

金色夜叉

尾崎紅葉

青空文庫

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一様に鎖籠めて、真直に長く東より西に横はれる大道は掃きたるやうに物の影を留めず、いと寂くも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙かりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に尽きぬる三箇日を惜むが如く、その哀切に小き腸は断れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を流して、この黄昏より床は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優き声の宥むる者無きより、憤をも増したるやうに飾竹を吹靡けつつ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂ひては引返し、揉みに揉んで独り散々に騒げり。微曇りし空はこれが為に眠を覚されたる気色

にて、銀梨子地の如く無数の星を顕して、鋭く冴えたる光は寒気を発つかと想はしむるまでに、その薄明に曝さるる夜の街は殆ど氷らんとすなり。

人この裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社会あり、

都あり、町あることを想得べき、九重の天、八際の地、始めて混沌の境を出でた

りといへども、万物未だ尽く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等

の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に遡く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛

然沸くが如く楽み、謳ひ、酔ひ、戯れ、歓び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚く

も夏果てし子子の形を斂めて、今将何処に如何にして在るかを疑はざらんとするも難

からずや。多時静なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。その響の消ゆる頃忽ち一点の燈

火は見え初めしが、揺々と町の尽頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂き星月夜を擅

に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯

気は一団の白き雲を舞立てて、心地悪き微温の四方に溢るとともに、垢臭き悪気の

盛に迸るに遭へる綱引の車あり。勢ひで角より曲り来にければ、避くべき違無くてその

中を駈抜けたり。

「うむ、臭い」

車の上に声して行過ぎし跡には、葉巻の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな」

「へい、松の内は早仕舞でございます」

車夫のかく答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり、紳士は二重外套の袖を袴と掻合せて、獺の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き行きて車はこの小路の尽頭を北に折れ、稍広き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、その南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、刻竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄関の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「頼む、頼む」

奥の方なる響動の劇きに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は声を合せて訪ひつつ、格子戸を連打にすれば、やがて急足の音立てて人は出で来ぬ。

円髻に結ひたる四十ばかりの小さく痩せて色白き女の、茶微塵の系織の小袖に黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、この家の内儀なるべし。彼の忙しげに格子を啓るを待ち

て、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遅へるを、彼は虚さず勤篤に下立ちて、この敬ふべき賓の為に辛くも一條の道を開けり。かくて紳士の脱捨てし駒下駄のみは独り障子の内に入られたり。

(一) の二

箕輪の奥は十畳の客間と八畳の中間とを打抜きて、広間の十個処に真鍮の燭台を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空気ランプを点したれば、四辺は真昼より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に余んぬる若き男女は一分に輪作りて、今を盛と歌留多遊を為るなりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人数の熱蒸と混じたる一種の温気は殆ど凝りて動かざる一間の内を、苺の煙と燈火の油煙とは更に纏れて渦巻きつつ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剥げたるあり、髪の解れたるあり、衣の乱次く着類れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取乱したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帯の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四ま

で紙にて結ゆひたるもあり。さしも息苦うんきき温気むせも、咽ねばさるる煙けふりの渦も、皆狂して知らざる如く、寧むしろ喜ののしびて罵のしり喚わめく声、笑わらひ顔くづる声、振ねちあ合ひ、踏ふみ破しだく犇ひしめき、一齊に揚どぐる響よみ動よみなど、絶間無うちき騒動ろうぜきの中に狼藉たはむとして戯てれ遊いたぶ為く、体は三綱五常さんこうごじょうも糸瓜へちまの皮と地に塗まび、唯ただこれ修羅道しゆらどうを打ぶ覆つくりかしたるばかりなり。

海上風波の難に遭あへる時、若そくばく干の油を取りて航路に澆そそげば、浪なみは奇くも忽たちましづまち鎮りて、

船は九死を出いづべしとよ。今この如何いかにとも為すべからざる乱脈の座中をば、その油の勢力を

もて支配によおうせる女王にようおうあり。猛たけびに猛ぶ男たちの心もその人の前には和やはらきて、終つひに崇拜せざ

るはあらず。女たちは皆猜そねみつも畏おそれを懷いだけり。中の間なる团欒まどろの柱はしら側わきに座を占めて、

重おもげに戴いたける夜会結やかいむすびに淡紫うすむらさきのりボン飾かざりして、小豆鼠あづきねずみの縮緬ちりめんの羽織を着たるが、

人の打騒ほだちぐを興あるやうに涼き目を睜みはりて、躬みづからは淑じゆかに引ひき繕つくろへる娘あり。粧つくり飾かより相

貌みづかまで水際立みづぎはたちて、凡ただならず媚こびを含めるは、色を売るものの仮の姿したるにはあらず

やと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普あまねく知ら

れぬ。娘も数多居あまたたり。醜みにくきは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑とまどひせるかと覺おぼし

もあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服装みなりは宮より数等立派すとうなるは数あ

多またあり。彼はその点にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛まなむすめ娘とて、最も不器量ふきりようを

極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、その起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帯は紫根の七糸に百合の折枝を縫金の盛上にしたる、人々これが為に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。この外種々色々の絢爛なる中に立交らひては、宮の装は纔に暁の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美き染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗き織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとその醜きを蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるもその美きを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手炉を囲みて、蜜柑を剥きつつ語ふ男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入たりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！ 馬士にも衣裳と謂ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物それ自らが美しいのだから、着物などはどうでも可い、実は何も着てをらんでも可い」

「裸体なら猶結構だ！」

この強き合槌撃つは、美術学校の学生なり。

綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入来りつ。その後には、今まで居間に潜みたりし主の箕輪亮輔も附添ひたり。席上は入乱れて、ここを先途と激き勝負の最中なれば、彼等の来れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸

早く目を側めて紳士の風采を視たり。

広間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小さい内儀の口は瘡の為に引き歪みて、その夫の額際より緒禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに頬の辺には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の広き顔は稍正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗ったり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、五紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七糸帯に金鏈子を垂れつつ、大様に面を挙げて座中を睥したる容は、実に光を発つらんやうに四辺を払ひて見えぬ。この団欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、しかも美々しく装ひたるはあらざるなり。

「何だ、あれは？」

例の二人の一個はさも憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くやうに言ひて学生はわざと面を背けつ。

「お俊や、一寸」と内儀は群集の中よりその娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴へるを見るより、慌忙く起ちて来れるが、顔好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚げたり。顔を赧めつつ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士はさして好ましからぬやうに頷けり。母は歪める口を怪しげに動して、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目礼せり。

「さあ、まあ、いらつしやいまし」

主の勧むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其処まで介添に附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを訝りて、彼の行くより坐るまで一挙一動も見脱さざりけり。その行く時

彼の姿はあたかも左の半面を見せて、まじゐ団欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ただならず強き光はともしび燈火に照添てりそひて、殆ど正く見る能はざるまでに眼を射られたるに呆あきれ惑へり。天上の最も明なる星は我手わがてに在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりしおほきダイヤモンド金剛石を飾れる黄金の指環はを穿めたるなり。

お俊は骨牌かるたの席かへに復ると俅ひとしく、密に隣の娘の膝ひざを衝つきて口早に呶ささやきぬ。彼は忙々いそがはしと顔を擡もたげて紳士の方かたを見たりしが、その人よりはその指に耀く物の異常なるに駭おどろかされたる体ていにて、

「まあ、あの指環は！一寸、ちよいと金剛石？」

「さうよ」

「大きいのねえ」

「三百円だつて」

お俊の説明を聞きて彼は漫そぞろに身毛みのけの弥立よだつを覚えつつ、

「まあ！ 好いのねえ」

ごまめ鰯の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、この幾いくとせ歳ねんがか念懸ねんがくれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽たちまち或事を思ひ浮べて攻せめつづみ鼓みの如く轟とどろけり。彼は惘然ぼうぜんとして殆ど我を

失へる間に、電光の如く隣より伸来れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攫へば、

「あら、貴女どうしたのよ」

お俊は苛立ちて彼の横膝を続けさまに拊きぬ。

「可くつてよ、可くつてよ、以来もう可くつてよ」

彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一旦金剛石の強

き光に焼かれたる心は幾分の知覺を失ひけんやうにて、さしも目覺かりける手腕の程も

見る見る漸く四途乱になりて、彼は敢無くもこの時よりお俊の為に頼み難き味方となれり。

かくしてかれよりこれに伝へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ」

「金剛石」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ」

「あれが金剛石？」

「見給へ、金剛石」

「あら、まあ金剛石」

「可すばらし感い金剛石」

「可おそろし恐い光るのね、金剛石」

「三百円の金剛石」

またたひま
瞬またたひまく間に三十余人は相呼び相応じて紳士の富を謳うたへり。

彼は人々の更かたみがはり互あひにおのれの方を眺ながむるを見て、その手に形好く葉卷シガアを持たせて、右み手を袖口そでぐちに差入れ、少し懈たゆげに床柱もたに靠れて、目鏡の下より下界を見遍みわたすらんやうに目め配くばりしてゐたり。

かかる目印ある人の名は誰たれしも問はあるべきにあらず、洩もれしはお俊の口よりなるべし。彼は富山とみやまただつぐ唯繼ぶげんとて、一代分限ぶんげんながら下谷区したやに聞ゆる資産家の家督なり。同じ区なる富山銀行はその父の私設する所にして、市会議員うちの中にも富山重平じゅうへいの名は見出みいださるべし。

宮の名の男の方かたに持もては嘸やさるる如く、富山と知れたる彼の名は直ただちに女の口々に誦ずんぜられぬ。あはれ一度ひとたびはこの紳士と組み、世に愛めでたき宝石に咫尺しせきするの榮を得ばや、と彼等こころこころこひねがの心々こころこころこひねがに冀もはざるは希まれなりき。人若し彼に咫尺するの榮を得ば、啻ただにその目の類無たぐひな

たのしま
く樂さるるのみならで、その鼻までも 董 ヴァイオレット 花の多く艷ぐべからざる 異香 いきよう に薫 くん ぜらる
るの幸 さいはひ を受くべきなり。

男たちは自 おのづ から荒 すさ められて、女の挙 こぞ りて金剛石 ダイヤモンド に心 こころ 牽 ひか さるる気色 けしき なるを、或は妬 あるひねた
く、或は浅 すずし ましく、多少の興 さま を冷 さ ざるはあらざりけり。独 ひと り宮のみは騒 さわ げる体 てい も無くて、
その清 すずし き眼 まなこ 色 いろ はさしもの金剛石と光 ひかり を争 あ はんやうに、用 たしな 意 み 深 ふか く、心 こころ 様 さま も幽 ゆ く振舞 ふりま
へるを、崇拜 ようこ 者は益々 いよく 懼 おそ びて、我等の慕 か ひ参 まゐ らする効 かひ はあるよ、偏 ひとへ にこの君 きみ を奉 ほう じて孤 こ
忠 う を全 す うし、美と富との勝負 しやうぶ を唯一戦 いつせん に決 けつ して、紳士 しんし の憎 にく き面 つら の皮 かわ を引剥 ひきむ かん、と手薬 てぐ
煉 すね 引 ひ いて待 まち ちかけたり。されば宮と富山との勢 いきほひ はあたかも日 ひ 月 げつ を並 なら 懸 か けたるやうなり。
宮 みや は誰 たれ と組 くみ み、富山 とみやま は誰 たれ と組 くみ むらんとは、人々の最 も も懸 けん 念 ねん するところなりけるが、鬪 くし の結 むす
果 は は驚 おどろ くべき予想 よそう 外 がい にて、目 め 指 さ されし紳士 しんし と美人 びじん とは他の三 さん 人 にん とともに一組 いっく になりぬ。始 はじ
め二 ふた つに輪 りん 作 さく りし人数 にんず はこの時 とき 合 あ 併 へい して一 いっ の大 おほ きなる団 だん 欒 らん に成 な されたるなり。しかも富山 とみやま と
宮 みや とは隣 となり 合 あ へに坐 ま りければ、夜 よ と昼 ひる との一時 いちじ に来 き にけんやうに皆 みな 狼 ろう 狽 た 騒 さわ ぎて、忽 たち ちそ
の隣 となり に自 みづか ら社会 しやかい 党 たう と称 と ぶる一組 いっく を出 い せり。彼等 かれら の主義 しゆぎ は不平 ふへい にして、その目的 もくひ は破 やぶ 壊 かい なり。
則 すなは ち彼等 かれら は専 もつぱ ら腕 うで 力 りき を用 もち ゐて或 ある 組 ぐみ の果 は 報 ほう と安 あん 寧 ねい とを妨 さ 害 がい せんと為 な るなり。又 また その前 まへ 面 めん に
は一人 ひとり の女 おんな に内 うち を守 まも らしめて、屈 くつ 強 きやう の男 おとこ 四 よ 人 にん 左 ひだり 右 みぎ に遠 とほ 征 せい 軍 ぐん を組 ぐみ 織 お し、左 ひだり 翼 よく を狼 ろう 藉 せき 組 ぐみ と称 と

し、右翼を蹂躪隊じゆうりんたいと称するも、実は金剛石の鼻柱を挫くじかんと大童おほわらはになれるに外ほかならざるなり。果せる哉かなくたん、件の組はこの勝負に蓬きたなき大敗を取りて、人も無げなる紳士もさすがに鼻白はなしろうみ、美き人は顔を赧あかめて、座にも堪たふべからざるばかりの面皮めんびを欠かされたり。この一番にて紳士の姿は不知見いつかえずなりぬ。男たちは万歳を唱へけれども、女の中には掌たなぞこの玉を失へる心地こころちしたるも多かりき。散々に破壊され、狼藉され、蹂躪されし富山は、余りにこの文明的ならざる遊戲に怖おそれをなして、密に主の居間に逃帰れるなりけり。鬢かつらを被きたるやうに梳くしけづりたりし彼の髪は棕櫚しゆうぼうぎ箒の如く乱れて、環かんの隻腕しかたかげたる羽織ひもの紐ひもは、手長猿てながざるの月を捉とらへんとする状かたちして揺曳ぶらぶらと垂さがれり。主は見るよりさも慌あわてたる顔して、

「どう遊ばしました。おお、お手から血が出てをります」

彼はやにはに煙管きせるを捨てて、忽ゆるがせにすべからざらんやうに急遽とつかはと身を起せり。

「ああ、酷ひどい目に遭あつた。どうもああ乱暴ぢや為様が無い。火事装束ででも出掛けなくつちやとても立切たちきれないよ。馬鹿にしてゐる！ 頭を二つばかり撲ぶたれた」

手の甲の血を吮すひつつ富山は不快なる面おももち色まうけして設の席に着きぬ。予て用意したれば、海老茶えびちやの紋縮緬もんぢりめんの傍しとに七宝焼しちほうやきの小判形こばんがたの大手炉おほてあぶりを置いて、蒔絵まきゑの吸物膳すひものぜんを

さへ据ゑたるなり。主は手を打鳴して婢をんなを呼び、大急おほいそぎに銚子と料理とを誂あつらへて、

「それはどうも飛でもない事を。外ほかに何処どこもお怪けが我はございませんでしたか」

「そんなに有られて耐たまるものかね」

為せう事無さに主も苦笑にがわらひせり。

「唯ただいま今絆創膏ばんそうこうを差上げます。何しろ皆書生でございますから随分乱暴でございませう。

故々御招申しまして甚はなはだ恐入りました。もう彼地あつちへは御出陣にならんが宜よろしうございませう。何もございせんがここで何卒御寛ごうぞくり」

「ところがもう一遍行つて見やうかとも思ふの」

「へえ、又いらつしやいますか」

物は言はで打笑うちあはめる富山の腮あぎといよひあがは愈展れり。早くもその意を得てや破顔はがんせる主の目は、薄すすきの切疵きりきずの如くほとほと有か無きかになりぬ。

「では御意ごいに召したのが、へえ？」

富山は益笑ますまみを湛ただへたり。

「ございましたらう、さうでございませうとも」

「何故なぜな」

「何故も無いものでございます。十目じゅうもくの見たところぢやございませんか」

富山は頷うなづきつつ、

「さうだらうね」

「あれは宜よろうございませう」

「一寸ちよいと好いね」

「まづその御意でお熱いところをお一盞ひとつ。不満むづかしや家の貴方あなたが一寸好いと有仰おつしやる位では、

余程よつほど尤物まれものと思はなければなりません。全く寡すくなうございます」

倉皇あたふた入来いりきたれる内儀は思ひも懸けず富山を見て、

「おや、此方こちらにお在いであそばしたのでございますか」

彼は先の程より台所に詰つめきりて、中入なかいりの食物の指図さしづなどしてゐたるなりき。

酷ひどく負けて逃にげて来ました」

「それは好く逃げていらつしやいました」

例の歪ゆがめる口を窄すぼめて内儀は空々そらぞらしく笑ひしが、忽たちまち彼の羽織の紐ひもの偏断かたがきれたるを見

尤とがめて、環かんの失せたりと知るより、慌あわて驚きて起たとせり、如何いかにとなればその環は純

金製のものなればなり。富山は事も無げに、

「なあに、宜いよろし」

「宜いではございません。純金きんでは大変でございます」

「なあに、可いいと言ふのに」と聞きも訖をはらで彼は広間かたの方へ出でて行けり。

「時にあれの身分はどうかね」

「さやう、悪い事はございませんが……」

「が、どうしたのさ」

「が、大した事たいはございませんです」

「それはさうだらう。然し凡おほそどんなものかね」

「旧もとは農商務省に勤めてをりましたが、唯ただいま今では地所かきくや家作などで暮してゐるやうでございます。どうか小金も有るやうな話で、鳴沢隆三しぎさわりゅうざうと申して、直隣町ちきとなりちやうに居りまするが、極手堅く小体こていに遣つてをるのでございます」

「はあ、知れたもんだね」

我われは顔がほおとがひかいなに頤ほを搔撫かづれば、例の金剛石ダイヤモンドは燦然きらりと光れり。

「それでも可いさ。然し嫁くれやうか、嗣子あととりぢやないかい」

「さやう、一人娘のやうに思ひましたが」

「それぢや窮るぢやないか」

「私は悉い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうで」

程無く内儀は環を搜得て帰来にけるが、誰が悪戯とも知らで耳搔の如く引展されたり。主は彼に向ひて宮の家の様子を訊ねけるに、知れる一遍は語りけれど、娘は猶能く知るらんを、後に招きて聴くべしとて、夫婦は頻に觴を侑めけり。

富山唯継の今宵ここに来りしは、年賀にあらず、骨牌遊にあらず、娘の多く聚れるを機として、嫁選せんとてなり。彼は一昨年をとしの冬英吉利より帰朝するや否や、八方に手分して嫁を求めけれども、器量望の太甚はなはだしければ、二十余件の縁談皆意に称かなはで、今日が日までもなほその事に齟齬あくさくして已まざるなり。当時取急やぎて普請せし芝の新宅は、未だ人の住着かざるに、はや日に黒み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

第二章

骨牌の会は十二時におよびて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人数の

三分の一強を失ひけれども、猶飽かで残れるものは景氣好く勝負を續けたり。富山の姿を隠したりと知らざる者は、彼敗走して帰りしならんと想へり。宮は会の終まで居たり。彼若疾く還りたらんには、恐く踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顔に富山は主と語合へり。

彼に心を寄せし輩は皆彼が夜深の帰途の程を氣遣ひて、我願くは何処までも送らんと、絶か念ひに念ひけれど、彼等の深切は無用にも、宮の帰る時一人の男附添ひたり。その人は高等中学の制服を着たる二十四五の学生なり。金剛石に垂いでは彼の挙動の目指れしは、座中に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければなり。この一事の外は人目を牽くべき点も無く、彼は多く語らず、又は躁がず、始終慎くしてゐたり。終までこの兩個の同伴なりとは露顯せざりき。さあらんには余所々々しさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門を出づるを見て、始めて失望せしもの寡からず。

宮は鳩羽鼠の頭巾を被りて、濃淺黄地に白く中形模様ある毛織のシオールを絡ひ、学生は焦茶の外套を着たるが、身を窄めて吹来る風を遣過しつつ、遅れし宮の辿着くを待ちて言出せり。

「宮さん、あの金剛石の指環を穿めてゐた奴はどうだい、可厭に氣取つた奴ぢやないか」

「さうねえ、だけれど衆みんながあの人を目の敵かたきにして乱暴するので気の毒だったわ。隣合つてゐたもんだから私まで酷ひどい目に遭あはされてよ」

「うむ、彼奴あいつが高慢な顔をしてゐるからさ。実は僕も横よこ腹こつぱらを二つばかり突いて遭つた」
「まあ、酷いのね」

「ああ云ふ奴は男の目から見ると反吐へどが出るやうだけれど、女にはどうだらうね、あんなのが女の氣に入るのぢやないか」

「私は可厭いやだわ」

「芬々ぶんぶんと香水の匂におひがして、金剛石ダイヤモンドの金の指環を穿めて、殿様然たる服装なりをして、好いいいに違ちがひな無ないさ」

学生あやは嘲むが如く笑へり。

「私は可厭よ」

「可厭なものが組になるものか」

「組くみは鬩しかただから為方が無いわ」

「鬩だけれど、組に成つて可厭さうな様子も見えなかつたもの」

「そんな無理な事を言つて！」

「三百円の金剛石ぢや到底僕等の及ぶところにあらずだ」

「知らない！」

宮はシオールを揺^{ゆりあ}上げて鼻^{なかなば}の半まで掩^{おほひかく}隠^{かく}しつ。

「ああ寒い！」

男は肩^{そばだ}を峙^{ひた}てて直と彼に寄添^{よそ}へり。宮は猶^{なほ}黙^{もく}して歩^あめり。

「ああ寒い!!」

宮はなほ答^{こた}へず。

「ああ寒い※」

彼はこの時始めて男^{かた}の方を見向^{むか}きて、

「どうしたの」

「ああ寒い」

「あら可厭^{たま}ね、どうしたの」

「寒^{たま}くて耐^たらんからその中^{うち}へ一^{いっしよ}処^{ところ}に入れ給^{たま}へ」

「どの中^{うち}へ」

「シオールの中^{うち}へ」

「可笑い、可厭だわ」

男は逸早く彼の押へしシオールの片端を奪ひて、その中に身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑ひて、

「あら貫一さん。これぢや切なくて歩けやしない。ああ、前面から人が来てよ」

かかる戯れを作して憚らず、女も為すままに信せて咎めざる彼等の関繋は抑も如何。事情ありて十年来鳴沢に寄寓せるこの間貫一は、此年の夏大学に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人なり。

第三章

間貫一の十年来鳴沢の家に寄寓せるは、怙所無くて養はるるなり。母は彼の幼かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中学を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆の中に父を葬るとともに、己が前途の望をさへ葬らざる可からざる不幸に遭へり。父在りし日さへ月謝の支出の血を絞るばかりに苦き瘦世帯なりけるを、当時彼なほ十五歳ながら間の戸主は学ぶに先ちて食ふべき急に迫られぬ。幼き戸主の学ぶに先ちては食ふべきの

急、食ふべきに先ちては葬^{はうむり}すべき急、猶^{なほ}これに先ちては看護医藥の急ありしにあらずや。自活すべくもあらぬ幼^{をさな}き者の如何^{いか}にしてこれ等の急を救^{すく}得^{ひえ}しか。固^{もと}より貫一が力^{あつ}の能^{あた}ふべきにあらず、鳴沢隆三の身一個^{ひとつ}に引承^{ひきう}けて万端の世話せしに因^よるなり。孤^{みなしご}児の父は隆三の恩人にて、彼は聊^{いささ}かその旧徳に報ゆるが為に、啻^{ただ}にその病めりし時に扶助せしのみならず、常に心着^{こころづ}けては貫一の月謝をさへ間支^{まま}弁したり。かくて貧^{うしな}き父を亡^{うしな}ひし孤^{みなしご}児は富める後^{うしろみ}見を得て鳴沢の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるにその短^せき生^{せい}時^じを以て慊^{もつあきた}らず思ひければ、とかくはその忘形見を天^{あつぱれ}晴人と成して、彼の一日も忘れざりし志を継^{つぎ}がんとせるなり。

亡^なき人常に言ひけるは、苟^{いやし}くも侍の家に生れながら、何の面^{めん}目^{ぼく}ありて我子貫一をも人に侮^{あなど}らすべきや。彼は学士となして、願くは再び四民^{しみん}の上に立たしめん。貫一は不斷にこの言^{ことば}を以て警^{いまし}められ、隆三は会ふ毎にまたこの言^{ことば}を以て啣^{かこ}たれしなり。彼は言^{もの}ふ違^いだに無^なくて暴^{にはかみまか}に歿^しりけれども、その前常に口にせしところは明かに彼の遺言なるべきのみ。

されば貫一が鳴沢の家内に於ける境遇は、決して厄介者として陰^{ひそ}に疎^そまるる如き憂^{うれ}目に遭^あふにはあざざりき。懋^{なまし}ひ継子^{ままこ}などに生れたらんよりは、かくて在りなんこそ幾^い許^かか幸^{さいはひ}は多からんよ、と知る人は噂^{うはさ}し合へり。隆三夫婦は実^げに彼を恩人の忘形見として疎^{おろそ}なら

ず取扱ひけるなり。さばかり彼の愛せらるるを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせむとすらんと想へる者もありしかど、当時彼等は構へてさる心ありしにはあらざりけるも、彼の篤学なるを見るに及びて、漸くその心は出で来て、彼の高等中学校に入りし時、彼等の了簡は始めて定りぬ。

貫一は篤学のみならず、性質も直に、行も正かりければ、この人物を以つて学士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし、と夫婦は私に喜びたり。この身代を譲られたりとして、他姓を冒して得謂はれぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑しと為ざるところなれども、美き宮を妻に為るを得ば、この身代も屈辱も何か有らんと、彼はなかなか夫婦に増したる權を懷きて、益学問を励みたり。宮も貫一をば憎からず思へり。されど恐くは貫一の思へる半には過ぎざらん。彼は自らその色好を知ればなり。世間の女の誰か自らその色好を知らざるべき、憂ふるところは自ら知るに過るに在り。謂ふ可くんば、宮は己が美しさの幾何値するかを当然に知れるなり。彼の美しさを以てして纔に簡程の資産を嗣ぎ、類多き学士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤より出でし例寡からざるを見たり。又は富人の醜き妻を厭ひて、美き妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のままなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。な

ほ彼は色を以て富貴を得たる人たちの若干を見たりしに、その容の己に如かざるもの多きを見出せり。剩へ彼は行く所にその美しさを唱はれざるはあらざりき。なほ一件最も彼の意を強うせし事あり。そは彼が十七の歳に起りし事なり。當時彼は明治音楽院に通ひたりしに、ヴァイオリンのプロフェツサアなる独逸人は彼の愛らしき袂に艶書を投入れぬ。これ素より仇なる恋にはあらで、女夫の契を望みしなり。殆ど同時に、院長の某は年四十を踰えたるに、先年その妻を喪ひしをもて再び彼を娶らんとて、密に一室に招きて切なる心を打明かせし事あり。

この時彼の小き胸は破れんとするばかり轟けり。半は曾て覚えざる可羞の為に、半は遽に大なる希望の宿りたるが為に。彼はここに始めて己の美しさの寡くとも奏任以上の地位ある名流をその夫に値ひすべきを信じたるなり。彼を美しく見たるは彼の教師と院長とのみならず、牆を隣れる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらず。

若かのプロフェツサアに添はんか、或は四十の院長に従はんか、彼の榮譽ある地位は、学士を婿にして鳴沢の後を嗣ぐの比にはあらざらんをと、一旦抱ける希望は年と共に太りて、彼は始終昼ながら夢みつつ、今にも貴き人又は富める人又は名ある人の己を見出して、

玉の輿こしを昇かかせて迎きたに來るべき天縁の、必ず廻めぐり到いたらんことを信じて疑はざりき。彼のさまでに深く貫一を思はざりしは全くこれが為のみ。されども決して彼を嫌きらへるにはあらず、彼と添はばさすがに樂たのしからんとは念おもへるなり。如かくのごとく決定さだかにそれとは無けれど又有りとし見ゆる筈ははきぎ木の好運を望みつつも、彼は怠らず貫一を愛してゐたり。貫一は彼の己を愛する外にはその胸の中に何もあらじとのみ思へるなりけり。

第四章

漆の如き闇やみの中に貫一の書齋の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午後四時より向むこう島じまの八や百松おまつに新年会ありとて未だ還かへらざるなり。

宮は奥より手ランプを持ちて入來いりきにけるが、机の上なる書燈を点ともし了をはれる時、婢をんなは台十能に火を盛りたるを持もち來きたれり。宮はこれを火鉢ひばちに移して、

「さうして奥のお鉄瓶てつも持つて來ておくれ。ああ、もう彼方あちらは御寢おやすみになるのだから」
 久ひさく人ひと氣けの絶えたりし一間の寒さむさは、今俄にはかに人の温き肉を得たるを喜びて、直ただちに咬かまんとするが如く膚はだに薄せまれり。宮は慌あわ忙ただしく火鉢に取付きつつ、目を挙げて書棚しよだなに飾れる

時計を見たり。

夜の闇く静なるに、燈の光の独り美き顔を照したる、限無く艶なり。松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさへしたれば、露を帯びたる花の梢に月のうつろへるが如く、背後の壁に映れる黒き影さへ香滴るるやうなり。

ダイヤモンド

金剛石と光を争ひし目は惜気も無く瞪りて時計の秒を刻むを打目成れり。火に翳せる

彼の手を見よ、玉の如くなり。さらば友禅模様ある紫縮緬の半襟に韜まれたる彼の

胸を想へ。その胸の中に彼は今如何なる事を思へるかを想へ。彼は憎からぬ人の帰来を

待侘ぶるなりけり。

ひとしきりさむきはなはだし

一時又寒の太甚きを覚えて、彼は時計より目を放つとともに起ちて、火鉢の対面なる貫

一が

の上に座を移せり。こは彼の手に縫ひしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今

夜彼の敷くなり。

もし

若やと聞着けし車の音は漸く近きて、益轟きて、竟に我門に停りぬ。宮は疑無し

と思ひて起たんとする時、客はいと酔ひたる声して物言へり。貫一は生下戸なれば嘗て酔

ひて帰りし事あらざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂んとす。

かど

門の戸引啓けて、酔ひたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何事とも分かず唯慌てて

ランプを持ちて出でぬ。台所より婢も、出合へり。

足の踏所も覺束無げに酔ひて、帽は落ちなんばかりに打傾き、ハンカチーフに裹みたる折を左に拈げて、山車人形のやうに揺々と立てるは貫一なり。面は今にも破れぬべく紅に熱して、舌の乾くに堪へかねて連に空唾を吐きつつ、

「遅かつたかね。さあ御土産です。還つてこれを細君に遣る。何ぞ仁なるや」

「まあ、大変酔つて！ どうしたの」

「酔つて了つた」

「あら、貫一さん、こんな所に寐ちや困るわ。さあ、早くお上りなさいよ」

「かう見えても靴が脱げない。ああ酔つた」

仰様に倒れたる貫一の脚を搔抱きて、宮は辛くもその靴を取去りぬ。

「起きる、ああ、今起きる。さあ、起きた。起きたけれど、手を牽いてくれなければ僕に

は歩けませんよ」

宮は婢に燈を把らせ、自らは貫一の手を牽かんとせしに、彼は跟きつつ肩に縋りて遂に

放さざりければ、宮はその身一つさへ危きに、やうやう扶けて書斎に入りぬ。

の上に昇下されし貫一は頰るる体を机に支へて、打仰ぎつつ微吟せり。

「君に勧む、金縷きんるの衣を惜むなかれ。君に勧む、須すく少年の時を惜むべし。花有り折るに堪たへなば直ただちに折る須べし。花無きを待つて空むなしく枝を折ることなかれ」

「貫一さん、どうしてそんなに酔つたの？」

「酔つてゐるでせう、僕は。ねえ、宮みやさん、非常に酔つてゐるでせう」

「酔つてゐるわ。苦くるいでせう」

「然しか矣、苦いほど酔つてゐる。こんなに酔つてゐるに就ついては大おほいに訳わけが有るのだ。さうして又宮さんなるものが大いに介抱して可い訳わけが有るのだ。宮さん！」

「可い厭やよ、私は、そんなに酔つてゐちや。不断きん嫌けんひの癖くせに何故なぜそんなに飲んだの。誰のに飲のまれたの。端山はやまさんだの、荒尾さんだの、白瀬さんだのが附ついてゐながら、酷ひどいわね、こんなに酔よして。十時にはきつと帰ると云ふから私は待つてゐたのに、もう十一時過ひよ」

「本ほん当とうに待つてゐてくれたのかい、宮みやさん。謝しゃ、多謝たしゃ！ 若もしそれが事実であるならばだ、僕はこのまま死んでも恨みません。こんなに酔されたのも、実はそれなのだ」

彼は宮の手を取りて、情に堪へざる如く握にぎり緊しめつ。

「二人の事は荒尾より外に知る者は無いのだ。荒尾が又決しやして喋べる男ぢやない。それがどうして知れたのか、衆みんなが知つてゐて……僕は実に驚いた。四方八方から祝しゅく盃はいだ祝盃だ

「もう極きまつてゐるものを、今更……」

「さうでないです。この頃をぢ翁さんや姨をばさんの様子を見るのに、どうも僕は……」

「そんな事は決けして無いわ、邪推だわ」

「実は翁さんや姨さんの了りようけん、簡はどうでも可い、宮さんの心一つなのだ」

「私の心は極つてゐるわ」

「さうかしらん？」

「さうかしらんで、それぢや余あんまりだわ」

貫一は酔よひを支へかねて宮が膝ひざを枕に倒れぬ。宮は彼が火の如き頬ほほに、額に、手を加へて、

「水を上げませう。あれ、又寐ねちや……貫一さん、貫一さん」

寔まことに愛の潔いさぎよき哉、この時は宮が胸の中にも例の汚れたる希望のぞみは跡を絶ちて彼の美き目は

他に見るべきもののあらざらんやうに、その力を貫一の寐顔あつに鍾めて、富も貴きも、乃至

有ゆる利慾の念は、その膝に覚ゆる一団の微温の為に溶とろかれて、彼は唯ただ妙たへに香かうき甘露かんろの

夢あに酔よひて前後をも知らざるなりけり。

諸の可もろ忌いまはしき妄想もうぞうはこの夜の如く眼まなこを閉ぢて、この一間に彼等の二人よりは在らざる

如く、彼は世間に別人の影を見ずして、又この明なる燈火あきらかの光の如きものありて、特に

彼等をのみ照すやうに感ずるなり。

第五章

或日箕輪の内儀は思も懸けず訪来りぬ。その娘のお俊と宮とは学校朋輩にて常に往來したりけれども、未だ家と家との交際はあらざるなり。彼等の通学せし頃さへ親々は互に識らで過ぎたりしに、今は二人の往來も漸く疎くなりけるに及びて、俄にその母の來れるは、如何なる故にか、と宮も両親も怪き事に念へり。

凡そ三時間の後彼は歸行きぬ。

先に怪みし家内は彼の來りしよりもその用事の更に思懸けざるに驚けり。貫一は不在なりしかばこの珍き客來のありしを知らず、宮もまた敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。その日より宮は少く食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮はいよいよ告げんとは為ざりき。この間に両親は幾度と無く談合しては、その事を決しかねてゐたり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因

もあらねど、片時もその目の忘れざる宮の様子へんじの常じょうに変わるを見出みいださんは難かたき事にあらず。さも無なかりし人の顔かほの色の遽にはかに光を失うひたるやうにて、振舞ふるまひなど別わけて力ちから無く、笑わらふさへいと打湿うちしめりたるを。

宮が居間と謂いふまでにはあらねど、彼の箏たんす笛ふえ手道具等置きたる小座敷あり。ここには火こ燵たつの炉を切りて、用無もちき人の来きたては送かたみに冬ふゆ籠こもりする所にも用ゐらる。彼は常じょうにここに居ゐて針仕事するなり。倦うめば琴ことをも弾ひくなり。彼が手玩てすきみと見ゆる狗子柳いのこやなぎのはや根を弛ゆるみ、真しんの打傾うちかへきたるが、鯰あなこうぎり鰯ほこり切の水に埃ほこりを浮べて小机かたへの傍に在り。庭に向へる肱ひぢ懸窓かけまどの明あかるきに敷紙しきがみを披ひろげて、宮は膝ひざの上に紅絹もみの引解ひきときを載のせたと、針は持たで、懶ものうげに火燵たつに靠もたれたり。

彼は少すこく食して多く眠すらずなりてよりは、好みてこの一間いに入りて、深く物思ふなりけり。両ふた親おやは仔細しさいを知れるにや、この様子をば怪あやまんともせで、唯彼の為なすまに委まかせたり。

この日貫一は授業始はじめの式しきのみにて早く帰来かへりきにけるが、下座敷したには誰たれも見えで、火燵こたつの間に宮みやの咳しかく声こゑして、後は静しずかに、我が帰かへりしを知らざると思おもひければ、忍足うかがひよに窺うかがひよ寄りぬ。襖ふすまの僅わずかに啓あきたる隙ひまより差覗さしのぞけば、宮は火燵たつに倚よりて硝子障子がらすを眺ながめては俯目ふしめにな

り、又胸痛きやうに仰ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美き目を瞠るは、
 何をか思凝すなるべし。人の窺ふと知らねば、彼は口もて訴ふるばかりに心の苦悶を
 その状に顕して憚らざるなり。

貫一は異みつつも息を潜めて、猶彼の為んやうを見んとしたり。宮は少時ありて火燵に
 入りけるが、遂に櫓に打俯しぬ。

柱に身を倚せて、斜に内を窺ひつつ貫一は眉を顰めて思惑へり。

彼は如何なる事ありてさばかり案じ煩ふならん。さばかり案じ煩ふべき事を如何なれば
 我に明さざるならん。その故のあるべく覚えざるとともに、案じ煩ふ事のあるべきをも彼
 は信じ得ざるなりけり。

かく又案じ煩へる彼の面も自ら俯きぬ。問はずして知るべきにあらずと思定めて、
 再び内を差覗きけるに、宮は猶打俯してゐたり。何時か落ちけむ、蒔絵の櫛の零れたる
 も知らで。

人の氣勢に驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既にその傍に在り。彼は慌てて思顔る気
 色を蔽はんとしたるが如し。

「ああ、吃驚した。何時御帰んなすつて」

「今歸つたの」

「さう。些^{ちつと}も知らなかつた」

宮はおのれの顔の頻^{しきり}に眺めらるるを眩^{まば}ゆがりて、

「何をそんなに視^みるの、可厭^{いや}、私は」

されども彼は猶目を放たず、宮はわざと打背^{うちそむ}きて、裁片^{きれたたふ}畳の内を撈^{かきさが}せり。

「宮^みさん、お前さんどうしたの。ええ、何処^{どこ}か不快^{わるい}のかい」

「何ともないのよ。何故^{なぜ}？」

かく言ひつつ益^{ますます}急に撈^{かきさが}せり。貫一は帽^{かぶ}を冠^{かぶ}りたるまま火燵に片肱^{かたひぢか}掛けて、斜^{ななめ}に彼の顔

を見遣^{みや}りつつ、

「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。さう言へば、直^{ちき}に疑^{うたぐりぶか}深い、神経質だのと言ふ

けれど、それに違^{ちが}ないぢやないか」

「だつて何ともありませんいものを……」

「何ともないものが、惘然^{ぼんやり}考へたり、太息^{ためいき}を吐^ついたりして鬱^{ふさ}いであるものか。僕は先^{さつ}之^き

から唐紙^{からかみ}の外で立つて見てゐたんだよ。病氣^{びやうき}かい、心配でもあるのかい。言^きつて聞^きした

つて可^いぢやないか」

宮は言ふところを知らず、纔に膝の上なる紅絹を手弄るのみ。

「病気なのかい」

彼は僅に頭を掉りぬ。

「それぢや心配でもあるのかい」

彼はなほ頭を掉れば、

「ぢやどうしたと云ふのさ」

宮は唯胸の中を車輪などの廻るやうに覚ゆるのみにて、誠に詐にも言を出すべき術を知らざりき。彼は犯せる罪の終に秘む能はざるを悟れる如き恐怖の為に心慄けるなり。如何に答へんとさへ惑へるに、傍には貫一の益詰らんと待つよと思へば、身は搾らるるやうに迫来る息の隙を、得も謂はれず冷かなる汗の流れ流れぬ。

「それぢやどうしたのだと言ふのに」

貫一の声音は漸く苛立ちぬ。彼の得言はぬを怪しと思へばなり。宮は驚きて不覺に言出せり。

「どうしたのだから私にも解らないけれど、……私はこの二三日どうしたのだから……変に色々な事を考へて、何だか世の中がつまらなくなつて、唯悲くなつて来るのよ」

呆あきれたる貫一は瞬またたきもせで耳を傾かたむけぬ。

「人間と云ふものは今日かうして生きてゐても、何時いつ死しんで了しまふか解らないのね。かうしてゐれば、可たのしみ樂かはりな事もある代に辛い事や、悲い事や、苦くるしい事なんぞが有つて、二つ好い事は無し、考れば考るほど私は世の中が心細いわ。不ふつと図おもひださう思おもひだ出したら、毎日そんな事ばかり考へて、可いや厭こころもちな心地になつて、自分でもどうか為したのかしらと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」

目を閉ぢて聴きゐし貫一は徐しづかまぶたに睚まゆを開くとともに眉ひそを顰ひそめて、

「それは病氣だ！」

宮は打うちしを萎かしられて頭を垂れぬ。

「然しかし心配する事は無いさ。氣に為ては可かんよ。可いかい」

「ええ、心配しはしません」

異あやしく沈みたるその声の寂しさを、如何いかに貫一は聴きたりしぞ。

「それは病氣の所せ為ゐだ、脳わでも不良わるいのだよ。そんな事を考へた日には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固もとより世の中と云ふものはさう面白い義わけのものぢやないので、又人の身の上ほど解らないものは無い。それはそれに違無いのだけれど、衆みんなが皆みなそんな了り

簡ようけんを起して御覽な、世界中御寺ばかりになつて了しまふ。儂はかないのが世の中と覺悟した上で、

その儂い、つまらない中で切せめては樂たのしみを求めやうとして、究竟つまり我々が働いてゐるのだ。考へて鬱ふさいだところで、つまらない世の中に儂い人間と生れて来た以上は、どうも今更為方が無いぢやないか。だから、つまらない世の中を幾分いくぶんか面白く暮さうと考へるより外は無いのさ。面白く暮すには、何か樂たのしみが無ければならない。一事ひとつかうと云ふ樂があつたら決して世の中はつまらんものではないよ。宮みやさんはそれでは樂と云ふものが無いのだね。この樂があればこそ生きてゐると思ふ程の樂は無いのだね」

宮は美き目を挙げて、求むるところあるが如く儁ひそかに男の顔を見たり。

「きつと無いのだね」

彼は笑あみを含みぬ。されども苦しげに見えたり。

「無い？」

宮の肩かたさき頭とを捉りて貫一こなたは此方に引向けんとすれば、為なすままに彼は緩ゆるく身を廻めぐしたれど、顔のみは可羞はぢがましそむく背けてゐたり。

「さあ、無いのか、有るのかよ」

肩に懸けたる手をば放さで連しきりゆすに揺るるを、宮は鍔くろがねの槌つちもて撃うち懲ちやうさるるやうに覺えて、

安き心もあらず。^{ひややか}冷なる汗は又一時流出^{ひとしきながれい}でぬ。

「これは怪^けしからん！」

宮は危^{あやぶ}みつつ彼の顔色^{うかが}を候ひぬ。常の如く戯るるなるべし。その面^{おもて}は和^{やはら}ぎて一点の怒氣だにあらず、寧^{むし}ろ唇^{くちもと}頭^{かぶ}には笑を包めるなり。

「僕^{ひと}などは一件^{ひとつ}大きな大きな樂があるので、世の中が愉快で愉快で耐^たまらん。一日^{ひと}が経^たつて行くのが惜くて惜くてね。僕は世の中がつまらない為にその樂を拵^{こしら}へたのではなくて、その樂の為にこの世の中に生きてゐるのだ。若^もしこの世の中からその樂を取去つたら、世の中は無い！ 貫一といふ者も無い！ 僕はその樂と生^{しょう}死^しを俱^{とも}にするのだ。宮^みさん、可^うらやまし

羨^{うらやまし} いだらう」

宮は忽^{たちま}ち全身の血の氷れるばかりの寒さに堪^たへかねて打顫^{うちふる}ひしが、この心の中を覺^{さと}られじと思へば、弱る力を励して、

「可^{うらやまし} 羨^{うらやまし} いわ」

「可^{どうぞ}羨^{うらやまし} ければ、お前さんの事だから分けてあげやう」

「何卒^{どうぞ}」

「ええ悉^{みんな}皆遣^やつて了^{しま}へ！」

彼は外オバコ套オトの衣兜かくしより一袋のボンボンを取り出して火燵こたつの上に置けば、余力はずみに袋の口は弛ゆるみて、紅白の玉は珊さざん々と乱みだれ出でぬ。こは宮の最も好める菓子なり。

第六章

その翌々日なりき、宮は貫一に勧められて行きて医の診察を受けしに、胃病なりとて一ちびん瓶すいやくの水薬を与へられぬ。貫一は信まことに胃病なるべしと思へり。患者は必ずさる事あらじと思ひつつもその薬を服したり。懊おうのう惱うきとして憂うきに堪たへざらんやうなる彼の容ようたい体たいに幾いくば許くの変も見えざりけれど、その心に水と火の如きものありて相剋あひこくする苦痛は、益募ますますりて止やまざるなり。

貫一は彼の憎からぬ人ならずや。怪あやしむべし、彼はこの日頃さしも憎からぬ人を見ることを懼おそれぬ。見ねばさすがに見まほしく思ひながら、面おもてを合すれば冷汗ひやあせも出づべき恐怖おそれを生ずるなり。彼の情なさけ有ある言を聞けば、身をも斫きらるるやうに覚ゆるなり。宮は彼の優こころ心ね根ねを見ることを恐れたり。宮が心地勝すぐれずなりてより、彼に対する貫一の優しさはその平生へいぜいに一層を加へたれば、彼は死を覓もとむれども得ず、生を求むれども得ざらんやうに、

悩乱してほとほとその堪ふべからざる限に至りぬ。

遂に彼はこの苦を両親に訴へしにやあらん、一日母と娘とは遽に身支度して、忙々

く車に乗りて出でぬ。彼等は小からぬ一個の旅鞆を携へたり。

大風の風ぎたる迹に孤屋の立てるが如く、侘しげに留守せる主の隆三は独り碁盤に

向ひて碁経を披きゐたり。齡はなほ六十に遠けれど、頭は夥き白髪にて、長く生ひたる髯

なども六分は白く、容は瘦せたれど未だ老の衰も見えず、眉目温厚にして頗る古井波無

きの風あり。

やがて帰来にける貫一は二人の在らざるを怪みて主に訊ねぬ。彼は徐に長き髯を撫でて

片笑みつつ、

「二人はの、今朝新聞を見ると急に思着いて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日医者が湯治
が良いと言うて切に勧めたらしいのだ。いや、もう急の思着で、脚下から鳥の起つ
やうな騒をして、十二時三十分の瀛車で。ああ、独で寂いところ、まあ茶でも淹れやう」

貫一は有る可からざる事のやうに疑へり。

「はあ、それは。何だか夢のやうですな」

「はあ、私もそんな塩梅で」

「然し、湯治は良いでございませう。幾日ほど逗留のお心算で？」

「まあどんなだか四五日と云ふので、些の着のままで出掛けたのだが、なかに直に飽きて了うて、四五日も居られるものか、出養生より内養生の方が楽だ。何か旨い物でも食べやうぢやないか、二人で、なう」

貫一は着更へんとて書齋に還りぬ。宮の遣したる筆の蹟などあらんかと思ひて、求めけれども見えず。彼の居間をも尋ねけれど在らず。急ぎ出でしなればさもあるべし、明日は必ず便あらんと思ひ、飜せしが、さすがに心楽まざりき。彼の六時間学校に在りて帰来れるは、心の瘦するばかり美き俤に饑ゑて帰来れるなり。彼は空く饑ゑたる心を抱きて慰むべくもあらぬ机に向へり。

「実に水臭いな。幾許急いで出掛けたつて、何とか一言ぐらゐ言遣いて行きさうなものぢやないか。一寸其処へ行つたのぢやなし、四五日でも旅だ。第一言遣く、言遣かないよりは、湯治に行くなら行くと、始に話が有りさうなものだ。急に思着いた？ 急に思着いたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい。俺の帰るのを待つて、話をして、明日行くと云ふのが順序だらう。四五日ぐらゐの離別には顔を見ずに行つても、あの人は平氣なのかしらん。

女と云ふ者は一体男よりは情が濃であるべきなのだ。それが濃でないと為れば、愛してをらんと考へるより外は無い。豈にあの人が愛してをらんとは考へられん。又万々そんな事は無い。けれども十分に愛してをると云ふほど濃ではないな。

元来あの人の性質は冷淡さ。それだから所謂『娘らしい』ところが余り無い。自分の思ふやうに情が濃でないのもその所為か知らんて。子供の時分から成程さう云ふ傾向は有つてゐたけれど、今のやうに太甚くはなかつたやうに考へるがな。子供の時分にさうであつたなら、今ぢや猶更でなければならんだ。それを考へると疑ふよ、疑はざるを得ない！

それに引替へて自分だ、自分の愛してゐる度は実に非常なもの、殆ど……殆どではない、全くだ、全く溺れてゐるのだ。自分でもどうしてこんなだらうと思ふほど溺れてゐる！

これ程自分の思つてゐるのに対しても、もう少し情が篤くなければならんだ。或時などは実に水臭い事がある。今日の事なども随分酷い話だ。これが互に愛してゐる間の仕草だらうか。深く愛してゐるだけにかう云ふ事を為れると実に憎い。

小説的かも知れんけれど、八犬伝の浜路だ、信乃が明朝は立つて了ふと云ふので、親の目を忍んで夜更に逢ひに来る、あの情合でなければならぬ。いや、妙だ！ 自分

の身の上も信乃に似てゐる。幼少から親に別れてこの鳴沢の世話になつてゐて、其処そこの娘と許いひなづけ嫁……似てゐる、似てゐる。

然し内の浜路は困る、信乃にばかり気を揉もして、余り憎いな、そでない為方しかただ。これから手紙を書いて思ふさま言つて遣やらうか。憎いは憎いけれど病氣ではあるし、病人に心配させるのも可哀かあいさうだ。

自分は又神経質に過るから、思過おもひすぎを為るところも大きいあるのだ。それにあの人も不斷言はれる、けれども自分が思過おもひすぎであるか、あの人が情が薄いのかは一件ひとつの疑問だ。

時々さう思ふ事がある、あの人の水臭い仕打の有るのは、多少か自分を侮あなどつてゐるのであるまいか。自分は此家ここの厄介者、あの人は家附の娘だ。そこで自ら主と家来と云ふやうな考が始終有つて、……否いや、それもあの人に能く言れる事だ、それくらゐなら始から許しはしない、好いと思へばこそかう云ふ訳に、……さうだ、さうだ、それを言出すと太くひど慍おこられるのだ、一番それを慍るよ。勿論もちろんそんな様子の些少すこでも見えた事は無い。自分の僻見ひがみに過ぎんのだけれども、気が済まないから愚痴も出るのだ。然し、若ももしあの人の心にそんな根性が爪の垢あかほどでも有つたらば、自分は潔くこの縁は切つて了ふ。立派に切つて

見せる！ 自分は愛情の俘とりことはなつても、未だ奴隸になる気は無い。或はこの縁を切つたなら自分はその人を忘れかねて焦死こがれじにに死ぬかも知れん。死なんまでも発狂するかも知れん。かまはん！ どうならうと切れて了ふ。切れずに措くものか。

それは自分の僻見ひがみで、あの人に限つてはそんな心は微塵みじんも無いのだ。その点は自分も能く知つてゐる。けれども情が濃こまやかでないのは事実だ、冷淡なのは事実だ。だから、冷淡であるから情が濃でないのか。自分に対する愛情がその冷淡を打壊うちこはすほどに熱しないのか。或は熱し能はざるのが冷淡の人の愛情であるのか。これが、研究すべき問題だ」

彼は意に満たぬ事ある毎に、必ずこの問題を研究せざるなけれども、未だ曾て解釈し得ざるなりけり。今日はや如何に解釈せんとすらん。

(六) の二

翌日果して熱海より便たよりはありけれど、僅に一枚の端書はがきをもて途中の無事と宿とを通知せるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手蹟しゆせきなり。貫一は読了よみをはすると齊しく片々に引裂きて捨ててけり。宮の在らば如何にとも言解くなるべし。彼の親したしく言解いひとか

ば、如何に打腹^{うちはら}立ちたりとも貫一の心の釈^とけざることはあらず。宮の前には常に彼は慍^{いかり}をも、恨^{うれひ}をも、憂^{うれひ}をも忘るるなり。今は可^{なつかし}懷^{なつかし}き顔を見る能はざる失望に加ふるに、この不平に遭^あひて、しかも言解く者のあらざれば、彼の慍^{いかり}は野火の飽くこと知らで燎^やくやうなり。

この夕隆^{ゆふべ}三は彼に食後の茶を薦^{すす}めぬ。一人佗^{わび}しければ留^{とど}めて物^{ものが}語^がはんとてなるべし。されども貫一の屈托^{くつた}顔^{がほ}して絶えず思の非ぬ方^{あらかた}に馳^はする氣色^{けしき}なるを、

「お前どうぞ為^しなすつたか。うむ、元氣が無いの」

「はあ、少し胸が痛みますので」

「それは好くない。劇^{ひど}く痛みでもするかな」

「いえ、なに、もう宜^{よろし}いのでございます」

「それぢや茶は可^いくまい」

「頂^{ちようだい}戴^{だい}します」

かかる浅ましき慍^{いかり}を人に移さんは、甚^{はなは}だ謂^{いは}無^なき事なり、と自ら制して、書齋に歸りて愁^{なまじ}ひ心を傷めんより、人に対して姑^{しば}く憂^{うき}を忘るるに如^しかじと思ひければ、彼は努めて寛^{くつろ}がんとしたれども、動^やもすれば心は空^{そら}になりて、主の語を聞^き逸^{そら}さむとす。

今日文の来て細々と優き事など書聯ねたらば、如何に我は嬉からん。なかなか同じ処に居て飽かず顔を見るに易へて、その樂は深かるべきを。さては出行きし恨も忘られて、二夜三夜は遠かりて、せめてその文を形見に思続けんもをかしかるべきを。

彼はその身の卒に出行きしを、如何に本意無く我の思ふらんかは能く知るべきに。それを知らば一筆書きて、など我を慰めんとは為ざる。その一筆を如何に我の嬉く思ふらんかをも能く知るべきに。我を可憐しと思へる人の何故にさは為ざるにやあらん。かくまでに情篤からぬ恋の世に在るべきか。疑ふべし、疑ふべし、と貫一の胸は又乱れぬ。主の声に驚かされて、彼は忽ちその事を忘るべき吾に復れり。

「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう」

笑ふにもあらず、顰むにもあらず、稍自ら嘲むに似たる隆三の顔は、燈火に照されて、常には見ざる異き相を顕せるやうに、貫一は覚ゆるなりき。

「はあ、どういふ御話ですか」

彼は長き髯を忙く揉みては、又頤の辺より徐に撫下して、先打出さん語を案じたり。

「お前の一身上の事に就いてだがの」

纔にかく言ひしのみにて、彼は又遅ひぬ、その髯は虻に苦しむ馬の尾のやうに揮はれつ

つ、

「いよいよお前も今年の卒業だつたの」

貫一は遽にはかに敬はるる心地して自と膝おのづひざを正せり。

「で、私もまあ一安心したと云ふもので、幾分かこれでお前の御父様おとつさんに対して 恩返おんがへしも出来たやうな訳、就いてはお前も益勉強ますますしてくれんでは困るなう。未だこの先大学を卒業して、それから社会へ出て相応の地位を得るまでに仕上げなければ、私も鼻は高くないのだ。どうか洋行の一つも為させて、指折の人物に為したいと考へてゐるくらゐ、未だ未だこれから 両肌りようはだを脱いで世話をしなければならんお前の体だ、なう」

これを聞きける貫一は鉄繩てつじようをもて縛いめられたるやうに、身の重きに堪たへず、心の転うたた苦くるきを感じたり。その恩の余りに大いなるが為に、彼はその中うちに在りてその中に在ることくるしを忘れんと為る平生へいぜいを省みたるなり。

「はい。非常な御恩に預りまして、考へて見ますと、口では御礼の申しやうもございません。愚父おやぢがどれ程の事を致したか知りませんが、なかなかこんな御恩返を受けるほどの事が出来るものでは有りません。愚父の事は措おきまして、私は私で、この御恩はどうか立派に御返し申したいと念おもつてをります。愚父の亡なくなりましたあの時に、此方こちらで引取いたつて戴ただか

なかつたら、私は今頃何に成つてをりますか、それを思ひますと、世間に私ほど幸さいなもの
は恐おそく無いでございませう」

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己おのれを見て、その着たる衣きぬを見て、その坐れる
を見て、やがて美き宮と共にこの家の主ぬしとなるべきその身を思ひて、漫そぞろに涙を催せり。実げ
に七千円の粧そうれん奩げんを随へて、百万金も購あがなふ可からざる恋女房を得べき学士よ。彼は小買の
米を風呂敷に提げて、その影の如く瘦せたる犬とともに月夜を走りし少年なるをや。

「お前がさう思うてくれれば私わしも張合がある。就いては改めてお前に頼たのみがあるのだが、聴
いてくれるか」

「どういふ事ですか、私で出来ます事ならば、何なりと致します」

彼はかく潔く答ふるに憚はばらざりけれど、心の底には危むところ無きにしもあらざりき。
人のかかる言ことばを出す時は、多く能あたはざる事を強しふる例ためしなればなり。

「外でも無いがの、宮の事だ、宮を嫁に遣やらうかと思つて」

見るに堪たへざる貫一の驚愕おどろきをば、せめて乱さんと彼は慌あわただし忙ことばく語を次ぎぬ。

「これに就いては私も種々いろいろと考へたけれど、大きに思ふところもあるで、いつそあれは遣
つて了しまうての、お前はも少しの事だから大学を卒業して、四五年も欧羅巴エウロッパへ留学して、

全然^{すつかり}仕上げたところで身を固めるとしたらどうかかな」

汝^{なんぢ}の命を与へよと逼^{せま}らるる事あらば、その時の人の思は如何^{いか}なるべき！ 可^{おそろし}恐^{おそ}きまで

に色を失へる貫一^{むなし}は空^{おもて}く隆三^{うちまも}の面を打目成^{うてい}るのみ。彼は太^{いた}く困^{こう}じたる体にて、長^{なが}き髯^{ひげ}をば揉^{もみ}みに揉^{もみ}みたり。

「お前に約束をして置いて、今更^{へんがへ}変換^{へんかん}を為るのは、何とも氣の毒だが、これに就いては私も大きに考へたところがあるので、必ずお前の為にも悪いやうには計はんから、可^いかい、宮は嫁に遣^{つか}る事^{こと}にしてくれ、なう」

待^{まち}てども貫一の言^{こと}を出^いさざれば、主^{あるじ}は寡^{すくな}からず惑^{まど}へり。

「なう、悪く取つてくれば困るよ、あれを嫁に遣^{つか}るから、それで我家^{うち}とお前との縁を切つて了^{しま}ふと云ふのではない、可^いかい。大^{たい}した事は無^ないがこの家は全^{そつくり}然^{ぜん}お前に譲^{ゆづ}るのだ、

お前は矢張^{やはり}私の家督^{けとく}よ、なう。で、洋行も為せやうと思ふのだ。必ず悪く取つては困るよ。

約束をした宮をの、余^よ所^そへ遣^{つか}ると云へば、何かお前に不足でもあるやうに聞えるけれど、決してさうした訳ではないのだから、其^{そこ}処^{ところ}はお前が能^よく承^{うけ}知^ししてくれなければ困る、誤^ご解^{かい}されては困る。又お前にしても、学問を仕上げて、なう、天^{あつぱれ}晴^{はれ}の人物に成るのが第一の希望^{のぞみ}であらう。その志^しを遂^とげさへ為れば、宮と一所になる、ならんはどれ程の事でもない

のだ。なう、さうだらう、然しこれは理窟で、お前も不服かも知れん。不服と思ふから私も頼むのだ。お前に頼が有ると言うたのはこの事だ。

従来もお前を世話した、後来も益世話をせうからなう、其処に免じて、お前もこの頼は聴いてくれ」

貫一は戦く唇を咬緊めつつ、故ら緩舒に出せる声音は、怪くも常に変れり。

「それぢや翁様の御都合で、どうしても宮さんは私に下さる訳には参らんですか」

「さあ、断つて遣れんと云ふ次第ではないが、お前の意はどうだ。私の頼は聴ずとも、又自分の修業の邪魔にならうとも、そんな貪着は無しに、何でもかでも宮が欲しいと云ふのかな」

「……………」

「さうではあるまい」

「……………」

得言はぬ貫一が胸には、理に似たる彼の理不尽を憤りて、責むべき事、詰るべき事、罵るべき、言破るべき事、辱むべき事の数々は沸くが如く充満したれど、彼は神にも勝れる恩人なり。理非を問はずその言には逆ふべからずと思へば、血出づるまで舌を咬みて、

敢て言はじと覚悟せるなり。

彼は又思へり。恩人は恩を枷に如く此く逼れども、我はこの枷の為に屈せらるべきも、彼は如何なる斧を以てか宮の愛をば割かんとすらん。宮が情は我が思ふままに濃ならずとも、我を棄つるが如きさばかり薄き情にはあらざるを。彼だに我を棄てざらんには、枷も理不尽も恐るべきかは。頼むべきは宮が心なり。頼まるるも宮が心也と、彼は可憐き宮を思ひて、その父に対する慍を和げんと勉めたり。

我は常に宮が情の濃ならざるを疑へり。あだかも好しこの理不尽ぞ彼が愛の力を試むるに足るなる。善し善し、盤根錯節に遇はずんば。

「嫁に遣ると有仰るのは、何方へ御遣しになるのですか」

「それは未だ確とは極らんがの、下谷に富山銀行と云ふのがある、それ、富山重平な、あれの息子の嫁に欲いと云ふ話があるので」

それぞ箕輪の骨牌会に三百円の金剛石を炫かせし男にあらずやと、貫一は陰に嘲笑へり。されど又余りにその人の意外なるに驚きて、やがて又彼は自ら笑ひぬ。これ必ずしも意外ならず、苟くも吾が宮の如く美きを、目あり心あるものの誰かは恋ひざらん。独り怪しとも怪きは隆三の意なる哉。我十年の約は軽々く破るべきにあらず、猶謂

無きは、一人娘を出して嫁せしめんとするなり。戯るるにはあらずや、心狂へるにはあらずや。貫一は寧ろかく疑ふをば、事の彼の真意に出でしを疑はんより邇かるべしと信じたりき。

彼は競争者の金剛石なるを聞きて、一度は汚され、辱められたらんやうにも怒を作せしかど、既に勝負は分明にして、我は手を束ねてこの弱敵の自ら僵るるを看んと思へば、心稍落るぬ。

「は、はあ、富山重平、聞いてをります、偉い財産家で」

この一言に隆三の面は熱くなりぬ。

「これに就いては私も大きに考へたのだ、何に為ろ、お前との約束もあるものなり、又一人娘の事でもあり、然し、お前の後來に就いても、宮の一身に就いてもの、又私たちは段々取る年であつて見れば、その老後だの、それ等の事を考へて見ると、この鳴沢の家には、お前も知つての通り、かうと云ふ親類も無いで、何かに就けて誠に心細いわ、なう。私たちは追々年を取るばかり、お前たちは若しと云ふもので、ここに可頼い親類が有れば、どれ程心丈夫だか知れて、なう。そこで富山ならば親類に持つても可愧からん家格だ。気の毒な思をしてお前との約束を變易するのも、私たちが一人娘を他へ遣つて了ふ

のも、究竟は銘々の為に行末好かれと思ふより外は無いのだ。

それに、富山からは切つての懇望で、無理に一人娘を貰ふと云ふ事であれば、息子夫婦は鳴沢の子同様に、富山も鳴沢も一家のつもりで、決して鳴沢家を疎には為まい。娘が内に居なくなつて不都合があるならば、どの様にもその不都合の無いやうには計はうからとなう、それは随分事を分けた話で。

決して慾ではないが、良い親類を持つと云ふものは、人で謂へば取も直さず良い友達で、お前にしてもさうだらう、良い友達があれば、万事の話し合手になる、何かの力になる、なう、謂はば親類は一家の友達だ。

お前がこれから世の中に出るにしても、大相な便宜になるといふもの。それやこれや考へて見ると、内に置かうよりは、遣つた方が、誰の為彼の為ではない。四方八方が好いのだから、私も決心して、いつそ遣らうと思ふのだ。

私の了簡はかう云ふのだから、必ず悪く取つてくれては困るよ、なう。私だとして年効も無く事を好んで、何為に若いものの不為になれと思ふものかな。お前も能く其処を考へて見てくれ。

私もかうして頼むからは、お前の方の頼も聴かう。今年卒業したら直に洋行でもしたい

と思ふなら、又さう云ふ事に私も一番奮発しやうではないか。明日にも宮と一処になつて、私たちを安心さしてくれるよりは、お前も私も少しのところを辛抱して、いつその事博士になつて喜ばしてくれんか」

彼はさと思ひのままに説完せたる面色して、寛に髻を撫でてゐたり。

貫一は彼の説進むに従ひて、漸くその心事の火を覩るより明なるを得たり。彼が千言万語の舌を弄して倦まざるは、畢竟利の一字を掩はんが為のみ。貧する者の盗むは世の習ながら、貧せざるもなほ盗まんとするか。我も穢れたるこの世に生れたれば、穢れたりとは自ら知らで、或は穢れたる念を起し、或は穢れたる行を為すことあらむ。されど自ら穢れたりと知りて自ら穢すべきや。妻を売りて博士を買ふ！これ豈穢れたるの最も大なる者ならずや。

世は穢れ、人は穢れたれども、我は常に我恩人の独り汚に染みざるを信じて疑はざりき。過ぐれば夢より淡き小恩をも忘れずして、貧き孤子を養へる志は、これを証して余あるを。人の浅ましきか、我の愚なるか、恩人は酷くも我を欺きぬ。今は世を挙げて皆穢れたるよ。悲めばとて既に穢れたる世をいかにせん。我はこの時この穢れたる世を喜ばんか。さしもこの穢れたる世に唯一つ穢れざるものあり。喜ぶべきものあるにあらずや。貫一は

可憐いとき宮が事を思へるなり。

私の愛か、死をもて脅おびすとも得て屈すべからず。宮が愛か、某なにがの帝の冠かどを飾れると聞く世界無双ぶそうの大金剛だいこんごう石をもて購あがはんとすとも、争いかでか動し得べき。我と彼との愛こそ淤お泥でいの中に輝く玉の如きものなれ、我はこの一つの穢れざるを抱いだきて、この世の渾すべて穢れたるを忘れん。

貫一はかく自ら慰めて、さすがに彼の巧言を憎うらめし可恨うらめしとは思ひつつも、枉まげてさあらぬ体ていに聴きゐたるなりけり。

「それで、この話は宮みさんも知つてゐるのですか」

「薄々うすうすは知つてゐる」

「では未だ宮みさんの意見は御聞にならんのぞ？」

「それは、何だ、一寸聞いたがの」

「宮さんはどう申してをりました」

「宮か、宮は別にどうといふ事は無いのだ。御父様おとつさんや御母様おつかさんの宜よろいやうにと云ふので、宮の方には異存は無いのだ、あれにもすつかり訳を説いて聞かしたところが、さう云ふ次第やうやならばと、漸く得心がいつたのだ」

断じて詐^{いつはり}なるべしと思ひながらも、貫一の胸は跳^{をど}りぬ。

「はあ、宮さんは承知を為ましたので？」

「さう、異存は無いのだ。で、お前も承知してくれ、なう。一寸聞けば無理のやうではあるが、その実少しも無理ではないのだ。私^{わし}の今話した訳はお前にも能く解つたらうが、なう」

「はい」

「その訳が解つたら、お前も快く承知してくれ、なう。なう、貫一」

「はい」

「それではお前も承知をしてくれるな。それで私も多きに安心した。悉^{くはし}い事は何^{いづ}れ又寛^{ゆつく}緩^り話を為やう。さうしてお前の頼も聴かうから、まあ能く種々^{いろいろ}考へて置くが可^いいの」

「はい」

第七章

熱海は東京に比して温きこと十余度なれば、今日漸^{やうや}く一月の半^{なかば}を過ぎぬるに、梅^{ばい}林^{りん}の

花は二千本の梢こすゑに咲乱ふれて、日に映うつへる光は玲瓏れいろうとして人の面おもてを照し、路みちを埋うづむる幾斗いくとの清香せいこうは凝こりて掬むすぶに堪たへたり。梅うめの外ほかには一木いちぼく無く、処ところどころ々々の乱石れんせきの低く横よこはるのみにて、地は坦たひらかせんに甃しを鋪しきたるやうの芝生しばふの園うちの中を、玉たまの碎くだけて迸ほとばしり、練ねりぎぬの裂ひけて翻ひるがへる如ごとき早瀬はやせの流ありて横よこさまに貫くけり。後に負おへる松杉しょうしやうの緑は麗うつくかに霽はれたる空を攢さしてその頂いたに方あたりて懶ものうげに懸かれる雲は眠ねむるに似たり。習そよとの風もあらぬに花は頻しきりに散りぬ。散る時に輕かろく舞うふを鶯うぐひすは争あひて歌へり。

宮は母親と連立いりきたちて入いりぬ。彼等は橋を渡りて、船板しやうぎの牀しょうぎ几こを据もゑたる木の下もとを指ゆして緩ゆるく歩あるめり。彼の病は未いまだ快からぬにや、薄飯うすげしやう糲ししたる顔色も散りたる葩はなびらのやうに衰はへて、足の運はこびも怠たげに、動ともすれば頭かしらの低たるを、思おもひだしては努なめて梢を眺ながむるなりけり。彼の常として物ものあんじ案あんすれば必ず唇くちびるを咬かむなり。彼は今頻しきりに唇を咬かみたりしが、

「御母おつかさん、どうしませうねえ」

いと好く咲きたる枝を飽かず見上げし母の目は、この時漸く娘に転うつりぬ。

「どうせうたつて、お前の心一つぢやないか。初は兎じめにお前が適いきたいといふから、かう云ふ話にしたのぢやないかね。それを今更……」

「それはさうだけれど、どうも貫かんいつ一いつさんの事が氣になつて。御父おとうさんはもう貫一かんいつさんに

話を為すつたらうか、ねえ御母さん」

「ああ、もう為すつたらうとも」

宮は又唇を咬みぬ。

「私は、御母さん、貫一さんに顔が合されないわね。だから若し適くのなら、もう逢はずに直と行つて了ひたいのだから、さう云ふ都合にして下さいな。私はもう逢はずに行くわ」
声は低くなりて、美き目は湿へり。彼は忘れざるべし、その涙を拭へるハンカチーフは再び逢はざらんとする人の形見なるを。

「お前がそれ程に思ふのなら、何で自分から適きたいと言ひなのだえ。さう何時までも気が迷つてゐては困るぢやないか。一日経てば一日だけ話が運ぶのだから、本当にどうとも確然極めなくては可けないよ。お前が可厭なものを無理にお出といふのぢやないのだから、断るものなら早く断らなければ、だけれど、今になつて断ると云つたつて……」

「可いわ。私は適くことは適くのだけれど、貫一さんの事を考へると情無くなつて……」

貫一が事は母の寢覚にも苦むところなれば、娘のその名を言ふ度に、犯せる罪をも歌はる心地して、この良縁の喜ぶべきを思ひつつも、さすがに胸を開きて喜ぶを得ざるなり。彼は強ひて宮を慰めんと試みつ。兼ねては自ら慰むるなるべし。

「お父さんからお話があつて、貫一さんもそれで得心がいけば、済む事だし、又お前が彼方へ適つて、末々まで貫一さんの力になれば、お互の仕合と云ふものだから、其処を考へれば、貫一さんだつて……、それに男と云ふものは思切が好いから、お前が心配してゐるやうなものではないよ。これなり遇はずに行くなんて、それはお前却つて善くないから、矢張逢つて、丁と話をして、さうして清く別れるのさ。この後とも末長く兄弟で往来をしなければならぬものだもの。」

いづれ今日か明日には御音信があつて、様子が解らうから、さうしたら還つて、早く支度に掛らなければ」

宮は牀几に倚りて、半は聴き、半は思ひつつ、膝に散来る葩を拾ひては、おのれの唇に代へて連に咬碎きぬ。鶯の声の絶間を流の音は咽びて止まず。

宮は何心無く面を挙げるとともに稍隔てたる木の間に男の漫行する姿を認めたり。彼は忽ち眼を着けて、木立は垣の如く、花は幕の如くに遮る隙を縫ひつつ、姑くその影を逐ひたりしが、遂に誰を見出しけん。慌忙く母親に咄けり。彼は急に牀几を離れて五六歩進行きしが、彼方よりも見付けて、逸早く呼びぬ。

「其処に御出でしたか」

その声は静なる林を動して響きぬ。宮は聞くと斉く、恐れたる風情にて牀几の端に竦りつ。

「はい、唯今し方参つたばかりでございます。好くお出掛でございましたこと」

母はかく挨拶しつつ彼を迎へて立てり。宮は其方を見向きもやらで、彼の急足に近く音を聞けり。

母子の前に顕れたる若き紳士は、その誰なるやを説かずもあらなん。目覚く大なる金イアモンド

剛石の指環を輝かせるよ。柄には緑色の玉を獅子頭に彫みて、象牙の如く瑩潤に白き杖を携へたるが、その尾をもて低き梢の花を打落し打落し、

「今お留守へ行きました、此処だといふのを聞いて追懸けて来た訳です。熱いぢやないですか」

宮はやうやう面を向けて、さて淑に起ちて、恭く礼するを、唯繼は世にも嬉しげなる目して受けながら、なほ飽くまでも倨り高るを忘れざりき。その張りたる腮と、への字に結べる薄唇と、尤異き金縁の目鏡とは彼が尊大の風に慙からざる光彩を添ふるや疑無し。

「おや、さやうでございましたか、それはまあ。余り好い御天気でございますから、ぶら

ぶらと出掛けて見ました。真ほんに今日こんにちはお熱いくらゐでございます。まあこれへお掛遊ばして」

母は牀几を払へば、宮は路みちを開ひらきて傍かたはに佇たたずめり。

「貴方あなたがたもお掛けなさいましな。今朝です、東京から手紙で、急用があるから早速歸るやうに——と云ふのは、今度私が一寸した会社を建てるのです。外国へ此方こちの塗物を売込む会社。これは去年中からの計画で、いよいよこの三四月頃には立派に出来上る訳でありますから、私も今は随分忙せはしい体からだ、なにしろ社長ですから。それで私が行かなければ解らん事があるので、呼びに来た。で、翌あすの朝立たなければならぬのであります」

「おや、それは急な事で」

「貴方がたも一いつしよ所にお立ちなさらんか」

彼は宮の顔を偷ぬす視つ。宮は物言はん気色けしきもなくて又母の答へぬ。

「はい、難ありがた有う存ぞんじます」

「それとも未だ御在まですか。宿屋に居るのも不自由で、面白くもないぢやありませんか。来年あたりは一つ別荘でも建てませう。何の難わづけは無い事です。地面を広く取つてその中に風流な田舎家ゐなを造るです。食物などは東京から取寄せて、それでなくては実は保養には成

らん。家が出来てから寛ゆつく緩遊びに来るです」

「結構でございますね」

「お宮さんは、何ですか、かう云ふ田舎の静な所が御好なの？」

宮は笑ゑみを含みて言はざるを、母は傍かたはらより、

「これはもう遊ぶ事なら嫌きらひはございませんので」

「はははははは誰もさうです。それでは以後盛これからにお遊びなさい。どうせ毎日用は無いのだから、田舎でも、東京でも西さい京きやうでも、好きな所へ行つて遊ぶのです。船は御嫌おきらひですか、ははあ。船が平氣だと、支那しなから亜米利加アメリカの方を見物がてら今度旅行を為て来るのも面白いけれど。日本の内ぢや遊山ゆうさんに行いたところで知れたもの。どんなに贅ぜい沢たくを為たからと云つて」

「御おか歸へりになつたら一日赤坂の別荘の方へ遊びにお出いで下ください、ねえ。梅が好いのであります。それは大きな梅林が有つて、一本々々種の違ふのを集めて二百本もあるが、皆老木ばかり。この梅などは全まるで為方しかたが無い！こんな若い野梅のうめ、薪まきのやうなもので、庭に植すゑられる花ぢやない。これで熱海の梅林も凄すさまじい。是非内うちのをお目に懸かけたいでありますね、一日遊びに来て下さい。御馳走ごちそうを為ますよ。お宮さんは何が所好すきですか、ええ、一番所好

なものは？」

彼は陰ひそかに宮と語らんことを望めるなり、宮はなほ言はずして可羞はづかしげに打笑うちゑめり。

「で、何日御帰でありますか。明朝あした一所に御発足おたちにはなりませんか。此地こつちにさう長く居なければならんと云ふ次第ではないのでせう、そんなら一所にお立ちなすつたらどうであります」

「はい、難ありがた有うございますが、少々宅の方の都合がございまして、二三日内うちには音信たよりがございます筈はずで、その音信たよりを待ちまして、実は帰ることに致してございますものですから、折角の仰せですが、はい」

「ははあ、それぢやどうもな」

唯継は例の倨おごりて天を睨にらむやうに打仰うちあふぎて、杖の獅子頭ししがしらを撫廻なでまはしつゝ、少時思案しばらくする体ていなりしが、やをら白羽しろはぶ二重のハンカチーフを取とり出して、片手に一揮ひとふり揮ふるよと見れば鼻はなを拭ぬぐへり。堇ヴァイオレット花かの香かを咽をむせばさるるばかりに薰くんじ遍わたりぬ。

宮も母もその鋭にほひき匂におひに驚けるなり。

「ああと、私これから少し散歩しやうと思ふのであります。これから出て、流つに沿ついて、田圃たんぼの方を。私未まだ知らんけれども、余程景色が好いさう。御一所にと云ふのだが、大分

跡程みちが有るから、貴方あなたは御迷惑ごめいわくであります。二時間ばかりお宮さんを御貸し下さいな。私一人で歩いてもつまらない。お宮さんは胃いが不良わるいのだから散歩は極きめて薬、これから行つて見ませう、ねえ」

彼は杖を取直してはや立たんとす。

「はい。難ありがた有うございます。お前お供をお為しかい」

宮の遅たふを見て、唯繼ことさらは故に座を起たてり。

「さあ行つて見ませう、ええ、胃病の薬です。さう因いんじん循しゆんしてゐては可いけない」

つと寄りて輕かろく宮の肩を拊うちぬ。宮は忽たちまち面おもてを紅あかめて、如何いかにとも為せん術すべを知らざらんやうに立たちまど惑とひてゐたり。母の前をも憚はばかぬ男の馴なれ々しさを、憎しとはあらねど、己おのれの忤はなきやうに慙はづるなりけり。

得も謂いはれぬその仇無あどなきの身に浸しみ遍わたるに堪たへざる思は、漫そぞろに唯繼の目の中に顕うちれて異あやき独ひとり笑あはれなりぬ。この仇無あどなきしらしき、美き娘の柔やはらかき手を携もへて、人無き野道の長の閑どなるを語かたひつつ行かば、如何いかばかり楽おつからんよと、彼ははや心も空そらになりて、

「さあ、行つて見ませう。御母おつかさんから御許おゆるしが出たから可いではありませんか、ねえ、貴方あなた、宜よろしであります」

母は宮の猶差なほはづるを見て、

「お前いお出いでかい、どうお為しだえ」

「貴方、お出かいなどと有おつしや仰おつしやつちや可おつしやけません。お出なさいと命令なを為なすつて下さい」

宮も母も思はず笑へり。唯繼おくも後おくれじと笑へり。

又人の入来いりくる氣勢けはひなるを宮は心着うかがきて窺うかがひしに、姿は見えずして靴の音のみを聞けり。

梅見る人か、あらぬか、用ありげに忙せはしく踏立ふみだつる足音なりき。

「ではお前まいお供をおしな」

「さあ、行きませう。直其處ちきそこまででありますよ」

宮は小ちひさき声して、

「御母おつかさんも一處おいでに御出おいでなさいな」

「私かい、まあお前お供をおしな」

母親を伴ひては大いに風流ならず、頗すこぶる妙ならずと思へば、唯繼は飽くまでこれを防が

んと、

「いや、御母さんには却かへつて御迷惑です。道が良くないから御母さんにはとても可かけますまい。實際貴方には切たつてお勧め申されない。御迷惑は知れてゐる。何も遠方へ行くので

はないのだから、御母さんが一処でなくても可いぢやありませんか、ねえ。私折角思立つたものでありますから、それでは一寸其処まで可いから附合つて下さい。貴女が可厭だつたら直に帰りますよ、ねえ。それはなかなか好い景色だから、まあ私に騙されたと思つて来て御覧なさいな、ねえ」

この時忙しげに聞えし靴音ははや止みたり。人は出去りしにあらで、七八間彼方なる木蔭に足を停めて、忍びやかに様子を窺ふなるを、此方の三人は誰も知らず。イめる人は高等中学の制服の上に焦茶の外套を着て、肩には古りたる象皮の学校鞆を掛けたり。彼は間貫一にあらずや。

再び靴音は高く響きぬ。その驟なると近きとに驚きて、三人は始めて音する方を見遣りつ。

花の散りかかる中を進来つつ学生は帽を取りて、

「姨さん、参りましたよ」

母子は動顛して殆ど人心地を失ひぬ。母親は物を見るべき力もあらず呆れ果てたる目をば空く瞪りて、少時は石の如く動かず、宮は、あはれ生きてあらんより忽ち消えてこの土と成すらんことの、せめて心易さを思ひつつ、その淡白き唇を啖裂かんとす

ばかりに咬みて咬みて止まざりき。

想ふに彼等の驚愕と恐怖とはその殺せし人の計らずも今生きて来れるに会へるが如きものならん。氣も不覺なれば母は譚語のやうに言出せり。

「おや、お出なの」

宮は些少なりともおのれの姿の多く彼の目に触れざらんやうにと冀へる如く、木蔭に身を側めて、打過む呼吸を人に聞かれじとハンカチーフに口元を掩ひて、見るは苦けれども、見ざるも辛き貫一の顔を、俯したる額越に窺ひては、又唯継の氣色をも氣遣へり。唯継は彼等の心々にさばかりの大波瀾ありとは知らざれば、聞及びたる鳴沢の食客の来れるよと、例の金剛石の手を見よがしに杖を立てて、誇りに梢を仰ぐ腮を張れり。

貫一は今回の事も知れり、彼の唯継なる事も知れり、既にこの場の様子をも知らざるにはあらねど、言ふべき事は後にぞ犇と言はん、今は姑く色にも出さじと、裂けもしぬべき無念の胸をやうやう鎮めて、苦き笑顔を作りてゐたり。

「宮さんの病氣はどうでございます」

宮は耐りかねて窃にハンカチーフを咬緊めたり。

「ああ、大きに良いので、もう二三日内には帰らうと思つてね。お前さん能く来られましたね。学校の方は？」

「教場の普請を為るところがあるので、今日半日と明日明後日と休課になつたのですから」

「おや、さうかい」

唯継と貫一とを左右に受けたる母親の絶体絶命は、過ちて野中の古井に落ちたる人の、沈みも果てず、上りも得為ず、命の綱と危くも取縋りたる草の根を、鼠の来りて噛むに遭ふと云へる比喻に最能く似たり。如何に為べきかと或は懼れ、或は惑ひたりしが、終にその免るまじきを知りて、彼はやうやう胸を定めつ。

「丁度宅から人が参りましたでございますから、甚だ勝手がましうございますが、私等はこれから宿へ帰りますでございますから、いづれ後程伺ひに出ますでございますが……」

「ははあ、それでは何でありますか、明朝は御一所に帰れるやうな都合になりますな」

「はい、話の模様に因りましては、さやう願はれるかも知れませんが、いづれ後程には是非伺ひまして、……」

「成程、それでは残念ですが、私も散歩は罷めます。散歩は罷めてこれから帰ります。帰

つてお待申してゐますから、後に是非お出いで下さいよ。宜よろいですか、お宮さん、それでは後にきつとお出いでなさいよ。誠に今日は残念でありますな」

彼は行かんとして、更に宮の傍そば近く寄来よりて、

「貴方あなた、きつと後のちにお出いでなさいよ、ええ」

貫一は瞬まばたきも為せで視みてゐたり。宮は窮して彼に会釈さへ為しかねつ。娘氣の可はづかし羞さにかくあるとのみ思へる唯繼は、益寄添ますますひつつ、舌怠したたるきまでに語を和やけて、

「宜よろいですか、来なくては可かけませんよ。私待まちつてゐますから」

貫一の眼は燃ゆるが如き色を作なして、宮の横顔を睨ねめつたり。彼は懼おそれて傍目わきめをも転ふらざりけれど、必ずさあるべきを想おもひて独ひとり心を慄おそかせしが、猶なほ唯繼の如何いかなることを言出でんも知られずと思へば、ともにかくにもその場を繕つくろひぬ。母子の為には幾い許かばかりの幸さいはひなりけん。彼は貫一に就いて半点の疑いひをも容ゆるれず、唯饜あくまでもいとき宮に心を遺のこして行けり。

その後影うしろかげを透とほすばかりに目成まもれる貫一は我を忘れて姑しばく佇たたずめり。両個ふたりはその心を測りかねて、言ことも出いでず、息をさへ凝むして、空むなく早瀬の音の聒かしまきを聴くのみなりけり。

やがて此方こなたを向きたる貫一は、尋常ただならず激して血の色を失へる面上おもてに、多からんとす

れども能はずと見ゆる微妙の笑を漏して、

「宮さん、今の奴はこの間の骨牌に来てゐた金剛石だね」

宮は俯きて唇を咬みぬ。母は聞かざる為して、折しも啼ける鶯の木の間を窺へり。貫一はこの体を見て更に嗤笑ひつ。

「夜見たらそれ程でもなかつたが、昼間見ると実に氣障な奴だね、さうしてどうだ、あの高慢ちきの面は！」

「貫一さん」母は卒に呼びかけたり。

「はい」

「お前さん翁さんから話はお聞きでせうね、今度の話は」

「はい」

「ああ、そんなら可いけれど。不断のお前さんにも似合はない、そんな人の悪口などを言ふものぢやありませんよ」

「はい」

「さあ、もう帰りませう。お前さんもお草臥だらうから、お湯にでも入つて、さうして未だ御午餐前なのでせう」

「いえ、きしや 瀕車すしの中で鮎あゆみを食べました」
 三人は俱ともに歩あゆみ始めぬ。貫一は外オバコ套オトの肩を払はれて、後うしろを捻ねぢ向けば宮おもてと面を合せ
 たり。

「其処そこに花が粘ついてゐたから取つたのよ」

「それは難ありがた有う※」

第八章

打霞うちかすみたる空ながら、月の色の句にほひこほ滴ほるやうにして、微ほの白しろき海は縹ひよう渺びようとし
 て限を知らず、譬たとへば無邪気なる夢を敷けるに似たり。寄せては返す波の音も眠ねむげに怠り
 て、吹来る風は人を酔はしめんとす。打連れてこの浜辺を逍遙しょうようせるは貫一と宮となり
 けり。

「僕は唯胸ただが一杯で、何も言ふことが出来ない」

五歩六歩行きし後宮はやうやう言出でつ。

「堪忍かんにんして下さい」

「何も今更謝^{あやま}ることは無いよ。一体今度の事は翁^{おぢ}さん姨^{おば}さんの意から出たのか、又はお前さんも得心であるのか、それを聞けば可^いいのだから」

「……………」

「此地^{こつち}へ来るまでは、僕は十分信じてをつた、お前さんに限つてそんな了^{りようけん}簡^{かん}のあるべき筈^{はず}は無いと。実は信じるも信じないも有りはしない、夫婦^{なかつ}の間で、知れきつた話だ。

昨夜^{ゆふべ}翁^{おきな}さんから悉^{くはし}く話があつて、その上に頼むといふ御言^{おことば}だ」

差含^{さしぐ}む涙に彼の声は顫^{ふる}ひぬ。

「大恩を受けてゐる翁さん姨さんの事だから、頼むと言はれた日には、僕の体^{からだ}は火水^{ひみづ}の中へでも飛込まなければならないのだ。翁さん姨さんの頼なら、無論僕は火水の中へでも飛込む精神だ。火水の中へなら飛込むがこの頼ばかりは僕も聴くことは出来ないと思つた。火水の中へ飛込めと云ふよりは、もつと無理な、余り無理な頼ではないかと、僕は済まなけれど翁さんを恨んでゐる。

さうして、言ふ事も有らうに、この頼を聴いてくれれば洋行さして遣^やるとお言ひのだ。い……………いかに貫一は乞食^{みなしご}士族^{ししゆ}の孤児^{みなしご}でも、女房を売つた錢で洋行せうとは思はん！」

貫一は蹈^{ふみ}留^{とどま}りて海に向ひて泣けり。宮はこの時始めて彼に寄添ひて、氣遣^{きづかは}しげにその顔を差^さ覗^{のぞ}きぬ。

「堪忍して下さいよ、皆私^{みんな}が……どうぞ堪忍して下さい」

貫一の手に縋^{すが}りて、忽ちその肩^{おもと}に面^{おしあ}を推当つると見れば、彼も泣音を洩^{なくね}すなりけり。波は漾々^{ようよう}として遠く烟^{けむ}り、月は朧^{おぼろ}に一湾の真砂^{まさご}を照して、空も汀^{みぎは}も淡白^{うすしろ}き中に、立尽せる二人の姿は墨^{すずめ}の滴^{したた}りたるやうの影を作れり。

「それで僕は考へたのだ、これは一方には翁^{おぢ}さんが僕を説いて、お前さんの方は姨^{おば}さんが説得しやうと云ふので、無理に此^{ここ}処へ連出したに違^{ちが}ひない。翁さん姨さんの頼と有つて見れば、僕は不承知を言ふことの出来ない身分だから、唯々^{はいはい}と言つて聞いてゐなければ、宮さんは幾多^{いくく}でも剛情を張つて差^さ支^{つか}無いのだ。どうあつても可厭^{いや}だとお前さんさへ言通せば、この縁談はそれで破れて了^{しま}ふのだ。僕が傍^{そば}に居ると智慧^{ちゑ}を付けて邪魔^すを為ると思ふものだから、遠くへ連出して無理往生に納得させる計だなどと考着くと、さあ心配で心配で僕は昨夜^{ゆうふべ}は夜一夜寐^{よつび}はしない、そんな事は万々^{ばんばん}有るまいけれど、種々^{いろいろ}言はれる為に可厭^{いや}と言はれない義理になつて、若^{もし}や承諾するやうな事があつては大変だと思つて、家^{うち}は学校へ出る積^{つも}で、僕はわざわざ様子を見に來たのだ。

馬鹿な、馬鹿な！ 貫一ほどの大馬鹿者が世界中を捜して何処に在る!! 僕はこれ程自分が大馬鹿とは、二十五歳の今日まで知……知……知らなかった」

宮は可^{かなしき}悲と可^{おそろしき}懼に襲はれて少^{すこし}く声さへ立てて泣きぬ。

憤^{いかり}を抑^{おさ}ふる貫一の呼吸は漸^{やうや}く乱れたり。

「宮^{みい}さん、お前は好くも僕を欺いたね」

宮は覺えず慄^{そのの}けり。

「病氣と云つてここへ来たのは、富山と逢ふ為だらう」

「まあ、そればかりは……」

「おおそればかりは？」

「余^{あんま}り邪推が過ぎるわ、余^{ひじ}り酷いわ。何ほ何でも余り酷い事を」

泣入る宮を尻目に挂^かけて、

「お前でも酷いと云ふ事を知つてゐるのかい、宮さん。これが酷いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……貫一は血の涙を流しても足りは為^せんよ。

お前が得心せんものなら、此地^{ここ}へ来るに就いて僕に一言^{いちごん}も言はんと云ふ法は無からう。家を出るのが突然で、その暇が無かつたなら、後から手紙を寄来^{よこ}すが可いぢやないか。出^だ

抜しぬいて家を出るばかりか、何たよりの便も為んとくろを見れば、始から富山と出会ふ手筈てはずになつてゐたのだ。或あるひは一所に來たのか知れはしない。宮さん、お前は奸婦かんぷだよ。姦通かんつうしたも同じだよ」

「そんな酷いことを、貫一さん、余りだわ、余りだわ」

彼は正体も無く泣なき顔くつれつつ、寄らんとするを貫一は突退つぎのけて、

「操みさをを破れば奸婦ぢやあるまいか」

「何時いつ私が操を破つて？」

「幾許いくち大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻さいが操を破る傍そばに付いて見てゐるものかい！ 貫一と云ふ歴れきとした夫を持ちながら、その夫を出抜いて、余所よその男と湯治に來てゐたら、姦通してゐないといふ証拠どこが何處に在る？」

「さう言はれて了しまふと、私は何とも言へないけれど、富山さんと逢ふの、約束してあつたのと云ふのは、それは全く貫一さんの邪推よ。私等わたしたちが此地こつちに來てゐるのを聞いて、富山さんが後から尋ねて來たのだわ」

「何で富山が後から尋ねて來たのだ」

宮はその唇くちびるに釘打たれたるやうに再び言ことばは出でざりき。貫一は、かく詰責せる間に彼の

必ず過^{あやまち}を悔い、罪を詫^わびて、その身は未^{おろ}か命までも己^{おのれ}の欲するままならんことを誓ふべしと信じたりしなり。よし信ぜざりけんも、心陰^{こころひそか}に望みたりしならん。如何^{いか}にぞや、彼は露ばかりもさせる気色^{けしき}は無くて、引けども朝顔の垣を離るまじき一図の心^{こころ}変^がを、貫一はなかなか信^{まこと}しからず覚ゆるまでに呆^{あき}れたり。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛^{いとをし}みし人^{あくた}は芥の如く我を悪^{にく}めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤^{いかり}は彼の胸を劈^{つんざ}きて、ほとほと身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖^{くら}ひて、この熱腸^{ねつちよう}を冷^ささんとと思へり。忽^{たちま}ち彼は頭腦の裂けんとするを覚えて、苦痛に得堪^えへずして尻居に僵^{たふ}れたり。

宮は見るより驚^{いとま}く違^{ちが}もあらず、諸共^{もろとも}に砂に塗^まびて搔^かき抱^{いだ}けば、閉ぢたる眼より乱落^{まなこはふりお}つる涙に浸れる灰色の頬^{ほほ}を、月の光は悲しげに彷徨^{さまよ}ひて、迫れる息は凄^{すさまじ}く波打つ胸の響を伝^{つた}ふ。宮は彼の背後^{うしろ}より取^{とり}継^{つぎ}り、抱^{いだ}緊^{きし}め、撼^{ゆり}動^{うご}して、戦^{をの}く声を励せば、励す声は更に戦^{たた}きぬ。

「どうして、貫一さん、どうしたのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顔をいと懇^{ねんごろ}に拭^{ぬぐ}ひたり。

「吁^{あゝ}、宮^{みい}さんかうして二人が一処に居るのも今夜ぎりだ。お前が僕の介抱^{かいほう}をしてくれるの

も今夜ぎり、僕がお前に物を言ふのも今夜ぎりだよ。一月の十七日、宮さん、善く覚えてお置き。来年の今月今夜は、貫一は何処どこでこの月を見るのだから！ 再さら来年の今月今夜：

…十年後の今月今夜…一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！ 可いか、宮さん、一月の十七日だ。来年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が…月が…月が…曇つたらば、宮さん、貫一は何処かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると思つてくれ」

宮は挫ひしぐばかりに貫一に取着きて、物ものぐるはし狂う咽むせび入りぬ。

「そんな悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。私はお肚なかの中には言ひたい事が沢山あるのだけれど、余り言いひにく難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、唯一たつたひとこ言とひたいのは、私は貴方あなたの事は忘れはしないわ——私は生涯忘れはしないわ」

「聞きたくない！ 忘れんくらゐなら何故見棄てた」

「だから、私は決して見棄てはしないわ」

「何、見棄てない？ 見棄てないものが嫁に帰ゆかい、馬鹿な！ 二人の夫が有てるかい」
「だから、私は考へてゐる事があるのだから、もう少し辛抱してそれを——私の心を見て下

さいな。きつと貴方の事を忘れない証拠を私は見せるわ」

「ええ、狼狽^{うろた}へてくだらんことを言ふな。食ふに窮^{こし}つて身を売らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に帰^ゆくのだ。内には七千円も財産が在つて、お前は其^{そこ}処^この一人娘ぢやないか、さうして婿まで極^{きま}つてゐるのぢやないか。その婿も四五五年の後には学士になると、末の見込も着いてゐるのだ。しかもお前はその婿を生涯忘れないほどに思つてゐると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に帰^ゆかなければならんのだ。天下にこれくらゐ理^{わけ}の解らん話が有らうか。どう考へても、嫁に帰^ゆくべき必用の無いものが、無理に算段をして嫁に帰^ゆかうと為るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。

婿が不足なのか、金持と縁を組みたいのか、主意は決してこの二件^{ふたつ}の外にはあるまい。

言つて聞かしてくれ。遠慮は要^いらない。さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫に定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、こんな事に遠慮も何も要るものか」

「私が悪いのだから堪忍して下さい」

「それぢや婿が不足なのだね」

「貫一さん、それは余^{あんま}りだわ。そんなに疑ふのなら、私はどんな事でもして、さうして証拠を見せるわ」

「婿に不足は無い？ それぢや富山が財があるからか、して見るとこの結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね。で、この結婚はお前も承知をしたのだね、ええ？」

翁さん嬢さんに迫られて、余義無くお前も承知をしたのならば、僕の考で破談にする方は幾許もある。僕一人が悪者になれば、翁さん嬢さんを始めお前の迷惑にもならずには打壊して了ふことは出来る、だからお前の心持を聞いた上で手段があるのだが、お前も適つて見る気は有るのかい」

貫一の眼はその全身の力を聚めて、思悩める宮が顔を鋭く打目成れり。五歩行き、七歩行き、十歩を行けども、彼の答はあらざりき。貫一は空を仰ぎて太息したり。

「宜い、もう宜い。お前の心は能く解つた」

今ははや言ふも益無ければ、重ねて口を開かざらんかと打按じつつも、彼は乱るる胸を寛うせんが為に、強ひて目を放ちて海の方を眺めたりしが、なほ得堪へずやありけん、又言はんとして顧れば、宮は傍に在らずして、六七間後なる波打際に面を掩ひて泣けるなり。

可惱しげなる姿の月に照され、風に吹れて、あはれ消えもしぬべく立ち迷へるに、森々たる海の端の白く頰れて波と打寄せたる、艶に哀を尽せる風情に、貫一は憤をも恨をも

も忘れて、少時は画を見る如き心地もしつ。更に、この美き人も今は我物ならずと思へば、なかなか夢かとも疑へり。

「夢だ夢だ、長い夢を見たのだ！」

彼は頭を低れて足の向ふままに汀の方へ進行きしが、泣く泣く歩来れる宮と互に知らで行合ひたり。

「宮さん、何を泣くのだ。お前は些も泣くことは無いぢやないか。空涙！」

「どうせさうよ」

殆ど聞得べからざるまでにその声は涙に乱れたり。

「宮さん、お前に限つてはさう云ふ了簡は無からうと、僕は自分を信じるほどに信じてゐたが、それぢややつぱりお前の心は慾だね、財なのだね。如何に何でも余り情無い、宮さん、お前はそれで自分に愛相は尽きないかい。

好い出世をして、さぞ榮耀も出来て、お前はそれで可からうけれど、財に見換へられて棄てられた僕の身になつて見るが可い。無念と謂はうか、口惜いと謂はうか、宮さん、僕はお前を刺殺して——驚くことは無い！——いつそ死んで了ひたいのだ。それを怵へてお前を人に奪れるのを手出しも為ずに見てゐる僕の心地は、どんなだと思ふ、どんな

だと思ふよ！ 自分さへ好ければ他は^{ひと}どうならうともお前はかまはんのかい。一体貫一はお前の何だよ。何だと思ふのだよ。鴨沢の家には厄介者の居^{ゐさふらふ}候でも、お前の為には夫ぢやないかい。僕はお前の男^{をとこめかけ}妾になつた覚は無いよ、宮さん、お前は貫一を玩弄物^{なぐさみもの}にしたのだね。平生^{へいぜい}お前の仕打が水臭い水臭いと思つたも道理だ、始から僕を一時の玩弄物の意で、本当の愛情は無かつたのだ。さうとは知らずに僕は自分の身よりもお前を愛してゐた。お前の外には何の樂^{たのしみ}も無いほどにお前の事を思つてゐた。それ程までに思つてゐる貫一を、宮さん、お前はどうしても棄てる氣かい。

それは無論金力の点では、僕と富山とは比^{くらべもの}較にはならない。彼方^{あつち}は屈指の財産家、僕は固^{もと}より一介の書生だ。けれども善く宮さん考へて御覽、ねえ、人間の幸福ばかりは決して財^{かね}で買へるものぢやないよ。幸福と財とは全く別物だよ。人の幸福の第一は家内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外は無い。お前を深く愛する点では、富山如きが百人寄つても到底僕の十分の一だけでも愛することは出来まい、富山が財産で誇るなら、僕は彼等の夢想することも出来んこの愛情で争つて見せる。夫婦の幸福は全くこの愛情の力、愛情が無ければ既に夫婦は無いのだ。

己^{おのれ}の身に換へてお前を思つてゐる程の愛情を有^もつてゐる貫一を棄てて、夫婦間の幸福に

は何の益も無い、寧ろ害になり易い、その財産を目的に結婚を為るのは、宮さん、どういふ心得なのだ。

然し財といふものは人の心を迷はすもので、智者の学者の豪傑のと、千万人に勝れた立派な立派な男子さへ、財の為には随分甚い事も為るのだ。それを考へれば、お前が偶然氣の變つたのも、或は無理も無いのだらう。からして僕はそれは咎めない、但もう一遍、宮さん善く考へて御覧な、その財が——富山の財産がお前の夫婦間にどれ程の効力があるのかと謂ふことを。

雀が米を食ふのは僅か十粒か二十粒だ、俵で置いてあつたつて、一度に一俵食へるものぢやない、僕は鳴沢の財産を譲つてもらはんでも、十粒か二十粒の米に事を欠いて、お前に餓い思を為せるやうな、そんな意氣地の無い男でもない。若し間違つて、その十粒か二十粒の工面が出来なかつたら、僕は自分は食はんでも、決してお前に不自由は為せん。宮さん、僕はこれ……これ程までにお前の事を思つてゐる！」

貫一は零する涙を払ひて、

「お前が富山へ嫁く、それは立派な生活をして、榮耀も出来やうし、樂も出来やう、けれどもあれだけの財産は決して息子の嫁の為に費さうとて作られた財産ではない、と云ふ事

をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ！ 栄耀が何だ！ 世間には、馬車に乗つて心配さうな青い顔をして、夜会へ招れて行く人もあれば、自分の妻子を車に載せて、それを自分が挽いて花見に出掛ける車夫もある。富山へ嫁けば、家内も多ければ人出入も、劇しし、従つて気兼も苦勞も一通の事ぢやなからう。その中へ入つて、氣を傷めながら愛してもをらん夫を持つて、それでお前は何を樂に生きてゐるのだ。さうして勤めてゐれば、末にはあの財産がお前の物になるのかい、富山の奥様と云へば立派かも知れんけれど、食ふところは今の雀の十粒か二十粒に過ぎんのぢやないか。よしんばあの財産がお前の自由になるとしたところで、女の身に何十万と云ふ金がどうなる、何十万の金を女の身で面白く費へるかい。雀に一俵の米を一度に食へと云ふやうなものぢやないか。男を持たなければ女の身は立てないものなら、一生の苦樂他人に頼るで、女の宝とするのはその夫ではないか。何百万の財が有らうと、その夫が宝と為るに足らんものであつたら、女の心細さは、なかなか車に載せて花見に連れられる車夫の女房には及ばんぢやあるまいか。

聞けばあの富山の父と云ふものは、内に二人外に三人も妾を置いてゐると云ふ話だ。財の有る者は大方そんな真似をして、妻は些の床の置物にされて、謂はば棄てられてゐるの

だ。棄てられてゐながらその愛されてゐる妾よりは、責任も重く、苦勞も多く、苦ばかりで樂は無いと謂つて可い。お前の嫁く唯繼だつて、固より所望でお前を迎ふのだから、当座は随分愛しも為るだらうが、それが長く続くものか、財が有るから好きな真似も出来る、他の樂に氣が移つて、直にお前の恋は冷されて了ふのは判つてゐる。その時になつて、お前の心地を考へて御覽、あの富山の財産がその苦を拯ふかい。家に沢山の財が在れば、夫に棄てられて床の置物になつてゐても、お前はそれで樂かい、満足かい。

僕が人にお前を奪られる無念は謂ふまでも無いけれど、三年の後のお前の後悔が目に見えて、心變をした憎いお前ぢやあるけれど、やつぱり可哀さうでならんから、僕は真実で言ふのだ。

僕に飽きて富山に惚れてお前が嫁くのなら、僕は未練らしく何も言はんけれど、宮さん、お前は唯立派なところへ嫁くといふそればかりに迷はされてゐるのだから、それは過つてゐる、それは実に過つてゐる、愛情の無い結婚は究竟自他の後悔だよ。今夜この場のお前の分別一つで、お前の一生の苦樂は定るのだから、宮さん、お前も自分の身が大事と思ふなら、又貫一が不便だと思つて、頼む！ 頼むから、もう一度分別を為直してくれないか。

七千円の財産と貫一が学士とは、二人の幸福を保つには十分だよ。今でさへも随分二人は幸福ではないか。男の僕でさへ、お前が在れば富山の財産などを可^{うらやまし}羨いとは更に思はんのに、宮さん、お前はどうしたのだ！ 僕を忘れたのかい、僕を可愛^{かはゆ}くは思はんのかい

彼は危^{あやふ}きを拯^{すく}はんとする如く犇^{ひし}と宮に取着きて匂^{にほひこぼ}滴^たるる頸^{えりもと}元に沸^にゆる涙を濺^{そそ}ぎつつ、蘆^{あし}の枯葉の風に揉^{もま}るるやうに身を顛^{ふるは}せり。宮も離れじと抱^{いだきし}緊めて諸共^{もろとも}に顛^ひひつつ、貫一が臂^{ひぢ}を咬^かみて咽^{むせびなき}泣^なに泣けり。

「嗚呼^{ああ}、私はどうしたら可からう！ 若し私が彼方^{あつち}へ嫁^いつたら、貫一さんはどうするの、それを聞かして下さいな」

木を裂く如く貫一は宮を突放して、

「それぢや断^{いよいよ}然^よお前は嫁^いく気だね！ これまでに僕が言つても聴いてくれんのだね。ちええ、腸^{はらわた}の腐^くつた女^{かんぷ}！ 姦^{かん}婦^ぷ!!」

その声とともに貫一は脚^{あし}を挙げて宮の弱腰をはたと^けたり。地響^{よこさま}して横^{よこさま}様に転^{まろ}びしが、なかなか声をも立てず苦痛を忍びて、彼はそのまま砂の上に泣伏^みしたり。貫一は猛獸^{みやう}などを撃ちたるやうに、彼の身動も得^え為^せず弱^{よわ}々と僵^{たふ}れたるを、なほ憎^{にく}さげに見遣^みりつつ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！ 貴様のな、心変をしたばかりに間貫一の男いっぴき一匹はな、失望の極発狂して、大事の一生を誤つて了しまふのだ。学問も何ももう廃やめだ。この恨の為に貫一は生きながら悪魔になつて、貴様のやうな畜生の肉を啖くつて遣る覺悟だ。富山の令……令夫……令夫人！ もう一生お目には掛らんから、その顔を挙げて、真人間で居る内の貫一の面つらを好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁おぢさん嬢をばさんには一目会つて段々の御礼を申上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細しさいあつて貫一はこのまま長の御お暇いとまを致しますから、随分お達者で御機嫌ごきげんよろしう……宮みやさん、お前から好くさう言つておくれ、よ、若し貫一はどうしたとお訊たづねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩に氣が違つて、熱海の浜辺から行方知れずになつて了つたと……」

宮はやにはに蹶はねお起きて、立たんと為れば脚の痛に脆もろくも倒れて効無きを、漸く這やうや寄りて貫一の脚に縫すがりつ付き、声と涙とを争ひて、

「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方あなたこれから何……何処どこへ行くのよ」

貫一はさすがに驚けり、宮が衣きぬの披はたけて雪可羞ゆきづかしく露あらはせる膝ひざ頭がしらは、夥おびたく血に染みて顫ふなりき。

「や、怪我けがをしたか」

寄らんとするを宮は支へて、

「ええ、こんな事のかまはないから、貴方は何処へ行くのよ、話があるから今夜は一所に歸つて下さい、よう、貫一さん、後生だから」

「話が有ればここで聞かう」

「ここぢや私は可厭よ」

「ええ、何の話が有るものか。さあここを放さないか」

「私は放さない」

「剛情張ると蹴飛ばすぞ」

「蹴られても可いわ」

貫一は力を極めて振断れば、宮は無残に伏転びぬ。

「貫一さん」

「貫一ははや幾間を急行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとして後も慕ひて、

「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……私は言遺した事がある」
遂に倒れし宮は再び起つべき力も失せて、唯声を頼に彼の名を呼ぶのみ。漸く朧になれ

る貫一の影が一散に岡を登るが見えぬ。宮は身悶みもだえして猶呼なほ続けつ。やがてその黒き影の岡の頂いただきに立てるは、此方こなたを目成まもれるならんと、宮は声の限に呼べば、男の声も遙はるかに來りぬ。
「宮みいさん！」

「あ、あ、あ、貫一かんいつさん！」

首を延べて胸みまはせども、目を瞪みはりて眺むれども、声せし後は黒き影の搔消かきけす如く失うせて、それかと思ひし木立の寂しげに動かず、波は悲き音を寄せて、一月十七日の月は白く愁なひぬ。

宮は再び恋こひしき貫一の名を呼びたりき。

中編

第一章

新橋停車場しんばしステーションの大時計は四時を過ること二分余よ、東海道行の列車は既に客車の扉を鎖とびらさして、機関車に烟を噴せつつ、三十余輛よりようを聯ねて蜿蜒えんえんとして横はりたるが、真承まうけの秋の日影に夕榮ゆふばえして、窓々の硝子は燃えんとすばかりに耀けりかがや。駅夫は右往左往に奔走して、早く早くと喚くわめを余所よそに、大踏歩だいとうほの寛々かんかんたる老歐羅巴人エウロッパは麦酒樽ビールだるを窃ぬすみたるやうに腹突つきい出して、桃色の服着たる十七八の娘の日本の絵日傘えひがさの柄に橙色えおレンジのリボンのりとを飾りたるを小脇こわきにせると推おし並び、おのれが乗物の顔して急ぐ気色けしきも無く過る後より、蚤のみと取眼りまなこになりて遅れじと所体顔しよたいくづして駈来かけくる女房の、嵩高かさだかなる風呂敷包いだを抱くが上に、

四歳ほどの子を背負ひたるが、何処の扉も鎖したるに狼狽ふるを、車掌に強曳れて漸く安堵せる間も無く、青洩垂せる女の子を率ゐて、五十余の老夫のこれも戸惑して往きつ復りつせし揚句、駅夫に曳れて室内に押入れられ、如何なる罪やあらげなく閉てらるる扉に袂を介まれて、もしもしと救を呼ぶなど、未だ都を離れざるにはや旅の哀を見るべし。

五人一隊の若き紳士等は中等室の片隅に円居して、その中に旅行らしき手荷物を控へたるは一人よりあらず、他は皆横浜までも見ゆる扮装にて、紋付の袷羽織を着たるもあれば、精縷の背広なるもあり、袴着けたるが一人、大島紬の長羽織と差向へる人のみぞフロツクコオトを着て、待合所にて受けし饞別の瓶、函などを網棚の上に片附けて、その手を摩ひつつ窓より首を出して、停車場の方をば、求むるものありげに望見たりしが、やがて藍の如き晩霽の空を仰ぎて、

「不思議に好い天氣に成つた、なあ。この分なら大丈夫じや」

「今晚雨になるのも又一興だよ、ねえ、甘糟」

黒餅に立沢瀉の黒細の羽織着たるがかく言ひて示すところあるが如き微笑を洩せり。甘糟と呼ばれたるは、茶柳条の仙台平の袴を着けたる、この中にて独り頬鬚の巖きを蓄ふる紳士なり。

甘糟の答ふるに先ちて、背広の風早は若きに似合はぬ皺噺声を振擻りて、

「甘糟は一興で、君は望むところなのだらう」

「馬鹿言へ。甘糟の痒きに堪へんことを僕は丁と洞察してをるのだ」

「これは憚様です」

大島紬の紳士は黏着いたるやうに靠れたりし身を遽に起して、

「風早、君と僕はね、今日は實際犠牲に供されてゐるのだよ。佐分利と甘糟は夙て横浜を主張してゐるのだ。何でもこの間遊仙窟を見出して來たのだ。それで我々を引張つて行つて、大いに氣焰を吐く意なのさ」

「何じやい、何じやい！ 君達がこの二人に犠牲に供されたと謂ふなら、僕は四人の為に売られたんじや。それには及ばんと云ふのに、是非浜まで見送ると言うで、氣の毒なと思つてをつたら、僕を送るのを名として君達は……怪しからん事たぞ。学生中からその方は勉強しをつた君達の事ぢやから、今後は実に想遣らるるね。ええ、肩書を辱めん限は遣るも可からうけれど、注意はしたまへよ、本当に」

この老実の言を作すは、今は四年の昔間貫一が兄事せし同窓の荒尾讓介なりけり。彼は去年法学士を授けられ、次いで内務省試補に挙げられ、踰えて一年の今日愛知

県の参事官に榮転して、赴任の途に上れるなり。その齡よはひと深慮しんりょと誠実との故を以つて、彼は他の同学の先輩として推服するところたり。

「これで僕は諸君へ意見の言納いひをさめじや。願くは君達も宜く自重してくれたまへ」

面白く発はりし一座も忽ち白けて、頻しきりに燦くゆらす巻まきたばこ 莨この煙の、急駛きゆうしせる車の逆風むかひかぜに扇あふらるるが、飛雲の如く窓を逸のがれて六郷川を掠かすむあるのみ。

佐分利は幾あまたたびうなづ回数さつぎテエンヨン頷うなづきて、

「いやさう言れると慄然とするよ、実は嚮停車場さつぎテエンヨンで例の『美人クرائم』びじ（こは美人の高利貸を戲称せるなり）を見掛けたのだ。あの声で蜥蜴とかげくら啖くちふかと思ふね、毎見ても美しいには驚嘆する。全まるで淑女レディの扮装いでたちだ。就なかんづく中今日は治めかしてをつたが、何処どこか旨い口でもあると見える。那奴あいつに搾しぼられちや克かなはん、あれが本当の真綿で首だらう」

「見たかつたね、それは。夙かねて御高名は聞及んでゐる」

と大島おほしまつむぎ 紬なほの猶続なほけんとするを遮さへぎりて、甘糟かんそうの言へる。

「おお、宝井が退学を吃くつたのも、其奴そいつが債権者の重なる者だと云ふぢやないか。余程好い女ださうだね。黄金きんの腕環わんなんぞ簞はめてゐると云ふぢやないか。酷ひどい奴な！ 鬼神のお松だ。佐分利はその劇なるを知りながら係かかつたのは、大いに冒険の目的があつて存するの

だらうけれど、木乃伊ミイラにならんやうに禪ふんを緊めて掛るが可いぜ」

「誰たれか其奴そいつには尻押しりおしが有るのだらう。亭主あが有るのか、或は情夫いろか、何か有るのだらう」
 皺しわ噎がれ声ごゑは卒然としてこの問を發せるなり。

「それに就いては小説的の閱歴ライフがあるのさ、情夫いろぢやない、亭主あがある、此奴こいつが君、我々の一世紀ぜん前に鳴した高利貸アイスで、赤あか櫛がし権三郎ごんざぶろうと云つては、いや無法な強慾で、加ふるに大々的いんぶつ物と来てゐるのだ」

「成程！ 積しやく極きよくと消極と相触れたので爪つめに火ともが 入る訳だな」

大島紬が得意の謔まぜ浪かへしに、深沈なる荒尾も已やむを得ざらんやうに破顔やしつ。

「その赤櫛と云ふ奴は貸金の督促を利用しては女を弄もてあそぶのが道楽で、此奴こいつの為に汚けがされた者は随分意外の辺へんにも在るさうな。そこで今の『美人びじんクリム』、これもその手に雇かかつたので、原もとは貧乏士族の娘で堅氣であつたのだが、老猾おやちこの娘を見ると食指大いに動いた訳で、これを俘とりこにしたさに父親に少しばかりの金を貸したのだ。期限が来ても返せん、それを何とも言はずに、後から後からと三四度も貸して置いて、もう好い時分に、内に手が無くて困るから、半月ばかり仲なか働はたらきに貸してくれと言出した。これはよしんば奴の胸中が見え透いてゐたからとて、勢ことわひ辞ことわりかねる人情だらう。今から六年ばかり前の事で、娘が

十九の年老猶は六十ばかりの禿^{はげ}顱^{あたま}の事だから、まさかに色気とは想はんわね。そこで内へ引張つて来て口説いたのだ。女房といふ者は無いので、怪しげな褻^{たきざはり}妾^{せん}然^{ぜん}たる女を置いてをつたのが、その内にいつか娘は妾同様になつたのはどうだい！」

固唾^{かたづ}を嚙^のみたりし荒尾は思ふところありげに打^{うち}領^{うなづ}きて、

「女といふ者はそんなものじやて」

甘糟^{かんそう}はその面^{おもて}を振仰ぎつつ、

「驚いたね、君にしてこの言あるのは。荒尾が女を解釈せうとは想はなんだ」

「何故かい」

佐分利の話を進むる折から、瀟^{きしや}車^{にはか}は遽^いに速力を加へぬ。

佐「聞えん聞えん、もつと大きな声で」

甘「さあ、御順にお膝^{ひざくり}繰^{ひざくり}だ」

佐「荒尾、あの葡萄酒^{ぶどうしゆ}を抜かんか、喉^{のど}が渴^{かわ}いた。これから佳境に入るのだからね」

甘「中^{なか}錢^{せん}があるのは酷^{ひど}い」

佐「蒲田^{かまだ}、君は好い苮^{たばこ}を吃^すつてゐるぢやないか、一本頂^{ちやうだい}戴^{だい}」

甘「いや、図に乗ること。僕は手廻^{てまはり}の物を片附けやう」

佐「甘糟、マツチ炸児を持つてゐるか」

甘「そら、いでお出だ。持参いたしてをりまする仕合で」

佐分利はゐたけだか居長高になりて、

「些ちよつと点けてくれ」

葡萄酒の紅くれなゐを啜り、ハヴァアナの紫を吹きて、佐分利は徐に語を継ぐ、

「所謂一朶の梨花海棠りかかいじょうを圧してからに、娘の満枝は自由にされて了つた訳だ。これは無

論親父には内証だつたのだが、当座は荐しきつて歸りたがつた娘が、後には親父の方から歸れ

歸れ言つても、歸らんだらう。その内に段々様子が知れたもので、侍形かたぎ氣の親父は非常な

立腹だ。子でない、親でないと云ふ騒になつたね。すると禿はげの方から、妾だから不承知な

のだらう、籍を入れて本妻に直すからくれろといふ談判になつた。それで逢つて見ると娘

も、阿父おとつさん、どうか承知して下さいは、親父益ますす意外の益す不服だ。けれども、天魔に

魅入あひそられたものと親父も愛相つかを尽して、唯一人の娘を阿父さん彼自身より十歳とをばかりも老

漢やぢの高利貸にくれて了つたのだ。それから満枝は益す禿の寵ちようを得て、内政を自由にするや

うになつたから、定めて生家さとの方へ貢ぐと思の外、極きめの給の外は塵葉ちりつば一本饋やらん。これ

が又禿ぎよの御意に入つたところで、女め熟うらつら高利の塩梅あんばいを見てゐる内に、いつかこの商売

が面白くなつて来て、この身代我物と考へて見ると、一人の親父よりは金銭の方が大事、といふ不敵な了簡が出た訳だね」

「驚くべきものじやね」

荒尾は可忌しげに呟きて、稍不快の色を動せり。

「そこで、敏捷な女には違無い、自然と高利の呼吸を吞込んで、後には手の足りん時

には禿の代理として、何処へでも出掛けるやうになつたのは益す驚くべきものだらう。丁

度一昨年辺から禿は中氣が出て未だに動けない。そいつを大小便の世話までして、女の手

一つで盛に商売をしてゐるのだ。それでその前年に親父は死んだのださうだが、板の間

に薄縁を一板敷いて、その上で往生したと云ふくらゐの始末だ。病氣の出る前などは

ろくに寄せ付けなんださうだがな、残刻と云つても、どう云ふのだから余り氣が知れんぢや

ないかな——然し事実だ。で、禿はその通の病人だから、今ではあの女が独で腕を揮つて

益す盛に遣つてゐる。これ則ち『美人クリム』の名ある所以さ。

年紀かい、二十五だと聞いたが、さう、漸う二三とよりは見えんね。あれで可愛い細い

声をして物柔に、口数が寡くつて巧い言をいふこと、恐るべきものだよ。銀貨を見

て何処の国の勲章だらうなどと言ひさうな、誠に上品な様子をしてゐて、書替だの、手

形に願ふのと、急所を衝く手際の婉曲に巧妙な具合と来たら、実に魔薬でも用ゐて人の心を痿すかと思ふばかりだ。僕も三度ほど痿されたが、柔能く剛を制すで、高利貸には美人が妙！ 那彼に一国を預ければ輒ちクレオパトラだね。那彼には滅されるよ」

風早は最も興を覺えたる気色にて、

「では、今はその禿願は中風で寐たきりなのだね、一昨年から？ それでは何か虫があるだらう。有る、有る、それくらゐの女で神妙にしてゐるものか、無いと見せて有るところがクレオパトラよ。然し、壮な女だな」

「余り壮なのは恐れる」

佐分利は頭を抑へて後様に靠れつつ笑ひぬ。次いで一同も笑ひぬ。

佐分利は二年生たりしより既に高利の大火坑に墮ちて、今はしも連帶一判、取交ぜ五口の債務六百四十何円の呵責に膏を取る身の上にぞありける。次いでは甘糟の四百円、大島紬氏は卒業前にして百五十円、後に又二百円、無疵なるは風早と荒尾とのみ。

瀧車は神奈川に着きぬ。彼等の物語をば笑しげに傍聴したりし横浜商人体の乗客は、幸に無聊を慰められしを謝すらんやうに、懇に一揖してここに下車せり。暫く話の絶えける間に荒尾は何をか打案ずる体にて、その目を空く見据ゑつつ漫語のやうに言出

でたり。

「その後誰も間の事を聞かんかね」

「間貫一かい」と皺噺声は問反せり。

「おお、誰やらぢやつたね、高利貸の才取とか、手代とかしてをると言うたのは」

蒲「さうさう、そんな話を聞いたつけね。然し、間には高利貸の才取は出来ない。あれは高利を貸すべく余り多くの涙を有つてゐるのだ」

我が意を得つと謂はんやうに荒尾は頷きて、猶も思に沈みゐたり。佐分利と甘糟の二人はその頃一級先ちてありければ、間とは相識らざるなりき。

荒「高利貸と云ふのはどうも妄ぢやらう。全く余り多くの涙を有つてをる。惜い事をした、得難い才子ぢやつたものね。あれが今居らうなら……」

彼は忍びやかに太息を泄せり。

「君達は今逢うても顔を見忘れはすまいな」

風「それは覚えてゐるとも。あれの峭然と外眥の昂つた所が目標さ」

蒲「さうして髪の癖毛の具合がな、愛嬌が有つたぢやないか。デスクの上に頬杖を拄いて、かう下向になつて何時でも真面目に講義を聴いてゐたところは、何処かアルフ

レッド大王に肖てゐたさ」

荒尾は仰ぎて笑へり。

「君は毎も妙な事を言ふ人ぢやね。アルフレッド大王とは奇想天外だ。僕の親友を古英雄に擬してくれた御礼に一盃を献じやう」

蒲「成程、君は兄弟のやうにしてををつたから、始終憶ひ出すだらうな」

「僕は實際死んだ弟よりも間の居らなくなつたのを悲む」

愁然として彼は頭を俛れぬ。大島紬は受けたる盃を把りながら、更に佐分利が持てる猪口を借りて荒尾に差しつ。

「さあ、君を慰める為に一番間の健康を祝さう」

荒尾の喜は実に溢るるばかりなりき。

「おお、それは辱ない」

盈々と酒を容れたる二つの猪口は、彼等の目より高く挙げらるると奇しく憂と相撃てば、紅の雫の漏るが如く流るるを、互に引くより早く一息に飲乾したり。これを見たる佐分利は甘糟の膝を揺して、

「蒲田は如才ないね。面は醜いがあの呼吸で行くから、往々拾ひ物を為るのだ。ああ言れ

て見ると誰たれでも些ちよつと憎くないからね」

甘さすが「遺さすは交際官試補！」

佐「試補々々！」

風「試補々々立つて泣きに行く……」

荒「馬鹿な！」

ことは言を改めて荒尾は言いひ出だせり。

「どうも僕は不思議でならんが、停車場ステーションで間を見たよ。間に違無いのじや」

唯ただいまの今陰ながらその健康をいのすりし蒲田は拍子を抜して彼の面おもてを眺めたり。

「ふう、それは不思議。他むかふは気が着かなんだかい」

「始は待合所の入口いりぐちの所で些ちよつと顔が見えたのじや。余り意外ぢやつたから、僕は思はず

長椅子ソオフワアを起つと、もう見えなくなつた。それから有間しばらくして又偶然ふつと見ると、又見えたの

じや」

甘「探偵小説だ」

荒「その時も起ちかけると又見えなくなつて、それから切符を切つて歩ブラットフォーム場へ入る

まで見えなかつたのじやが、入つて少し来てから、どうも気になるから振返つて見ると、

傍そばの柱に僕を見て黒い帽を揮ふつとる者がある、それは間よ。帽を揮つとつたから間に違無
いちやないか」

横浜！ 横浜！ と或あるひは急に、或は緩く叫ぶ声の窓の外面そともを飛過とびすぐるとともに、響は雑
然として起り、迸ほとばしり出づる、群集くんじゆは玩具箱おもちゃばこを覆かへしたる如く、場内の彼方かなたより轟く鐸とどろ
音ねはこの響と混雑との中を貫きて奔注せり。

☆昨七日イ便の葉書にて（飯田町局消印）美人クリイムの語にフエアクリイム或あるひ
ベルクリイムの傍訓ぼうくん有度との言を貽おくられし読者あり。ここにその好意を謝すると
ともに、聊いささか弁ずるところあらむとす。おのれも始め美人の英語を用ゐむと思ひしか
ど、かかる造語は懋なましひに理詰なまじひならむよりは、出まかせの可笑をかき響あらむこそ可よかめれと
バイスクリイムとも思着おもひつきしなり。意は美アイスクリイムなるを、ビ、アイ——バイ
の格にて試みしが、さては説明を要すべき炊くたくだ冗じしさを嫌きらひて、更に美人の二字にび
じ訓を付せしを、校合者きやうごうしやの思おもひ僻ひがめてん字は添じへたるなり。陋いやしげなるびじク
リイムの響の中には嘲弄ちょうろうの意も籠こもらむとてなり。なほ高論こうろんを請こふ（三〇・九・八附
読売新聞より）

第二章

柵さくの柱もとの下に在りて帽を揮ふりたりしは、荒尾が言ことばの如く、四年の生死しやうしを詳つまびら悉かにせざりし間貫一にぞありける。彼は親友の前に自みづからの影くらを晦まし、その消息そくしをさへ知らせざりしかど、陰ながら荒尾が動静あらましの概略あらましを伺ふことを怠らざりき、こ回たびその参事官たる事も、午後四時発の列車にて赴任する事をも知るを得しかば、余所よそながら暇いとま乞こひもし、二つには栄誉にしきの錦を飾れる姿をも見んと思ひて、群集くんじゆに紛れてここには来りしなりけり。何なにの故ゆゑに間は四年の音信おとづれを絶ち、又何の故にさしも懷おもひに忘れざる旧友と相見て別べつを為さざりしか。彼が今の身の上を知らば、この疑問は自ら解釈せらるべし。

柵の外に立ちて列車の行くを送りしは独り間貫一ひとのみにあらず、そこもとに聚つどひし老ろう若やく貴き賤せんの男女なんによは皆個々の心をもて、愁しうふるもの、楽らくむもの、虞きづふもの、或は何とも感ぜぬものなど、品変れども目的は一いつなり。数分時の混雑の後車いの出づるとともに、一人散り、二人散りて、彼の如く久ひさう立尽せるはあらずき。やがて重き物など引くらんやうに彼の漸く踵やうやきびすめぐらを旋せし時には、推おしか重かさなるまでに柵際さくぎはに聚つどひし衆ひとは殆ど散果てて、駅夫

の三四人が、箒はうきを執りて場内を掃除せるのみ。

貫一は差さ含くまるる涙を払ひて、独り後おくれたるを驚おどきけん、遽にはかに急ぎて、蓬菜橋ほうらいばしぐち口より出でんと、あだかも石段際に寄るところを、誰たれとも知らで中等待合の内より声を懸けぬ。

「間さん！」

慌あわてて彼の見向く途端に、

「些ちよつと」と戸口より半身を示して、黄金の腕環の気爽けさやかに耀かがやける手なる絹ハンカチーフに唇くちもと辺を掩おほいて束髪くちもとの婦人の小腰を屈かがむるに会へり。艶えんなる面おもてに得も謂いはれず愛らしき笑あみをさへ浮べたり。

「や、赤檉あかがしさん！」

婦人の笑あみもて迎ふるには似ず、貫一は冷然として眉まゆだに動かさず。

「好よい所でお目に懸りましたこと。急にお話を致したい事が出来ましたので、まあ、些ちよつと此方こちへ」

婦人は内に入れば、貫一も洩々ソオフワア跟ついて入るに、長椅子ソオフワアに掛かれば、止む無くその側そばに座まを占めたり。

「実はあの保険建築会社の小車梅おくるめの件なのでございますがね」

彼は黒檜文絹の帶の間を搜りて金側時計を取出し、手早く収めつつ、

「貴方どうせ御飯前でゐらつしやいませう。ここでは、御話も出来ませんですから、何方へかお供を致しませう」

紫紺塩瀬に消金の口金打ちたる手靴を取直して、婦人はやをら起上りつ。迷惑

は貫一が面に顕れたり。

「何方へ？」

「何方でも、私には解りませんですから貴方のお宜い所へ」

「私にも解りませんな」

「あら、そんな事を仰有らずに、私は何方でも宜いのでございます」

荒布革の横長なる手靴を膝の上に搔抱きつつ貫一の思案せるは、その宜き方を択

ぶにあらで、俱に行くをば躊躇せるなり。

「まあ、何にしても出ませう」

「さやう」

貫一も今は是非無く婦人に従ひて待合所の出會頭に、入来る者ありて、その足尖を挫げよと踏付けられぬ。驚き見れば長高き老紳士の目尻も異く、満枝の色香に惑ひて、

これは失敬、意外の麁相そそうをせるなりけり。彼は猶懲なほこりずまにこの目覚めざましき美形びけいの同伴をさへ暫しばらく目送もくそうせり。

二人は停車場ステーションを出で、指す方かたも無く新橋に向へり。

「本当に、貴方、何方へ参りませう」

「私は、何方でも」

「貴方、何時までもそんな事を言つてゐらしつてはきりがございせんから、好い加減に極きめやうでは御坐いせんか」

「さやう」

満枝は彼の心進まざるを曉さとれども、勉つとめて吾意わがいに従はしめんと念おもへば、さばかりの無ぶあし遇ぐひをも甘んじて、

「それでは、貴方、鰻うなぎは上あがりますか」

「鰻？ 遣りますよ」

「鶏肉とりと何方よろしが宜うございます」

「何方でも」

「余り御挨拶ごあいさつですネ」

「何な為ぜですか」

この時貫一は始めて満枝の面おもてまなこに眼を移せり。百ももの媚こびを含みて、へし彼の眸まなじりは、未いまだ言はずして既にその言はんとせる半なかばをば語かたり尽つくしたるべし。彼の為ひととなり人を知りて畜生と疎うとめる貫一も、さすがに艶なりと思ふ心を制し得ざりき。満枝は貝の如き前歯と隣れる金歯とを露あらはして片笑かたゑみつつ、

「まあ、何な為ぜでも宜なうございますから、それでは鶏肉とりに致しませうか」

「それも可いいでせう」

三十間堀さんじつけんぼりに出でて、二町ばかり来たる角かどを西に折れて、唯と有る露地口に清らなる門か構どがまへして、光沢消硝子の軒燈籠つやけしガラスのきとうろうに鳥と標しるしたる方に、人目にはさぞ解わけあるらしい二人は連立ちて入りぬ。いと奥まりて、在りとも覚えぬ辺あたりに六畳の隠座敷の板道わたりづたみ伝に離れたる一間に案内されしも宜うべなり。

懼おそれたるにもあらず、困こうじたるにもあらねど、又全おそくさにあらざるにもあらざらん気色けしきにて貫一かたの容ようさへ可つ慎つしげに黙して控へたるは、かかる所にこの人と共にとは思懸おもひけざるていたらく為なるばし體ことばを、さすがに胸の安からぬなるべし。通し物は逸いちはや早く満枝が好きに計はかひて、少少し頃ばしは言無ことばき二人が中に置れたるたばこぼん 莨たばこ盆ぼんは子細らしい一炷ちゆうの百和香ひやつかこうを燻くゆらせぬ。

「間さん、貴方どうぞお楽に」

「はい、これが勝手で」

「まあ、そんな事を有仰らずに、よう、どうぞ」

「内に居つても私はこの通なのですから」

「嘘を有仰いまし」

かくても貫一は膝を崩さで、巻蓑入を取り出せしが、生憎一本の蓑もあらざりければ、手を鳴さんとするを、満枝は先じて、

「お間に合せにこれを召上りましな」

麻蝦夷の御主殿持とともに薦むる筒の端より焼金の吸口は灰に耀けり。齒は黄金、帶留は黄金、指環は黄金、腕環は黄金、時計は黄金、今又煙管は黄金にあらずや。黄金な哉、金、金！知る可し、その心も金！と貫一は独り可笑しさに堪へざりき。

「いや、私は日本蓑は一向可かんのので」

言ひも訖らぬ顔を満枝は熟と視て、

「決して穢いものでは御坐いませんけれど、つい心着きませんでした」

懐紙を出してわざとらしくその吸口を振拭へば、貫一も少く慌てて、

「決してさう云ふ訳ぢやありません、私は日本葎は用ゐんですから」

満枝は再び彼の顔を眺めつ。

「貴方、嘘をお吐きなさるなら、もう少し物もの 覺おぼえを善く遊ばせよ」

「はあ？」

「先日鰐わにづち淵さんへ上つた節、貴方召上つてゐらしたではございませんか」

「はあ？」

「瓢ひょうたん箆のやうな恰かつこ好のお煙管で、さうして羅らう宇の本に些もとちよつと紙の巻いてございました」

「あ！」と叫びし口は頓とみに塞ふさがざりき。満枝は仇無あどなげに口を掩おほひて笑へり。この罰として貫一は直ただちに三服の吸付葎を強しひられぬ。

とかくする間に盃はいばん盤は陳つらねられたれど、満枝も貫一も三盃ばいを過し得ぬ下戸げこなり。女は清めし猪口ちよくを出して、

「貴方、お一盞ひとつ」

「可かんです」

「又そんな事を」

「今度は實際」

「それでは麦酒ビールに致しませうか」

「いや、酒は和洋とも可かんですから、どうぞ御随意に」

酒には礼ありて、おのれ辞せんとならば、必ず他に侑すめて酌せんとこそあるべきに、甚はなはだい哉、彼の手を束つかねて、御随意にと会釈せるや、満枝は心憎しとよりはなかなか可笑しと思へり。

「私も一向不調法なのでございますよ。折角差上げたものですからお一盞ひとつお受け下さいましな」

貫一は止む無くその一盞ひとつを受けたり。はやく酒になりけれども、満枝が至急と言ひし用談に及ばざれば、

「時に小車梅おぐるめの件と云ふのはどんな事が起りましたな」

「もうお一盞召上れ、それからお話を致しますから。まあ、お見事！ もうお一盞たちま彼は忽ち眉まゆを攢あつめて、

「いやそんなに」

「それでは私が戴いたきませう、恐入りますがお酌を」

「で、小車梅の件は？」

「その件の外ほかに未だお話があるのでございます」

「大相有りますな」

「酔はないと申上げ難にくい事なので、私少々酔ひますから貴方、憚はばかりさま様ですが、も

う一つお酌を」

「酔つちや困ります。用事は酔はん内にお話し下さい」

「今晚は私酔つもりふ意なのでございますもの」

その媚こびある目の辺は漸く花桜の色に染みて、心樂しげに稍身ややゆるやかを寛に取成したる風情は、
 実に匂におなど零れぬべく、熱しとて紺の絹精縷きぬセルの被風ひふを脱げば、羽織は無く、粲然はつとした
 る紋御召あはせの袷くろちよろけんに黒樗文絹まるおびの全帯、華麗はなやかに紅の入りたる友禪べにの帯揚おびあげして、鬢びんの後おくれ
 の被る耳際みみぎはを搔かき上ぐる左の手首には、早蕨さわらびを二筋寄せて蝶の宿れる形かたしたる例の腕
 環さはやの爽さやに晃きらめき遍りぬ。常に可忌いまはしと思へる物をかく明々地に見せつけられたる貫一は、得
 堪たふまじく苦にがりたる眉状まゆつきして密に目を翳そらしつ。彼は女の貴族的に装へるに反して、黒
 細むぎの紋付の羽織に藍千筋あゐせんすぢの秩父銘撰ちちぶめいせんの袷あはせを着て、白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおびも新からず。

彼を識しれりし者は定めて見咎みとがむべし、彼の面影おもかげは尠すくなからず変りぬ。愛らしかりしこ
 ろは皆失うせて、四年に余る悲酸と憂苦と相結びて常に解けざる色は、自ら暗き陰を成して

その面を蔽へり。撓むとも折るべからざる堅忍の気は、沈鬱せる顔色がんしよくの表に動けども、嘗て宮を見しやうの優き光は再びその眼に輝かずなりぬ。見ることの冷に、言ふことの謹めるは、彼が近來の特質にして、人はこれが為に狎るるを憚れば、自もまた苟も親みを求めざるほどに、同業者は誰も誰も偏人として彼を遠けぬ。焉んぞ知らん、貫一が心には、さしもの恋を失ひし身のいかで狂人たらざりしかを怪むなりけり。

彼は色を正して、満枝が独り興に乗じて盃を重ねる体を打目成れり。

「もう一盞戴きませうか」

笑を漾ふる眸は微醺に彩られて、更に別様の媚を加へぬ。

「もう止したが可いでせう」

「貴方が止せと仰有るなら私は止します」

「敢て止せとは言ひません」

「それぢや私酔ひますよ」

答無かりければ、満枝は手酌してその半を傾けしが、見る見る頬の麗く紅になれるを、彼は手もて掩ひつつ、

「ああ、酔ひましたこと」

貫一は聞かざる為^{まね}して莧^{くゆ}を燻らしむたり。

「聞さん、……」

「何ですか」

「私今晚は是非お話し申したいことがあるので御坐いますが、貴方お聴き下さいますか」

「それをお聞き申す為に御同道したのぢやありませんか」

満枝は嘲^{あざけら}むが如く微笑^{ほほゑ}みて、

「私何だか酔つてをりますから、或は失礼なことを申上げるかも知れませんが、お氣に障^さへては困りますの。然^{しか}し、御酒^{ごしゆ}の上で申すのではございせんから、どうぞそのお意^{つもり}で、宜^{よろ}うございますか」

「撞^{どうちやく}着してゐるぢやありませんか」

「まあそんなに有^{おつしや}仰らずに、高^{たか}が女の申すことでございますから」

こは事^{ことむづかし}難^なうなりぬべし。克^{かな}はぬまでも多少は累を免れんと、貫一は手^{こまぬ}を拱きつつ俯^ふ目^{しめ}になりて、力^{つと}めて関^{かかは}らざらんやうに持成^{もてな}すを、満枝は擦^{すりよ}寄りて、

「これお一盞^{ひとつ}で後は決^けしてお強^ひひ申しませんですから、これだけお受けなすつて下さいましな」

貫一は些さの言ことも出いさでその猪口ちよくを受けつ。

「これで私の願は届きましたの」

「易やすい願ですな」と、あはや出いでんとせし唇くちびるを結びて、貫一は纔わづかに苦笑して止みぬ。

「間さん」

「はい」

「貴方失礼ながら、何でございますか、鰐淵さんの方に未まだお長くゐらつしやるお意つもりなのですか。然し、いづれ独立あそばすので御坐いませう」

「勿もちろん論です」

「さうして、まづ何頃いつごろ彼方あちらと別にお成りあそばすお見込なのでございますの」

「資本のやうなものが少しでも出来たらと思つてゐます」

満枝たちまは忽ち声こゑを斂をさめて、物思はしげに差さしうつむ。俯ふき、莨盆ふちの縁もてをば弄あそべるやうに煙管きせるもて刻きざみを打ちてゐたり。折しも電燈の光の遽にはかくらに驚あぎて顔をあげれば、又旧もとの如く一間ひとまは明あうなりぬ。彼は煙管を捨てて猶なほ暫しばし打案じたりしが、

「こんな事を申上げては甚はなだ失礼なのでございますけれど、何時まで彼方あちらにゐらつしやるよりは、早く独立あそばした方が宜よろいでは御坐いませんか。もし明日にもさうと云ふ御考

でゐらつしやるならば、私……こんな事を申しては……烏滯がましいので御坐いますが、大した事は出来ませんけれど、都合の出来るだけは御用達申して上げたいのでございますが、さう遊ばしませんか」

意外に打れたる貫一は箸を叩へて女の顔を屹と視たり。

「さう遊ばせよ」

「それはどう云ふ訳ですか」

実に貫一は答に窮せるなりき。

「訳ですか？」と満枝は口籠りたりしが、

「別に申上げなくてもお察し下さいましな。私だつて何時までも赤檉に居たいことは無いぢやございませんか。さう云ふ訳なのでございます」

「全然解らんですな」

「貴方、可うございますよ」

可恨しげに満枝は言を絶ちて、横膝に荻を拈りゐたり。

「失礼ですけれど、私はお先へ御飯を戴きます」

貫一が飯桶を引寄せんとするを、はたと抑へて、

「お給仕なれば私致します」

「それは憚はばかりさま様さまです」

満枝は飯桶を我が側に取寄せしが、茶ちや碗わんをそれに伏せて、彼方あなたの壁かべ際ぎはに推おし遣やりたり。

「未だお早うございますよ。もうお一盞召上めいじょうれ」

「もう頭が痛くて克かなはんですから赦ゆるして下さい。腹が空いてゐるのですから」

「お餒ひもじいところを御飯を上げませんでは、さぞお辛つらうございませう」

「知れた事ですわ」

「さうでございませう。それなら、此方こちらで思つてゐることが全まるで先方さきへ通らなかつたら、

餒はるいのに御飯を食べないのよりか、竽はるかに辛うございますよ。そんなにお餒はるじければ御飯をお

附つけ申しますから、貴方も只今の御返事をなすつて下さいましな」

「返事と言はれたつて、有おつしや仰おほしることの主意が能く解よらんのですもの」

「何故なぜお了解わかりになりませんの」

責なむるが如く男の顔を見遣れば、彼もまた詰な詰じるが如く見返しつ。

「解らんぢやありませんか。親い御交際の間でもない私に資本を出して下さい。さうしてその訳はと云へば、貴方も彼あそこ処こを出る。解らんぢやありませんか。どうか飯を下さいな」

「解らないとは、貴方、お酷いぢやございせんか。ではお氣に召さないのございますか」

「氣に入らんと云ふ事は有りませんが、縁も無い貴方に金を出して戴く……」

「あれ、その事ではございせんてば」

「どうも非常に腹が空いて来ました」

「それとも貴方外にお約束でも遊ばした御方がお在なさるのでございますか」
彼終に鋒 鈍を露し来れると思へば、貫一は猶解せざる体を作して、

「妙な事を聞きますね」

と苦笑せしのみにて続く言もあらざるに、満枝は図を外されて、やや心惑へるなりけり。
「さう云ふやうなお方がお在なさらなければ、……私貴方にお願があるのでございます」

貫一も今は屹と胸を据ゑて、

「うむ、解りました」

「ああ、お了解になりました」

嬉しと心を言へらんやうの氣色にて、彼の猪口に余せし酒を一息に飲乾して、その盃をつと貫一に差せり。

「又ですか」

「是非！」

発はずみに乗せられて貫一は思はず受うくると斉ひとしく盈みなみ々注そがれて、下にも置れず一口附くるを見た満枝よろこびが歡喜！

「その盃は清めてございませんよ」

一々底意ありて忽ゆるがせ諸にすべからざる女の言を、彼はいと可わづらはし煩わづらはしくて持もて余あませるなり。
「お了解わかりになりましたら、どうぞ御返事を」

「その事なら、どうぞこれぎりにして下さい」

僅わづかにかく言ひ放ちて貫一は敵おごそかに沈黙しつ。満枝もさすがに酔よひを冷さまして、彼の氣色けしきを候うかがひたりしに、例の言寡ことばすくななる男の次いでは言はざれば、

「私もこんな可耻はづかしい事を、一旦申上げたからには、このままでは済されません」

貫一は緩ゆるやかに頷うなづけり。

「女の口からかう云ふ事を言出しますのは能々よくよくの事でございますから、それに対するだけの理由を有おつしや仰つて、どうぞ十分に私が得心の参るやうにお話し下さいましな、私座興でこんな事を申したのではございせんから」

「御尤ごもつともです。私のやうな者でもそんなに言つて下さると思へば、決して嬉くない事はありません。ですから、その御深切ごしんせつに対して裏つづまず自分の考かん量がへをお話し申します。けれど、私は御承知の偏屈者でありますから、衆ひととは大きに考量が違つてをります。

第一、私は一生妻さいといふ者は決して持たん覚悟なので。御承知か知りませんが、元、私は書生でありました。それが中途から学問を罷やめて、この商売を始めたのは、放蕩ほうとうで遣やりりつたのでもなければ、敢て食窮くひつめた訳でも有りませんので。書生が可厭いやさに商売を遣らうと云ふのなら、未だ外ほかに幾多いくたも好い商売は有ります、何を苦んでこんな極悪非道な、白日盗はくじつとうを為なすと謂いはうか、病人の喉のど口くちを干ほすと謂いはうか、命よりは大事な人の名譽を殺して、その金銭を奪取る高利貸などを択えらむものですか」

聴居る満枝は益ますすま酔あひを冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう悪事ですな。それを私が今こん日にち始めて知つたのではない、知つて身を墮おとしたのは、私は当時敵手さきを殺して自分も死にたかつくらゐ無念きはま極る失望をした事があつたからです。その失望と云ふのは、私が人を頼たのみにしてをつた事があつて、その人達も頼れなければならん義理合になつてをつたのを、不図した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、さうして私は見事に売られたのです」

ひかげ
火影を避けんとしたる彼の目の中に遽にはに耀けるは、なほ新なる痛恨の涙の浮べるなり。

「実に頼たのみ少い世の中で、その義理も人情も忘れて、罪も無い私の売られたのも、原もとはと云へば、金銭かねからです。仮初かりそめにも一匹いっぴきの男子たる者が、金銭かねの為に見易みかへられたかと思へば、その無念といふものは、私は一い……一生忘れられます。

軽薄でなければ詐いつはり、詐でなければ利慾、愛相あいその尽きた世の中です。それほど可厭いやな世の中なら、何なぜ為ひと一おもひ思に死んで了はんか、と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、その無念が障さはりになつて死切れんです。売られた人達を苦めるやうなそんな復讐ふくしゅうなどは為たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受けた恨！ それだけは屹きつと霽はらさなければ措おかん精神。片時でもその恨を忘れることの出来ん胸中といふものは、我ながらさう思ひますが、全まるで発狂してゐるやうですな。それで、高利貸のやうな残刻はなはだしの甚い、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を毎日扱つて、さうして感情を暴あらしてゐなければとても堪へられんです、発狂者には適當の商売です。そこで、金銭かねゆゑに売られもすれば、辱めはづかしられた、金銭の無いのも謂はば無念の一つです。その金銭が有つたら何とでも恨が霽されやうか、とそれを樂たのしみに義理も人情も捨てて掛つて、今では名譽も色恋も無く、金銭より外には何の望のぞみも持たんです。又考へて見ると、愁なまじひ人などを信じるよりは金銭を信じた方

が間違が無い。人間よりは金銭の方が簞はるか頼たのみになりますよ。頼にならんのは人の心です！

先まつかう云ふ考でこの商売に入つたのでありますから、実を申せば、貴方の貸して遣らうと有おつしや仰る資本は欲しいが、人間の貴方には用が無いのです」

彼は仰おほぎて高たか笑わらひしつつも、その面は痛く激したり。

満枝は、彼の言の決ことばして譎いつはりならざるべきを信じたり。彼の偏屈なる、実げにさるべき所かんが見へを懐けるも怪むには足らずと思へるなり。されども、彼は未だ恋の甘きを知らざるが故に、心狭くもこの面白き世に偏屈とびちの扉を閉ぢて、詐いつはりと輕薄と利欲との外なる樂あるを曉さとらざるならん。やがて我そを教へんと、満枝は輒たやすく望を失はざるなりき。

「では何でございますか、私の心もやはり頼にならないとお疑ひ遊ばすのでございますか」
「疑ふ、疑はんと云ふのは二の次で、私はその失望以来この世の中が嫌きらひで、総すべての人間を好まんですから」

「それでは誠も誠も——命懸けて貴方を思ふ者がございまして？」

「勿論！ 別して惚ほれたの、思ふのと云ふ事は大嫌です」

「あの、命を懸けて慕つてゐるといふのがお了解わかりになりましたも」

「高利貸の目には涙は無いですよ」

今は取付く島も無くて、満枝は暫し惘然としてゐたり。

「どうぞ御飯を頂戴」

打菱れつつ満枝は飯を盛りて出せり。

「これは恐入ります」

彼は啖ふこと傍に人無き若し。満枝の面は薄紅になほ酔は有りながら、酔へる体も

無くて、唯打案じたり。

「貴方も上りませんか」

かく会釈して貫一は三盃目を易へつ。やや有りて、

「間さん」と、呼れし時、彼は満口に飯を啣みて遽に応ふる能はず、唯目を挙げて女の顔を見たるのみ。

「私もこんな事を口に出しますまでには、もしや貴方が御承知の無い時には、とそれ等を考へまして、もう多時胸に畳んでをつたのでございます。それまで大事を取つてをりながら、かう一も二も無く奇麗にお謝絶を受けては、私実に面目無くて……余り悔うございますわ」

慌忙くハンカチーフを取りて、片手に恨泣の目元を掩へり。

「面目無くて私、この座が起れません。間さん、お察し下さいまし」

貫一は冷々ひやかに見返りて、

「貴方一人を嫌つたと云ふ訳なら、さうかも知れませんが、私は総ての人間が嫌なのですから、どうぞ悪からず思つて下さい。貴方も御飯をお上んなさいな。おお！ さうして小車梅おぐるめの件に就いてのお話は？」

泣なき赤あかめたる目を拭ぬぐひて満枝は答へず。

「どう云ふお話ですか」

「そんな事はどうでも宜よろうございます。間さん、私、どうしても思切れませんから、さう思召おぼしめして下さい。で、お可厭いやならお可厭で宜うございますから、私がこんなに思つてゐることを、どうぞ何日いつまでもお忘れなく……きつと覚えてゐらつしやいまいしょ」

「承知しました」

「もつと優やさしい言をお聞せ下さいましな」

「私も覚えてゐます」

「もつと何とか有おつしや仰りやうが有りさうなものではございませんか」

「御志は決けして忘れません。これなら宜いでせう」

満枝は物をも言はずと起ちしが、翻然と貫一の身近に寄添ひて、
 「お忘れあそばすな」と言ふさへに力籠りて、その太股を絶か撮れば、貫一は不意
 の痛に覆らんとするを支へつつ横様に振払ふを、満枝は早くも身を開きて、知らず顔に
 手を打鳴して婢を呼ぶなりけり。

第三章

赤坂氷川の辺に写真の御前と言へば知らぬ者無く、実にこの殿の出づるに写真機械を
 車に積み随へざることあらざれば、自ら人目をれず、かかる異名は呼るるにぞあり
 ける。子細を明めずしては、「将某の殿様」の流かとも想はるべし。あらず！ 才の敏
 学の博、貴族院の椅子を占めて優に高かるべき器を抱きながら、五年を独逸に薫染せし学
 者風を喜び、世事を抛ちて愚なるが如く、累代の富を控へて、無勘定の雅量を肆にすれど
 も、なほ歳の入るものを計るに正に出づるに五倍すてふ、子爵中有数の内福と聞えたる田
 鶴見良春その人なり。

氷川なる邸内には、唐破風造の昔を摸せる館と相並びて、帰朝後起せし三層の煉瓦

造くりの異あやきまで目慣れぬ式しきなるは、この殿とのの数寄すきにて、独逸どいつに名ある古城こじやうの面影おもかげを偲しのびてここに象かたどれるなりとぞ。これを文庫ぶんこと書斎しよさいと客間きゃくまとに充あてて、万よろづ足たらざる無なき閑日かんじつ月げつをば、書ふけに耽たのし、彫刻てうこくを愛あいし、音楽うそふに嘯さうき、近き頃ころよりは専もつぱら写真しやしんに遊あそびて、齡よはひ三十四さんじゆに、べども頑がんとして未いまだ娶めとらず。その居おのづかるや、行いくや、出でづるや、入いるや、常ひようぜんに飄ひようぜん然ぜんとして、絶たえて貴族きしゆ的てき容儀ようぎを修おのづかめざれど、自おのづからなる七万石しちまんせきの品格ひかくは、面おもて白しろう眉まゆひい秀ひよくでて、鼻はな高たかく、眼まなこ爽さかに、形かたちの清きよに揚あがれるは、咬こうとして玉ぎよく樹じゆの風前ふうぜんに臨りんめるとも謂いふべくや、御代ごだい々々御美男ごみなんにわたらせらるるとは常に藩士はんしの誇こほるところなり。

かかれれば良縁むなしの空そらからざること、蝶ちようを捉とらへんとする蜘蛛くもの糸いとより繁しげしいへども、反かへり顧みだに為せずして、例いの飄然ひようぜん忍いびては醉ゑひの紛いれの逸いつ早はやき風流みやぶに慰なぐさみ、内うちには無妻主義むさいしゆぎを主張しやうして、人ひとの諫いさめなどふつに用もちゐるなりけり。さるは、かの地ちに留学りゆうがくの日ひ、陸軍中佐りくぐんちゆうさなる人の娘むすめと相愛あひあいして、末すえの契せきも堅かたく、月下げつがの小舟せうふねに比翼ひよくの權かひを操あやつり、スプレイすぷれいの流ながを指ゆびさして、この水みづの終つひに涸かわるる日はあらんとも、我が恋ほのほの消きゆる時ときあらせじ、と互たがひの誓詞せいしに詐いつはりはあらざりけるを、歸かへりりて母君ははきみに請こふことありしに、いと太いたう驚おどろかれて、こは由々ゆゆしき家の大事だいじぞや。夷狄いてきは□□よりも賤いやしむべきに、畏かしこくも我が田鶴見たかくみの家いへをばなでう禽獸きんじゆう

の檻おりと為すべき。あな、可疎うとましの吾子あこが心やと、涙と共に搔口かきくど説せきて、悲かなしび歎なげきの余は病
 にさへ伏したまへりしかば、殿も所せん為な無くて、心苦う思ひつつも、猶なほ行末をこそ頼めと文
 の便たよりを度々たびたびに慰めて、彼方あなたも在るにあられぬ三年みつせの月日を、憂うきは死ななんと味あぢき気なく
 過せしに、一昨年をとしの秋物思ふ積りやありけん、心自から弱りて、存なへかねし身の苦くる悩しみを、
 御神みかみの恵めぐみに助けられて、導かれし天国の杳ようとして原たづぬべからざるを、いとど可な懐つかしの殿の
 胸は破れぬべく、ほとほと知覚の半をも失ひて、世と絶つの念益ますす深く、今は無尽の富も
 世襲の貴きも何にかはせんと、唯ただ懐おもひを亡なき人に寄せて、形見こそ仇あだならず書斎の壁に
 掛けたる半身像は、彼かの女をんなが十九の春の色ねんごろを苦しゆに手し写やして、嘗かつて貽おくりしものなりけり。
 殿はこの失望の極放肆遊惰の裏に聊うちいさか懐おもひを遣り、一具の写真機に千金なげうを擲なちて、これに
 嬉戯すること少しょう児にの如く、身をも家をも外ほかにして、遊ぶと費すに余念は無かりけれど、
 家令に畔くろやなぎもとえ柳元衛ありて、その人迂うならず、善く財を理し、事を計るに由りて、かかる
 疎放いの殿ただを戴ける田鶴見家も、幸さいはひに些ひさの破綻はたんを生ずる無きを得てけり。

彼は貨殖の一端として密ひそかに高利の貸元を営みけるなり。千、二千、三千、五千、乃至一
 万の巨額をも容易に支出する大資本主たるを以て、高利貸の大口を引受くる輩はいのここに便たよ
 らんとせざるはあらず。されども慧さかしき畔柳は事の密なるを策の上と為して刃みだりに利の為に誘

はれず、始よりその藩士なる鰐淵ただゆき直行の一手に貸出すのみにて、他は皆彼の名義を用ゐて、直接の取引を為さざれば、同業者は彼の那边いづれにか金穴きんけつあるを疑はざれども、その果して誰なるやを知る者絶えてあらざるなりき。

鰐淵わにぶちの名が同業間に聞えて、威権をさをさ四天王の随一たるべき勢あるは、この資本主の後うしろだて楯たてありて、運轉神助の如きに由るのみ。彼は元田鶴見の藩士にて、身柄は謂ふにも足らぬ足輕頭あしがらがしらに過ぎざりしが、才覚ある者なりければ、廃藩の後出のちいでて小役人こやくじんを勤め、転じて商社に事つかへ、一時あるひ或は地所家屋の売買を周旋し、万年青おもとを手掛け、米屋町こめやまちに出しゅつ入し、何れにしても世渡よわたの茶を濁さずといふこと無かりしかど、皆思はしからで巡查を志願せしに、上官の首尾好く、竟つひには警部にまで取立てられしを、中ごろにして金きんこれ権けんと感ずるところありて、奉職中たくはへえ蓄得たくはへえたりし三百余円を元に高利貸を始め、世間の未だこの種の悪手段に慣れざるに乘じて、或は欺あそき、或は嚇おどし、或は賺すかし、或は虐しひたげ、纔わづかに法網を潜り得て辛からくも繩附なはつきたらざるの罪を犯し、積不善の五六千円に達せし比ころ、あだかも好し、畔柳の後見を得たりしは、虎とらに翼を添へたる如く、現に彼の今運轉せる金額は殆ど数万に上るとぞ聞えし。

畔柳はこの手より穫とるる利の半なかばは、これを御殿ごてんの金庫に致し、半はこれふところを懐ふところにして、鰐

淵もこれに因りて利し、金は一にしてその利を三にせる家令が六臂の働は、主公が不生産的なるを補ひて猶余ありとも謂ふべくや。

鰐淵直行、この人ぞ間貫一が捨鉢の身を寄せて、牛頭馬頭の手代と頼まれ、五番町なるその家に四年の今日まで寄寓せるなり。貫一は鰐淵の裏二階なる八畳の間を与へられて、名は雇人なれども客分に遇はれ、手代となり、顧問となりて、主の重宝大方ならざれば、四年の久きに弥れども主は彼を出すことを喜ばず、彼もまた家を構ふる必要無ければ、敢て留るを厭ふにもあらで、手代を勤むる傍若干の我が小額をも運転して、自ら営む便もあれば、今愁ひにここを出でて瘦臂を張らんよりは、然るべき時節の到来を待つには如かじと分別せるなり。彼は啻に手代として能く働き、顧問として能く慮るのみをもて、鰐淵が信用を得たるにあらず、彼の齢を以てして、色を近けず、酒に親まず、浪費せず、遊惰せず、勤むべきは必ず勤め、為すべきは必ず為して、己を銜はず、他を貶めず、恭謹にしてしかも気節に乏からざるなど、世に難有き若者なり、と鰐淵は寧ろ心陰に彼を畏れたり。

主は彼の為人を知りし後、如此き人の如何にして高利貸などや志せると疑ひしなり、貫一は己の履歴を詐りて、如何なる失望の極身をこれに墜せしかを告げざるなりき。

されども彼が高等中学の学生たりしことは後に顕れにき。他の一事の秘に至りては、今もなほ主が疑問に存すれども、そのままに年経にければ、改めて穿鑿もせられで、やがては、暖簾を分けて屹としたる後、見は為てくれんと、鰐淵は常に疎ならず彼が身を念ひぬ。直行は今年五十を一つ越えて、妻なるお峯は四十六なり。夫は心猛く、人の憂を見ること、犬の噓の如く、唯貪りて饜くを知らざるに引易へて、氣立優しとまでにはあらねど、鬼の女房ながらも尋常の人の心は有てるなり。彼も貫一の偏屈なれども律義に、愛すべきところとは無けれど、憎ましきところとは猶更にあらぬを愛して、何くれと心着けては、彼の為に計りて善かれと祈るなりける。

いと幸ありける貫一が身の上哉。彼は世を恨むる余その執念の驅るままに、人の生ける肉を啖ひ、以つて聊か逆境に暴されたりし枯腸を癒さんが為に、三惡道に捨身の大願を發起せる心中には、百の呵責も、千の苦難も固より期したるを、なかなかかかる寛なる信用と、かかる温き憐愍とを被らんは、羝羊の乳を得んとよりも彼は望まざりしなり。憂の中の喜なる哉、彼はこの喜を如何に喜びけるか。今は呵責をも苦難をも敢て悪まざるべき覺悟の貫一は、この信用の終には愆の為に剥がれ、この憐愍も利の為に吝まるる時の目前なるべきを固く信じたり。

(三) の二

毒は毒を以て制せらる。鰐淵わにぶちが債務者中に高利借の名にしおふ某党ぼうの有志家某あり。

彼は三年來生なまごろし殺ころの關係にて、元利五百余円の責せめを負ひながら、奸智かんちを弄ろうし、雄弁ぶを揮ふるひ、大胆不敵に構かまへて出沒自在の計はかりごとを出し、鰐淵が老巧の術といへども得て施すところ無かりければ、同業者のこれに係かかりては、逆振さかねぢを吃くひて血反吐ちへどを嘔はかされし者すくなからざるを、鰐淵は弥いよ憎よしと思へど、彼に対しては鋏かなてこ桿こも折れぬべきに持余しつるを、克かなはぬまでも棄措すておくは口惜くちをしければ、せめては令見みせしめの爲にも折々釘くぎを刺して、再び那奴しやつの翅はがいを展のべしめざらんに如しかずと、昨日きのふは貫一ぬかの曠ぬからず嚴談せよと代理を命ぜられてその家に向ひしなり。

彼は散々に翻ほんろう弄ろうせられけるを、劣らじと罵ののしりて、前後四時間ばかりその座を起ちも遣やらで壮さかんに言争ひしが、病者に等き青二才あなどと侮あなりし貫一の、陰忍強しんねりく立向ひて屈する気色けしきあらざるより、有合あやふふ仕込杖しこみつゑを抜放し、おのれ還かへらずば生けては還さじと、二尺余あまりの白刃あやふを危く突付けて脅おびやかせしを、その鼻頭はなさきに待あしちひて愈いよいよ動かざりける折柄をりから、来合せつる壮

士三名の乱拳に囲れて門外に突放され、少しは傷など受けて帰来にけるが、これが為に彼の感じ易き神経は甚く激動して夜もすがら眠を成さず、今朝は心地の転た勝ねば、一日の休養を乞ひて、夜具をも収めぬ一間に引籠れるなりけり。かかることありし翌日は夥く脳の懨るとともに、心乱れ動きて、その憤りし後を憤り、悲みし後を悲まざれば已まず、為に必ず一日の勤を廃するは彼の病なりき。故に彼は折に触れつつその体の弱く、その情の急なる、到底この業に不適當なるを感じざることを無し。彼がこの業に入りし最初の一年は働より休の多かりし由を言ひて、今も鰐淵の笑ふことあり。次の年よりは漸く慣れてけれど、彼の心は決してこの悪を作すに慣れざりき。唯能く忍得るを学びたるなり。彼の学びてこれを忍得るの故は、爾来終天の失望と恨との一日も忘るる能はざるが為に、その苦悶の余勢を驅りて他の方面に注がしむるに過ぎず。彼はその失望と恨とを忘れんが為には、以外の堪ふまじき苦悶を辞せざるなり。されども彼は今もなほ往々自ら為せる残刻を悔い、或は人の加ふる侮辱に堪へずして、神経の過度に亢奮せらるる為に、一日の調摂を求めざるべからざる微恙を得ることあり。

朗に秋の気澄みて、空の色、雲の布置句はしう、金色の日影は豊に快晴を飾れる南受の縁障子を隙して、爽なる肌寒の蔭に長高く瘦せたる貫一は横はれり。蒼

く濁れる頬ほの肉よ、へる横顔よこがほの輪廓りんかくよ、曇の懸れる眉まゆの下に物思はしき眼色めざしの凝りて動かざりしが、やがて崩くづるやうに頬杖ほづゑを倒して、枕くくりまくら囊ふくろに重き頭かしらを落すとともに寝返りつつ搔卷かいまき引寄せて、拡げたりし新聞を取りけるが、見る間もあらず投遣りて仰向なげやになりぬ。折しも誰たれならん、階子はしこを昇のぼりく来る音す。貫一は凝然として目を塞ふたぎゐたり。紙門ふすまを啓あけて入来いりきたれるは主の妻なり。貫一の慌あわてて起上るを、そのままにと制して、机かたはらの傍はらに坐りつ。

「紅茶を淹いれましたからお上んなさい。少しばかり栗くりを茹ゆでましたから」

手籃てかごに入れたる栗と盆なる茶器とを枕頭まくらもとに置きて、

「気分はどうです」

「いや、なあに、寝てゐるほどの事は無いので。これは色々御馳走様ごちそうさまでございます」

「冷めない内にお上んなさい」

彼は会釈して珈琲茶碗カフェイチャわんを取上げしが、

「旦那は何時頃だんなお出懸でかけになりました」

「今朝けさは毎いより早くね、氷川ひかわへ行くと云つて」

言ふも可疎うとましげに聞えけれど、さして貫一は意こころも留とどめず、

「はあ、畔柳さんですか」

「それがどうだか知れないの」

お峯は苦笑しつ。明なる障子の日脚はその面の小皺の読まれぬは無きまでに照しぬ。髪は薄けれど、櫛の齒通りて、一髪を乱さず円鬘に結ひて顔の色は赤き方なれど、いと好く磨きて清に滑なり。鼻の辺に薄痘痕ありて、口を引窄むる癖あり。齒性悪ければとて常に涅めたるが、かかるをや烏羽玉とも謂ふべく殆ど耀くばかりに麗し。茶柳条のフラネルの単衣に朝寒の羽織着たるが、御召縮緬の染直しなるべく見ゆ。貫一はさすがに聞きも流されず、

「何為ですか」

お峯は羽織の紐を解きつ結びつして、言はんか、言はざらんかを遅へる風情なるを、強ひて問はまほしき事にはあらじと思へば、貫一は籃なる栗を取りて剥きあたり。彼は姑く打案ぜし後、

「あの赤檉の別品さんね、あの人は悪い噂が有るぢやありませんか、聞きますか」

「悪い噂とは？」

「男を引掛けては食物に為るとか云ふ……」

貫一は覺えず首を傾けたり。曩さきの夜の事など思合するべし。

「さうでせう」

「一向聞きませんな。那奴男あいっを引掛けなくても金銭かねには窮こまらんでせうから、そんな事は無からうと思ひますが……」

「だから可いけない。お前さんなんぞもべいろしや組の方ですよ。金銭かねが有るから為ないと限つたものですか。さう云ふ噂が私の耳へ入つてゐるのですもの」

「はて、な」

「あれ、そんな剥きやうをしちや食べるところは無い、此方こつちへお貸しなさい」

「これは憚はばかりさま様です」

お峯はその言はんとするところを言はんとには、墨まじまじ々と手を束ねて在らんより、事に紛らしつつ語るの便たよりあるを思へるなり。彼は更に栗の大いなるを拵えらみて、その頂いただきよりナイフを加へつ。

「些ちよと見たつてそんな事を為さうな風ぢやありませんか。お前さんなんぞは堅人かたじんだから可いけれど、本当にあんな者に係かかりあ合ひでもしたら大變ですよ」

「さう云ふ事が有りますかな」

「だつて、私の耳へさへ入る位なのに、お前さんが万更知らない事は無からうと思ひますがね。あの別品さんがそれを遣やると云ふのは評判ですよ。金かなくぼ窪くぼさん、鷺わしづめ爪づめさん、それから芥あくたはら原はらさん、皆みんなその話をしてゐましたよ」

「或あるひはそんな評判があるのかも知れませんが、私は一向聞きません。成程、ああ云ふ風ですから、それはさうかも知れませんか」

「外の人にはこんな話は出来ません。長年氣心も知り合つて家内うちの人と同じのお前さんの事だから、私もお話を為るのですけれどね、困つた事が出来て了つたの——どうしたら可からうかと思つてね」

お峯がナイフを執やうやれる手は漸やうやく鈍やうやくなりぬ。

「おや、これは大変な虫だ。こら、御覽なさい。この虫はどうでせう」

「非常ですな」

「虫が付いちや可けません！ 栗には限らず」

「さうです」

お峯は又一つ取りて剥むき始めけるが、心進まざらんやうにナイフの運はこびは愈いよ等閑なほざりなりき。

「これは本当にお前さんだから私は信仰して話を為るのですけれど、此処ここきりの話ですからね」

「承知しました」

貫一は食はんとせし栗を持ち直して、屹きとお峯に打向ひたり。聞く耳もあらずと知れど、秘密を語らんとする彼の声は自おのづから潜ひそまりぬ。

「どうも私はこの間から異をかしいわいと思つてゐたのですが、どうも様子がね、内の夫ひとがあの別品かかりあひさんに係合を付けてゐやしないかと思ふの——どうもそれに違無ちがひいの！」

彼ははや栗など剥かずなりぬ。貫一は揺ゆすり笑わらひして、

「そんな馬鹿な事が、貴方あなた……」

「外の人ならいざ知らず、附いてゐる女房にようぼの私が……それはもう間違無まちがひしよ！」

貫一は熟じつと思ひ入りて、

「旦那はお幾歳いくつでしたな」

「五十一、もう爺ぢぢいですわね」

彼は又思案して、

「何ぞ証拠が有りますか」

「証拠と云つて、別に寄越した文を見た訳でもないのですけれど、そんな念を推さなくたって、もう違無いの!!」

息巻くお峯の前に彼は面を俯して言はず、静に思廻らすなるべし。お峯は心着きて栗を剥き始めつ。その一つを終ふるまで言を継がざりしが、さて徐に、

「それはもう男の働とか云ふのだから、妾も楽も可うございます。これが芸者だとか、囲者だとか云ふのなら、私は何も言ひはしませんけれど第一は、赤檜さんといふ者が

あるのぢやありませんか、ねえ。その上にあの女だ! 凡の代物ぢやありませんわ

ね。それだから私は実に心配で、心火なら可いけれど、なかなか心火どころの洒落た沙

汰ぢやありません。あんな者に係合つてゐた日には、未始終どんな事になるか知れ

やしない、それが私は苦勞でね。内の夫もあのくらゐ利巧で居ながらどうしたと云ふので

せう。今朝出掛けたのもどうも異いの、確に氷川へ行つたんぢやないらしい。だから御覧

なさい。この頃は何となく治れてゐますわね、さうして今朝なんぞは羽織から帯まで仕

立下し渾成で、その奇麗事と謂つたら、何が日にも氷川へ行くのにあんなに靚した事は

ありません。もうそれは氷川でない事は知れきつてゐるの」

「それが事実なら困りましたな」

「あれ、お前さんは未だそんな気楽なことを言つてゐるよ。事実ならツて、事実に違無いと云ふのに」

貫一の気乗せぬをお峯はいと齒痒くて心苛つなるべし。

「はあ、事実とすれば弥よ善くない。あの女に係合つちや全く妙でない。御心配でせう」

「私は悋氣で言ふ訳ぢやない、本当に旦那の身を思つて心配を為るのですよ、敵手が悪いからねえ」

思ひ直せども貫一が腑には落ちざるなりけり。

「さうして、それは何頃からの事でございます」

「ついこの頃ですよ、何でも」

「然し、何にしろ御心配でせう」

「それに就いて是非お頼があるんですがね、折を見て私も篤り言はうと思ふのです。就いてはこれといふ証拠が無くちや口が出ませんから、何とか其処を突止めたいのだけれど、私の体ぢや戸外の様子が全然解らないのですものね」

「御尤」

「で、お前さんと見立ててお頼があるんです。どうか内々様子を探つて見て下さいな。お

前さんが寝てお在いででないと、実は今日早速お頼があるのだけれど、折が悪いのね」

行けよと命ぜられたるとなんぞ扱かんばん、これ有る哉、紅茶と栗と、と貫一はその余あまりに安く売られたるが独ひとり可笑をかしかりき。

「いえ、一向差支さしつかへございません。どういふ事ですか」

「さう？ 余あんまりお気の毒ね」

彼の赤き顔の色は耀かがやくばかりに懽よろこびぬ。

「御遠慮無く有おつしや仰つて下さい」

「さう？ 本当に可いのですか」

お峯は彼が然ぜん諾だくの爽さはなるに遇あひて、紅茶と栗とのこれに酬ゆるの薄儀に過ぎたるを、今更に可はづかし愧く覚ゆるなり。

「それではね、本当に御苦労で済まないけれど、氷川まで行つて見て来て下されば、それで可いのですよ。畔柳さんへ行つて、旦那が行つたか、行かないか、若もし行つたのなら、何頃いつごろ行つて何頃歸つたか、なあに、十とをこのつに九まではきつと行きはしませんから。その様子だけ解れば、それで可いのです。それだけ知れば、それで探偵が一つ出来たのですから」

「では行つて参りませう」

彼は起ちて寝衣帶ねまきおびを解かんとすれば、

「お待ちなさいよ、今俤くるまを呼びに遣やるから」

かく言捨ててお峯は忙せはしく階子はしごを下行おりゆけり。

迹あとに貫一は繰返し繰返しこの事の真偽を案じ煩わづらひけるが、服を改めて居間を出でんとし

つつ、

「女房に振られて、学士に成なり損そこなつて、後が高利貸の手代で、お上さんの秘密探偵か！」

と端はしな無く思ひ浮べては漫そぞろに独り打笑うちゑまれつ。

第四章

貫一は直に俤ただちくるまを飛とばして氷川なる畔くろやなぎ柳のもとに赴おもむけり。その居宅は田鶴見子爵の邸内

に在りて、裏門より出しゆつ入にゆうすべく、館やかたの側面を負ひて、横長に三百坪ばかりを木槿垣もくげがき

に取廻して、昔形むかし氣かたぎの内に幽ゆかしげに造成したる二階建なり。構かまの可愼へつましう目立たぬに引ひ

易きかへて、木口きぐちの撰せん扱たくの至れるは、館の改築ありし折その旧材を拝領して用ゐたるなりと

ぞ。

貫一も彼の主もこの家に公然の出入を憚る身なれば、玄関側なる格子口より訪るるを常とせり。彼は戸口に立寄りけるに、鰐淵の履物は在らず。はや帰りしか、来ざりしか、或は未だ見えざるにや、とにもかくにもお峯が言にも符号すれども、直にこれを以て疑を容るべきにあらずなど思ひつつ音なへば、応ずる者無くて、再びする時間慣れたる主の妻の声して、連に婢の名を呼びたりしに、答へざりければやがて自ら出で来て、

「おや、さあ、お上んなさい。丁度好いところへお出でした」

眼のめいと大くて、病勝に瘦衰へたる五体は燈心の如く、見るだに惨々しながら、声の明にして張ある、何処より出づる音ならんと、一たびは目を驚かし、一たびは耳を驚かすてふ、貫一が一種の化物と謂へるその人なり。年は五十路ばかりにて頭の霜繁く夫よりは姉なりとぞ。

貫一は屋敷風の恭き礼を作して、

「はい、今日は急ぎまするので、これで失礼を致します。主人は今朝ほど此方様へ伺ひましたでございませうか」

「いいえ、お出はありませんよ。実はね、ちとお話が有るので、お目に懸りたいと申してをりましたところ。唯今御殿へ出てをりますので、些と呼びに遣りませうから、暫くお

上んなすつて」

言はるるままに客間に通りて、端はし近ちかう控ふれば、彼は井ゐの端はたなりし婢をんなを呼立てて、速そくそあるじかた々主の方へ走らせつ。蓂たばこ盆ぼんを出いだし、番茶を出いだせしのみにて、納戸なんどに入りける妻は再び出いで来きたらず。この間は貫一は如何いかにこの探偵一件を処置せんかと工夫してゐたり。やや有りて婢の息促いきせき還かへり来きにける氣勢けはひせしが、やがて妻の出でて例の声を振ひぬ。

「さあ唯今ちよつ些と手が放せませんので、御殿の方に居りますから、どうか彼方あちらへお出なすつて。直其処ちきそこですよ。婢に案内を為せます。あの豊とよや！」

暇いとま乞こひして戸口を出づれば、勝手元の垣きの側はたに二十歳かと思ゆる物馴ものなれ顔がほの婢まの待まちりしが、後うしろさまに帯おびかひつくろひつつ道知みちしる込す。垣に沿ひて曲れば、玉川砂礫ざりを敷きたる徑こみちありて、出外ではづるれば子爵家の構かま内へうちにて、三棟並べる塗籠ぬりごめの背後うしろに、桐の木高く植うゑたる列あつちねたる下道したみちの清く掃いたるを行窮ゆきつむれば、板塀いたべい繞めぐらせる下屋造げやつくりの煙突より忙せはしげなる煙立昇りて、折しも御前籠ごぜんかご昇入るは通用門なり。貫一もこれを入りて、余所よそながら過來し厨すぎこりに、酒かの香か、物煮る匂におひしき頻ひりて、奥よりは絶えず人の通ふ乱響ひしめきしたる、来客などやと覺えつつ、畔柳が詰所なるべき一間ひとまに導かれぬ。

(四) の二

畔柳くろやなぎもとえ元衛もとゑの娘むすめ静緒しずおは館やかたの腰元こしもとに通勤とらもちせるなれば、今日は特に女客にょきやくの執持しつぢに召よれて、
 高髻たかき、変かはりうら裏よそひに粧よそひを改あらめ、お傍そば不去さらずに鹿そりやく略りやくあらせじと冊かしづくなりけり。かくて邸内てい内
 遊覧ゆうらんの所望しよぼうありければ、先まづ西洋館せいやうかんの三階さんかいに案内あんないすとて、迂廻まはりばし階子かいしの半なかを昇のぼり行ゆく後うしろす
 姿がたに、その客きやくの如何いかに貴婦人きふじんなるかを窺うかがふべし。鬢かつらならではと見ゆるまでに結ゆひな做なしたる
 円髻まるわけの漆しの如ごときに、珊瑚さんごの六分玉ろくぶだまの後うしろ挿さしを点しじたれば、更に白襟しろえりの冷豔れいえん物ものの
 類たぐふべき無く、貴族きぞく鼠ねずみの縮しぼ緬たかちりめんの五いつつもん紋もんなる单衣ひとへを曳ひきて、帯みは海松かいそう色いろ地に装し
 束ようぞく切き摸きれうつしの色紙しきしちらし散しちんの七糸しちんを高く負おひたり。淡紅ときいろもんろ色いろ紋もん紹ながじゆばんの長襦ながじゆばん袷すその裾うはぐつは上履うはぐつの
 歩あゆみに緩ゆるく匂におひ零こぼして、絹足袋きぬたびの雪ゆきに嫋々たわわなる山茶花さざんかの開ひらく心地こころす。
 この麗うるはき容かたちをば見返みかへり勝かへに静緒しずおは壁かべ側がはに寄よりて二三段さんさんづつ先立さきだちちけるが、彼の俯うつむきて
 昇のぼるに、櫛くしの蒔絵まきゑのいと能よくく見えければ、ふとそれに目を奪うばはれつつ一段踏ふみみ失あねて、
 凄すさまじき響きこの中にあなや僵たふれんと為したり。幸さいはひに怪我けがは無なかりけれど、彼はなかなか己おのれの怪我けがな
 どより貴客きかくを駭おどろかせし狼藉ろうぜきをば、得えも忍しのばれず満面まんめんに慚はぢて、
 「どうも飛そでんだ鹿相しかそうを致いたしまして……」

「いいえ。貴方本当に何処もお傷めなさりはしませんか」

「いいえ。さぞ吃驚遊ばしたでございませう、御免あそばしまして」

今度は薄氷を踏む想して一段を昇る時、貴婦人はその帯の解けたるを見て、

「些とお待ちなさい」

進寄りて結ばんとするを、心着きし静緒は慌て驚きて、

「あれ、恐入ります」

「可うございますよ。さあ、熟として」

「あれ、それでは本当に恐入りますから」

争ひ得ずして竟に貴婦人の手を勞せし彼の心は、溢るるばかり感謝の情を起して、次い

ではこの優しさを桜の花の薫あらんやうにも覚ゆるなり。彼は女四書の内訓に出でた

りとして屢ば父に聴さるる「五綵服を盛にするも、以つて身の華と為すに足らず、貞順

道に率へば、乃ち以つて婦徳を進むべし」の本文に合ひて、かくてこそ始めて色に矜

らず、その徳に爽かずとも謂ふべきなれ。愛でたき人にも遇へるかなと絶に思入りぬ。

三階に着くより静緒は西北の窓に寄り行きて、効々しく緑色の帷を絞り硝子戸を繰

揚げて、

「どうぞ此方へお出あそばしまして。ここが一番見晴が宜いのでございます」

「まあ、好い景色ですことね！ 富士が好く晴れて。おや、大相木犀が匂ひますね、お邸内に在りますの？」

貴婦人はこの秋霽の朗に濶くして心往くばかりなるに、夢など見るらん面色して

佇めり。窓を争ひて射入る日影は斜にその姿を照して、襟留なる真珠は焚ゆる如く輝き

ぬ。塵をだに容さず澄みに澄みたる添景の中に立てる彼の容華は清く鮮に見勝りて、玉壺に白き花を挿したらん風情あり。静緒は女ながらも見惚れて、不束に眺入りつ。

その目の爽にして滴るばかり情の籠れる、その眉の思へるままに画き成せる如き、その

口元の蒼ながら香に立つと見ゆる、その鼻の似るものも無くいと好く整ひたる、肌理濃

に光をさへ帯びたる、色の透るばかりに白き、難を求めなば、髪は濃くて瑩沢に、頭も

重げに束ねられたれど、髪際の少く打乱れたると、立てる容こそ風にも堪ふまじく纖

弱なれど、面の瘦の過ぎたる為に、自ら愁う底寂きと、頸の細きが折れやしぬべく

可傷きとなり。

されどかく揃ひて好き容量は未だ見ずと、静緒は心に驚きつつ、蹈外せし僞忽はは

や忘れて、見据うる流盼はその物を奪はんと覘ふが如く、吾を失へる顔は間抜けて、常

は顧らるる貌かたちありながら、草の花の匂無きやうに、この貴婦人の傍かたはらには見劣せらるること夥おびただしかり。彼は己おのれの間拔けたりとも知らで、返す返すも人の上を思ひて止まざりき。實げにこ

の奥方なれば、金時計持てるも、真珠の襟留せるも、指環を五つまで穿させるも、よし馬車に乗りて行かんとも、何をか愧はづべき。婦をんなの徳をさへ虧かかでこの嬋娟あでやかに生れ得て、しかもこの富めるに遇あへる、天の恵めぐみと世の幸さちとを併あはせ享うけて、残かたる方無き果報のかくも痛いき人もあるものか。美きは貧くて、売らざるを得ず、富めるは醜みにくくて、買はざるを得ず、二者ふたつは慚かなはぬ世の習なるに、女ながらもかう生れたらんには、その幸さいはひは男にも過ぎぬべしなど、若き女は物もの羨うらやみの念強けれど、妬ねたしとは及び難くて、静緒は心に畏おそるるなるべし。

彼は貴婦人の貌かたちに耽ふけりて、その欺待もてなしにとて携へ来つる双眼鏡を参らするをば氣着かであたり。こは殿の仏蘭西フランスより持ち歸られし名器なるを、漸やうやく取出とりだして薦すすめたり。形は一握ちあくの中に隠るるばかりなれど、能く遠くを望み得る力はほとほと神助と疑ふべく、筒は乳白色の玉もて造られ、僅わずかに黄金細工の金具を施したるのみ。

やがて双眼鏡は貴婦人の手に在りて、措おくを忘らるるまでに愛めでられけるが、目の及ばぬ遠き限は南に北に眺ながめつゝ、尽つされて、彼はこの鏡グラスの凡ただならず精巧なるに驚ける状さまなり。

「那あそこ処に遠く些ほんの小楊枝こようじほどの棒が見えませう、あれが旗なので、浅黄あさぎに赤い柳条ししまの模様

まで昭然見えて、さうして旗竿の頭に鳶が宿つてゐるが手に取るやう」

「おや、さやうでございますか。何でもこの位の眼鏡は西洋にも多度御座いませんさうで、招魂社のお祭の時などは、狼煙の人形が能く見えるのでございます。私はこれを見まする度にさやう思ひますのでございますが、かう云う風に話が聞えましたらさぞ宜うございませう。余り近くに見えますので、音や声なんぞが致すかと想ふやうでございます」

「音が聞えたら、彼方此方の音が一所に成つて粉雑になつて了ひませう」

かく言ひて齊く笑へり。静緒は客遇に慣れたれば、可羞しげに見えながらも話を求むるには拙からざりき。

「私は始めてこれを見せて戴きました折、殿様に全然騙されましたのでございます。鼻の前に見えるだらうと仰せられますから、さやうにございますと申上げますと、見えたら直にその眼鏡を耳に推付けて見ろ、早くさへ耳に推付けければ、音でも声でも聞えると仰せられますので……」

淀無く語出づる静緒の顔を見入りつつ貴婦人は笑ましげに聴ゐたり。

「私は急いで推付けましたのでございます」

「まあ！」

「なに、ちつとも聞えは致しませんのでございますから、さやう申上げますと、推付けやうが悪いと仰せられまして、御自身に遊ばして御覧なさるのでございますよ。何遍致して見ましたか知れませんでしたのでございますけれど、何も聞えは致しませんので。さやう致しますると、お前では可かんと仰せられまして、御供を致してをりました御家来から、御親類方も御在おいでであらつしやいましたが、皆みんななすつて御覧遊ばしました」

貴婦人は怵こらへかねて失笑せり。

「あら、本当なのでございますよ。それで、未だ推付けやうが悪い、もつと早く早くと仰せられるものでございますから、御殿に居ります速水はやみと申す者は余り急ぎましたので、耳の此処ここを酷ひどく打ちまして、血を出したのでございます」

彼の歎うろこべるを見るより静緒は椅子を持来もちきたりて薦めし後、さて語り続けるやう。

「それで誰たれにも聞えないのでございます。さやう致しますると、殿様は御自身に遊ばして御覧で、なるほど聞えない。どうしたのか知らんなんて、それは、もう実にお真面目まじめな顔で、わざと御考へあそばして、仏蘭西フランスに居た時には能く聞えたのだが、日本は氣候が違ふから、空気の具合が眼鏡の度に合はない、それで聞えないのだらうと仰せられましたのを、皆本当に致して、一年ばかり釣られてをりましたのでございます」

その名器を手にし、その耳にせし人を前にせる貴婦人の興を覚ゆることは、殿の悪作あくさげ劇きを親おく睹みたらんにも劣らざりき。

「殿様はお面白い方でゐらつしやいますから、随分そんな事を遊ばしませうね」

「それでもこの二三年はどうも御気分がお勝すぐれ遊ばしませんので、お険むづかしいお顔をしてゐらつしやるのでございます」

書齋に掛けたる半身の画像こそその病根なるべきを知れる貴婦人は、卒にはかに空目遣そらめづかひして物の思はしげに、例そこさびしの底寂うちしめう打湿うちしめりて見えぬ。

やや有りて彼は徐しづかに立ち上りけるが、今回は更たゞに邇ちかきを眺めんとて双眼鏡を取り直してけり。彼方あなた此方こなたに差向くる筒あてどの当所も無かりければ、偶たまま唐櫟からゆづり葉のいと近きが鏡面レンズに入り来きて一面に蔓はびこりぬ。粒々の実も珍く、何の木かとそのまま子細に視たりしに、葉蔭を透きて人顔の見ゆるを、心とも無く眺めけるに、自おのづから得忘れぬ面影に肖にたるところあり。

貴婦人は差し向けたる手を緊しかと据ゑて、目を拭ぬぐふ間も忙せはしく、なほ心を留めて望みけるに、枝葉えだはの遮さへぎりてとかくに思ふままならず。漸やうやくその顔あきらかの明に見ゆる隙ひまを求めけるが、別に相さ対むかへる人ありて、髪は黒けれども真額まつかうの瑩てらてら々は禿はげたるは、先に挨拶あいさつに出いでし家扶しむかの畔柳はなにて、今一人なるその人こそ、眉濃まゆこく、外眦まなじりの昂あがれる三十前後の男なりけれ。得

忘れぬ面影に肖^にたりとは未^{おろ}や、得忘れぬその面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の
 グラス鏡持てる手は兢^{わなわな}々と打顫^{うちふる}ひぬ。

行く水に数画^{かずか}くよりも儂^{はかな}き恋しさと可懷^{なつか}しさとの朝夕に、なほ夜昼^{わかち}の別も無く、絶えぬ

思はその外ならざりし四年^{よとせ}の久きを、熱海の月は朧^{おぼろ}なりしかど、一期^{いちご}の涙に宿りし面影は、

なかなか消えもやらで身に添ふ幻を形見にして、又何日^{いつか}は必ずと念懸^{おもひか}けつつ、雨にも風にも

君が無事を祈りて、心は毫^{つゆ}も昔に渝^{かは}らねど、君が恨を重ぬる宮はここに在り。思ひに思

ふのみにて別れて後の事は知らず、如何^{いか}なる勞^{わづらひ}をやさまでは積みけん、齡^{よはひ}よりは面^{おも}瘁^{やつれ}

して、異^{あやし}うも物々しき分別^{ふんべつかほ}顔に老いにけるよ。幸^{さいはひ}薄^{うす}く暮さるるか、着たるものの見

好げにもあらで、なほ書生なるべき姿なるは何にか身を寄せらるるならんなど、思は置所

無く湧出^{わきい}でて、胸も裂けぬべく覚ゆる時、男の何語りてや打笑む顔の鮮^{あざやか}に映れば、貴婦人

の目よりは涙すずろに玉の糸の如く流れぬ。今は堪^たへ難くて声も立ちぬべきに、始めて人

目あるを曉^{さと}りて失^{しな}したりと思ひたれど、所為^{せんな}無くハンカチーフを緊^{きびし}く目に掩^あてたり。静緒

の驚駭^{おどろき}は謂ふばかり無く、

「あれ、如何^{いか}が遊ばしました」

「いえ、なに、私は脳^{わるい}が不良^{あんま}ものですから、余^{あま}り物を瞞^{みづ}めてをると、どうかすると眩暈^{めまひ}が

して涙の出ることがあるので」

「お腰をお掛け遊ばし、少しお頭をお摩り申上げませう」

「いえ、かうしてをると、今に直に癒ります。憚ですがお冷を一つ下さいましな」

静緒は驀地に行かんとす。

「あの、貴方、誰にも有仰らずにね、心配することは無いのですから、本当に有仰らずに、唯私が嗽をうがひをすると言つて、持つて来て下さいましよ」

「はい、畏りました」

彼の階子を下り行くと、齊く貴婦人は再び鏡を取りて、葉越の面影を望みしが、一目見るより漸含む涙に曇らされて、忽ち文色も分かずなりぬ。彼は静無く椅子に崩折れて、縦まに泣乱したり。

(四)の三

この貴婦人こそ富山宮子にて、今日夫なる唯継と俱に田鶴見子爵に招れて、男同士のシャンペンなど酌交す間を、請うて庭内を遊覧せんとて出でしにぞありける。

子爵と富山との交際は近き頃よりにて、彼等の孰も日本写真会々員たるに因れり。自ら宮の除物のけものになりて二人の興に入れるは、想ふにその物語なるべし。富山はこの殿と親友たらんことを切望して、ひたすらその意を獲んと力めけるより、子爵も好みて交るべき人とも思はざれど、勢ひ疎うとんじ難くして、今は会員中善く識れるものの最たるなり。爾来富山は益す傾慕して措かず、家にツイシ안의模写と伝へて所蔵せる古画の鑒定を乞ふを名として、曩に芝西久保なる居宅に請じて疎ならず饗す事ありければ、その返とて今日は夫婦を招待せるなり。

会員等は富山が頻に子爵に取入るを見て、皆その心を測りかねて、大方は彼為にするところあらなど言ひて陋み合へりけれど、その実敢て為にせんとにもあらざるべし。彼は常にその友を択べり。富山が交るところは、その地位に於て、その名声に於て、その家柄に於て、或はその資産に於て、孰のつか取るべき者ならざれば決して取らざりき。されば彼の友とするところは、それらの一つを以て優に彼以上に価する人士にあらざるは無し。実に彼は美き友を有てるなり。さりとて彼は未だ曾てその友を利用せし事などあらざれば、こたびも強に有福なる華族を利用せんとにはあらで、友として美き人なれば、かく勉めて交は求むるならん。故に彼はその名簿の中に一箇の憂を同うすべき友をだに見出さ

ざるを知れり。抑も友とは樂を共にせんが為の友にして、若し憂を同うせんとは、別に金銭ありて、人の助を用ゐず、又決して用ゐるに足らずと信じたり。彼の美き友を挾ぶは固よりこの理に外ならず、寔に彼の挾べる友は皆美けれども、尽くこれ酒肉の兄弟たるのみ。知らず、彼はこれを以てその友に満足すとも、なほこれをその妻に於けるも然りと為すの勇あるか。彼が最愛の妻は、その一人を守るべき夫の目をめて、陋みても猶余ある高利貸の手代に片思の涙を灑ぐにあらずや。

宮は傍に人無しと思へば、限知られぬ涙に搔昏れて、熱海の浜に打俯したりし悲歎の足らざるをここに続がんとすなるべし。階下より仄に足音の響きければ、やうやう泣顔隠して、わざと頭を支へつつ室の中央なる卓子の周囲を歩みゐたり。やがて静緒の持来りし水に漱ぎ、懷中藥など服して後、心地復りぬとて又窓に倚りて外方を眺めたりしが、

「ちよいと、那処に、それ、男の方の話をしてお在の所も御殿の続きなのですか」

「何方でございます。へ、へい、あれは父の詰所で、誰か客と見えまする」

「お宅は？ 御近所なのですか」

「はい、お邸内でございます。これから直に見えまする、あの、倉の左手に高い櫓の

木がございませう、あの陰に見えます二階家が宅なのでございます」

「おや、さうで。それではこの下から直とお宅の方へ行かれますのね」

「さやうでございます。お邸の裏門の側でございます」

「ああさうですか。では些とお庭の方からお邸内を見せて下さいましな」

「お邸内と申しても裏門の方は誠に穢うございまして、御覧あそばすやうな所はございません」

宮はここを去らんとして又葉越の面影を窺へり。

「付かない事をお聞き申すやうですが、那処にお父様とお話をしてゐらつしやるのは何地の方ですか」

彼の親達は常に出入せる鰐淵の高利貸なるを明さざれば、静緒は教へられし通りを告るなり。

「他は番町の方の鰐淵と申す、地面や家作などの売買を致してをります者の手代で、間とか申しました」

「はあ、それでは違ふか知らん」

宮は聞えよがしに独語ちて、その違へるを訝るやうに擬しつつ又其方を打目成れり。

「番町はどの辺で？」

「五番町だとか申しました」

「お宅へは始終見えるのでございますか」

「はい、折々参りますのでございます」

この物語に因りて宮は彼の五番町なる鰐淵といふに身を寄するを知り得たれば、この上は如何にも逢ふべき便はあらんと、獲難き宝を獲たるにも勝れる心地せるなり。されどもこの後相見んことは何日をも計られざるに、願うては神の力も及ぶまじき今日の奇遇を仇に、余所ながら見て別れんは本意無からずや。若し彼の眼に睨まれんとも、互の面を合せて、言は交さずとも切ては相見て相知らばやと、四年を恋に饑ゑたる彼の心は熬るる如く動きぬ。

さすがに彼の氣遣へるは、事の危きに過ぎたるなり。附添さへある賓の身にして、賤きものに遇はる手代風情と、しかもその邸内の径に相見て、万一不慮の事などあらば、我等夫婦は抑や幾許り恥辱を受くるならん。人にも知られず、我身一つの恥辱ならんには、この面に唾吐るるも厭はじの覚悟なれど奇遇は棄つるに惜き奇遇ながら、逢瀬は今日の一日に限らぬものを、事の破を目に見て愚に躁るべきや。ゆめゆめ今日は逢ふべき機なら

ず、辛くとも思止まんと胸は据ゑつつも、彼は静緒を賺して、邸内を一周せんと、西洋館の後より通用門の側に出でて、外堀際なる礫道を行けば、静緒は斜に見ゆる父が詰所の軒端を指して、

「那処が唯今の客の参つてをります所でございます」

実に唐櫟葉は高く立ちて、折しく一羽の小鳥来鳴けり。宮が胸は異うつと塞りぬ。

楼を下りてここに来たるは僅少の間なれば、よもかの人は未だ帰らざるべし、若しここに出で来らば如何にすべきなど、さすがに可恐きやうにも覚えて、歩は運べど地を踏める心地も無く、静緒の語るも耳には入らで、さて行くほどに裏門の傍に到りぬ。

遊覧せんとありしには似で、貴婦人の目を挙げども何処を眺むるにもあらず、俯き勝に物思はしき風情なるを、静緒は怪くも氣遣くて、

「まだ御気分がお悪うゐらつしやいますか」

「いいえ、もう大概良いのですけれど、未だ何だか胸が少し悪いので」

「それはお宜うございません。ではお座敷へお帰りあそばしました方がお宜うございませう」

「家の中よりは戸外の方が未だ可いので、もう少しと歩いてゐる中には復りますよ。ああ、

此方こちらがお宅ですか」

「はい、誠に見苦い所でございます」

「まあ、奇麗な！ 木槿もくげが盛さかですこと。白さつぱりばかりも淡白たんぱくして好よいぢやありませんか」

畔柳すまひの住居を限として、それより前は道さきあれども、賓まろうどの足を容いるべくもあらず、納屋、

物干場、井戸端などの透きて見ゆる疎まだらがき垣このたの此方に、櫓かしの実の夥おびただしく零れて、片側かたわきに下

水を流せる細路ほそみちを鶏の遊び、犬の睡ねむれるなど見るも慍いぶせきに、静緒は急ぎ返さんとせるな

り。貴婦人もはや返さんとするとともに恐懼おそれは忽たちまちその心を襲へり。

この一筋道を行くなれば、もしかの人の出いできた来るに会はば、遁のがれんやうはあらで明々地あからさま

に面を合すべし。さるは望まざるにもあらねど、静緒の見る目あるを如何いかにせん。仮令たとひ此

方なたにては知らぬ顔してあるべきも、争いかでかの人の見付けて驚かざらん。固もとより恨を負へる

我が身なれば、言ことばなど懸けらるべしとは想はねど、さりとてなかなか道行く人のやうには

見過されざるべし。ここに宮を見たるその驚駭おどろきは如何ならん。仇あだに遇あへるその憤懣いきどほり

は如何ならん。必ずかの人の凄すさまじう激せるを見ば、静緒は幾いかに許我を怪むらん。かく思ひ

浮ひぶると齊ひとしく身内は熱して冷き汗つめたを出いだし、足は地に吸るかとばかり竦すくみて、宮はこれを

想ふにだに堪たへざるなりけり。脇道わきみちもあらば避けんと、静緒に問へば有らずと言ふ。知

りつつもこの死地に陥りたるを悔いて、遣る方も無く惑へる宮が面色の穩からぬを見尤めて、静緒は窃に目を側めたり。彼はいとどその目を懼るるなるべし。今は心も漫に足を疾むれば、土蔵の角も間近になりて其処をだに無事に過ぎなば、と切に急がるる折しも、人の影は突としてその角より顕れつ。宮は眩きぬ。

これより歸りてともかくもお峯が前は好きやうに言譌へ、さて篤と実否を糺せし上にて私に為んやうも有らんなど貫一は思案しつつ、黒の中折帽を稍目深に引側め、通学に馴されし疾足を驅りて、塗籠の角より斜に桐の並木の間を出でて、礫道の端を歩み来り。

四辺に往來のあるにあらねば、二人の姿は忽ち彼の目に入りぬ。一人は畔柳の娘なりとは疾く知られけれど、顔打背けたる貴婦人の眩く着飾りたるは、子爵家の客なるべしと纔に察せらるるのみ。互に歩み寄りて一間ばかりに近けば、貫一は静緒に向ひて慇懃に礼するを、宮は傍に能ふ限は身を窄めて密に流盼を凝したり。その面の色は慘として夕顔の花に宵月の映へる如く、その冷なるべきもほとほと、相似たりと見えぬ。脚は打顫ひ打顫ひ、胸は今にも裂けぬべく轟くを、覺られじとすれば猶打顫ひ猶轟きて、貫一が面影の目に沁むばかり見ゆる外は、生きたりとも死にたりとも自ら分かぬ心地してき。貫一

は帽を打着て行過ぎんとする際に、ふと目鞆の走りて、館の賓なる貴婦人を一瞥せり。端
 無くも相互の面は合へり。宮なるよ！ 姦婦なるよ！ 銅臭の肉蒲団なるよ！ とかつ
 は驚き、かつは憤り、はたと睨めて動かざる眼には見る見る涙を湛へて、唯一攫にも
 せまほしく肉の躍るを推忭へつつ、窃に齒咬をなしたり。可懐しさと可恐しさと可耻し
 さとを取集めたる宮が胸の内は何に喩へんやうも無く、あはれ、人目だにあらざば抱付
 きても思ふままに苛まれんをと、心のみは憧れながら身を如何とも為難ければ、せめてこ
 の誠は通ぜよかしと、見る目に思を籠むるより外はあらず。

貫一はつと踏出して始の如く足疾に過行けり。宮は附人に面を背けて、唇を咬みつ
 つ歩めり。驚きに驚かされし静緒は何事とも弁へねど、推すべきほどには推して、事の秘
 密なるを思へば、賓の顔色のさしも常ならず変りて可惱しげなるを、問出でんも可や否や
 を料りかねて、唯可慎う引添ひて行くのみなりしが、漸く庭口に来にける時、

「大相お顔色がお悪くてゐらつしやいますが、お座敷へお出あそばして、お休み遊ばしま
 しては如何でございます」

「そんなに顔色が悪うございますか」

「はい、真蒼でゐらつしやいます」

「ああさうですか、困りましたね。それでは彼方へ参つて、又皆さんに御心配を懸けると
 可いけませんから、お庭を一周しまして、その内には気分が復りますから、さうしてお
 座敷へ参りませう。然し今日は大変貴方のお世話になりました、お蔭様で私も……」

「あれ、飛んでもない事を有仰います」

貴婦人はその無名指より繡眼児の押競を片截にせる黄金の指環を拔取りて、懐
 紙に包みたるを、

「失礼ですが、これはお礼のお証に」

静緒は驚き怖れたるなり。

「はい……かう云ふ物を……」

「可うございますから取つて置いて下さい。その代り誰にもお見せなさらないやうに、阿
 父様にも阿母様にも誰にも有仰らないやうに、ねえ」

受けじと為るを手籠に取せて、互に何も知らぬ顔して、木の間伝ひに泉水の鹿朶橋近く
 寄る時、書院の静なるに夫の高笑するが聞えぬ。

宮はこの散歩の間に勉めて気を平げ、色を斂めて、ともかくも人目をれんと計れるな
 り。されどもこは酒を窃みて酔はざらんと欲するに同かるべし。

彼は先に遭ひし事の胸に鏤られたらんやうに忘るる能はざるさへあるに、なかなか朽ちも果てざりし恋の更に萌出でて、募りに募らんとする心の乱は、堪ふるに難き痛苦を齎して、一步は一步より、胸の逼ること急に、身内の血は尽くその心頭に注ぎて余さず熬らるるかと思ゆるばかりなるに、かかる折は打寛ぎて意任せの我が家に独り居たらんぞ可き。人に接して強ひて語り、強ひて笑ひ、強ひて楽まんなど、あな可煩しと、例の劇く唇を咬みて止まず。

築山陰の野路を写せる径を行けば、蹈処無く地を這ふ葛の乱れ生ひて、草藤、金線草、紫茉莉の色々、茅萱、穂薄の露滋く、泉水の末を引きて、水を卑きに落せる汀なる胡麻竹の一叢茂れるに隠頭して苔蒸す石組の小高きに四阿の立てるを、やうやう辿り着きて貴婦人は艱しげに憩へり。

彼は静緒の柱際に立ちて控ふるを、

「貴方もお草臥でせう、あれへお掛けなさいな。未だ私の顔色は悪うございますか」

その色の前にも劣らず蒼白めたるのみならで、下唇の何に傷きてや、少く血の流れたるに、彼は太く驚きて、

「あれ、お唇から血が出てをります。如何あそばしました」

ハンカチイフもて抑へければ、絹の白きに柘榴ざくろの花弁はなびらの如く附きたるに、貴婦人は懷ふ鏡ところかみ取出とりだして、咬かむことの過ぎし故ゆゑぞと知りぬ。実に顔の色は躬みづからも凄すこしと見るまでに変れるを、庭の内をば幾いくめ周めぐして我はこの色を隠さんと為すらんと、彼は心こころ陰ひそに己おのれを嘲あざけるなりき。

たちま 忽ち女の声して築山の彼方より、

「静緒さん、静緒さん！」

彼は走り行き、手を鳴して応こたへけるが、やがて木隠こがくれに語かたふ氣勢けはひして、返り来ると齊ひとしく寶まらうどの前に会釈して、

「先程からお座敷ではお待兼であらつしやいますさうで御座いますから、直すぐに彼方あちらへお出いであそばしますやうに」

「おや、さうでしたか。随分先から長い間道草を食べましたから」

道を転じて静緒は雲帯うんたい橋きょうの在ある方かたへ導うけり。橋に出づれば正面の書院を望むべく、はや所ところ狭せまきまで盃盤はいばんを陳つらねたるも見えて、夫は席に着きゐたり。

此方こなたの姿を見るより子爵は縁先に出でて磨さしきつつ、

「そこをお渡りになつて、此方こちらに燈籠とうろうがございませう、あの傍そばへ些ちよつとお出で下さいませ

んか。一枚像とらして戴きたい」

写真機は既に好き処に据ゑられたるなり。子爵は庭に下立ちおりたて、早くもカメラおほひの覆ひを引きき、被かき、かれこれ位置を取りなどして、

「さあ、光線の具合が妙だ！」

いでや、事ようの様を見んとて、慢々ゆらゆらと出来い来るは富山唯継なり。片手には葉卷シガアの半なか燵ぼんりしを撮つまみ、片臂かたひぢを五紋の单羽織ひとへはおりの袖そでの内に張りて、鼻の下あなの延びて見ゆるやうの笑あみを浮べつつ、

「ああ、おまへ其処そこに居らんければ可なかんよ、何なぜ為歩いて来るのかね」

子爵あわの慌あわてたる顔はこの時毛繻子けしゆすの覆あの内よりついと顯あられたり。

「可あすこけない！ 那処あすこに居て下さらないければ可あけませんな。何、御免かうむを蒙る？ ——可あけな

い！ お手間は取せませんから、どうぞ」

「いや、貴方あなたは巧ことい言をお覚えですな。お手間は取せませんは余程好い」

「この位に言つて願はんとね、近頃は写してもらふ人よりは写したがる者の方が多いですからね。さあ、奥さん、まあ、彼方あちらへ。静緒、お前奥さんあすこを那処へお連れ申して」

唯継は目もて示して、

「お前、早く行かんけりや可かんよ、折角かうして御支度ごしたくをなすつて下すつたのに、是非願ひな。ええ。あの燈籠とうろうの傍そばへ立つのだ。この機械は非常に結構けいこうなのだから是非願ひな。

何も羞含はにかむことは無いぢやないか、何羞含はにかむ訳ぢやない？ さうとも羞含はにかむことは無いとも、始終内で遣やつてをるのに、あれで可いのさ。姿勢かたちは私が見て遣るから早くおいで。燈籠とうろうへ倚よつ掛かつて頬杖ほづゑでも拄ついて、空を眺ながめてゐる状かたちなども可いよ。ねえ、如何いかにでせう」
「結構。結構」と子爵は頷うなづけり。

心は進まねど強ひて否いなむべくもあらねば、宮は行きて指定の位置に立てるを、唯繼は望み見て、

「さう棒立ちになつてをつちや可かんぢやないか。何ぞ持つてをる方が可いか知らんて」
かく呟つぶやきつつ庭下駄ひきかを引掛ひきかけ、急ぎ行きて、その想へるやうに燈籠とうろうに倚よらしめ、頬杖ほづゑを拄つしめ、空を眺めよと教へて、袂たもとの皺しわめるを展のべ、裾すその縷もつれを引直し、さて好しと、少く退すこしきて姿勢を見るとともに、彼はその面の可惱おもてなやましげに太くも色を変へたるを発見して、直ただちに寄り来つ、

「どうしたのだい、おまへ、その顔色は？ 何処どこか不快わるいのか、ええ。非常な血色だよ。どうした」

「少しばかり頭痛がいたすので」

「頭痛？ それぢやかうして立つてをるのは苦いだらう」

「いいえ、それ程ではないので」

「苦いやうなら我慢をせんとも、私が訳を言つてお謝絶ことわりをするから」

「いいえ、宜よろしうございますよ」

「可いかい、本当に可いかね。我慢をせんとも可いから」

「宜よろしうございますよ」

「さうか、然し非常に可厭いやな色だ」

彼は眷けん々として去る能あたはざるなり。待ちかねたる子爵は呼べり。

「如何いかにですか」

唯継は慌あわ忙ただしく身を開きて、

「一つこれで御覧下さい」

鏡面レンズに照して二三の改むべきを注意せし後、子爵は種板たねいたを挿入さしるれば、唯継は心得て

その邇ちかきを避けたり。

空を眺むる宮が目の中うちには焚もゆらんやうに一種の表情力充満みちみちて、物憂さの支へかねた

る姿もわざとならず。色ある衣は唐松の翠の下蔭に章を成して、秋高き清遠の空はその後のに舗しき、四脚よつあしの雪見燈籠を小楯こたてに裾の辺は寒咲躑躅あたりかんざきつづじの茂しげみに隠れて、近きに二羽の鷺がの汀みぎはあさに、るなど、寧ろ画にこそ写さまほしきを、子爵は心に喜びつつ写真機の前に進み出で、今や鏡面レンズを開かんと構ふる時、貴婦人の頬杖は忽ち頹たちまくづれて、その身は燈籠の笠の上に折重なりて岸破がばと伏しぬ。

第五章

遊佐良橘ゆさりようきつは郷里に在りし日も、出京の遊学中も、頗るすこぶ謹直を以て聞えしに、却りて、日本周航会社に出勤せる今日こんにち、三百円の高利の為に艱なやまさると知れる彼の友は皆驚けるなり。或ものは結婚費なるべしと言ひ、或ものは外を張らざるべからざる為の遣繰やりくりなるべしと言ひ、或ものは隠かくれあそび遊の風流債ならんと説くもありて、この不思議の負債とその美き妻とは、遊佐に過ぎたる物が二つに数へらるるなりき。されどもこは謂いふべからざる事情の下に連帯の印いんを仮かせしが、形かたの如く腐れ込みて、義理の余毒の苦を受うくと知りて、彼の不幸を悲むものは、交際官試補なる法学士蒲田鉄弥かまだと、同会社の貨物課なる法学士風か

早庫之助とあるのみ。

凡そ高利の術たるや、およ 渴者かつしやに水を売るなり。渴はなはだしの甚く堪へ難き者に至りては、決して

その肉を割さきてこれを換ふるを辞せざるべし。この急に乗じてこれを売る、一杯の水もその値あたぎよくしやう玉漿いゆを盛るに異る無し。故に前後不覚に渴する者能くこれを買ふべし、その渴の

癒るに及びては、玉漿なりとして喜び吃きつせしものは、素もと下水の上澄うはすみに過ぎざるを悟り

て、痛恨、痛悔すといへども、彼は約の如く下水の倍量をばその鮮血に搾しぼりその活肉に割

きて以て返さざるべからず。噫あゝ、世間の最も不敵なる者高利を貸して、これを借るは更に

最も不敵なる者と為さざらんや。ここを以て、高利は借るべき人これを借りて始めて用ゐ

るべし。さらずばこれを借るの覚悟あるべきを要す。これ風早法学士の高利貸に對する意

見の概要なり。遊佐は実にこの人にあらず、又この覚悟とても有らざるを、奇禍かかに罹かれる

哉と、彼は人の為ながら常にこの憂うれひを解く能あたはざりき。

近きに郷友会きようゆうかいの秋季大会あらんとて、今日委員会のありし帰かへるさを彼等は三人打連みたりれ

て、遊佐が家へ向へるなり。

「別に御馳走ごちそうと云つては無いけれど、松茸まつたけの極新ごくあたらしいのと、製造元もたらから貰つた黒麦くろビイ

酒ルが有るからね、鶏とりでも買つて、寛ゆつくり話さうぢやないか」

遊佐が弄れる半月形の熏豚の罐詰も、この設にとて途に求めしなり。

蒲田の声は朗々として聴くに快く、

蒲「それは結構だ。さう泊が知れて見ると急ぐにも当らんから、どうだね、一ゲエム。君はこの頃風早と対に成つたさうだが、長足の進歩ぢやないか。然し、どうもその長足のちやうはてう（貂）足らず、続ぐにフロックを以つて為るのぢやないかい。この頃は全然フロックが止つた？ ははははは、それはお目出度いやうな御愁傷のやうな妙な次第だね。然し、フロックが止つたのは明に一段の進境を示すものだ。まあ、それで大分話せるやうになりました」

風早は例の皺噺声して大笑を發せり。

風「更に一段の進境を示すには、
 堅杖をして二寸三分クロオスを裂かなければ可けま

せん」

蒲「三たび臂を折つて良医となるさ。あれから僕は
 堅杖の極意を悟つたのだ」

風「へへへ、この頃の僕の後曳の手際も知らんで」

これを聞きて、こたびは遊佐が笑へり。

遊「君の後曳も口ほどではないよ。この間那処の主翁がさう言つてゐた、風早さんが後曳

を三度なさると新しいチヨオクが半分失る……」

蒲「穿^{うがちえ}得て妙だ」

風「チヨオクの多少は業^{わざ}の巧拙には関せんよ。遊佐が無闇^{むやみ}に杖^{きゅう}を取易^{とりか}へるのだつて、決して見^みとも好くはない」

蒲田は手もて遽^{にはか}に制しつ。

「もう、それで可い。他^{ひと}の非を挙げるやうな者に業^{わざ}の出来た例^{ためし}が無い。悲い哉^{かな}君達の球も蒲田に八十で底止^{とまり}だね」

風「八十の事があるものか」

蒲「それでは幾箇^{いくつ}で来るのだ」

「八十五よ」

「五とは情無い！ 心の程も知られける哉^{かな}だ」

「何でも可いから一ゲエム行かう」

「行かうとは何だ！ 願ひますと言ふものだ」

語^{ことば}も訖^{をは}らざるに彼は傍腹^{ひばら}に不意の肱突^{ひぢつき}を吃^{くら}ひぬ。

「あ、痛^{いた}！ さう強く撞^つくから毎々球が滾^{ころ}げ出すのだ。風早の球は暴^{あら}いから癩癩^{かんしやく}玉と

謂ふのだし、遊佐のは馬鹿に柔いから蒟蒻玉。それで、二人の撞くところは電公と蚊帳が捫拭してゐるやうなものだ」

風「ええ、自分がどれほど撞けるのだ」

蒲「さう、多度も行かんが、天狗の風早に二十遣るのさ」

二人は劣らじと諍ひし末、直に一番の勝負をいざいざと手薬煉引きかくるを、遊佐は引分けて、

「それは飲んでからに為やう。夜が長いから後で寛り出来るさ。帰つて風呂にでも入つて、それから徐々始めやうよ」

往来繁き町を湯屋の角より入れば、道幅その二分の一ばかりなる横町の物売の店も雜りながら閑静に、家並整へる中程に店蔵の質店と軒ラムプの並びて、格子木戸の内を庭がかりにしたる門に櫟葉の立てるぞ遊佐が居住なる。

彼は二人を導きて内格子を開きける時、彼の美き妻は出で来りて、伴へる客あるを見て稍打惑へる気色なりしが、遽に笑を含みて常の如く迎へたり。

「さあ、どうぞお二階へ」

「座敷は？」と夫に尤められて、彼はいよいよ困じたるなり。

「唯今些と塞つてをりますから」

「ぢや、君、二階へどうぞ」

勝手を知る客なれば、々と長四畳を通りて行く跡に、妻は小声になりて、

「鰐淵から参つてをりますよ」

「来たか！」

「是非お目に懸りたいと言つて、何と言つても帰りませんから、座敷へ上げて置きました、些とお会ひなすつて、早く還してお了ひなさいましな」

「松茸はどうした」

妻はこの暢気なる間に驚かされぬ。

「貴方、まあ松茸なんぞよりは早く……」

「待てよ。それからこの間の黒麦酒な……」

「麦酒も松茸もございますから早くあれを還してお了ひなさいましよ。私は那奴が居ると思ふと不快な心持で」

遊佐も差当りて当惑の眉を顰めつ。二階にては例の玉戲の争なるべし、さも氣樂に高笑するを妻はいと心憎く。

少間しばしありて遊佐は二階に昇り来れり。

蒲「浴ゆに一つ行かうよ。手拭てぬぐひを貸してくれ給へな」

遊「ま、待ち給へ、今一処に行くから。時に弱つて了つた」
 實げに言ふが如く彼は心こころ穩おだやかならず見ゆるなり。

風「まあ、坐りたまへ。どうしたのかい」

遊「坐つてもをられんのだ、下に高利貸アイスが来てをるのだよ」

蒲「那物えてものが来たのか」

遊「先から座敷で歸来かへりを待つてをつたのだ。困つたね！」

彼は立ちながら頭かしらを抑へて緩く柱ゆゑに倚れり。

蒲「何とか言つて逐返おつかへして了ひ給へ」

遊「なかなか逐返おつかへらんのだよ。陰忍ひねくねした皮肉な奴でね、那奴あいつに捉つかつたら耐たまらん」

蒲「二三円も叩たたき付けて遣るさ」

遊「もうそれも度々たびたびなのでね、他むかふは書替かを為せやうと掛つてゐるのだから、延期料を握つたのぢや今日は帰らん」

風早は聴ゐるだに心苦くて、

「蒲田、君一つ談判してやり給へ、ええ、何とか君の弁を揮つて」

「これは外の談判と違つて唯金銭づくなのだから、素手で飛込むのぢや弁の奮ひやうが無いよ。それで忽諸すると飛んで火に入る夏の虫となるのだから、まあ君が行つて何とか話をして見たまへ。僕は様子を立聞して、臨機応変の助太刀を為るから」

いと難しと思ひながらも、かくては果てじと、遊佐は氣を取直して下り行くなりけり。

風「氣の毒な、萎れてゐる。あれの事だから心配してゐるのだ。君、何とかして拯つて遣り給へな」

蒲「一つ行つて様子を見て来やう。なあに、そんなに心配するほどの事は無いのだよ。遊佐は氣が小さいから可かない。ああ云ふ風だから益す脚下を見られて好い事を為れるのだ。高が金銭の貸借だ、命に別条は有りはしないさ」

「命に別条は無くても、名誉に別条が有るから、紳士たるものは懼れるだらうぢやないか」
「ところが懼れない！ 紳士たるものが高利を貸したら名誉に關らうけれど、高い利を払つて借りるのだから、安利や無利息なんぞを借りるから見れば、隻に以つて榮とするに足れりさ。紳士たりといへども金銭に窮らんと云ふ限は無い、窮つたから借りるのだ。借りて返さんと言ひは為まいし、名誉に於て傷くところは少しも無い」

「恐入りました、高利アイスを借りやうと云ふ紳士の心掛は又別の物ですな」

「で、仮に一步を譲るさ、譲つて、高利アイスを借りるなどは、紳士たるもののいとも慚はすべき行おこなひと為るよ。さほど慚はすべきならば始から借りんが可いぢやないか。既に借りた以上は仕方が無い、未だいま借りざる先の慚はすべき心を以つてこれに對せんとするも能あたはざるなりだらう。宋そうの時代であつたかね、何か乱おこが興おこつた。すると上奏に及んだものがある、これは師を動かさるまでもない、一人いちにんの將を河上かじようへ遣つかして、賊かたの方に向つて孝経こうきようを読よせられた事ならば、賊は自おのづから消滅せん、は好いぢやないか。これを笑ふけれど、遊佐の如きは真面目まじめで孝経を読よんでゐるのだよ、既に借りてさ、天引てんびき四割と吃くつて一月隔おきに血を吮すれる。そんな無法な目に遭あひながら、未だいま借りざる先の紳士たる徳義や、良心を持つてゐて耐るものか。孝経が解るくらゐなら高利アイスは貸しません、彼等は錢勘定の出来る毛族けだものや」

得意の快弁流るる如く、彼は息をも継つがせず説とききた来りぬ。

「濡ぬれぬ内こそ露をもだ。遊佐も借りんのなら可いさ、既に借りて、無法な目に遭あひながら、なほ未だいま借りざる先の良心を持つてゐるのは大きな悞あやまりだ。それは勿論もちろん借りた後といへども良心を持たなければならんけれど、借りざる先の良心と、借りたる後の良心とは、

「一物にして一物ならずだよ。武士の魂と商人根性とは元是一物なのだ。それが境遇に
応じて魂ともなれば根性ともなるのさ。で、商人根性といへども決して不義不徳を容さん
ことは、武士の魂と敢て異なるところは無い。武士にあつては武士魂なるものが、商人に
あつては商人根性なのなもの。そこで、紳士も高利などを借りん内は武士の魂よ、既に対
高利となつたら、商人根性にならんければ身が立たない。究竟は敵に應ずる手段なのだ」
「それは固より御同感さ。けれども、紳士が高利を借りて、榮と為るに足れりと謂ふに至
つては……」

蒲田は恐縮せる状を作して、

「それは少し白馬は馬に非ずだつたよ」

「時に、もう下へ行つて見て遣り給へ」

「どれ、一ヒ深く探る蛟鰐の淵と出掛けやうか」

「空拳を奈んだらう」

一笑して蒲田は二階を下りけり。風早は独り臥つきつ安否の氣遣れて苦き無聊に堪
へざる折から、主の妻は漸く茶を持ち来りぬ。

「どうも甚だ失礼を致しました」

「蒲田は座敷へ参りましたか」

彼はその美き顔を少く赧めて、

「はい、あの居間へお出で、紙門越に様子を聴いてゐらつしやいます。どうもこんなところを皆様のお目に掛けまして、実にお可恥くてなりません」

「なあに、他人ぢやなし、皆様子を知つてゐる者ばかりですから構ふ事はありません」

「私はもう彼奴が参りますと、惣毛豎つて頭痛が致すのでございます。あんな強慾な事を

致すものは全く人相が別でございます。それは可厭に陰気な々々した、底意地の悪さうな、本当に探偵小説にでも在りさうな奴でございますよ」

急足に階子を鳴して昇り来りし蒲田は、

「おいおい風早、不思議、不思議」

と上端に坐れる妻の背後を過るとて絶かその足を踏付けたり。

「これは失礼を。お痛うございましたらう。どうも失礼を」

骨身に沁みて痛かりけるを妻は赤くなりて推泳へつつ、さり気無く挨拶せるを、風早は見かねたりけん、

「不相変鹿相かしいね、蒲田は」

「どうぞ御免を。つい慌あわてたものだから……」

「何をそんなに慌あわてるのさ」

「落おちつか付れる訳のものではないよ。下に来てゐる高利貸アイスと云ふのは、誰たれだと思ふ」

「君のと同じ奴かい」

「人様の居る前で君のとは怪しからんぢやないか」

「これは失礼」

「僕は妻君の足を踏んだのだが、君は僕の面つらを踏んだ」

「でも仕しあはせ合と皮の厚いところで」

「怪けしからん！」

妻の足の痛いたは忽たちまち下腹うつに転うつりて、彼は得堪へず笑ふなりけり。

風「常談どころぢやない、下では苦しんでゐる人があるのだ」

蒲「その苦しめてゐる奴だ、不思議ぢやないか、間だよ、あの間貫一だよ」

敵寄すると聞きけんやうに風早は身構へて、

「間貫一、学校に居た」

「さう！ 驚いたらう」

彼は長き鼻息を出して、空^{むなし}く眼^{まなこ}を瞪^{みは}りしが、

「本^{ほん}当^{とう}かい」

「まあ、見て来たまへ」

別^{わか}して呆^{あき}れたるは主^{あるじ}の妻^{つま}なり。彼は鈍^{おそ}ましからず胸^{むね}の跳^はるを覚えぬ。同じ思^{おも}は二人^{ふたり}が面^{おもて}にも顛^{あらは}るるを見るべし。

「下に参^{まゐ}つてゐるのは御^ご朋^{ほう}友^{ゆう}なのでございますか」

蒲^せ田^はは忙^せしげに頷^{うなづ}きて、

「さうです。我々と高等中学の同級に居つた男なのですよ」

「まあ！」

「夙^{かね}て学^が校^ねを罷^やめてから高^ア利^{イス}貸^スを遣^やつてゐると云ふ話は聞^きいてゐましたけれど、極^{ごく}温^{おと}和^{なし}い男^{おとこ}で、高^ア利^{イス}貸^スなどの出^で来^きる気^きぢやないのですから、そんな事^{こと}は虚^{うそ}だらうと誰^{たれ}も想^{おも}つてを

つたのです。ところが、下^{した}に来^きてゐるのがその間^{かん}貫^{くわん}一^{いつ}ですから驚^{おどろ}くぢやありませんか」

「まあ！ 高等中学にも居た人が何だつて高利貸などに成つたのでございませう」

「さあ、そこで誰^{たれ}も虚^{うそ}と想^{おも}ふのです」

「本^{ほん}にさうでございますね」

すこし
少き前に起ちて行きし風早は疑を霽して帰り来れり。

「どうだ、どうだ」

「驚いたね、確に間貫一！」

「アルフレッド大王の面影があるだらう」

「エッセクスを逐払はれた時の面影だ。然し彼奴が高利貸を遣らうとは想はなかつたが、どうしたのだらう」

「さあ、あれで因業な事が出来るだらうか」

「因業どころではございませんよ」

あるじ
主の妻はその美き顔を皺めたるなり。

蒲「随分酷うございますか」

妻「酷うございますわ」

こたびは泣顔せるなり。風早は決するところ有るが如くに余せし茶をば遽に取りて飲干し、

「然し間であるのが幸だ、押掛けて行つて、昔の顔で一つ談判せうぢやないか。我々が口を利くのだ、奴もさう阿漕なことは言ひもすまい。次手に何とか話を着けて、元金だけ

か何かに負けさして遣らうよ。那奴あいつなら恐れることは無い」

彼の起ちて帯締直すを蒲田は見て、

「まるで喧嘩けんかに行くやうだ」

「そんな事を言はずに自分も些ちつと氣凛きりつとするが可い、帯の下へ時計の垂下ぶらさがつてゐるなどは威厳を損じるぢやないか」

「うむ、成程」と蒲田も立上りて帯を解けば、主あるじの妻は傍かたはらより、

「お羽織をお取りなさいましな」

「これは憚はばかりさま様さまです。些ちよつと身支度こころぞへに婦人の心こころ添ぞへを受けるところは堀部安兵衛といふ

役だ。然し芝居でも、人数にんずが多くて、支度をする方は大概取つて投げられるやうだから、お互に氣を着ける事だよ」

「馬鹿な！ 間如はさまきに」

「急に強くなつたから可笑をかしい。さあ。用意は好いいよ」

「此方こつちも可いい」

二人は膝を正して屹きと差向へり。

妻「お茶を一つ差上げませう」

蒲「どうしても敵討の門出だ。互に交す茶盃か」

第六章

座敷には窘める遊佐と沈着きたる貫一と相對して、蔑盆の火の消えんとすれど呼ばず、彼の傍に茶托の上に伏せたる茶碗は、嘗て肺病患者と知らで出せしを恐れて除物にしたりしをば、妻の取出してわざと用ゐたるなり。

遊佐は憤を忍べる声音にて、

「それは出来んよ。勿論朋友は幾多も有るけれど、書替の連帯を頼むやうな者は無いのだから。考へて見給へ、何ぼ朋友の中だと云つても外の事と違つて、借金連帯は頼めないよ。さう無理を言つて困らせんでも可いぢやないか」

貫一の声は重きを曳くが如く底強く沈みたり。

「敢て困らせるの、何のと云ふ訳ではありません。利は下さらず、書替は出来んと、それでは私の方が立ちません。何方とも今日は是非願はんければならのでございます。連帯と云つたところで、固より貴方がお引受けなさる精神なれば、外の迷惑にはならんです

から、些ほんの名義を借りるだけの話、それくらゐの事は朋友の誼よしみとして、何方どなたでも承諾なさ
りさうなものです。究竟つまり名義だけあれば宜よろしいので、私の方では十分貴方を信用してを
るのですから、決してその連帶者に掛らうなどとは思はんです。ここで何とか一つ廉かど
付きませんと、私も主人に対して言訳がありません。利を受取る訳に行かなかつたから、
書替をして来たと言へば、それで一先句切が付くのでありますから、どうぞ一つさう願
ひます」

遊佐は答ふところを知らざるなり。

「何方どなたでも可うございます、御親友の内で一名」

「可かんよ、それは到底可かんのだよ」

「到底可かんでは私の方が済みません。さう致すと、自然御名誉かかはに関するやうな手段も取ら
んければなりません」

「どうせうと言ふのかね」

「無論さしおさへ差押です」

遊佐は強しひて微笑を含みけれど、胸には犇ひしと応こたへて、はや八分の怯気おしけ付きたるなり。彼
は悶もだえて振断ねちきるばかりにその髭ひげを拈ひねり拈りて止まず。

「三百円やそこらの端金^{はしたがね}で貴方^{あなた}の御名譽^{きずつ}を傷けて、後來御出世^{さまたげ}の妨碍^{さまたげ}にもなるやうな事を為るのは、私の方でも決して可^け好^{このまし}くはないのです。けれども、此方^{こちら}の請求^{せいきう}を容^いれて下さらなければ已^やむを得ないので、実は事は穩便^{えんべん}の方が双方の利益なのですから、更に御一考を願ひます」

「それは、まあ、品に由つたら書替も為んではないけれど、君の要求は、元金^{もとぎん}の上に借用^{きゆう}当時から今日^{こんにち}までの制規^{せいぎ}の利子が一ケ年分と、今度払ふべき九十円の一月分を加へて三百九十円かね、それに対する三月分の天引^{てんひき}が百十七円強^{なにかし}、それと合^あして五百円の証書面^{しょうしょめん}に書替へると云ふのだらう。又それが連帶債務^{れんたいしゆむ}と言ふだらうけれど、一文だつて自分が費^{つか}つたのでもないのに、この間九十円といふものを取られた上に、又改めて五百円の証書を書^かされる！ 余^{あんま}り馬鹿々々しくて話にならん。此方^{こちら}の身にも成つて少しは斟酌^{しんしやく}するが可^かいぢやないか。一文も費ひもせずに五百円の証書が書けると想ふかい」

空^{そら} 嘯^{うそぶ}きて貫一は笑へり。

「今更そんな事を！」

遊佐^{ひそか}は陰^{はがみ}に切齒^{はがみ}をなしてその横顔^{ねめつ}を睨^{にら}付けた。

彼^のも、れ難^がき義理^{ぎり}に迫りて連帶^{れんたい}の印捺^{いんぱつ}きしより、不測^{ふそく}の禍^{わざはひ}は起りてかかる憂^{うれ}き目を見る

よと、太く己に懲りてければ、この際人に連帯を頼みて、同様の迷惑を懸くこともやと、断じて貫一の請求を容れざりき。さりとて今一つの請求なる利子を即座に払ふべき道もあらざれば、彼の進退はここに谷るとともに貫一もこの場は一寸も去らじと構へたれば、遊佐は羂に係れる獲物の如く一分時毎に窮する外は無く、今は唯身に受くべき謂無き責苦を受けて、かくまでに悩まざる不幸を恨み、翻りて一点の人情無き賤奴の虐待を憤る胸の内は、前後も覚えず暴れ乱れてほとほと引裂けんとするなり。

「第一今日は未だ催促に来る約束ぢやないのではないか」

「先月の二十日にお払ひ下さるべきのを、未だにお渡が無いのですから、何日でも御催促は出来るのです」

遊佐は拳を握りて顫ひぬ。

「さう云ふ怪しからん事を！ 何の為に延期料を取った」

「別に延期料と云つては受取りません。期限の日に参加したのにお払が無い、そこで空く帰るその日当及び俤代として下すつたから戴きました。ですから、若しあれに延期料と云ふ名を附けたらば、その日の取立を延期する料とも謂ふべきでせう」

「貴、貴様は！ 最初十円だけ渡さうと言つたら、十円では受取らん、利子の内金でな

しに三日間の延期料としてなら受取る、と言つて持つて行つたぢやないか。それからついこの間又十円……」

「それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄足を踏みました日当でありますから、その日が経過すれば、翌日から催促に参つても宜い訳なのです。まあ、過去つた事は置きまして……」

「措けんよ。過去りは為んのだ」

「今日はその事で上つたのではないのですから、今日の始末をお付け下さいまし。ではどうあつても書替は出来んと仰有るのですな」

「出来ん！」

「で、金も下さらない？」

「無いから遣れん！」

貫一は目を側めて遊佐が面を熟と候へり。その冷に鋭き眼の光は異く彼を襲ひて、坐に熱する怒氣を忘れしめぬ。遊佐は忽ち吾に復れるやうに覺えて、身の危きに処るを省みたり。一時を快くする暴言も竟に曳れ者の小唄に過ぎざるを曉りて、手持無沙汰に鳴を鎮めつ。

「では、何いづごろ御都合が出来るのですか」
機を制して彼も劣らず和やはらぎぬ。

「さあ、十六日まで待つてくれたまへ」

「睨しかと相違ございませんか」

「十六日なら相違ない」

「それでは十六日まで待ちますから……」

「延料かい」

「まあ、お聞きなさいまし、約束手形を一枚お書き下さい。それなら宜よろうしございませう」

「宜い事も無い……」

「不承を有おつしや仰おつしやるところは少しも有りはしません、その代り何なん分ぶんか今こん日にちお遣つかし下さい」
かく言ひつつ手て鞆かばんを開きて、約束手形の用紙を取とり出いだせり。

「錢は有りはせんよ」

「僅わづか少よろで宜いので、手数料として」

「又手数料か！ ぢや一円も出さう」

「日当、俵代なども入つてゐるのですから五円ばかり」

「五円なんと云ふ金円は有りはせん」

「それぢや、どうも」

彼は遽に躊躇して、手形用紙を惜めるやうに拈るなりけり。

「ええ、では三円ばかり出さう」

折から紙門を開きけるを弗と貫一のふる目前に、二人の紳士は徐々と入来りぬ。案内も無くかかる内証の席に立入りて、彼等の各心得顔なるは、必ず子細あるべしと思ひつつ、彼は少く座を動きて容を改めたり。紳士は上下に分れて二人が間に坐りければ、貫一は敬ひて礼を作せり。

蒲「どうも曩から見たやうだ、見たやうだと思つてゐたら、間君ぢやないか」

風「余り様子が變つたから別人かと思つた。久く会ひませんな」

貫一は愕然として二人の面を眺めたりしが、忽ち身の熱するを覚えて、その誰なるやを憶出せるなり。

「これはお珍い。何方かと思ひましたら、蒲田君に風早君。久くお目に掛りませんでした
が、いつもお變無く」

蒲「その後はどうですか、何か当時は變つた商売をお始めですな——儲りませう」

貫一は打笑みて、

「儲りもしませんが、間違つてこんな事になつて了ひました」

彼の毫も愧づる色無きを見て、二人は心陰に呆れぬ。侮りし風早もかくては与し易からず思へるなるべし。

蒲「儲けづくであるから何でも可いけれど、然し思切つた事を始めましたね。君の性質で能くこの家業が出来ると思つて感服しましたよ」

「真人間に出来る業ぢやありませんな」

これ実に真人間にあらざる人の言なり。二人はこの破廉耻の老面皮を憎しと思へり。蒲「酷いね、それぢや君は真人間でないやうだ」

「私のやうな者が懋ひ人間の道を守つてをつたら、とてもこの世の中は渡れんと悟りましたから、学校を罷めるとともに人間も罷めて了つて、この商売を始めましたので」

風「然し真人間時分的朋友であつた僕等にかうして会つてゐる間だけは、依旧真人間で居てもらひたいね」

風早は親しげに放笑せり。

蒲「さうさう、それ、あの時分浮名の聒かつた、何とか云つたけね、それ、君の所に居つ

た美人さ」

貫一は知らざる為^{まね}してゐたり。

風「おおおあれ？ さあ、何とか云つたつけ」

蒲「ねえ、間君、何とか云つた」

よしその旧友の前に人間の面^{おもてあか}を赧めざる貫一も、ここに到りて多少の心を動かさざるを得ざりき。

「そんなつまらん事を」

蒲「この頃はあの美人と一所ですか、可^{うらやまし}羨^{うらやまし}い」

「もう昔話は御免下さい。それでは遊佐さん、これに御印^{ごいん}を願ひます」

彼は矢立^{やたて}の筆を抽^ぬきて、手形用紙に金額を書入れんとするを、

風「ああ些^{ちよつ}と、その手形はどう云ふのですね」

貫一の簡単にその始末を述ぶるを聴きて、

「成程^{ごもつとも}御尤^{ごもつとも}、そこで少しお話を為したい」

蒲田^{しばら}は姑く助太刀の口を嚙^{くぐ}みて、皺^{しわ}噺^{がれごゑ}声の如何^{いか}に弁^わずるかを聴かんと、吃^{すひさし}余の葉巻を火入^{ひいれ}に挿^さして、威^あ長^{たけ}高^かに腕組して控へたり。

「遊佐君の借財の件ですがね、あれはどうか特別の扱あつかひをして戴きたいのだ。君の方も營業なのだから、御迷惑は掛けませんさ、然し旧友の頼たのみと思つて、少し勘弁をしてもらひたい」
 彼も答へず、これも少時しばしは言はざりしが、

「どうかね、君」

「勘弁と申しますと？」

「究竟君の方に損の掛らん限は減まけてもらひたいのだ。知つての通り、元金もとこの借金は遊佐君が連帶であつて、實際頼れて印を貸しただけの話であるのが、測らず倒れて来たといふ訳なので、それは貸主の目から見れば、そんな事はいつでも可いものだから、取立てるものは取立てる、其処そこは能く解よつてゐる、からして今更その愚痴を言ふのぢやない。然し朋友の側から遊佐君を見ると、飛んだ災難に罹かつたので、如何いかにも氣の毒な次第。ところで、図はらずも貸主が君と云ふので、鰻てつぷの水を得たる想で我々が中へ入つたのは、營業者の鰻淵として話を為るのではなくて、旧友の間はざまとして、実は無理な頼も聴いてもらひたいのさ。夙かて話は聞いてゐるが、あの三百円に対しては、借主の遠とお林ばやしが従これ来三回に二百七十円の利を払あつて在る。それから遊佐君の手で九十円、合計三百六十円と云ふものが既に入つてゐるのでせう。して見ると、君の方には既に損は無いのだ、であるから、この三百円

の元金^{もとぎん}だけを遊佐君の手で返せば可いといふ事にしてもらひたいのだ」

貫一は冷笑せり。

「さうすれば遊佐君は三百九十円払ふ訳だが、これが一文も費^{つか}はずに空^{くう}に出るのだから随分辛い話^{つら}、君の方は未だ^{まだ}未だ利益になるのをここで見切るのだからこれも辛い。そこで辛^{くら}さを競^べを為るのだが、君の方は三百円の物が六百六十円になつてゐるのだから、立前^{たちまへ}にはなつてゐる、此方^{こつち}は三百九十円的全損^{まるぞん}だから、ここを一つ酌量^{しやくりやう}してもらひたい、ねえ、特別^{とくべつ}の扱^{あつか}で」

「全^{まる}でお話にならない」

秋の日は短^{みじ}しと謂^いはんやうに、貫一は手形用紙を取上げて、用捨無く約束の金額を書入れたり。一斉に彼の面^{おもて}を注視^{しゆし}せし風早と蒲田との眼^{まなこ}は、更に相合うて瞋^{いか}れるを、再び彼方^{あなた}に差向^{さむか}けて、いとど厳^{きび}く打目^{うちめ}成れり。

風「どうかさう云ふ事^{こと}にしてくれたまへ」

貫「それでは遊佐さん、これに御印^{ごいん}を願ひませう。日限^{にちげん}は十六日、宜^{よろ}うございますか」

この傍若無人の振舞に蒲田の怵^{こは}へかねたる気色^{けしき}なるを、風早は目授^{めまぜ}して、

「聞君、まあ少し待つてくれたまへよ。恥を言はんければ解らんけれど、この借金は遊佐

君には荷が勝過ぎてゐるので、利を入れるだけでも方が付かんのだから、長くこれを背負つてゐた日には、体も一所に沈没して了ふばかり、実に一身の浮沈に関する大事なので、僕等も非常に心配してゐるやうなもの、力が足らんで如何とも手の着けやうが無い。対手が君であつたのが運の尽きざるところなのだ。旧友の僕等の難を拯ふと思つて、一つ頼を聴いてくれ給へ。全然損を掛けやうと云ふのぢやないのだから、決してさう無理な頼ぢやなからうと思ふのだが、どうかね、君」

「私は鰐淵の手代なので、さう云ふお話は解りかねます。遊佐さん、では、今日
「私は鰐淵の手代なので、さう云ふお話は解りかねます。遊佐さん、では、今日
はまあ三円頂戴してこれに御印をどうぞお早く」

遊佐はその独に計ひかねて覺束なげに頷くのみ。言はで忍びたりし蒲田の怒はこの時
衝くが如く、

「待ち給へと言ふに！ 先から風早が口を酸くして頼んでゐるのぢやないか、
門に立つたのぢやない、人に対するには礼と云ふものがある、可然き挨拶を為たまへ」
「お話がお話だから可然き御挨拶の為やうが無い」

「黙れ、間！ 貴様の頭脳は錢勘定ばかりしてゐるので、人の言ふ事が解らんと見えるな。
誰がその話に可然挨拶を為ろと言つた。友人に対する挙動が無礼だから節めと言つたのだ。」

高利貸なら高利貸のやうに、身の程を省みて神妙にしてをれ。盗人の兄弟分のやうな不正な營業をしてゐながら、かうして旧友に会つたらば赧い顔の一つも為ることか、世界漫遊でもして来たやうな見識で、貴様は高利を貸すのをあつぱれ名譽と心得てゐるのか。恥を恥とも思はんのみか、一枚の証文を鼻に懸けて我々を侮蔑したこの有様を、荒尾讓介に見せて遣りたい！ 貴様のやうな畜生に生れ變つた奴を、荒尾はやはり昔の間貫一だと思つて、この間も我々と話して、貴様の安否を苦にしてな、実の弟を殺したより、貴様を失つた方が悲いと言つて鬱いでゐたぞ。その一言に対しても少しは良心の眠を覺せ！ 真人間の風早庫之助と蒲田鉄弥が中に入るからは決して迷惑を掛けるやうな事は為んから、今日は順く帰れ、帰れ」

「受取るものを受取らなくては帰れもしません。貴下方がそれまで遊佐さんの件に就いて御心配下さいますなら、かう為すつて下さいますせんか、ともかくもこの約束手形は遊佐さんから戴きまして、この方の形はそれで一先附くのですから、改めて三百円の証書をお書き下さいまし、風早君と蒲田君の連帯にして」

蒲田はこの手段を知るの経験あるなり。

「うん、宜い」

「ではさう為^{なす}つて下さるか」

「うん、宜い」

「さう致せば又お話の付けやうもあります」

「然し気の毒だな、無利息、十個年賦^{じつかねんぷ}は」

「ええ？ 常談ぢやありません」

さすがに彼の一本参りしを、蒲田は誇^せりかに嘲笑^{わらひ}しつ。

風「常談は措いて、いづれ四五日^{うち}内に篤^{とく}と話を付けるから、今日のところは、久しぶりで会つた僕等の顔を立てて、何も言はずに帰つてくれ給へな」

「さう云ふ無理を有^{おつしや}仰るで、私の方も然るべき御挨拶が出来なくなるのです。既に遊佐さんも御承諾なのですから、この手形はお貰ひ申して帰ります。未だ外^{ほか}へ廻るで急ぎますから、お話は後日寛^{ゆつく}り伺ひませう。遊佐さん、御印を願ひますよ。貴方^{あなた}御承諾なすつて置きながら今になつて遅々^{ぐづぐづ}なすつては困ります」

蒲「疫病神^{やくびようがみ}が戸惑^{とまどひ}したやうに手形々と煩^{うるさ}い奴だ。俺^{おれ}が始末をして遣らうよ」

彼は遊佐が前なる用紙を取りて、

蒲「金壺百拾七円……何だ、百拾七円とは」

遊「百十七円？ 九十円だよ」

蒲「金壹百拾七円とこの通り書いてある」

かかる事は能く知りながら彼はわざと怪しむなりき。

遊「そんな筈は無い」

貫一は彼等の騒ぐを尻目に掛けて、

「九十円が元金、これに加へた二十七円は天引の三割、これが高利の定法です」
音もせざれど遊佐が胆は潰れぬ。

「お……ど……ろ……いたね！」

蒲田は物をも言はず件の手形を二つに引裂き、遊佐も風早もこれとは見る間に、猶も引裂き引裂き、引振りて間が目先に投遣りたり。彼は騒げる色も無く、

「何を為るのです」

「始末をして遣つたのだ」

「遊佐さん、それでは手形もお出し下さらんですな」

彼は間が非常手段を取らんとするよ、と心陰に懼を作して、

「いやさう云ふ訳ぢやない……」

蒲田は^{きつひざ}佐と膝を前めて、

「いや、さう云ふ訳だ！」

彼の^{こはもて}鬼臉なるをいと稚^{をさな}しと輕^{かろ}しめたるやうに、間はわざと色^{やはら}を和けて、

「手形の始末はそれで付いたか知りませんが、貴方^{あなた}も折角中へ入つて下さるなら、もう少し男らしい扱をなさいましな。私^{わたくし}如き畜生とは違つて、貴方は立派な法学士」

「おお俺が法学士ならどうした」

「名実^{あひそ}が相副はんと謂ふのです」

「生意氣なもう一遍言つて見ろ」

「何遍でも言ひます。学士なら学士のやうな所業^なを為さい」

蒲田^{かひな}が腕は電光の如く躍^{をど}りて、猶言はんとせし貫一が胸先^{もろつかみ}を諸^{もろつかみ}掴^むに無^む図^ずと捉^とりたり。

「間、貴様は……」

振向^{ねむむ}けたる彼の面^{おもて}を打目成^{うちまも}りて、

「取つて投げてくれやうと思ふほど憎い奴でも、かうして顔を見合せると、白い二本筋^{ちからぬ}の帽子^{かぶ}を冠^{ストオフ}つて煖^{ストオフ}炉の前に膝を並べた時分の姿が目^めに附いて、嗚呼^{ああ}、順^{おとなし}い間^まを、と力^{ちから}拔^けがして了ふ。貴様これが人情だぞ」

鷹に遭へる小鳥の如く身動し得為で押付けられたる貫一を、風早はさすがに惘然と見遣りて、

「蒲田の言ふ通りだ。僕等も中学に居た頃の間と思つて、それは誓つて迷惑を掛けるやうな事は為んから、君も友人の誼を思つて、二人の頼を聴いてくれ給へ」

「さあ、間、どうだ」

「友人の誼は友人の誼、貸した金は貸した金で自から別問題……」

彼は忽ち吭迫りて言ふを得ず、蒲田は稍強く緊めたるなり。

「さあ、もつと言へ、言つて見ろ。言つたら貴様の呼吸が止るぞ」

貫一は苦しさに堪へで振釈かんと挽けども、嘉納流の覚ある蒲田が力に敵しかねて、なかなかその為すに信せたる幾分の安きを頼むのみなりけり。遊佐は驚き、風早も心ならず、

「おい蒲田、可いかい、死にはしないか」

「余り、暴くするなよ」

蒲田は哄然として大笑せり。

「かうなると金力よりは腕力だな。ねえ、どうしてもこれは水滸伝にある図だらう。惟

ふに、凡そ国利を護り、国権を保つには、国際公法などは実は糸瓜の皮、要は兵力よ。万国の上には立法の君主が無ければ、国と国との曲直の争は抑も誰の手で公明正大に遺憾無く決せらるるのだ。ここに唯一つ審判の機関がある、曰く戦！」

風「もう釈してやれ、大分苦しうだ」

蒲「強国にして辱められた例を聞かん、故に僕は外交の術も嘉納流よ」

遊「余り酷い目に遭せると、僕の方へ報つて来るから、もう舍してくれたまへな」

他の言に手は弛めたれど、蒲田は未だ放ちも遣らず、

「さあ、間、返事はどうだ」

「吭を緊められても出す音は変りませんよ。間は金力には屈しても、腕力などに屈するものか。憎いと思ふならこの面を五百円の紙幣束でお撲きなさい」

「金貨ぢや可かんか」

「金貨、結構です」

「ぢや金貨だぞ！」

油断せる貫一が左の高頬を平手打に絶か吃すれば、呀と両手に痛を抑へて、少時は顔も得挙げざりき。蒲田はやうやう座に復りて、

「急には此奴^{こいつ}帰らんね。いつそこで酒を始めやうぢやないか、さうして飲みかつ談ずると為^せう」

「さあ、それも可^よからう」

独り可からぬは遊佐なり。

「ここで飲んぢや旨^{うま}くないね。さうして形が付かなければ、何時^{いつ}までだつて歸りはせんよ。酒^{しゅ}が仕舞^{しまひ}になつてこればかり遺^{のこ}られたら猶^{なほ}困る」

「宜^{よろし}い、歸去^{かへり}には僕が一所に引張つて好い処へ連れて行つて遣るから。ねえ、間、おい、間と言ふのに」

「はい」

「貴様、妻君有るのか。おお、風早！」

と彼は横手を拍^うちて不意に※^{さけ}べば、

「ええ、吃驚^{びっくり}する、何だ」

「憶^{おもひだ}出した。間の許^{いひなづけ}婚はお宮、お宮」

「この頃はあれと一所かい。鬼の女房に天女だけれど、今日^{こんにち}ぢや大きに日済^{ひなし}などを貸してゐるかも知れん。ええ、貴様、そんな事を為^さしちや可かんよ。けれども高利貸^{アイヌ}などは、

これで却つて女子には温いよね、間、さうかい。彼等の非義非道を働いて暴利を貪る所以の者は、やはり旨いものを食ひ、好い女を自由にして、好きな栄耀がして見たいと云ふ、唯それだけの目的より外に無いのだと謂ふが、さうなかね。我々から考へると、人情の忍ぶ可からざるを忍んで、経営慘憺と努めるところは、何ぞ非常の目的があつて貨を殖へるやうだがな、譬へば、軍用金を聚めるとか、お家の宝を質請するとか。単に己の慾を充さうばかりで、あんな思切つて殘刻な仕事が出来るものではないと想ふのだ。許多のガリガリ亡者は論外として、間貫一に於ては何ぞ目的が有るのだらう。こんな非常手段を遣るくらゐだから、必ず非常の目的が有つて存するのだらう」

秋の日は忽ち黄昏れて、稍早けれど燈を入るとともに、用意の酒肴は順を逐ひて運び出されぬ。

「おつと、麦酒かい、頂戴。鍋は風早の方へ、煮方は宜くお頼み申しますよ。うう、好い松茸だ。京でなくてはかうは行かんよ——中が真白で、庖丁が軋むやうでなくては。今年是不作だね、瘡せてゐて、虫が多い、あの雨が障つたのさ。間、どうだい、君の目的は」

「唯貨が欲しいのです」

「で、その貨をどうする」

「つまらん事を！ 貨はどうでもなるぢやありませんか。どうでもなる貨だから欲い、その欲い貨だから、かうして催促もするのです。さあ、遊佐さん、本当にどうして下さるのです」

風「まあ、これを一盃いっぱい飲んで、今日は機嫌きげん好く帰つてくれ給へ」

蒲「そら、お取次だ」

「私は酒はいかん不可わたくしのです」

蒲「折角差したものだ」

「全く不可のですから」

差付けらるるをおしの排除はずみくる機に、コップは脆もろくも蒲田の手を脱すべれば、

莨たばこ盆ぼんの火入ひいれに抵あた

りて発矢はつしと割れたり。

「何を為る！」

貫一も今は怵こらへかねて、

「どうしたと！」

やをら起たんと為るところを、蒲田が力に胸板むないたを衝つかれて、一ひと耐たもせず仰様のけさまに打う

僵ちこけたり。蒲田はこの隙ひまに彼の手鞆てかばんを奪うばひて、中なる書類てまかせを手信つかみだに梱出つかみだせば、狂氣

の如く駈寄かけよる貫一、

「身分に障さはるぞ！」と組み付くを、利腕ききうで捉とつて、

「黙れ！」と振伏ねぢふせ、

「さあ、遊佐、その中に君の証書が在るに違無ちがひいから、早く其奴そいつを取つて了しまひ給へ」

これを聞きたる遊佐は色を変へぬ。風早も事の余あまりに暴なるを快こころよしと為なざるなりき。貫一は駭おどろきて、撥返はねかへさんと右に左に身を揉むを、蹈ふんまたが踏ふんまたがりて振揚ねぢあげ振揚ねぢあげ、蒲田は声を励はげして、

「この期ごに及およんで！ 躊躇ちゆうちよするとこでないよ。早く、早く、早く！ 風早、何を考

へとる。さあ、遊佐、ええ、何事も僕が引受けたから、かまはず遣り給へ。証書を取つて了へば、後は細工はりうりう僕が心得てゐるから、早く探したまへと言ふに」

手を出しかねたる二人を睨ねめ廻まはして、蒲田はなかなか下に貫一の悶もだゆるにも劣ひとらず、独ひとり業ごうを沸かひなして、効無かひなき地鞆ぢただらを踏みてぞゐたる。

風「それは余り遣過よぎる、善よくない、善よくない」

「善いいも悪いもあるものか、僕が引受けたからかまはんよ。遊佐、君の事ぢやないか、何

を 然ほんやりしてゐるのだ」

彼はほとほと慄おそきて、寧ろ蒲田が腕立うでだての紳士にあるまじきを諫めんとも思へるなり。腰弱き彼等の与くみするに足らざるを憤れる蒲田は、宝の山に入りながら手を空むなしうする無念さに、貫一が手も折れよとばかり振ねじ上あぐれば、

「ああ、待つた待つた。蒲田君、待つてくれ、何とか話を付けるから」

「ええ聒やかましい。君等のやうな意気地無しはもう頼まん。僕が独ひとりで遣つて見せるから、後学の為に能く見て置き給へ」

かく言捨てて蒲田は片手して己の帶おのれを解かんとすれば、時計の紐ひもの生憎あやにくに絡からまるを、躁あせりに躁りて引放さんとす。

風「独ひとりでどうするのだよ」

彼はさすがに見かねて手を仮さんと寄り進みつ。

蒲「どうするものか、此奴こいつを蹈縛ふんじばつて置いて、僕が証書を探すわ」

「まあ、余り穩おだやかでないから、それだけは思ひ止とまり給へ。今間も話を付けると言つたから」

「何か此奴こいつの言ふ事が！」

間は苦くるしき声こゑを搾しぼりて、

「きつと話を付けるから、この手を釈してくれ給へ」

風「きつと話を付けるな——此方の要求を容れるか」

間「容れる」

詐とは知れど、二人の同意せざるを見て、蒲田もさまではと力挫けて、竟に貫一を放ちてけり。

身を起こすとともに貫一は落散りたる書類を掻聚め、鞆を拾ひてその中に振込み、さて慌忙く座に復りて、

「それでは今日はこれでお暇をします」

蒲田が思切りたる無法にこの長居は危しと見たれば、心に恨は含みながら、陽には克はじと閉口して、重ねて難題の出でざる先にかくは引取らんと為るを、

「待て待て」と蒲田は下司扱に呼掛けて、

「話を付けると言つたでないか。さあ、約束通り要求を容れん内は、今度は此方が還さんぞ」

膝推向けて迫寄る気色は、飽くまで喧嘩を買はんとするなり。

「きつと要求は容れますけれど、嚮から散々の目に遭されて、何だか酷く心持が悪くてな

りませんから、今日はこれで還して下さいまし。これは長座ちようざをいたしてお邪魔でございました。それでは遊佐さん、いづれ二三日の内に又上つてお話を願ひます」

忽ちたちま打つて変りし貫一の様子に蒲田は冷笑あざわらひして、

「間、貴様は犬の糞くそで仇を取らうと思つてゐるな。遣つて見ろ、そんな場合には自今これから毎でも蒲田が現れて取とり挫ひしいで遣るから」

「間も男なら犬の糞かたきや仇は取らない」

「利きいた風なことを言ふな」

風「これさ、もう好加減にしないかい。間も帰り給へ。近日是非篤と話をしたいから、何事もその節だ。さあ、僕が其処そこまで送らう」

遊佐と風早とは起ちて彼を送おくり出いせり。主の妻は縁側より入り来きたりぬ。

「まあ、貴方あなた、お蔭様で難有ありがたう存じました。もうもうどんなに好い心持でございましたらう」

「や、これは。些ちよつと壮士芝居そうしといふところを」

「大相宜ようしい幕でございましたこと。お酌を致しませう」

件くだんの騒動にて四辺あたりの狼藉ろうぜきたるを、彼は効々かひかひしく取形付けてゐたりしが、二人はやがて

入来るを見て、

「風早さん、どうもお蔭様で助りました、然し飛んだ御迷惑様で。さあ、何も御坐いませんけれど、どうぞ貴下方御寛り召上つて下さいまし」

妻の喜は溢るるばかりなるに引易へて、遊佐は青息呟きて思案に昏れたり。

「弱つた！ 君がああして取緊めてくれたのは可いが、この返報に那奴どんな事を為るか知れん。明日あたり突然と差押などを吃せられたら耐らん」

「余り蒲田が手酷い事を為るから、僕も、さあ、それを案じて、惴々してゐたぢやないか。嘉納流も可いけれど、後前を考へて遣つてくれなくては他迷惑だらうぢやないか」

「まあ、待ち給へと言ふことさ」

蒲田は袂の中を撈りて、揉皺みたる二通の書類を取出しつ。

風「それは何だ」

遊「どうしたのさ」

何ならんと主の妻も鼻の下を延べて窺へり。

風「何だか僕も始めてお目に掛るのだ」

彼は先づその一通を取りて披見るに、鰐淵直行に対する債務者は聞きも知らざる百円

の公正証書謄本なり。

二人は蒲田が案外の物持てるに驚^{おどろ}かれて、各息^{おのおの}を凝^こして瞪^みれる眼^{まなこ}を動さず。蒲田も無言^{むごん}の間に他の一通^{うち}を取りて披^{ひら}けば、妻はいよいよ近^{ちか}きて差^さ覗^{しのぞ}きつ。四箇^{よつ}の頭顱^{かしら}はラムプの周^{めぐり}辺^ふに麩^ふに寄^よる池^{いけ}の鯉^{こひ}の如^{ごと}く犇^{ひし}と聚^{あつ}まり。

「これは三百円の証書だな」

一枚二枚と繰^くり行^いけば、債務者^{せむし}の中に鼻^{はな}の前^{さき}なる遊佐良橘^{うすざら}の名^なをも署^{しる}したり、蒲田は弾^は機^は仕^し掛^けのやうに躍^{をど}り上^ありて、

「占めた！ これだこれだ」

驚喜^{きんぎ}の余^あり身^みを支^しへ得^えざる遊佐^{うすざ}の片手^{しやも}は鷲^{はち}の鉢^{はち}の中にすつぽと落^お入り、乗出^{のりだ}す膝^{ひざ}頭^{がしら}に銚^{ちやうし}子^こを薙^{なぎ}倒^{たふ}して、

「僕^{おれ}のかい、僕^{おれ}のかい」

「どう、どう、どう」と証書^{しやうし}を取^とらんとする風早^{ふうさ}が手^ては、筋^{きん}の活^は動^{たら}きを失^うへるやうにて幾^い度^{たび}も捉^{とら}へ得^えざるなりき。

「まあ！」と叫^こびし妻^{たちま}は忽^{たちま}ち胸^{むね}塞^{ふた}りて、その後^{のち}を言^いふ能^よはざるなり。蒲田^{ふで}は手^ての舞^まひ、膝^{ひざ}の踏^ふむところを知らず、

「占めたぞ！ 占めたぞ！！ 難^{ありがた}有^い※」

証書は風早の手に移りて、遊佐とその妻と彼と六^{むつ}の目を以^もて子細にこれを点検して、その夢ならざるを明^{あきら}めたり。

「君はどうしたのだ」

風早の面^{おもて}はかつ呆^{あき}れ、かつ喜^{をそ}び、かつ懼^{をそ}るるに似たり。やがて証書は遊佐夫婦の手に渡りて、打^{うち}拡^{ひろ}げたる二人が膝の上に、これぞ比翼^{ひよく}読^よまるべき。更に麦酒^{ビール}の満^{まん}を引きし蒲田は

「血は大刀^{しきた}に滴^{ぬぐ}りて拭^ふふに違^{いとま}あらざる」意氣^{いき}を昂^あげて、

「何と凄^{すこ}からう。奴^{ねぢふ}を振^ふ伏^ふせてゐる中に脚^{あし}で搔^{かきよ}寄^よせて袂^{たもと}へ忍^{しの}ばせたのだ——早^{はや}業^{わざ}さね」

「やはり嘉納流にあるのかい」

「常談言^{こと}つちや可^かかん。然^{しか}しこれも嘉納流の教^{きやう}外^げ別^{べつ}伝^{でん}さ」

「遊佐の証書といふのはどうして知^しつたのだ」

「それは知らん。何でも可^かいから一つ二つ奪^{うば}つて置^おけば、奴^{やつ}を退^{たい}治^じる材料になると考^{かん}へたから、早業^{はやわざ}をして置^おいたのだが、思^{おも}ひきやこれが覬^{ねら}ふ敵^{かたき}の証書ならんとは、全く天^{てん}の善^{ぜん}に与^{くみ}するところだ」

風「余^こり善^{ぜん}でもない。さうしてあれを此^こ方^{うち}へ取^とつて了^しへば、三百円は蹈^ふめるのかね」

蒲「大踏め！　少し悪党になれば踏める」

風「然し、公正証書であつて見ると……」

蒲「あつても差支無い。それは公証人役場には証書の原本が備付けてあるから、いざと云ふ日にはそれが物を言ふけれど、この正本さへ引揚げてあれば、間貫一いくら地動波動したつて『河童の皿に水の乾いた』同然、かうなれば無証拠だから、矢でも鉄砲でも持つて来いだ。然し、全然踏むのもさすがに不便との思召を以つて、そこは何とか又色を着けて遣らうさ。まあまあ君達は安心してゐたまへ。蒲田弁理公使が宜く樽俎の間に折衝して、遊佐家を泰山の安きに置いて見せる。嗚呼、実に近來の一大快事だ！」

人々の呆るるには目も掛けず、蒲田は証書を推戴き推戴きて、

「さあ、遊佐君の為に万歳を唱へやう。奥さん、貴方が音頭をお取んなさいましよ——いいえ、本当に」

小心なる遊佐はこの非常手段を極悪大罪と心安からず覚ゆるなれど、蒲田が一切を引受けて見事に埒開けんといふに励されて、さては一生の怨敵退散の賀と、各漫に前む膝を聚めて、長夜の宴を催さんとぞ韓いたる。

第七章

茫々たる世間に放れて、蚤く骨肉の親むべき無く、況や愛情の温むるに会はざりし貫
 一が身は、一鳥も過ぎざる枯野の広きに塊然として横はる石の如きものなるべし。彼が
 鳴沢の家に在りける日宮を恋ひて、その優き声と、柔き手と、温き心とを得たりし彼の
 満足は、何等の樂をも以外に求むる事を忘れしめき。彼はこの恋人をもて妻とし、生命と
 して嫌らず、母の一部分となし、妹の一部分となし、或は父の、兄の一部分とも為して宮
 の一身は彼に於ける愉快なる家族の団欒に値せしなり、故に彼の恋は青年を樂む一場
 の風流の麗き夢に似たる類ならで、質はその文に勝てるものなりけり。彼の宮に於けるは
 都ての人の妻となすべき以上を妻として、寧ろその望むところ多きに過ぎずやと思はしむ
 るまでに心に懸けて、自はその至当なるを固く信ずるなりき。彼はこの世に一人の宮を得
 たるが為に、万木一時に花を着くる心地して、曩の枯野に夕暮れし石も今將た水に温み、
 霞に酔ひて、長閑なる日影に眠る如く覚えけんよ。その恋のいよいよ急に、いよいよ濃に
 なり勝れる時、人の最も憎める競争者の為に、しかも輒く宮を奪はれし貫一が心は如何な
 りけん。身をも心をも打委せて詐ることを知らざりし恋人の、忽ち敵の如く己に反きて、

空く他人に嫁するを見たる貫一が心は更に如何なりけん。彼はここに於いて曩に半箇の骨肉の親むべきなく、一点の愛情の温むるに会はざりし凄寥を感じるのみにて止らず、失望を添へ、恨を累ねて、かの塊然たる野末の石は、霜置く上に風の吹誘ひて、皮肉を穿ち来る人生の酸味の到頭骨に徹する一種の痛苦を悩みて已まざるなりき。実に彼の宮を奪れしは、その嘗て与へられし物を取去られし上に、与へられざりし物をも併せて取去られしなり。

彼は或はその恨を抛つべし、なんぞその失望をも忘れざらん。されども彼は永くその痛苦を去らしむる能はざるべし、一旦太くその心を傷けられたるかの痛苦は、永くその心の存在と俱に存在すべければなり。その業務として行はざるべからざる殘忍刻薄を自ら強ふる痛苦は、能く彼の痛苦と相剋して、その間聊か思を遣るべき余地を窃み得るに慣れて、彼は漸く忍ぶべからざるを忍びて為し、恥づべきをも恥ぢずして行ひけるほどに、勁敵に遇ひ、悪徒に罹りて、或は弄ばれ、或は欺かれ、或は脅され勢毒を以つて制し、暴を以つて易ふるの已むを得ざるより、一はその道の習に薰染して、彼は益す懼れず貪るに至れるなり。同時に例の不断の痛苦は彼を撻つやうに募ることありて、心も消々に悩まざる毎に、齷利を趁ふ力も失せて、彼はなかなか死の安きを懷はざるにあらず。唯

その一旦にして易く、又今の空き死を遂げ了らんをば、いと効為しと思返して、よし遠くとも心に期するところは、なでう一度前の失望と恨とを霽し得て、胸裡の涼きこと、氷を砕いて明鏡を磨ぐが如く為ざらん、その夕ぞ我は正に死ぬべきと私に慰むるなりき。貫一は一はかの痛苦を忘るる手段として、一はその妄執を散ずべき快心の事を買はんの目的をもて、かくは高利を食ふるなり。知らず彼がその夕にして瞑せんとする快心事とは何ぞ。彼は尋常復讐の小術を成して、宮に富山に鳴沢に人身的攻撃を加へて快事を取らんとにはあらず、今少く事の大きく男らしくあらんをば企図せるなり。然れども、痛苦の劇く、懐旧の恨に堪へざる折々、彼は熱き涙を握りて祈るが如く嘆ちぬ。

「!!」

頭も打割るるやうに覚えて、この以上を想ふ能はざる貫一は、ここに到りて自失し了るを常とす。かかる折よ、熱海の浜に泣倒れし鳴沢の娘と、田鶴見の底に逍遙せし富山が妻との姿は、双々貫一が身边を彷徨して去らざるなり。彼はこの痛苦の堪ふべからざるに任せて、ほとほと前後を顧ずして他の一方に事を為すより、往々その性の為す能はざるをも為して、仮さざること仇敵の如く、債務を逼りて酷を極むるなり。退いてはこれを悔ゆるも、又折に触れて激すれば、忽ち勢に驅られて断行するを憚らざるなり。かく

して彼の心に拘ふ事あれば、自ら念頭を去らざる痛苦をもその間に忘るるを得べく、素より彼は正を知らずして邪を為し、是を喜ばずして非を為すものにあらざれば、己を枉げてこれを行ふ心苦しきは俯して愧ぢ、仰ぎて懼れ、天地の間に身を置くところは、纔にその容るる空間だに猶濶きを覚ゆるなれど、かの痛苦に較べては、復に忍ぶの易く、体のまた胖なるをさへ感ずるなりけり。

一向に神を勞し、思を費して、日夜これを暢るに違あらぬ貫一は、肉瘦せ、骨立ち、色疲れて、宛然死水などのやうに沈鬱し了んぬ。その攢めたる眉と空く凝せる目とは、体力の漸く衰ふるに反して、精神の愈よ興奮するとともに、思の益す繁く、益す乱るるを、従ひて斐り、従ひて解かんとすれば、なほも繁り、なほも乱るるを、竟に如何に為ばや、と心も砕けつつ打悩めるを示せり。更に見よ、漆のやうに鮮潤なりし髪は、後脳の辺に若干の白きを交へて、額に催せし皺の一筋長く横はれるぞ、その心の窄れる褻ならざるべき、況んや彼の面を蔽へる蔭は益す暗きにあらずや。

吁、彼はその初一念を遂げて、外面に、内心に、今は全くこの世からなる魔道に墜つるを得たりけるなり。貪欲界の雲は凝りて歩々に厚く護り、離恨天の雨は随所直に灑ぐ、一飛一躍出でては人の肉を啖ひ、半生半死入りては我と腸を劈く。居る所は陰風常に廻り

て白日を見ず、行けども行けども無明の長夜今に到るまで一千四百六十日、逢へども
 なつかし可懐き友の面を知らず、交れども曾て情の蜜より甘きを知らず、花咲けども春日の麗な
 るを知らず、樂來れども打背きて歡ぶを知らず、道あれども履むを知らず、善あれ
 ども与するを知らず、福あれども招くを知らず、恵あれども享くるを知らず、空く利欲に
 耽りて志を喪ひ、偏に迷執に弄ばれて思を勞らす、吁、彼は終に何をか成さんとすらん。
 間貫一の名は漸く同業者間に聞えて、恐るべき彼の未来を属目せざるはあらずなりぬ。
 かの堪ふべからざる痛苦と、この死をも快くせんとする目的とあるが為に、貫一の漸く
 頻なる嚴談酷促は自から此処に彼処に債務者の怨を買ひて、彼の為に泣き、彼の為に
 憤るもの寡からず、同業者といへども時としては彼の余に用捨無きを咎むるさへありけり。
 ひとり鰥淵はこれを喜びて、強将の下弱卒を出さざるを誇れるなり。彼は己の今日あるを
 致せし辛抱と苦労とは、未だ如此くにして足るものならずとて、屢ばその例を挙げて
 は貫一をし、飽くまで彼の意を強うせんと勉めき。これが為に慰めらるるにはあらね
 ど、その行へる残忍酷薄の人の道に欠けたるを知らざるにあらぬ貫一は、職業の性質既に
 不法なればこれを営むの非道なるは必然の理にて、己の為すところは都て同業者の為す
 ところにて、己一人の残刻なるにあらず、高利貸なる者は、世間一様に如此く残

刻ならざるべからずと念^{おも}へるなり。故に彼は決して己の所業のみ独り怨を買ふべきにあらずと信じたり。

實に彼の頼める鰐淵直行の如きは、彼の辛うじてその半を想ひ得る殘刻と、終に學ぶ能はざる譎詐とを左右にして、始めて今日の富を得てしなり。この点に於ては彼は一も二も無く貫一の師表たるべしといへども、その実さばかりの殘刻と譎詐とを擅にして、なほ天に畏れず、人に憚らざる不敵の傲骨あるにあらず。彼は密に警めて多く夜出でず、内には神を敬して、得知れぬ教会の大神者となりて、奉納寄進に財を吝まず、唯これ身の無事を祈るに汲々として、自ら安ずる計をなせり。彼は年来非道を行ひて、なほこの家榮え、身の全きを得るは、正にこの信心の致すところと仕へ奉る御神の冥護を辱なみて措かざるなりき。貫一は彼の如く殘刻と譎詐とに勇ならざりけれど、又彼の如く敬神と閉居とに怯ならず、身は人と生れて人がましく行ひ、一も曾て犯せる事のあらざりしに、天は却りて己を罰し人は却りて己を詐り、終生の失望と遺恨とは濫に斷腸の斧を揮ひて、死苦の若かざる絶痛を与ふるを思ひては、彼はよし天に人に憤るところあるも、懼るべき無しと為るならん。貫一の最も懼れ、最も憚るところは自の心のみなりけり。

第八章

用談果つるを俟ちて貫一の魚膠無く暇乞するを、満枝は暫しと留置き、用有り
 げに奥の間にぞ入りたる。その言の如く暫し待てども出で来ざれば、又巻蓑を取
 しけるに、手炉の炭は狼の糞のやうになりて、いつか火の気の絶えたるに、檀座に毛糸
 の敷物したる石笠のラムプのを仮りて、貫一は為う事無しに煙を吹きつつ、この赤
 檜の客間を夜目ながらしつ。

袋棚なる置時計は十時十分前を指せり。違棚には箱入の人形を大小二つ並べて、そ
 の下は七宝焼擬の一輪挿、蛸石の飾玉を水色縮緬の三重の褥に載せて、
 床柱なる水牛の角の懸花入は松に隼の勸工場蒔絵金々として、花を見ず。鋳物の香炉
 の悪古びに玄ませたと、羽二重細工の花筐とを床に飾りて、雨中の富士をば引
 きかきまは
 攪旋したるやうに落墨して、金泥精描の騰竜は目貫を打つたるとばかり雲間に耀
 ける横物の一幅。頭を回らせば、楣間に黄海大海戦の一問程なる水彩画を掲げて座敷
 の隅には二鉢の菊を据ゑたり。

やや有りて出来れる満枝は服を改めたるなり。糸織の衿懸けたる小袖に納戸小紋の縮

緬の羽織着て、七糸しつちんと黒縹くろじゆす子との昼夜帯して、華美はでなるシオウルを携へ、髪など撫なで付けしと覺おぼく、面も見違ふやうに輕よそほく粧よそほひて、
「大變失礼を致しました。些ちよつたくしと私も其処まで買物に出ますので、実は御一緒に願はうと存じまして」

無礼なりとは思ひけれど、口説よしみれし誼に貫一は今更腹も立て難くて、

「ああさうですか」

満枝はつと寄りて声を低くし、

「御迷惑でゐらつしやいませうけれど」

聴き飽きたりと謂いはんやうに彼は取合はで、

「それぢや参りませう。貴方あなたは何方どちうまでお出いでなのですか」

「私わたくしは大横町おおよこちようまで」

二人は打連れて 四谷左門町よつやさもんちようなる赤檜てんまちようどおりの家を出でぬ。伝馬町てんばちようどおり通は両側の店に燈ともを列しつら

ねて、未だ宵まなる景気なれど、秋としも覺えず夜寒はなはだしの甚はなはだしければ、往來ゆききも稀まれに、空は星あれどいと暗し。

「何といふお寒いのでございませう」

「さやう」

「貴方、間さん、貴方そんなに離れてお歩き遊ばさなくても宜いぢやございませんか。それではお話が達きませんわ」

彼は町の左側をこたびは貫一に擦寄りて歩めり。

「これぢや私が歩き難いです」

「貴方お寒うございませう。私お鞆を持ちませう」

「いいや、どういたして」

「貴方恐入りますが、もう少し御緩りお歩きなすつて下さいましな、私呼吸が切れて…」

…

已む無く彼は加減して歩めり。満枝は着重るシオウルを揺上げて、

「疾からは非お話致したいと思ふ事があるのでございますけれど、その後些ともお目に掛らないものですから。間さん、貴方、本当に偶にはお遊びにいらしつて下さいましな。私もう決して先達而のやうな事は再び申上げませんから。些といらしつて下さいましな」

「は、難有う」

「お手紙を上げましても宜うございますか」

「何の手紙ですか」

「御機嫌伺の」
ごきげんうかがひ

「貴方から機嫌を伺はれる訳が無いぢやありませんか」

「では、恋い時に」
こひし

「貴方が何も私を……」

「恋いのは私の勝手でございますよ」

「然し、手紙は人にでも見られると面倒ですから、お辞をします」
ことわり

「でも近日に私お話を致したい事があるのでございますから、鰐淵わにぶちさんの事に就きまし

てね、私はこれ程困つた事はございませんので、是非貴方に御相談を願はうと存じまして、……」

唯見れば伝馬町三丁目と二丁目との角なり。貫一はここにて満枝を撒まかんと思ひ設けたるなれば、彼の語り続けるをも会釈せ為ずして立住たちどまりつ。

「それぢや私はここで失礼します」

その不意に出いでて貫一の闇き横町に入るを、

「あれ、貴方あなた、其方そちらからいらつしやるのですか。この通をいらつしやいましなね、わざわざ

ぎ、そんな寂い道をお出なさらなくても、此方の方が順ではございませんか」

満枝は離れ難なく二三間追ひ行きたり。

「なあに、此方が余程近いのですから」

「幾多も違ひは致しませんが、賑かな方をいらつしやいましよ。私その代り四谷見附の所までお送り申しますから」

「貴方に送つて戴いたつて為やうが無い。夜が更けますから、貴方も早く買物を為すつてお帰りなさいまし」

「そんなお為転を有仰らなくても宜うございます」

かく言争ひつつ、行くにもあらねど留るにもあらぬ貫一に引添ひて、不知不識其方に歩ませられし満枝は、やにはに立竦みて声を揚げつ。

「ああ！ 間さん些と」

「どうしました」

「路悪へ入つて了つて、履物が取れないのでございますよ」

「それだから貴方はこんな方へお出でなさんが可いのに」

彼は洩々寄り来れり。

「憚はばかり様ですが、この手を引張つて下さいましな。ああ、早く、私転びますよ」

シオウルの外に援たすけを求むる彼の手を取りて引寄すれば、女はよろめきつつ泥濘ぬかるみを出でたりしが、力や余りけん、身を支へかねてと貫一どうに靠もたれたり。

「ああ、危い」

「転びましたら貴方あなたの所為せゐでございますよ」

「馬鹿なことを」

彼はこの時扶たすけし手を放たんとせしに、釘付くぎつけなどにしたらんやうに曳ひけども振れども得離れざるを、怪しと女の面を窺おもてうかがへるなり。満枝は打背うちそむけたる顔の半なかばをシオウルの端はしに包みて、握れる手をば弥いよいよ固く緊めたり。

「さあ、もう放して下さい」

益ますますす緊めて袖の中へさへ曳入れんとすれば、

「貴方、馬鹿な事をしては可けません」

女は一語ひとことも言はず、面も背けたるままに、その手は益放たで男の行く方かたに歩めり。

「常談しちや可かんですよ。さあ、後うしろから人が来る」

「宜よろしうございますよ」

独語ひとりごつやうに言ひて、満枝いよいよは弥寄添よひつ。貫一くわんいちは怵こへかねて力任せうんに咥くはと曳ひけば、手は離はなれずして、女の体のみ倒たれかかりぬ。

「あ、痛いた！ そんな酷ひどい事をなさらなくても、其処そこの角まで参ればお放し申しますから、もう少しの間どうぞ……」

「好い加減になさい」

と暴あらかに引ひ払つひて、寄らんとする隙ひまもあらせず摩脱すりぬくるより足を疾はやめて津守坂つのかみざかを驀ま直しに下りたり。

やうやう昇あれる利鎌とかまの月は乱雲らんうんを芟かりて、き梢はるけこずゑの頂ただきに姑ばらく掛かれり。一抹いちまつの闇やみを透ときて士官学校の森と、その中なる兵営と、その隣なる町の片割かたわれとは、懶ものうく寢覚ねさめたるやうに覚束おぼつかなき形あらはを顕あらしめ。坂上なる巡查派出所の燈ともは空くく血紅けつこうの光を射て、下り行きし男の影も、取残されし女の姿も終つひに見えず。

(八) の二

片側町かたかはまちなる坂町さかまちは軒並のきなみに鎖とざして、何処いづこに隙洩すきもる火影ひかげも見えず、旧砲兵營の外柵がいさく

に生茂る群松は颯々の響を作して、その下道の小暗き空に五位鷺の魂切る声消えて、夜色愁ふるが如く、正に十一時に垂んとす。

忽ち兵營の門前に方りて人の叫ぶが聞えぬ、間貫一は二人の曲者に囲れたるなり。一人は黒の中折帽の鐔を目深に引下し、鼠色の毛糸の衿巻に半面を裹み、黒キヤリコの紋付の羽織の下に紀州ネルの下穿高々と尻褰して、黒足袋に木裏の雪踏を履き、六分強なる色木の弓の折を杖にしたり。他は盲縞の股引腹掛に、唐棧の半纏着て、茶ツツクの深靴を穿ち、衿巻の頬冠に烏撃帽子を頂きて、六角に削成したる檳榔子の逞きステッキを引抱き、いづれも身材貫一よりは低けれど、血氣腕力兼備と見えたる壮佼どもなり。

「物取か。恨を受ける覚は無いぞ！」

「黙れ！」と弓の折の寄るを貫一は片手に障へて、

「僕は間貫一といふ者だ。恨があらば尋常に敵手にならう。物取ならば財はくれる、訳も言はずに無法千万な、待たんか！」

答は無くして揮下したる弓の折は貫一が高頬を発矢と打つ。眩きつつも逃行くを、猛然と追迫れる檳榔子は、件の杖もて片手突に肩の辺を曳と突いたり。踏み耐へんとせし貫

一は水道工事の鉄道に^{レイル}跌^{つまづ}きて仆^{たふ}るを、得^うたりと附^{つけ}入^{はい}る曲^{まが}者は、余^{あま}に躁^{はや}りて貫^{くわん}一の折^{ひま}れたるに又^{また}跌^{おち}き、一^{いっ}間^まばかりの彼^{あな}方に反^{はん}跳^{しゅう}を打^{うち}ちて投^な飛^ひされぬ。入^い替^かりて一^{いっ}番^{ぱん}手の弓^{きう}の折^{ひま}は貫^{くわん}一の背^そを袈^け裟^さ掛^{がけ}に打^{うち}据^よえければ、起^おきも得^うせで、崩^{くづ}折^をるを、置^おみか^かけんとする際^{ひま}に、手^て元に脱^ぬ捨^すてたりし駒^こ下^げ駄^だを取^とるより早^{はや}く、彼^あの面^{おもて}を望^{もちこ}みて投^なげたるが、丁^{ちよう}と中^{ちゆう}りて痿^{ひる}むその時^{とき}、貫^{くわん}一^{いつ}は蹶^{はね}起^おきて三^{さん}歩^ぽばかりも、れ^のしを打^{うち}転^{ころ}けし檳^{べい}榔^{とう}子^しの躍^をり蒐^かりて、^を打^{うち}に下^おせる杖^{こびん}は小^{かす}髻^{すべ}を掠^かり、肩^{かた}を迂^よりて、鞆^{たぼん}持^ぢつ手^てを断^{ちぎ}れんとすばかりに撲^{うち}ちけるを、辛^{から}くも忍^{しの}びてつと退^のきながら身^み構^{かまへ}しが、目^め潰^{つぶ}吃^くひし一^い番^{ぱん}手^ての怒^{いかり}を作^なして奮^き進^{すす}し来^{きた}るを見るより今^{いま}は危^{あや}しと鞆^{たぼん}の中^ななる小^こ刀^{がたな}撈^{いさぐ}りつつ馳^は出^せづるを、輒^{たやす}く肉^{にく}薄^{はく}せる二^{ふた}人^{にん}が咎^{しもと}は雨^{あめ}の如^{ごと}く、所^{ところ}嫌^{きら}はぬ滅^め多^た打^{うち}に、彼^あは敢^{あへ}無^なくも昏^{こん}倒^{とう}せるなり。

檣^{よう}「どうです、もう可^いいに為^なませうか」

弓^{きう}「此^こ奴^{いつ}おれの鼻^{はな}面^{めん}へ下^{した}駄^だを打^{うち}着^ちけよつた、あ^あ、痛^{いた}」

衿^{かき}卷^{まき}搔^か除^ぞけて彼^あの撫^なでたる鼻^{はな}は朱^{あけ}に染^そみて、西^{さい}洋^{やう}蕃^{ばん} 椒^しの熟^うえたるに異^{ちが}らず。

檣^{よう}「おお、大^{だい}変^{へん}な凧^{たな}ですぜ」

貫^{くわん}一^{いつ}は息^{いき}も絶^た々ながら緊^{しか}と鞆^{たぼん}を搔^か抱^{いだ}き、右^{みぎ}の逆^{さか}手^てに小^こ刀^{がたな}を隠^{かく}し持^もちて、この上^{うへ}にも狼^ろ藉^{せき}に及^{およ}ばば為^なんやう有^ありと、油^{あぶら}断^たを計^{はか}りてわざと為^なす無^なき体^{てい}を装^{よそ}ひ、直^{ひた}呻^{うめ}きにぞ呻^{うめ}き

るたる。

弓「憎い奴じや。然し、随分撲つたの」

櫛「ええ、手が痛くなつて了ひました」

弓「もう引揚げやう」

かくて曲者は間近の横町に入りぬ。辛うじて面を擡げ得たりし貫一は、一時に発せる全身の疼通に、精神漸く乱れて、屢ば前後を覚えざらんとす。

後編

第一章

翌々日の諸新聞は坂町さかまちに於ける高利貸アイス遭難の一件を報道せり。中に間貫一うちはざまを誤りて鰐わにぶちたにぶちただけゆき、淵直行みづなおと為るせもありしが、負傷者は翌日大学第二医院に入院したりとのみは、一樣に事實の真を伝ふるなりけり。されどその人を誤れる報道は決して何等の不都合をも生ぜざるべし。彼等を識しらざる読者は湯屋の喧嘩けんかも同じく、三ノ面記事の常套じょうとうとして看過みすごすべく、何の違いとまかその敵手あひての誰々たれたれなるを問はん。識れる者は恐くは、貫一も鰐淵も一つに足腰きの利かざるまで撃うちのめめされざりしを本意ほんい無く思へるなるべし。又或者は彼の即死せざりしをも物足らず覚ゆるなるべし。下手人は不明なれども、察するに貸借上の遺趣より

為せる業わざならんとは、諸新聞の記しるせる如く、人も皆思ふところなりけり。

直行は今朝病院へ見舞に行きて、妻は患者の容体を案じつつ留守せるなり。夫婦は心を協あはせて貫一の災難を悲かなしみ、何程の費つひえをも吝をまず手宛の限を加へて、少小の癥きずをも遺のこさざらんと祈るなりき。

股肱ここうと恃たのみ、我子とも思へる貫一の遭難を、主人はなかなかその身に受けし闇打やみうちのやうに覺えて、無念の止み難く、かばかりの事に屈する鰐淵みせしめならぬ令見ひきようものの為に、彼が入院中めざましを目覺めざましくも厚く賄まかなひて、再び手出しもならざらんやう、陰かげながら卑怯者の息の根を遏とめんと、氣も狂くるはしく力を竭つくせり。

彼の妻は又、やがてはかかる不慮の事の夫の身にも出いで來きたるべきを思過して、若しさるべからんには如何いかにか為すべき、この悲しさ、この口惜くちをしさ、この心細さにては止やまじと思ふに就けて、空可そらおそろし恐く胸の打騒ぐを禁め得ず。奉公大事ゆゑに怨うらみを結びて、憂き目に遭あひし貫一は、夫の禍わざはひを転じて身の仇あだとせし可憫あはれさを、日頃の手柄に増して浸しみ々難有ありがたく、かれを念おもひ、これを思ひて、絶したたかに心弱くのみ成行くほどに、裏に愧はづること、懼おそるること、疚やましきことなどの常に抑おさへたるが、忽たちまち涌立わきたち、跳をどり出でて、その身を責むる痛苦に堪たへざるなりき。

年久く飼^{かは}るる老^{ろう}猫^{みょう}の凡^{およ}そ子^こ狗^{いぬ}ほどなるが、棄^すてたる雪^{ゆき}の塊^{かたまり}のやうに長^{なが}火^か鉢^{ひばち}の猫^{ねこ}板^{いた}の上^{うへ}に蹲^{うづくま}りて、前^{まへ}足^{あし}の隻^{しかた}落^おして爪^{つま}頭^{さき}の灰^{うづも}に埋^{うづも}るをも知らず、駒^{いびき}をさへ搔^かきて熟^{うまい}睡^{すい}したり。妻^{つま}はその夜^よの騷^{さわ}擾^{じょう}、次^{つぎ}の日^ひの氣^き勞^{れう}に、血^ちの道^{みち}を悩^{なや}める心^{こころ}地^ちにて、うつらう々^{うつらう}となりては驚^{おどろ}かされつつありける耳^{みみ}元に、格^{こう}子^しの鐸^{たけ}の轟^{とどろ}きければ、はや夫^{かへり}の帰^{かへ}来^りかと疑^{うたが}ひも果^はてぬに、紙^{ふすま}門^{かど}を開^あきて頭^{あたま}せる姿^{すがた}は、年^{とし}紀^き二^に十^{じゅう}六^{ろく}七^{しち}と見^みえて、身^み材^{ざい}は高^{たか}からず、色^{いろ}やや蒼^{あを}き瘦^{やせ}顔^{がほ}の険^{むづか}しげに口^{くち}髭^{ひげ}たくましく、髪^{かみ}の生^おひ乱^{みだ}れたるに深^{ふか}々と紺^{くろ}ネ^ろルトン^{のん}の二^に重^{じゅう}外^{うまわ}套^{えり}の襟^{えり}を立てて、黒^{くろ}の中^{なか}折^お帽^{ぼう}を脱^{はき}ぎて手^てにしつ。高^{たか}き鼻^びに鼈^{べつ}甲^{こう}縁^{えん}の眼^は鏡^{きよう}を挿^{はさ}みて、稜^{かど}ある眼^{まなこ}色^{いろ}は見る物^{もの}毎^{まい}に恨^{うら}あるが如^{ごと}し。

妻^{つま}は思^{おも}設^もけぬ面^{おも}色^{もち}の中^{なか}に喜^{よろこ}を漾^たへて、

「まあ直^{ただ}道^{みち}かい、好^いくお出^{いで}だね」

片^{かた}隅^{すみ}に外^{がい}套^{とう}を脱^{はき}捨^すつれば、彼^{かれ}は黒^{くろ}綾^{あや}のモオニ^{あたらし}ング^のの新^{あらた}からぬに、濃^{こい}納^{なん}戸^{んど}地^じに黒^{くろ}縞^{しま}の穿^{ズボン}袴^{ゆたか}の寛^きなるを着^きけて、清^{きよ}ならぬ護^ご謨^ものカ^カラ、カ^カフ、鼠^{ねずみ}色^{いろ}の紋^{もん}縷^{じゆ}子^すの頸^{えり}飾^{かざり}したり。妻^{つま}は得^い々^そ起^おちて、その外^{ぐわい}套^{とう}を柱^{はしら}の折^を釘^{くぎ}に懸^かけつ。

「どうも取^とんだ事^{こと}で、阿^お父^{とつ}さんの様^{よう}子はど^だんな？ 今^{こん}朝^{ちやう}新^{しん}聞^{ぶん}を見^みると愕^{おどろ}いて飛^とんで来^きたのです。容^{よう}体^{たい}はど^どうです」

彼は時儀を叙ぶるに、およばずして忙しげにかく問出でぬ。

「ああ新聞で、さうだつたかい。なあに阿父さんはどうも作りはしないわね」

「はあ？　坂町で大怪我をおほけが為つて、病院へ入つたと云ふのは？」

「あれは間さ。はざま阿父さんだと思ひなの？　可厭だね、どうしたと云ふのだらう」

「いや、さうですか。でも、新聞には歴然とさう出てゐましたよ」

「それぢやその新聞が違つてゐるのだよ。阿父さんは先之病院へ見舞にお出掛だから、間もなくお帰来だらう。かへりまあ寛々してゆつくりお在ないで」

かくと聞ける直道は余のあまり不意に拍子抜して、喜びも得え為せず啞然たるのみ。

「ああ、さうですか、間が遣やられたのですか」

「ああ、間が可哀かあいさうにねえ、取んだ災難で、大怪我をしたのだよ」

「どんなです、新聞には余程劇ひどいやうに出てゐましたが」

「新聞に在る通だけけれど、かたは不具になるやうな事も無いさうだが、全然すつかり快くなるには三月

ぐらゐはどんな事をしてかも要るといふ話だよ。誠に氣の毒な、それで、阿父さんもおおとつ大抵な

心配ぢやないの。まあ、ね、病院も上等へ入れて手宛てあては十分にしてあるのだから、決して

氣遣きづかひは無いやうなものだけれど、何しろ大怪我だからね。左の肩の骨が少しくだ摧けたとか

で、手が緩縦ぶらぶらになつて了つたの、その外紫色の痣あざだの、蚯蚓腫めづばれだの、打切ぶつきれたり、擦す毀りこはしたやうな負傷きずは、お前、体一面なのさ。それに気絶するほど頭部あたまを撲ぶたれたのだから、脳病でも出なければ可いつて、お医者様もさう言つてお在いださうだけれど、今のところではそんな塩梅あんばいも無いさうだよ。何しろその晩内へ昇かつぎこ込んだ時は半死半生で、些ほんの虫の息が通つてゐるばかり、私は一目見ると、これはとても助るまいと想つたけれど、割合に人間といふものは丈夫なものだね」

「それは災難な、氣の毒な事をしましたな。まあ十分に手宛をして遣るが可いです。さうして阿父さんは何と言つてゐました」

「何ととは？」

「間が闇打やみうちにされた事を」

「いづれ敵手あひては貸金かしきんの事から遺趣を持つて、その悔し紛まぎれに無法な真似まねをしたのだらうつて、大相腹けんかを立ててお在いなのだよ。全くね、間はああ云ふ不斷の大人おとなしい人だから、つまらない喧嘩けんかなぞを為る氣遣きづかひはなし、何でもそれに違は無いのさ。それだから猶更なほさら氣の毒で、何とも謂いひやうが無い」

「間は若いから、それでも助るのです、阿父おとつさんであつたら命は有りませんよ、阿母おつかさん」

「まあ可厭なことをお言ひでないな！」

浸々思入りたりし直道は徐にその恨き目を挙げて、

「阿母さん、阿父さんは未だこの家業をお廃めなさる様子は無いのですかね」

母は苦しげに鈍り鈍りて、

「さうねえ……別に何とも……私には能く解らないね……」

「もう今に応報は阿父さんにも……。阿母さん、間があんな目に遭つたのは、決して人事ぢやありませんよ」

「お前又阿父さんの前でそんな事をお言ひでないよ」

「言ひます！ 今日では是非言はなければならぬ」

「それは言ふも可いけれど、従来も随分お言ひだけけれど、あの気性だから阿父さんは些もお聴きではないぢやないか。とても他の言ふことなんぞは聴かない人なのだから、まあ、もう少しお前も目を瞑つてお在よ、よ」

「私だつて親に向つて言ひたくはありません。大概の事なら目を瞑つてゐたいのだけれど、実にこればかりは目を瞑つてゐられないのですから。始終さう思ひます。私は外に何も苦勞といふものは無い、唯これだけが苦勞で、考出すと夜も寝られないのです。外にどんな

苦勞が在つても可いから、どうかこの苦勞だけは没してしまつて了ひたいと熟く思ふのです。噫、こんな事なら未だ親子で乞食をした方が復に可い」

彼は涙を浮べて倆きぬ。母はその身も俱に責めらるる想して、或は可慚く、或は可忌く、この苦き位置に在るに堪へかねつつ、言解かん術さへ無けれど、とにかくにも言はで已むべき折ならねば、辛じて打出しつ。

「それはもうお前の言ふのは尤だけれど、お前と阿父さんとは全で気合が違ふのだから、万事考量が別々で、お前の言ふ事は阿父さんの肚には入らず、ね、又阿父さんの為る事はお前には不承知と謂ふので、その中へ入つて私も困るわね。内も今では相応にお財も出来たのだから、かう云ふ家業は廢めて、樂隠居になつて、お前に嫁を貰つて、孫の顔でも見たい、とさう思ふのだけれど、ああ云ふ氣の阿父さんだから、そんなことを言出さうものなら、どんなに慍られるだらうと、それが見え透いてゐるから、漫然した事は言はれずさ、お前の心を察して見れば可哀さうではあり、さうかと云つて何方をどうすることも出来ず、陰で心配するばかりで、何の役にも立たないながら、これでなかなか苦いのは私の身だよ。

さぞお前は氣も済まなからうけれど、とても今のところでは何と言つたところが、応と

承知をしさうな様子は無いのだから、慍^{なまじ}ひ言合つてお互に心持を悪くするのが果^{おち}だから、……それは、お前、何と云つたつて親一人子一人の中だもの、阿父さんだつて心ぢやどんなにお前が便^{たより}だか知れやしないのだから、究竟^{つまり}はお前の言ふ事も聴くのは知れてゐるのだし、阿父さんだつて現在の子のそんなにまで思つてゐるのを、決して心に掛けないのではないけれども、又阿父^{おとつ}さんの方にも其^{そこ}処^りには了^{りよう}簡^{かん}があつて、一概にお前の言ふ通にも成りかねるのだらう。

それに今日あたりは、間の事で大變氣が立つてゐるところだから、お前が何か言ふと却^{かへ}つて善くないから、今日は窃^{そつ}として措^おいておくれ、よ、本当に私が頼むから、ねえ直道^{ちてい}」
実に母は自ら言へりし如く、板^{いた}挾^{はさみ}の難局に立てるなれば、ひたすら事あらせじと、誠^{まこと}の一匁に直道^{ちてい}を諭^{さと}すなりき。彼は涙の催すに堪^たへずして、鼻目^{はなめがね}鏡を取捨てて目を推^{おしぬ}拭^{ぬぐ}ひつつ猶^{むせ}咽^{むせ}びあたりしが、

「阿母^{おつか}さんにさう言れるから、私は不斷は怵^{こら}へてゐるのです。今日ばかり存分に言はして下さい。今日言はなかつたら言ふ時は有りませんよ。間のそんな目に遭^あつたのは天罰です、この天罰は阿父さんも今に免れんことは知れてゐるから、言ふのなら今、今言はんくらゐなら私はもう一生言ひません」

母はその一念に脅されけんやうにて漫寒きを覚えたり。洩打去みて直道は語を継ぎぬ。

「然し私の仕打も善くはありません、阿父さんの方にも言分は有らうと、それは自分で思つてゐます。阿父さんの家業が気に入らん、意見をしても用ゐない、こんな汚れた家業を為るのを見てゐるのが可厭だ、と親を棄てて別居してゐると云ふのは、如何にも情合の無い話で、実に私も心苦いのです。決して人の子たる道ではない、さぞ不孝者と阿父さん始阿母さんもさう思つてお在でせう」

「さうは思ひはしないよ。お前の方にも理はあるのだから、さうは思ひはしないけれど、一処に居たらさぞ好からうとは……」

「それは、私は猶の事です。こんな内に居るのは可厭だ、別居して独で遣る、と我儘を言つて、どうなりかうなり自分で暮して行けるのも、それまでに教育して貰つたのは誰のお陰かと謂へば、皆親の恩。それもこれも知つてゐながら、阿父さんを踏付にしたやうな行を為るのは、阿母さん能々の事だと思つて下さい。私は親に悖ふのぢやない、阿父さんと一処に居るのを嫌ふのぢやないが、私は金貸などと云ふ賤い家業が大嫌なのです。人を悩めて己を肥す——浅ましい家業です！」

身を顫はして彼は涙に搔昏れたり。母は居久らぬまでに惑へるなり。

「親を過すほどの芸も無くて、生意気な事ばかり言つて実は面目も無いのです。然し不自由を辛抱してさへ下されば、両親ぐらゐに乾い思はきつと為せませんから、破屋でも可いから親子三人一所に暮して、人に後指を差れず、罪も作らず、怨も受けずに、清く暮したいぢやありませんか。世の中は貨が有つたから、それで可い訳のものぢやありませんよ。まして非道をして拵へた貨、そんな貨が何の頼になるものですか、必ず悪銭身に附かずです。無理に仕上げた身は一時代持たずに滅びます。因果の報う例は恐るべきものだから、一日でも早くこんな家業は廃めるに越した事はありません。噫、末が見えてゐるのに、情無い事ですなあ！」

積悪の応報觀面の末を憂ひて措かざる直道が心の眼は、無残にも怨の刃に劈れて、路上に横死の恥を暴せる父が死顔の、犬に蹴られ、泥に塗れて、古蓆の陰に枕せるを、怪くも歴々と見て、恐くは我が至誠の鑑は父が未然を宛然映し出して謬らざるにあらざるかと、事の目前の真にあらざるを知りつつも、余りの浅ましさに我を忘れてつと迸る哭聲は、咬緊むる齒をさへ漏れて出づるを、母は驚き、途方に昏れたる折しも、門に俤の駐りて、格子の鐸の鳴るは夫の帰來か、次手悪しと胸を轟かして、直道の肩を揺り動しつつ、声を潜めて口早に、

「直道、阿父さんのお歸来^{かへり}だから、泣いてゐちや可けないよ、早く彼方^{あつち}へ行つて、……よ、今日は後生だから何も言はずに……」

はや足音は次の間に来^{きた}りぬ。母は慌^{あわ}てて出迎^たに起てば、一足遅れに紙門^{ふすま}は外より開れて主^{あるじ}直行の高く幅たき軀^{からだ}は岸^{のつそり}然とお峯の肩^{かた}越^{こし}に踰^あれぬ。

(一) の二

「おお、直道か珍しいの。何時^{いつ}来たのか」

かく言ひつつ彼は艶^{つや}々と赭^{あから}みたる鉢^{はち}割^{われ}の広き額の陰に小く点せる金^{かね}壺^{つぼ}眼^{まなこ}を心^{こころ}快^よげに瞪^{みひら}きて、妻が例の如く外套^{がいとう}を脱^ぬするまゝに立てり。お峯は直道^{ちくどう}が言^{こと}に稜^{かど}あらんことを慮^{おもひ}りて、さり氣無く自ら代りて答へつ。

「もう少し先^{さつき}でした。貴君^{あなた}は大相お早かつたぢやありませんか、丁度好^よございましたこと。さうして間の容体はどんなですね」

「いや、仕合^{しあはせ}と想うたよりは輕くての、まあ、ま、あの分なら心配は無いて」
黒一樂^{くろいちらく}の三紋^{みつもん}付けたる綿入^{わたいれ}羽織^{おり}の衣紋^{えもん}を直して、彼は機嫌^{きげん}好く火鉢^{ひばち}の傍^{そば}に歩み寄

る時、直道は漸く面を抗げて礼を作せり。

「お前、どうした、ああ、妙な顔をしてをるでないか」

梭欄の毛を植ゑたりやとも見ゆる口髭を搔拵りて、太短なる眉を顰むれば、聞
る妻は呀とばかり、刃を踏める心地も為めり。直道は屹と振仰ぐとともに両手を胸に組
合せて、居長高になりけるが、父の面を見し目を伏せて、さて徐に口を開きぬ。

「今朝新聞を見ましたところが、阿父さんが、大怪我を為つたと出てをつたので、早速お
見舞に参つたのです」

白髪を交へたる茶褐色の髪の毛の頭に置余るばかりなるを撫でて、直行は、

「何新聞か知らんけれど、それは間の間違ぢやが。俺ならそんな場合に出会つたて、唯
々打れちやをりやせん。何の先は二人でないかい、五人までは敵手にしてくれるが」

直道の隣に居たる母は密に彼のコオトの裾を引き、言を返させじと心着るなり。これ
が為に彼は少しく遅ひぬ。

「本にお前どうした、顔色が良うないが」

「さうですか。余り貴方の事が心配になるからです」

「何じや?」

「阿父さん、度々言ふ事ですが、もう金貸は廃めて下さいな」

「又！もう言ふな。言ふな。廃める時分には廃めるわ」

「廃めなければならんやうになつて廃めるのは見ともない。今朝貴方が半死半生の怪我をしたといふ新聞を見た時、私はどんなにしても早くこの家業をお廃めなさるやうに為せなかつたのを熟く後悔したのです。幸に貴方は無事であつた、から猶更今日は私の意見を用ゐて貰はなければならんのです。今に阿父さんも間のやうな災難を必ず受けるですよ。それが可^{おそろし}恐^{おそろし}いから廃めると謂ふのぢやありません、正しい事で争つて殞^{おと}す命ならば、決して辞することは無いけれど、金銭づくの事で怨^{うらみ}を受けて、それ故に無法な目に遭ふのは、如何にも恥^{はぢ}曝^{さら}してはいませんか。一つ間違へば命も失はなければならん、不具^{かたは}にも為れなければならん、阿父さんの身の上を考へると、私は夜も寝られんのですよ。

こんな家業を為^せんでは生活が出来んのではなし、阿父さん阿母さん二人なら、一生安樂に過せるほどの資産は既に有るのでせう、それに何を苦んで人には怨まれ、世間からは指^{つま}まはぢき^{まはぢき}弾^{はじ}をされて、無理な財^{かね}を拵^{こしら}へなければならんのですか。何でそんなに金が要^いるのですか。誰にしても自身に足りる以外の財^{かね}は、子孫に遺^{のこ}さうと謂ふより外は無いのでせう。貴方には私が一人子^{ひとりっこ}、その私は一銭たりとも貴方の財は譲られません！ 欲^ほくないのです。

さうすれば、貴方は今日無用の財を貯へる為に、人の怨を受けたり、世に誚られたり、さうして現在の親子が讐のやうになつて、貴方にしてもこんな家業を決して名誉と思つて楽しんで為つてゐるのではないでせう。

私のやうなものでも可愛いと思つて下さるなら、財産を遺して下さる代に私の意見を聴いて下さい。意見とは言ひません、私の願です。一生の願ですからどうぞ聴いて下さい」父が前に頭を低れて、輒く抗げぬ彼の面は熱き涙に蔽るるなりき。

些も動ずる色無き直行は却つて微笑を帯びて、語をさへ和げつ。

「俺の身 pensando そんなに言うてくれるのは嬉しいけど、お前のはそれは杞憂と謂ふんじや。俺と違つてお前は神経家ぢやからそんなに思ふんぢやけど、世間と謂ふものは、お前の考へとるやうなものではない。学問の好きな頭脳で実業を遣る者の仕事を責むるのは、それは可かん。人の怨の、世の誚のと言ふけどの、我々同業者に對する人の怨などと云ふのは、面々の手前勝手の愚痴に過ぎんのじや。世の誚と云ふのは、多くは嫉、その証拠は、働の無い奴が貧乏しとれば慫まるるじや。何家業に限らず、財を拵へる奴は必ず世間から何とか攻撃を受くる、さうぢやらう。財の有る奴で評判の好えものは一人も無い、その通じやが。お前は学者ぢやから自ら心持も違つて、財などをさう貴いものに思つてをらん。

学者はさうなけりやならんけど、世間は皆学者ではないぞ、可^ええか。実業家の精神は唯^{ただか}財^ねじや、世の中の奴の慾も財より外には無い。それほどに、のう、人の欲^{ほし}がる財じや、何ぞ好^ええところが無くてはならんぢやらう。何処^{どこ}が好^ええのか、何でそんなに好^ええのかは学者には解らん。

お前は自身に供給するに足るほどの財^{かね}があつたら、その上に望む必要は無いと言ふのぢやな、それが学者の考^{かんがへ}量じやと謂ふんじやが。自身に足るほどの物があつたら、それで可^ええと満足してうてからに手を退^ひくやうな了^{りようけん}簡であつたら、国は忽^{たちまほろぶ}ち亡るじや——社会の事業は發達せんじや。さうして国^{こくちゆう}中若隱居ばかりになつて了うたと為れば、お前どうするか、あ。慾にきりの無いのが国民の生命なんじや。

俺にそんなに財^{かね}を拵^{こしら}へてどうするか、とお前は不審するじやね。俺はどうも為^せん、財は余計にあるだけ愉快なんじや。究竟^{つまり}財を拵^{こしら}へるが極^{きは}めて面白^{おもしろ}いんじや。お前の学問するの面白い如く、俺は財の出来るが面白^{おもしろ}いんじや。お前に本を読むのを好^ええ加減に為^せい、一人前の学問が有つたらその上望む必要は有るまいと言うたら、お前何と答へる、あ。

お前は能^ようこの家業を不正ぢやの、汚^{けがらはし}いと言ふけど、財を儲^{まう}くるに君子の道を行うてゆく商売が何処^{どこ}に在るか。我々が高利の金を貸す、如何^{いか}にも高利じや、何為^{なぜ}高利か、可^ええ

か、無抵当じや、そりや。借る方に無抵当といふ便利を与ふるから、その便利に対する報酬として利が高いのぢやらう。それで我々は決して利の高い金を安いと詐つて貸しはせんとぞ。無抵当で貸すぢやから利が高い、それを承知で皆借るんじや。それが何で不正か、何で汚いか。利が高うて不当と思ふなら、始から借らんが可え、そんな高利を借りても急を極はにや措れんくらゐの困難が様々にある今の社会じや、高利貸を不正と謂ふなら、その不正の高利貸を作つた社会が不正なんじや。必要の上から借る者があるで、貸す者がある。なんぼ貸したうても借る者が無けりや、我々の家業は成立ちは為ん。その必要を見込んで仕事を為るが則ち營業の魂なんじや。

財といふものは誰でも愛して、皆獲やうと念うとる、獲たら離すまいと為とる、のう。

その財を人より多く持たうと云ふぢやもの、尋常一樣の手段で行くものではない。合意の上で貸借して、それで儲くるのが不正なら、総ての商業は皆不正でないか。学者の目からは、金儲する者は皆不正な事をしとるんじや」

太くもこの弁論に感じたる彼の妻は、屢ば直道の顔を偷視て、あはれ彼が理窟もこれが為に挫けて、氣遣ひたりし口論も無くて止みぬべきを想ひて私に懽べり。

直道は先づ嚴に頭を掉りて、

「学者でも商業家でも同じ人間です。人間である以上は人間たる道は誰にしても守らんければなりません。私は決して金儲を為るのを悪いと言ふのではない、いくら儲けても可いから、正當に儲けるのです。人の弱みに付入つて高利を貸すのは、断じて正當でない。そんな事が營業の魂などとは……！」 譬へば間が災難に遭つた。あれは先は二人で、しかも不意打を吃したのでせう、貴方はあの所業を何とお考へなさる。男らしい遺趣返の為方とお思ひなさるか。卑劣極る奴等だと、さぞ無念にお思ひでせう？」

彼は声を昂げて逼れり。されども父は他を顧て何等の答をも与へざりければ、再び声を鎮めて、

「どうですか」

「勿論」

「勿論？ 勿論ですとも！ 何奴か知らんけれど、実に陋根性、劣な奴等です。然し、怨を返すといふ点から謂つたら、奴等は立派に目的を達したのですね。さうでせう、設ひその手段は如何にあらうとも」

父は騒がず、笑を含みて赤き髭を弄りたり。

「卑劣と言れやうが、陋いと言れやうが、思ふさま遺趣返をした奴等は目的を達してさぞ

満足してをるでせう。それを掴つか殺ころしても遣りたいほど悔いのは此方ばかり。

阿父おとつさんの營業の主意も、彼等の為方と少しも違はんぢやありませんか。間の事に就いて無念だと貴方あなたがと思ひなさるなら、貴方から金を借りて苦められる者は、やはり貴方を恨まずにはゐませんよ」

又しても感じ入りたるは彼の母なり。かくては如何なる言ことばをもて夫はこれに答へんとすらん、我はこの理ことわりの覷てきめん面当然なるに口を開かんやうも無きにと、心慌あわてつつ夫の氣色を密ひそに窺かがひたり。彼は自若じじやくとして、却かへつてその子の善く論ろんずるを心に愛めづらんやうの面色おももちにて、転うたた微笑を弄ろうするのみ。されども妻は能よく知れり、彼の微笑を弄するは、必ずしも人のこれを弄するにあらざる時に於おいて屢しばしばするを。彼は今それか非あらぬかを疑へるなり。
蒼あをく羸やつれたる直道が顔は可い忌まはしくも白き色に變じ、声は甲かんだか高に細りて、膝ひざに置ける手て頭さきは連しきりに震ひぬ。

「いくら論じたところで、解りきつた理窟なのですから、もう言ひますまい。言へば唯阿父さんの心持を悪くするに過ぎんです。然し、従これ来までも度々たびたび言ひましたし、又今日こんな言ふのも、皆阿父おとつさんの身を案じるからで、これに就いては陰でどれほど私が始終苦心してゐるか知つてお在いは無からうけれど、考かんが出へすと勉強するのも何も可い厭やになつ

て、ああ、いつそ山の中へでも引籠ひっこんで了はうかと思ひます。阿父おとうさんはこの家業を不正でないと言ひなさるが、実に世間でも地獄の獄卒のやうに憎にくみ賤いやしんで、附合はつきふのも耻はぢにし
てゐるのですよ。世間なんぞはかまふものか、と貴方はお言ひでせうが、子としてそれを
聞きされる心苦しさを察して下さい。貴方はかまはんと謂ふその世間も、やはり我々が渡つ
て行かなければならん世間です。その世間に肩身が狭くなつて終つひには容れられなくなるの
は、男の面目ではありませんよ。私はそれが何より悲い。此方こつちに大見識があつて、それが
世間と衝突して、その為に憎まれるとか、棄てられるとか謂ふなら、世間は私を棄てんで
も、私は喜んで阿父さんと一処に世間に棄てられます。親子棄てられて路みち辺はたに餓死かつゑじ
するのを、私は親子の名誉、家の名誉と思ふのです。今我々親子の世間から疎うとれてゐるの
は、自業自得の致すところで、不名誉の極です！」

眼まなこは痛恨の涙を湧わかして、彼は覚えず父の面おもてを睨にらみたり。直行は例の嘯うそぎけり。

直道は今日を限と思入りたるやうに飽くまで言ことばを止やめず。

「今度の事を見ても、如何いかに間が恨まれてゐるかが解りませう。貴方あなたの手代でさへあの通
ではありませんか、して見れば貴方の受けてゐる恨、憎にくみはどんなであるか言ふに忍びない」
父は忽たちまさち遮りて、

「善し、解つた。能う解つた」

「では私の言ことばを用ゐて下さるか」

「まあ可ええ。解つた、解つたから……」

「解つたとお言ひなさるからはきつと用ゐて下さるのでせうな」

「お前の言ふ事は能う解つたさ。然しかし、爾なんぢは爾たり、吾は吾たりじや」

直道は怵こらへかねて犇ひしこぶしと拳を握れり。

「まだ若い、若い。書物ばかり見とるぢや可かん、少しは世間も見い。なるほど子の情として親の身を案じてくれる、その点は空あだには思はん。お前の心中も察する、意見も解つた。然し、俺は俺で又自ら信ずるところあつて遣るんぢやから、折角の忠告ぢやからと謂うて、枉まげて従ふ訳にはいかんで、のう。今度間がああ云ふ目に遭うたから、俺は猶なほ更さら劇えうい目に遭はうと謂うて、心配してくれるんか、あ？」

はや言ふも益無しと観念して直道は口を開かず。

「そりや辱かたじけないが、ま、当分俺の軀からだは俺に委まかして置いてくれ」

彼は徐しづかに立上りて、

「些ちよつとこれから行いて来にやならん処があるで、寛ゆつくりして行くが可ええ」

忽忙そそくさと二重外套にじゆうまわしを打被うちかつぎて出づる後より、帽子かぶとを持ちて送れる妻は密ひそかに出先を問へるなり。彼は大きいなる鼻はなを皺しわめて、

「俺が居ると面倒ちよつぢやから、些と出て来る。可ええやうに言うての、還かへしてくれい」

「へえ？ そりや困りますよ。貴方あなた、私わたしだつてそれは困るぢやありませんか」

「まあ可ええが」

「可よくはありません、私は困りますよ」

お峯は足摩あしずりして迷惑を訴ふるなりけり。

「お前なら居ても可ええ。さうして、もう還るぢやらうから」

「それぢや貴方還るまでゐらしつて下さいな」

「俺が居ては還らんからじやが。早たう行けよ」

さすがに争ひかねてお峯の渋々た佇ためるを、見も返らで夫は驀地まつしぐらかどに門を出でぬ。母は直道の勢おそに怖おそれて先にも増してさぞや苛さいまるるならんと想へば、虎とらの尾をも履ふむらんやうに覚えつつ歸り来にけり。唯と見れば、直道は手こまぬを拱かき、頭かしらを低たれて、在りけるままに凝然と坐したり。

「もうお中食ひるだが、お前何をお上りだ」

彼は身み転ころも為せざるなり。重ねて、

「直道」と呼べば、始めて覺束おぼつかなげに顔を挙あげて、

「阿母さん！」

その術じゆつ無なき声は謂い知ひらず母の胸を刺せり。彼はこの子の幼くて善く病める枕頭まくらもとに居たりし心地をそのままに覚えて、ほとほとと寄らんとしたり。

「それぢや私はもう帰ります」

「あれ何だね、未だ可いよ」

異あやくも遽いに名残なごりの惜をれて、今は得はも放たじと心こころ牽ひるるなり。

「もうお中食ひるだから、久しぶりで御膳ごぜんを食べて……」

「御膳のども吭へは通りませんから……」

第二章

主人公なる間貫一が大学第二医院の病室にありて、昼夜を重傷に悩める外ほか、身辺に事あらざる暇いとまに乗じて、富山に嫁ぎたる宮がその後の消息を伝ふべし。

一月十七日をもて彼は熱海の月下に貫一に別れ、その三月三日を挾えらびて富山の家に興こし入れしたりき。その場より貫一の失踪しつそうせしは、鳴沢一家の為もつけに物化じやまばらひの邪魔まじりたりしには疑うたがひ無なかりけれど、家内かないは挙こぞりてさすがに騒動さわどうしき。その父よりも母よりも宮は更に切なる誠を籠こめて心痛こころいたせり。彼はただに棄てざる恋を棄てにし悔に泣くのみならで、寄よるべ
 辺へあらぬ貫一が身の安否あんひを慮おもひりて措おく能あたはざりしなり。

氣強きじやうくは別れにけれど、やがて歸り来こんと頼めし心待も、終つひに空なるを曉さとりし後、さりと
 とも今一度は仮初かりそめにも相見んことを願ねがひ、又その心の奥には、必ずさばかりの逢瀬あふせは有
 るべきを、おのれと契りけるに、彼の行方ゆくへは知られずして、その身の家を出いづべき日は潮
 の如く迫るに、遣方やるかたも無く漫惑そぞろひては、常おぞましに鈍おろう思おもひ下せる卜者ぼくしやにも問とひて、後に
 は廻めぐり合あふべきも、今はなかなか文ふみに便たよりもあらじと教へられしを、筆持まめつは篤あつなる人なれ
 ば、長ながき長ながき怨言うらみなどは告来つげこさんと、そののみは掌たなごころを指さすばかりに待ちたりしも、疑うたがひし
 卜者こしはの言は不幸あやまにも過たで、宮は彼の怨言うらみをだに聞きくを得えざりしなり。

ともかくにも今一目見ずば動かじと始おもに念おもひ、それは慚かなはずなりてより、せめて一
 筆での便聞たよりかずばと更に念おもひしに、事は心と渾すべて違たがひて、さしも願ねがはぬ一事いちじのみは玉を転
 ずらんやうに何等さはりの障はかじも無く抄取はかじりて、彼が空むなしく貫一の便たよりを望ねがみし一日にも似にず、三月三

日は忽ち頭の上に跳り来れるなりき。彼は終に心を許し肌身を許せし初恋を擲ちて、絶痛絶苦の悶々の中に一生最も樂かるべき大札を挙げ畢んぬ。

宮は実に貫一に別れてより、始めて己の如何ばかり彼に恋せしかを知りけるなり。

彼の出でて歸らざる恋しさに堪へかねたる夕、宮はその机に倚りて思ひ、その衣の人の香を嗅ぎて悶え、その写真に頬摩して憧れ、彼若し己を容れて、ここに優き便をだに聞せなば、親をも家をも振捨てて、直に彼に奔るべきものと念へり。結納の交されし日も宮は富山唯繼を夫と定めたる心はつゆ起らざりき。されど、己は終にその家に適くべき身たるを忘れざりしなり。

ほとほと自らその緒を索むる能はざるまでに宮は心を乱しぬ。彼は別れし後の貫一をばさばかり慕ひて止まざりしかど、過を改め、操を守り、覚悟してその恋を全うせんとは計らざりけるよ。真に彼の胸に恃める覚悟とはあらざりき。恋侘びつつも心を貫かんとにはあらず、由無き縁を組まんとしたるよと思ひつつも、強ひて今更否まんとするにもあらず、彼方の恋きを思ひ、こなたの富めるを愛み、自ら決するところ無く、為すところ無くして空き迷に弄ばれつつ、終に移すべからざる三月三日の来るに会へるなり。

この日よ、この夕よ、更けて床盃のその期にびても、怪むべし、宮は決して富山

唯繼を夫と定めたる心は起らざるにぞありける、止この人を夫と定めざるべからざる我身なるを忘れざりしかど。彼は自ら謂へり、この心は始より貫一に許したるを、縁ありて身は唯繼に委すなり。故に身は唯繼に委すとも、心は長く貫一を忘れずと、かく謂へる宮はこの心事の不徳なるを知れり、されどこの不徳のその身に免る能はざる約束なるべきを信じて、寧ろ深く怪むにもあらざりき。如此にして宮は唯繼の妻となりぬ。

花聶君は彼を愛するに二念無く、彼を遇するに全力を挙げたり。宮はその身の上の日

毎輝き勝るまに、いよいよ意中の人と私すべき陰無くなりゆくを見て、愈よ樂まざる心

は、夫の愛を承くるに慵くて、唯機械の如く事ふるに過ぎざりしも、唯繼は彼の言ふ花の

姿、温き玉の容を一 向に愛で悦ぶ余に、冷かに空き器を抱くに異らざる妻を擁して、殆

ど憎むべきまでに得意の頤を撫づるなりき。彼が一段の得意は、二箇月の後最愛の妻は妊

りて、翌年の春美き男子を挙げぬ。宮は我とも覺えず浅ましがりて、産後を三月ばかり重

く病みけるが、その癒ゆる日を竣たで、初子はいと弱くて肺炎の為に歿りにけり。

子を生みし後も宮が色香はつゆ移はずして、自ら可惱き風情の添りたるに、夫が愛護の

念は益深く、寵は人目の見苦きばかり弥よ加るのみ。彼はその妻の常に樂まざる故を毫

も曉らず、始より唯その色を見て、打沈みたる生得と都合点して多く問はざるなりけ

り。

かく^{いと}怜まれつつも宮が初一念は動かんともせで、難^{ありがた}有^なき人の情に負^なきて、ここに嫁^{とつ}ぎし罪をさへ歎きて止まざりしに、思はぬ子まで成せし過^{あやまち}は如何にすべきと、躬^{みづか}らその容^{ゆる}し難きを慙^はぢて、悲むこと太甚^{はなはだ}かりしが、実^げに親の所憎^{にくしみ}にや堪^たへざりけん。その子の失^うせし後、彼は再び唯継の子をば生まじ、と固く心に誓ひしなり。二年^{ふたとせ}の後、三年^{みとせ}の後、四年^よの後まで異^{あやし}くも宮はこの誓を全うせり。

次第に彼の心は楽まらずなりて、今は何の故にその嫁ぎたるかを自ら知るに苦^{くる}めるなりき。機械の如く夫を守り置物のやうに内に据られ、絶えて人の妻たる効^{かひ}も思出もあらで、空^{むなし}く籠^{ろうちよう}鳥の雲を望める身には、そのみの願なりし裕^{ゆたか}なる生活も、富める家計も、土の如く顧るに足らず、却^{かへ}りてこの四年^{よとせ}が間思ひに思ふばかりにて、熱海より行方^{ゆくへ}知れざりし人の姿を田鶴^{たづみ}見の邸内に見てしまで、彼は全く音沙汰^{おとさた}をも聞かざりしなり。生家^{さと}なる鴨沢^{しぎさわ}にては薄々知らざるにもあらざりしかど、さる由^{よしな}無き事を告ぐるが如き愚^{おろか}なる親にもあらねば、宮のこれを知るべき便^{たより}は絶れたりしなり。

計らずもその夢寐^{むび}に忘れざる姿を見たりし彼が思は幾^いかばかり計なりけんよ。饑^うゑたる者の貪^{むさぼ}り食ふらんやうに、彼はその一目にして四年^{よとせ}の求むるところを求めんとしたり。饜^あかず、

鑒かず、彼の慾はこの日より益急になりて、既に自ら心事の不徳を以つて許せる身を投じて、唯快く万事を一事に換へて已まん、と深くも念じたり。

五番町なる鰐淵わにぶちといふ方に住める由は、静緒しずおより聞きつれど、むぎとは文ふみも通はせ難く、道は遠からねど、独り出でて彷徨さまよふべき身にもあらぬなど、克かなはぬ事のみなるに苦かりけれど、安否を分かざりし幾年いくとせの思に較ぶれば、はや囊ふくろの物を搜さがるに等しかるをと、その一筋に慰められつつも彼は日毎の徒然つれづれを憂きに堪へざる余あまり、我心を遺のこる方無く明すべき長き長き文を書かんと思立ちぬ。そは折を得て送らんとにもあらず、又逢うては言ふ能はざるを言はしめんとにもあらで、止ただかくも儂はかなき身の上と切なき胸の内とを独ひとり自ら慇うったへんとてなり。

(二) の二

宮は貫一が事を忘れざるとともに、又長く熱海の悲き別を忘る能あたはざるなり。更に見よ。歳々としとしめぐるく廻来めぐりくる一月十七日なる日は、その悲き別を忘れざる胸やきがねに烙やくして、彼の悔を新にするにあらずや。

「十年後の今月今夜も、僕の涙で月は曇らして見せるから、月が曇つたらば、貫一は何処までお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると想ふが可い」

掩へども宮が耳は常にこの声を聞かざるなし。彼はその日のその夜に会ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾てその人の余所に泣ける徴もあらざりければ、さすがに恨は忘れしかと、それには心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何処に如何にしてなど、更に打歎かるるなりき。

例のその日は四たび廻りて今日しも来りぬ。晴れたりし空は午後より曇りて少く吹出でたる風のいと寒く、凡ならず冷ゆる日なり。宮は毎よりも心煩きこの日なれば、かの筆採りて書続けんと為たりしが、余に思乱るればさるべき力も無くて、いとどしく紛れかねてゐたり。

益す寒威の募るに堪へざりければ、遽に煖炉を調ぜしめて、彼は西洋間に徙りぬ。尽く窓帷を引きたる十畳の間は寸隙もあらず裏まれて、火気の漸く春を蒸すところに、宮は体を胖に友禅縮緬の長襦袢の袂を踏抜きて、緋の紋緞子張の楽椅子に凭りて、心の影の其処に映るを眺むらんやうに、その美き目をば唯白く坦なる天井に注ぎたり。

夫の留守にはこの家の主として、彼は事ふべき舅姑を戴かず、気兼すべき小姑を抱

へず、足手絡あしてまとひの幼きも未だ有らずして、一箇ひとりの仲なかばたらきばたらき、働はたらと両箇ふたりの下婢かひとに万般よろづの煩わづらはきを
 委まかせ、一日何の為なすべき事も無くて、出いづるに車あり、膳ぜんには肉あり、しかも言ふことは
 皆聴れ、為すことは皆悦よろこばるる夫を持てるなど、彼は今若き妻の黄金時代をば夢むる如く
 樂めるなり。實げに世間の娘の想ひに想ひ、望みに望める絶頂は正まさに己おのれのこの身の上なる哉かな、
 と宮は不覺胸そぞろに浮べたるなり。

嗟あ乎、おのれもこの身の上を願ひに願ひし余あまりに、再び得難き恋人を棄てにしよ。されど
 も、この身の上に窮きはめし樂も、五年いつとせの昔なりける今日の日に窮きはめし悲かなしみに易かふべきものは
 あらざりしを、と彼は苦しげに太息ためいきしたり。今にして彼は始めて悟りぬ。おのれのこの
 身の上を願ひしは、その恋人と俱ともに同じき樂たのしみを享うけんと願ひしに外ならざるを。若もし身の
 樂たのしみと心の樂たのしみとを併あはせせうくべき幸さち無くて、必ずその一つを損えらぶべきものならば、孰いづれを取るべ
 きかを知ることの晩おそかりしを、遣方やるかたも無く悔ゆるなりけり。

この寒き日をこの煖あたき室かしつに、この焦るる身をこの意中の人に並べて、この誠をもてこの
 恋しさを語らば如何いかに、と思到れる時、宮は殆ど裂けぬべく胸を苦く覚えて、今の待つ身
 は待たざる人を待つ身なる、その口惜くちをしさを悶もたえては、在るにも在られぬ椅子を離れて、
 歩み寄りたる窓の外そと面を何心無く打見遣れば、いつしか雪の降出でて、薄白く庭に敷ける

なり。一月十七日なる感はいと劇く動きて、宮は降頻る雪に或言を聴くが如く佇めり。折から唯繼は還来りぬ。静に啓けたる闥の響は絶に物思へる宮の耳には入らざりき。氷の如く冷徹りたる手をわりなく懷に差入れらるるに驚き、咄嗟と見向かんとすれば、後より緊と抱へられたれど、夫の常に飮める香水の薫は隠るべくもあらず。

「おや、お帰来でございましたか」

「寒かつたよ」

「大相降つて参りました、さぞお困りでしたらう」

「何だか知らんが、むちやくちやに寒かつた」

宮は楽椅子を夫に勧めて、躬は煖炉の薪をべたり。今の今まで貫一が事を思窮めたりし心には、夫なる唯繼にかく事ふるも、なかなか道ならぬやうにて屑からず覚ゆるなり。窓の外に降る雪、風に乱るる雪、梢に宿れる雪、庭に布く雪、見ゆる限の白妙は、我身に積める人の怨の丈かとも思ふに、かくてあることの疚しき、切なさは、脂を搾らるやうにも忍び難かり。されども、この美人の前にこの雪を得たる夫の得意は限無くて、その脚を八文字に踏展け、漸く煖まれる頤を突反して、

「ああ、降る降る、面白い。かう云ふ日は寄鍋で飲むんだね。寄鍋を取つて貰はう、寄

鍋が好い。それから珈琲を一つ拵へてくれ、コニヤックを些と余計に入れて」

宮の行かんとするを、

「お前、行かんでも可いぢやないか、要る物を取寄せてここで拵へなさい」

彼の電鈴を鳴して、火の傍に寄来ると齊く、唯継はその手を取りて小脇に挟みつ。宮は憚る気色も無くて、彼の為すに任するのみ。

「おまへどうした、何を鬱いでゐるのかね」

引寄せられし宮はほとほと仆れんとして椅子に支へられたるを、唯継は鼻も摩るばかりにその顔を差覗きて余念も無く見入りつつ、

「顔の色が甚だ悪いよ。雪で寒いんで、胸でも痛むんか、頭痛でもするんか、さうも無い？ どうしたんだな。それぢや、もつと爽然してくれんぢや困るぢやないか。さう陰気

だと情合が薄いやうに想はれるよ。一体お前は夫婦の情が薄いんぢやあるまいかと疑ふよ。ええ？ そんなことは無いかね」

忽ち闔の啓くと見れば、仲働の命ぜし物を持来れるなり。人目を憚らずその妻を

愛するは唯継が常なるを、見苦しと思ふ宮はその傍を退かんとすれど、放たざるを例の事として仲働は見ぬ風しつつ、器具と壇とをテエブルに置いて、直に退り出でぬ。かく執念

く愛せらるるを、宮はなかなか憂くも浅ましくも思ふなりけり。

雪は風を添へて搔^{かき}乱^{みだ}し搔^{かき}乱^{みだ}し降^{ふり}頻^{しき}りつつ、はや日暮れなんとするに、楽^{やう}き夜^やの漸^{やう}く来^{きた}れるが最^{いと}辱^{かたじけな}き唯^{ただ}継^{つぎ}の目^め尻^{しり}なり。

「近頃はお前別して鬱^{おれ}いでをるやうぢやないか、俺にはさう見えるがね。さうして内にばかり引籠^{ひっこ}んでをるのが宜^{よろ}くないよ。この頃は些^{ちよつ}とも出掛^{でかけ}けんぢやないか。さう因^{いん}循^{じゆん}してをるから、益^{ます}す陰^{かげ}氣^きになつて了^{しま}ふのだ。この間も鳥柴^{としば}の奥^{おく}さんに会^あつたら、さう言^いつてゐたよ。何^な為^ぜ近頃は奥^{おく}さんは些^{ちよつ}ともお見^みえなさらんのだらう。芝居^{まわ}ぐらゐにはお出掛^{でかけ}になつても可^べきさうなものだが、全^{まる}然^{ごと}影^{かげ}も形^{かたち}もお見^みせなさらん。なんぼお大事^{だいじ}になさるつて、そんなに仕舞^{しま}込んでお置^おきなさるものぢやございませぬ。慈^{ひと}善^との為^{ため}に少しは衆^{しゆ}にも見^みせてお遣^やなさい、なんぞと非常^{ひじょう}に遣^やられたぢやないか。それからね、知^しつてをる通り、今度の選挙^{せんぎょ}には実^{じつ}業^{ぎやう}家^かとして福^{ふく}積^{しき}が当^あ選^{せん}したらう。俺も大^{おほ}いに与^{あづか}つて尽^{じん}力^{りき}したんさ。それで近日^{きんじつ}当^あ選^{せん}祝^{しゆ}があつて、それが済^す次^じ第^{だい}別^{べつ}に慰^ゐ労^{らう}会^{かい}と云^いふやうな名^なで、格^{かく}別^{べつ}尽^{じん}力^{りき}した連^{れん}中^{ちゆう}を招^{まね}待^{たい}するんだ。その席^{しやく}へは令^{れい}夫^ふ人^{にん}携^{けい}帯^{たい}といふ訳^{わけ}なんだから、是非^{ぜひ}お前も出^でなければならぬ。驚^{おどろ}くよ。俺の社会^{しやかい}では富^ふ山^{さん}の細^こ君^{くん}と来^きたら評^{へい}判^{はん}なもんだ。会^{かい}つたことの無^ない奴^{やつ}まで、お前の事^{こと}は知^しつてをるんさ。そこで、俺は実^{じつ}は自^じ慢^{まん}でね、さう評^{へい}判^{はん}になつて見^みると、

軽々しく出行でかれるのも面白くない、余り顔を見せん方が見識よが好いけれど、然し、近頃のやうに籠こもつてばかり居をるのは、第一衛生におまへ良くない。実は俺は日曜毎にお前を連れて出たいんさ。おまへの来た当座はさうであつたぢやないかね。子供を産んでから、さう、あれから半年はんとしばかり経たつてからだよ。余り出なくなつたのは。それでも随分あちこ彼地ち出たぢやないかね。

善し、珈琲カフェ出来たか。うう熱い、旨いうま。お前もお飲み、これを半分上げやうか。沢山だ？ それだからお前は冷淡で可かんと謂ふんさ。ぢや、酒の入らんのを飲むと可い。寄鍋まだは未か。うむ、彼方あつちに支度がしてあるから、来たら言ひに来る？ それは善い、西洋室の寄鍋なんかは風流でない、あれは長火鉢ながひばちの相對さしむかひに限るんさ。

可いかね、福積の招待しょうたいには吃驚びっくりさせるほど美しくして出て貰はなけりやならん。それで、着物だ、何か欲ければ早速拵こしらへへやう。おまへが、これならば十分と思ふ服装なりで、隆りゅうとして推出すんだね。さうしてお前この頃は余り服装なりにかまはんぢやないか、可かんよ。いつでもこの小紋の羽織ねぼの寐恍ねぼけたのばかりは恐れるね。何為なぜあの被風ひふを着ないのかね、あれは好く似合ふにな。

明後日あさっては日曜だ、何処どこかへ行かうよ。その着物を見に三井へでも行かうか。いや、さう

さう、柏原かしわばらの奥さんが、お前の写真を是非欲いと言つて、会ふ度に聒たびやかましく催促するんで克かなはんよ。明日あしたは用が有つて行かなければならんのだから、持つて行かんと拙まついて。未だ有つたね、無い？ そりや可かん。一枚も無いんか、そりや可かん。それぢや、明後日あさつて写しに行かう。直すつと若返つて二人で写すなんでも可いぢやないか。

善し、寄鍋が来た？ さあ行かう」

夫に引添ひて宮はこの室を出でんとして、思ふところありげに姑しばらく窓の外面そともを窺うかがひたりしが、

「どうしてこんなに降るのでせう」

「何を下くだらんことを言ふんだ。さあ、行かう行かう」

第三章

宮は既に富むと裕ゆたかなるとに鑒あきぬ。抑も彼がこの家に嫁とつぎしは、惑まどひ深ふかき娘氣の一図に、榮耀榮華えいようの欲するままなる身分を願ふを旨とするなりければ、始より夫の愛情の如きは、有るも善し、有らざるも更に善しと、殆ど無用の物のやうに輕かろしめたりき。今やその願

足りて、しかも遂に鑿きたる彼は、弥よ貪らるる愛情の煩きに堪へずして、寧ろ影を追ふよりも儚き昔の恋を思ひて、私に樂むの味あるを覺ゆるなり。

かくなりてより彼は自ら唯繼の面前を厭ひて、寂く垂籠めては、随意に物思ふを憚びたりしが、図らずも田鶴見の邸内に貫一を見しより、彼のさして昔に變らぬ一介の書生風なるを見しより、一度は絶えし恋ながら、なほ冥々に行末望あるが如く、さるは、彼が昔のままの容なるを、今もその独を守りて、時の到るを待つらんやうに思倣さるるなりけり。

その時は果して到るべきものなるか。宮は躬の心の底を叩きて、答を得るに沮みつつも、さすがに又己にも知れざる秘密の潜める心地して、一面には覺束なくも、又一面にはともかくにも信ぜらるるなり。

便ち宮の夫の愛を受くるを難堪く苦しと思知りたるは、彼の写真の鏡面の前に悶絶せし日よりにて、その恋しさに取迫めては、いでや、この富めるに鑿き、裕なるに倦める家を棄つべきか、棄てよとならば遅はじと思へるも屢々なりき。唯敢てこれを為ざるは、窃に望は繋けながらも、行くべき方の怨を解かざるを虞るる故のみ。

素より宮は唯繼を愛せざりしかど、決してこれを憎むとはあらざりき。されど今はし

も正にその念は起れるなり。自ら謂へらく、吾夫こそ当時恋と富との値を知らざりし己を欺き、空く輝ける富を示して、售るべくもあらざりし恋を奪ひけるよ、と悔の余はかかる恨をも他に被せて、彼は己を過りしをば、全く夫の罪と為せり。

この心なる宮はこの一月十七日に会ひて、この一月十七日の雪に会ひて、いとどしく貫一が事の忍ばるるに就けて転た悪人の夫を厭ふこと甚かり。無辜の唯継はかかる今宵の樂を授るこの美き妻を拝するばかりに、有程の誠を捧げて、蜜よりも甘き言の数々を咄きて止まざれど、宮が耳には人の声は聞えずして、雪の音のみぞいと能く響きたる。

その雪は明方になりて歇みぬ。乾坤の白きに漂ひて華麗に差出でたる日影は、漲るばかりに暖き光を鋪きて終日輝きければ、七分の雪はその日に解けて、はや翌日は往來の妨碍もあらず、処々の泥濘は打続く快晴の天に曝されて、刻々に乾き行くなり。この雪の為に外出を封ぜられし人は、この日和とこの道とを見て、皆怵へかねて昨日より出でしも多かるべし。まして今日となりては、手置の宜からぬ横町、不性なる裏通、屋敷町の小路などの氷れる雪の九十九折、或は捏返せし汁粉の海の、差掛りて難儀を極むるとは知らず、見渡す町通の乾々干に固れるに唆かされて、控へたりし人の出でざるはあらざらんやうに、往來の常より頻なる午前十一時といふ頃、屈み勝に疲れたる車夫は、

泥こつちの粉衣こなぎ掛けたる車輪くるまわを可惱なやましげに転まろして、黒綾くろあやの吾妻あづまコオト着て、鉄色てついろ縮緬ちりめんの頭づ巾きんを領えりに巻きたる五十路いそぢに近き賤いやしからぬ婦人を載せたるが、南の方かたより芝飯倉しばいいぐら通とおに來きかかりぬ。

唯とあ有る横町よこまちを西に切れて、某なにがしの神社しんじの石いしの玉垣たまがきに沿したがひて、だらだらと上る道狭のぼく、繁しげき木立きだちに南を塞ふさがれて、残れる雪の夥おびただし多おきが泥どろまじり交まじに踏散ふみされたるを、件くだんの車は曳えいといひき上げて、取着とつきに土塀どべいを由々ゆゆしく構かどへて、門かどには電燈でんとうを掲かげたる方にぞ入りける。

こは富山唯繼すまひが住居すまひにて、その女客にようきやくは宮が母なり。主あるじは疾とくに会社かいシャに出勤しゅつきんせし後のちにて、例たと刻きたに來れる髮結かへりゆの今方けふ歸かへり行ゆきて、まだその跡あとも掃かぬ程なり。紋羽もんは二重ふたへの肉色にくいろ鹿子かのこを掛けたる大円おほまる鬚わけより水は滴たるばかりに、玉たまの如ごとき喉のどを白絹しろきぬのハンカチハンカチフに巻まきて、風か邪氣ぜけなどにや、連しきりに打うち咳しはぶきつつ、宮は奥より出迎でむかひに見えぬ。その故ゆゑとも覺あえず余あまりに著しるき面おも贏やつは、唯一目ひとめに母が心を驚おどろかせり。

閑ひまある身なれば、宮は月々さ生家なまなる両親りやうしんを見舞みまひ、母も同じほど訪とひ音おとづるるをば、此こ上よ無なき隱居いんこの保養ほやうと為るなり。信まことに女親にようしんの心は、娘の身の定さだりて、その家榮けいえ、その身安しんあん泰たいに、しかもいみじう出世しゅっせしたる姿を見るに増まして樂たのまざる事はあらざらん。彼は宮を見る毎おほいに大なる手柄てしなをも成なしたらんやうに吾われが識しれるほどの親おやといふ親は、皆才みな覺しる無く、

仕合しあはせ薄はくくて、有あり様は氣の毒なる人達哉、と漫そぞろに己の誇からるるなりけり。されば月毎に彼が富山の門かどに入るは、正まじに人の母たる成功の凱旋門がいせんもんを過する心地もすなるべし。

可なつかし懷なつかきと、嬉うれきと、猶なほ今一つとにて、母は得いそいそ々と奥に導ひれぬ。久く垂籠たれこめて友欲ともき宮は、拯すくを得たるやうに覺えて、有るまじき事ながら、或は密ひそかに貫一の報を齎もたらせるにはあらずやなど、枉まげても念じつつ、せめては愁うれひに閉ぢたる胸を姑しばくも寛ゆるうせんとするなり。

母は語るべき事の日頃蓄へたる数々を措おきて、先づ宮が血色の氣遣きづかはし衰へたる故を詰なりぬ。同じ事を夫にさへ問れしを思合せて、彼はさまでに己の羸やつれたるを懼おそれつつも、

「さう？　でも、何処どこも悪い所なんぞ有りはしません。余り体あんまを動いかさないから、その所せ為みかも知れません。けれども、この頃は時々氣が鬱ふさいで鬱ふさいで耐たまらない事があるの。あれは血の道と謂いふんでせうね」

「ああ、それは血の道さ。私なんぞも持病にあるのだから、やつぱりさうだらうよ。それでも、それで瘦せるやうぢや良くないのだから、お医者に診みてもらふ方が可いいよ、放はなつて措おくから畢ひつきよう竟持病にもなるのさ」

宮は唯うなづ頷うなづきぬ。

母は不図思起してや、さも慌忙あわただしげに、

「後が出来たのぢやないかい」

宮は打笑^{うちゑ}みつ。されども例の可羞^{はづか}しとはあらで 傍^{かたはら}痛^{いた}き余を微見^{ほのみ}せしやうなり。

「そんな事はありませんわ」

「さう何日^{いっ}までも沙汰^{さた}が無くちや困るぢやないか。本当に未だ^まそんな様子は無いのかえ」

「有りはしませんよ」

「無いのを手柄にでもしてゐるやうに、何だね、一人はもう無くてどうするのだらう、先へ寄つて御覧、後悔を為るから。本当なら二人ぐらゐ有つて好い時分なのに、あれきり後が出来ないとところを見ると、やつぱり体が弱いのだね。今の内養生して、丈夫にならなくちや可けないよ。お前はさうして平気で、いつまでも若くて居る氣なのだらうけれど、本宅の方なんぞでも後が後がつて、どんなに待兼ねてお在^{いで}だか知れはしないのだよ。内ぢや又阿父^{おとつ}さんは、あれはどうしたと謂ふんだらう、情無い奴だ。子を生み得ないのは女の恥だつて、慍^{おこ}りきつてゐなさるくらゐだのに、当人のお前と云つたら、可厭^{いや}に落着いてゐるから、憎らしくてなりはしない。さうして、お前は先^{せん}の内は子供が所好^{すき}だつた癖に、自分の子は欲くないのかね」

宮もさすがに当惑しつつ、

「欲くない事はありませんけれど、出来ないものは為方が無いわ」

「だから、何でも養生して、体を丈夫にするのが専だよ」

「体が弱いと言ひだけれど、自分には別段ここが悪いと思ふところも無いから、診てもらふのも変だし……けれどもね、阿母さん、私は疾から言はうと思つてゐたのですけれど、実は氣に懸る事があつてね、それで始終何だか心持が快くないの。その所為で自然と体も良くないのかしらんと思ふのよ」

母のその目は瞪り、その膝は前み、その胸は潰れたり。

「どうしたのさ!」

宮は俯きたりし顔を寂しげに起して、

「私ね、去年の秋、貫一さんに逢つてね……」

「さうかい!」

己だに聞くを憚る秘密の如く、母はその応ふる声をも潜めて、まして四辺には油断もあらぬ氣勢なり。

「何処で」

「内の方へも全然爾來の様子^{まるきあれから}は知れないの?」

「ああ」

「些ちつとも？」

「ああ」

「どうしてゐると云ふやうな話も？」

「ああ」

かく纔わづかに応ふるのみにて、母は自ら湧わせる万感の渦の裏うちに陥りてぞゐたる。

「さう？ 阿父おとつさんは内証で知つてお在いぢやなくて？」

「いいえ、そんな事は無いよ。何処で逢つたのだえ」

宮はその梗概あらましを語れり。聴ゐる母は、彼の事無くその場を遁のがれ得てし始末を詳つまびらかにするを俟まちちて、始めて重荷を下したるやうに、と息を咆つきぬ。実に彼は熱海の梅園にて膩あぶら汗あせを搾しぼられし次手悪さを思合せて、憂き目を重ねし宮が不幸を、不愍ふびんとも、慘いぢらしとも、今更に親心を傷いたむるなりけり。されども過ぎしその事よりは、為に宮が前途に一大障礙しょうがいあるあるひきたの或は来るべきを案じて、母はなかなか心穩ならず、

「さうして貫一はどうしたえ」

「お互に知らん顔をして別れて了つたけれど……」

「ああそれから？」

「それきりなのだけれど、私は気になつてね。それも出世して立派になつてゐるのなら、さうも思はないけれど、つまらない風采なりをして、何だか大変羸やつれて、私も極きまりが悪かつたから、能くは見なかつたけれど、気の毒のやうに身み窄すぼい様子だつたわ。それに、聞けばね、番町の方の鰐わに淵ぶちとかいふ、地面や家作なんぞの世話をしてゐる内に使はれて、やつぱり其処そこに居るらしいのだから、好い事は無いのでせう、ああして子供の内から一いつしよ処に居た人が、あんなになつてゐるかと思ふと、昔の事を考へ出して、私は何だか情無くなつて……」

彼は襦じゆ袷ばんの袖そでの端はしに窃そと睚まふをたりて、

「好い心持はしないわ、ねえ」

「へええ、そんなになつてゐるのかね」

母の顔色も異あやし寒ささにや襲おもはるると見えぬ。

「それまでだつて、憶おもひださない事は無いけれど、去年逢つてからは、毎日のやうに気になつて、可厭いやな夢なんぞを度々たびたび見るの。阿父おとつさんや、阿母おつかさんに会ふ度に、今度は話さう、今度は話さうと思ひながら、私の口からは何と無く話はなし難にくいやうで、実は今まで言はずに

ゐただけれど、その事が初中終苦になる所為で氣を傷めるから体にも障るのぢやないかと、さう想ふのです」

思凝 おもひこら せるやうに母は或方を見据ゑつつ、言は無くして頷きゐたり。

「それで、私は阿母さんに相談して、貫一さんをどうかして上げたいの——あの時にそんな話も有つたのでせう。さうして依旧鳴沢の跡は貫一さんに取して下さいよ、それなくて私の氣が済まないから。今までは行方が知れなかつたから為方がないけれど、聞合せば直に分るのだから、それを抛つて措いちや此方が悪いから、阿父さんにでも会つて貰つて、何とか話を付けるやうにして下さいな。さうして從來通に内で世話をして、

どんなにもあの人の目的を達しとして、立派に吾家の跡を取して下さい。私はさうしたら兄弟の盃をして、何処までも生家の兄さんで、未始終力になつて欲しいわ」

宮がこの言は決して内に自ら欺き、又敢て外に他を欺くにはあらざりき。影とも儚く隔の関の遠き恋人として余所に朽さんより、近き他人の前に己を殺さんぞ、同く受くべき苦痛ならば、その忍び易きに就かんと冀へるなり。

「それはさうでもあらうけれど、随分考へ物だよ。あのひとの事なら、内でも時々話が出て、何処にどうしてゐるかしらんつて、案じないぢやないけれど、阿父さんも能くお言ひ

のさ、如何に何だつて、余り貫一の仕打が憎いつて。成程それは、お前との約束ね、それを反古にしたと云ふので、^{ほご}齡の若いものの事だから腹も立たう、立たうけれど、お前自分の身の上も些は考へて見るが可いわね。^{ちつと}子供の内からああして世話になつて、全く内のお蔭でともかくもあれだけでもなつたのぢやないか、その恩も有れば、義理も有るのだらう。そこ所を些と考へたら、あれぎり家出をしてふなんて、あんなまあ面抵がましい仕打振をするつてが有るものかね。

それぢやあの約束を反古にして、もうお前には用は無いからどうでも独で勝手に為るが可い、と云ふやうな不人情なことを仮初にも為たのぢやなし、鳴沢の家は譲らうし、所望なら洋行も為せやうとまで言ふのぢやないか。それは一時は腹も立たうけれど、好く了簡して前後を考へて見たら、万更訳の解らない話をしてゐるのぢやないのだもの、私達の顔を立ててくれたつて、そんなに罰も当りはしまいと思ふのさ。さうしてお剰に、阿父さんから十分に訳を言つて、頭を低げないばかりにして頼んだのぢやないかね。だから此方には少しも無理は無い筈だのに、貫一が余り身の程を知らな過ぎるよ。

それはね、阿父さんが昔あの人のお世話になつた事があるさうさ、その恩返なら、行処の無い軀を十五の時から引取つて、高等学校を卒業するまでに仕上げたから、それ

で十分だらうぢやないか。

全く、お前、貫一の為方しかたは増長してゐるのだよ。それだから、阿父さんだつて、私だつて、ああされて見ると決して可愛かはゆくはないのだからね、今更此方こつちから搜出して、とやかう言ふほどの事はありませんよ。それぢや何ぼ何でも不見識とやらぢやないか」

その不見識とやらを嫌きらふよりは、別に嫌きらふべく、懼おそるべく、警いましむべき事あらずや、と母は私ひそに慮おもひはかはは私はに慮おもひれるなり。

「阿父さんや阿母さんおつの身になつたら、さう思ふのは無理も無いけれど、どうもこのままぢや私が済まないんですもの。今になつて考へて見ると、貫一さんが悪いのでなし、阿父さん阿母さんが悪いのでなし、全く私一人が悪かつたばかりに、貫一さんには阿父さん阿母さんを恨ませるし、阿父さん阿母さんには貫一さんを悪く思はせたのだから、やつぱり私が仲へ入つて、元々通に為なければ済まないと思ふんですから、貫一さんの悪いのは、どうぞ私に免じて、今までの事は水に流して了つて、改めて貫一さんを内の養子にして下さいな。若しさうなれば、私もそれで苦勞なくが滅なるのだから、きつと体も丈夫になるに違無いから、是非さう云ふ事に阿父さんにも頼んで下さいな、ねえ、阿母さん。さうして下さらないと、私は段々体を悪くするわ」

かく言出でし宮が胸は、ここに尽くその罪を懺悔ざんげしたらんやうに、多少の涼きを覚ゆるなりき。

「そんなに言ふのなら、還かへつて阿父さんに話をして見やうけれど、何もその所為せみで体が弱くなると云ふ訳も無かりさうなものぢやないか」

「いいえ、全くその所為よ。始終そればかり苦になつて、時々考込むと、実に耐たまらない心持になることがあるんですもの、この間逢ふ前まではそんなでもなかつたのだけれど、あれから急に——さうね、何と謂いつたら可いのだらう——私ふしがあんなに不仕合ふしあはせな身分にしましめて了つたさう思つて、さぞ恨んでゐるだらうと、氣の毒のやうな、可おそろし恐いやうな、さうして、何と無く私は悲くてね。外ほかには何も望は無いから、どうかあの人だけは元のやうにして、あの優しい氣立で、未始終阿父さんや阿母さんの世話をして貰つたら、どんなに嬉うれしからうと、そんな事ばかり考へては鬱ふさいであるのです。いづれ私からも阿父さんに話をしますけれど、差さしあたり当阿母さんから好くこの訳をさう言つて、本当に頼んで下さいな。私

二三日の内にいきますから」

されども母は投首なげくびして、

「私の考かんがへ量ぢや、どうも今更ねえ……」

「阿母さんは！ 何もそんなに貫一さんを悪く思はなくたつて可いわ。折角話をして貰はうと思ふ阿母さんがさう云ふ氣ぢや、とても阿父さんだつて承知をしては下さるまいから……」

「お前がそれまでに言ふものだから、私は不承知とは言はないけれど……」

「可いの、不承知なのよ。阿父さんもやつぱり貫一さんが憎くて、大方不承知なんでせうから、私は憑^{あて}拠^{あて}にはしないから、不承知なら不承知でも可いの」

涙^{なみだぐ}含^{なみだぐ}みつつ宮^{みや}が焦^{せき}心^{こころ}になれるを、母は打惑^{うちごころ}ひて、

「まあ、お聞きよ。それは、ね、……」

「阿母さん、可いわ——私、可いの」

「可^よかないよ」

「可^よかなくつても可いわ」

「あれ、まあ、……何だね」

「どうせ可いわ。私の事はかまつてはおくれでないのだから……」

我^{われ}にもあらで迸^{ほとばし}る泣^{なみだ}声を、つと袖^{そで}に抑^{おさ}へても、宮^{みや}は急^{せき}来^きる涙^{なみだ}を止^{とど}めかねたり。

「何もお前、泣くことは無いぢやないか。可笑^{をかし}な人だよ、だからお前の言ふことは解^とつて

ゐるから、内へ帰つて、善く話をした上で……」

「可いわ。そんなら、さうで私にも了簡りようけんがあるから、どうとも私は自分で為るわ」

「自分でそんな事を為るなんて、それは可くないよ。かう云ふ事は決してお前が自分で為ることぢやないのだから、それは可けませんよ」

「……………」

「帰つたら阿父おとつさんに善く話を為やうから、……泣くほどの事は無いぢやないかね」

「だから、阿母おつかさんは私の心を知らないのだから、頼効たのみがひが無い、と謂いふのよ」

「多度たんとお言ひな」

「言ふわ」

真顔まへん作れる母は火鉢ひばちの縁ふちに丁とんと煙管きせるを撃はたけば、他行持よそゆきもちの暫しばく乾からされて弛ゆるみし雁首がんくびは
ほつくり脱けて灰の中に舞込みぬ。

第四章

頭部に受けし貫一くわんいちが挫傷ざしやうは、危あやふくも脳膜炎脳膜炎を続発せしむべかりしを、肢体したいに数個すかしよ所の

傷部とともに、その免るべからざる若干の疾患を得たりしのみにて、今や日増に康復の歩を趁ひて、可艱しげにも自ら起居を扶け得る身となりければ、一日一夜を為す事も無く、ベッドの上に静養を勉めざるべからざる病院の無聊をば、殆ど生きたがら葬られたらんやうに倦み困じつつ、彼は更にこの病と相關する如く、関せざる如く併発したる別様の苦悩の為に侵さるるなりき。

主治医も、助手も、看護婦も、附添婆も、受附も、小使も、乃至患者の幾人も、皆目を側めて彼と最も密なる関係あるべきを疑はざるまでに、満枝の頻繁病を訪ひ来るなり。三月にわたる久きをかのみ姿の絶えず出入するなれば、噂は自から院内に播りて、博士の某さへ終に唆されて、垣間見の歩をここに枉げられしとぞ伝へ侍る。始の程は何者の美形とも得知れざりしを、医員の中に例の困められしがありて、名著の美人クリムと洩せしより、いとど人の耳を驚かし、目を悦す種とはなりて、貫一が浮名もこれに伴ひて唱はれけり。

さりとは彼の暁るべき由無けれど、何の廉もあらむに足近く訪はるるを心憂く思ふ余に、一度ならず満枝に向ひて言ひし事もありけれど、見舞といふを陽にして訪ひ来るなれば、理として好意を拒絶すべきにあらず。さは謂へ、こは情の掛※と知れば、又甘んじて受く

べきにもあらず、しかのみならで、彼は素より満枝の爲ひととなり、人を悪みて、その貌かたちの美きを見ず、その思切なるを汲まんとせざるに、猶なほかつ主ぬしある身の謬あやまりて仇名あだなもや立たばなど氣遣きづかはるるに就けて、貫一は彼の入来いりくるに会へば、冷き汗の湧出わきいつるとともに、創所きずしよの邊にはかうづに疼いたき立ちて、唯ただ異あやしくも己おのれなる者の全く痺しびらさるるに似たるを、吾ながら心弱しと尤とがむれども効無かひかりけり。実に彼は日頃この煩わづらひを逃れん為に、努めてこの敵を避けてぞ過せし。今彼の身は第二医院の一室に密封せられて、しかも隠るる所無きベッドの上に横よこたえられれば、宛然さながら俎板まないたに上れる魚の如く、空く他の為すに委まかするのみなる仕合しあはせを、搔かきむ搔むらんとばかりに悶もだゆるなり。

かかる苦くるしき枕頭まくらもとに彼は又驚くべき事実を見出しつつ、翻ひるがへつて己を顧れば、測らざる累かさねの既に逮およべる迷惑は、その藁蒲団わらぶとんの内に針の包れたる心地して、今なほ彼の病むと謂はば、恐くは外に三分さんぶを患わづらひて、内に却かへつて七分しちぶを憂ふるにあらざらんや。貫一もそれをこそ懸念けねんせしが、果して鰐淵わにぶちは彼と満枝との間を疑ひ初めき。彼は又鰐淵の疑へるに由りて、その人と満枝との間をも略推ぼしういし得たるなり。

例わづらしの煩わづらしき人は今日も訪とひ来きつ、しかも仇あだならず意を籠めたりと覺おぼし見舞物など持ちて。はや一時間余を過せども、彼は枕頭に起ちつ、居つして、なかなか帰り行くべくも見えず。

貫一は寄付けじとやうに彼方あなたを向きて、覚めながら目を塞ふさぎていと静に臥ふしたり。附添つきそひ
 婆ばばの折はから出行いでゆきしを候うかがひて、満枝は椅子を躍にじり寄せつつ、

「間さん、間さん。貴方あなた、貴方あなた」

と枕はしの端を指もて音なへど、眠れるにもあらぬ貫一は何の答をも与へず、満枝は起ちて
 ベッドの彼方あなたへ廻り行きて、彼の寐顔ねがほを差覗さしのぞきつ。

「間さん」

猶答へざりけるを、軽く肩の辺あたりうごかを撼せば、貫一はさるをも知らざる為まねはしかねて、始め
 て目を開きぬ。彼はかく覚めたれど、満枝はなほ覚めざりし先の可懐なつかしげに差寄りたる態かたち
 を改めずして、その手を彼の肩に置き、その顔を彼の枕に近けたるまま、

「私貴方わたくしに些ちよつとお話をして置かなければならない事があるのでございますから、お聞き下
 さいまし」

「あ、まだ在あらしつたのですか」

「いつも長居を致して、さぞ御迷惑でございませう」

「……………」

「外でもございせんが……」

彼の隔無く身近に狎るるを可忌しと思へば、貫一はわざと寐返りて、椅子を置きたる方に向直り、

「どうぞ此方へ」

この心を曉れる満枝は、飽くまで憎き事為るよと、持てるハンカチーフにベッドを打ち、かくまでに遇はれながら、なほこの人を慕はでは已まぬ我身かと、効無くも余に軽く弄ばるるを可愧うて佇みたり。されども貫一は直に席を移さざる満枝の為に、再び言を費さんとも為ざりけり。

氣嵩なる彼は胸に余して、聞えよがしに、

「あ、貴方には輕蔑されてゐる事を知りながら、何為私腹を立てることが出来ないのせう。実に貴方は！」

満枝は彼の枕を捉へて顫ひしが、貫一の寂然として眼を閉ぢたるに益苛ちて、
「余り酷うございますよ。間さん、何とか有仰つて下さいましな」

彼は堪へざらんやうに苦りたる口元を引歪めて、

「別に言ふ事はありません。第一貴方のお見舞下さるのは難有迷惑で……」

「何と有仰います！」

「以来はお見舞にお出で下さるのを御辞退します」

「貴方、何と……!!」

満枝は眉を昂^{まゆあ}げて詰^つ寄せたり。貫一は仰^{まなこ}ぎて眼を塞^{ふた}ぎぬ。

もと

素より彼の無愛相なるを満枝は知れり。彼の無愛相の己^{おのれ}に對しては更に甚^{はなは}きを加ふるを

も善く知れり。満枝が手管^{てくだ}は、今その外に顯^{おもてあらは}せるやうに決して内に怵^{こち}へかねたるにはあら

ず、かくしてその人と諍^{いさか}ふも、また慍^{かな}はざる恋の内に聊^{いささ}か樂む道なるを思へるなり。涙微^ほ

のあか

紅^{まぶた}めたる眶に耀^{かがや}きて、いつか宿^{あかつ}せる暁^{はなびら}の葩^{しとど}に露の津々なる。

「お内にも御病人の在るのに、早く歸つて上げたが可^わいぢやありませんか。私も貴方^{たくし}に度^た

びたび

々來て戴^{はなは}くのは甚^{はなは}だ迷惑なのですから」

「御迷惑は始から存じてをります」

「いいや、未だ外にこの頃があるので」

「ああ！ 鰐淵さんの事ではございませんか」

「まあ、さうです」

「それだから、私お話が有ると申したのではございせんか。それを貴方は、私と謂ふと何でも鬱陶^{うつと}しがつて、如何^{いか}に何でもそんなに作^なるものぢやございせんよ。その事ならば、

貴方が御迷惑遊ばしてゐらつしやるばかりぢやございません。私だつてどんなに窮つてをるか知れは致しません。この間も鰐淵さんが可厭なことを有仰つたのです。私些もかまひは致しませんけれど、さうでもない、貴方がこの先御迷惑あそばすやうな事があつてはと存じて、私それを心配致してをるくらゐなのでございます」

聴ゐざるにはあらねど、貫一は絶えて応答だに為ざるなり。

「実は疾からお話を申さうとは存じたのでございますけれど、そんな可厭な事を自分の口から吹聴らしく、却つて何も御存じない方が可からうと存じて、何も申上げずにをつたのでございますが、鰐淵様のかれこれ有仰るのは今に始つた事ではないので、もう私実に窮つてをるのでございます。始終好い加減なことを申しては遁げてをるのですけれど、鰐淵さんは私が貴方をこんなに……と云ふ事は御存じなかつたのですから、それで済んでをりましたけれど、貴方が御入院あそばしてから、私かうして始終お訪ね申しますし、鰐淵さんも頻繁いらつしやるので、度々お目に懸るところから、何とかお想ひなすつたのでございませう。それで、この間は到頭それを有仰つて、訳が有るなら有るで、隠さずに話をしろと有仰るのぢやございませんか。私為方がありませんから、お約束をしたと申して了ひました」

「え！」と貫一は繻帶ほうたいしたる頭を擡もたげて、彼の有為しつたりがほ顔を赦ゆるし難く打目うちまも戕せれり。満枝はさすが過あやまちを悔ふぜいいたる風情ふうせいにて、やをら左の袂たもとを膝ひざに搔載かきのせ、牡丹ぼたんの荅つぼみの如く揃そろへる紅絹裏もみうらの振ふりを弄まさぐりつつ、彼の咎とがめを懼おそる目遣めづかひしてゐたり。

「実に怪けしからん！　なことを有仰おつしやつたものです」
 萎しをる満枝を尻目に掛けて、

「もう可いから、早くお還り下さい」

彼を喝かつせし怒いかりに任せて、半起なかばしたりし体たいを投倒なげおせば、腰部ようぶの創所きずしよを強く抵あてて、得堪えたへず呻うめき苦むを、不意ふいなりければ満枝は殊ことに惑まどひて、

「どう遊どばして？　何処どこぞお痛みですか」

手早く夜着よぎを揚げんとすれば、払退はらひのけて、

「もうお還り下さい」

言放ちて貫一は例の背を差向けて、遽にはかに打鎮うちしづまりゐたり。

「私わたくし還りません！　貴方がさう酷く有仰おつしやれば、以上還りません。いつまでも居からられる軀からだではないのでございますから、順おとなしく還るやうにして還して下さいまし」

いとはしたなくて立てる満枝は闔ドアの啓あくに驚かされぬ。入来いりきたれるは、附添つきそひ婆ばか、あ

らず。看護婦か、あらず。国^{ドクトル}手の回診か、あらず。小使か、あらず。あらず！

胡麻塩羅紗の地厚なる二重外套^{にじゅうまわしまと}を絡^{まと}へる魁肥^{かいひ}の老紳士は悠然^{ゆうぜん}として入来^{いりきた}りしが、内の光景^{ありさま}を見ると齊^{ひとし}く胸悪^{むしや}き色はつとその面^{おもて}に出^いでぬ。満枝は心に少^{すこ}く慌^{あわ}てたれど、さしも頭^{あは}さで、雍^{しや}かに小腰^{こが}を屈^かめて、

「おや、お出^{いで}あそばしまし」

「ほほ、これは、毎度お見舞下さつて」

同^{いんぎん}く慇懃^{いんぎん}に会釈^{かいせき}はすれど、疑^ぎも無く反對^{はんたい}の意^いを示^しせる金壺^{かなつぼ}眼^{まなこ}は光^{ひかり}を逞^{たくま}しう女の横顔^{よこがほ}を瞥^{ひら}見^みせり。静^{しず}に臥^ふしたる貫一^{くわんいち}は発^{はつ}作^{さく}の来^{きた}れる如^{ごと}き苦惱^{くなう}を感じ^{かん}じつつ、身^みを起^たして直行^{ただゆき}を迎^{むか}ふれば、

「どうぢやな。好^ええ方^{かた}がお見舞^{みまひ}に來^きてを^をつて下^{くだ}さる^るで、可^ええの」

打付^{うちつけ}に過^こぎし言^{ことば}を二人^{ふに}ともに快^かからず思^{おも}へば、頓^{とん}に答^{こた}は無^なくて、その場^ばの白^{しろ}けたるを、さこそと謂^いはんやうに直行^{ちゆく}の独^{ひとり}り笑^{わら}ふなりき。如何^{いか}に答^{こた}ふべきか。如何^{いか}に言^い釈^{せき}くべきか、如何^{いか}に処^はすべきかを思^{おも}ひ煩^{わづら}へる貫一^{くわんいち}は艱^{むづ}しげなる顔^{かほ}を稍^{やや}内^{うち}向^むけたるに、今はなかなか悪^{わる}怖^{おそ}れもせで満枝^{まんし}は椅子^{いす}の前^{まえ}なる手^て炉^ろに寄^よりぬ。

「然^{しか}しお宅^{たく}の御都合^{ごごうご}もあるぢやらうし、又^{また}お忙^{せは}しいところを度々^{たびたび}お見舞^{みまひ}下^{くだ}されては痛^{いた}み入^いり

ます。それにこれの病氣も最早快^よくなるばかりじやで御心配には及ばんで、以来お出^いで下さるのは何分お断り申しまする」

言^{いひくろ}黒めたる邪魔立を満枝は面憎^{つらく}がりて、

「いいえ、もうどう致しまして、この御近辺まで毎々次手^{ついで}がありますのでございますから、その御心配には及びません」

直行^{まなこ}の眼は再び輝けり。貫一^{なまじひ}は愁^{くるし}に彼を窺^{くろし}めじと、傍^{かたはら}より言^{ことば}を添へぬ。

「毎度お訪ね下さるので、却^{かへ}つて私は迷惑^{わたくし}致すのですから、どうか貴方^{しかるべく}から可然^{しかるべく}御断り下さるやうに」

「当人もお氣の毒に思うてあの様に申すで、折角ではありませんけど、決して御心配下さらんやうに、のう」

「お見舞に上りましてはお邪魔になります事ならば、私差控^{わたくし}へませう」

満枝は色^なを作して直行^{うちみや}を打見遣りつつ、その面^{おもて}を引^{ひきめぐら}廻^{まわ}して、やがて非ぬ方^{あらかた}を目成^{まも}りたり。

「いや、いや、な、決して、そんな訳ぢや……」

「余^{あんな}りな御挨拶^{おはしめ}で！ 女^{おんな}だと思^{おも}召^{めしめ}して有^{おつしや}仰^{おつしや}るのは存^{ぞん}じませんが、それまでのお指図^{さしづ}

は受けませんで宜うございます」

「いや、そんなに悪う取られては甚だ困る、畢 竟 貴方の為を思ひますじやに困つて…

…」

「何と有仰います。お見舞に出ますが、何で私の不為になるのでございませう」

「それにお心着が無い？」

その能く用ゐる微笑を弄して、直行は巧に温顔を作れるなり。

満枝は稍急立ちぬ。

「ございません」

「それは、お若いでさう有らう。甚だ失敬ながら、すいぢや申して見やう。な。貴方もお若けりや間も若い。若い男の所へ若い女子が度々出入したら、そんな事は無うても、人がかれこれ言ひ易い、可えですか、そしたら、間はとにかくじや、赤檉様と云ふ者のある貴方の軀に疵が付く。そりや、不為ぢやありますまいか、ああ」

陰には己自ら更に甚き不為を強ひながら、人の口といふもののかくまでに重宝なるが可笑し、と満枝は思ひつつも、

「それは御深切に難有う存じます。私はとにかく、間さんはこれから美しい御妻君をお

持ち遊ばす大事のお軀からだでゐらつしやるのを、私のやうな者の為に御迷惑遊ばすやうな事が御座いましては何とも済みませんですから、私これから自つし今慎みますでございます」

「これは太えらい失敬なことを申しましたに、早速お用ゐなさつて難有い。然し、間も貴方のやうな方と嘘うそにもかれこれ言いはるるんぢやから、どんなにも嬉しいぢやらう、私のやうな老人ぢやつたら、死ぬほどの病氣したて、赤檉さんは訪ねても下くださりや為すまいにな」

貫一は苦々しさに聞かざる為まねしてゐたり。

「そんな事が有るものでございますか、お見舞に上りますとも」

「さやうかな。然し、こんなに度々来ては下くださりやすまい」

「それこそ、御妻君が在あつしやるのですから、余り頻しげしげ繁上りますと……」

後は得言はで打笑める目元の媚こび、ハンカチーフを口くち蔽おほひにしたる羞はぢ含がましさなど、直行はふと目を奪はれて、飽かず覚ゆるなりき。

「はッ、はッ、はッ、すぢや細君が無いで、ここへは安心してお出いでかな。私わしは赤檉さんの処へ行つて言ひますぞ」

「はい、有おつしや仰つて下さいまし。私わたくし此方へ度々お見舞に出ますことは、宅でも存じてをるのでございますから、唯今も貴方あなたから御注意を受けたのでございしますが、私も用を抱へて

をる体でかうして上りますのは、お見舞に出なければ済まないと考へまする訳がございまして、その実、上りますれば、間さんは却つて私の伺ふのを懊惱く思召してゐらつしやるのですから、それは私のやうな者が余り参つてはお目障か知れませんが、外の事ではなし、お見舞に上るのでございますから、そんなに作らなくても宜いではございせんか。

然し、それでも私氣に懸つて、かうして上るのは、でございます、宅へお出になつた御帰途にこの御怪我なでございませう。それに、未だ私済みません事は、あの時大通の方をお帰りあそばすと有仰つたのを、津守坂へお出なさる方がお近いとさう申してお勧め申すと、その途でこの御災難でございませう。で私考へるほど申訳が無くて、宅でも大相氣に致して、勉めてお見舞に出なければ済まないと申すので、その心持で毎度上るのでございますから、唯今のやうな御忠告を伺ひますと、私実に心外なのでございます。そんなにして上れば、間さんは間さんでお喜が無いのでございませう」

彼はいと辛しとやうに、恨しとやうに、さては悲しとやうにも直行を視るなりけり。直行は又その辛し、恨し、悲しとやうの情に堪へざらんとする満枝が顔をば、竊に金壺ひそかなつばまなの一角を溶しつづ眺入るにぞありける。

「さやうかな。如何^{いか}さま、それで善う解りましたじや。太^{えら}い御深切な事で、間もさぞ満足ぢやらうと思ひまする。又私^{わし}からも、そりや厚うお礼を申しまするじや、で、な、お礼はお礼、今の御忠告は御忠告じや、悪う取つて下さつては困る。貴方がそんなに念^{おも}うて、毎々お訪ね下さると思や、私も実に嬉しいで、折角の御好意をな、どうか卻^{しりぞく}るやうな、失敬なことは決して言ひたうはないんじや、言ふのはお為を念ふからで、これもやつぱり年寄役なんぢやから、捨てて措^おけんで。年寄と云ふ者は、これでとかく嫌^{きら}はるるじや。貴方もやつぱり年寄はお嫌ひぢやらう。ああ、どうですか、ああ」

赤^{あか}髭^{ひげ}を拈^{ひね}り拈^{ひね}りて、直行は女の氣色^{けしき}を偷^{ぬす}み視^みつ。

「さやうでございます。お年寄は勿^{もちろん}論結構でございますけれど、どう致しても若いものは若い同士の方が氣が合ひまして宜いやうでございますね」

「すぢやて、お宅の赤檉^{せき}さんも年寄でせうが」

「それでございますから、もうもう口^{くちや}喧^{かまし}くてなりませんのです」

「ぢや、口喧^{くちや}うも、氣^き難^{むづかし}うもなうたら、どうありますか」

「それでも私好きませんでございますね」

「それでも好かん？ 太^{えら}う嫌^{きら}うたもんですな」

「尤も年寄だから嫌ふ、若いから一概に好くと申す訳には参りませんでございます。いくら此方こつちから好きましても、他さきで嫌はれましては、何の効かひもございませんわ」

「さやう、な。けど、貴方あんたのやうな方が此方こつちから好いたと言うたら、どんな者でも可厭いや言ふ者は、そりや無い」

「あんな事を有仰おつしやつて！ 如何いかがでございますか、私そんな覚はございせんから、一向存じませんでございます」

「さやうかな。はッはッ。さやうかな。はッはッはッ」

椅子も傾くばかりに身を反そらして、彼はわざとらしく揺上ゆりあげ揺上ゆりあげて笑ひたりしが、

「間、どうぢやらう。赤檜さんはああ言うてをらるるが、さうかの」

「如何いかがですか、さう云ふ事は」

誰たれか鳥からすの雌雄しゆうを知らんとやうに、貫一は冷然として嘯うそぶけり。

「お前も知らんかな、はッはッはッはッ」

「私が自分にさへ存じませんものを、間さんが御承知有らう筈はずはございませんわ。ほほほほほほほ」

そのわざとらしさは彼にも遜ゆづらじとばかり、満枝は笑ひ囁はやせり。

直行が眼は誰を見るときも無くて独り耀けり。

「それでは私もうお暇を致します」

「ほう、もう、お歸去かな。私もはや行かん成らんで、其所まで御一処に」

「いえ、私些と、あの、西黒門町へ寄りますでございますから、甚だ失礼でござい
すが……」

「まあ、宜い。其処まで」

「いえ、本当に今日は……」

「まあ、宜いが、実は、何じや、あの旭座の株式一件な、あれがつい纏りさうぢやで、
この際お打合をして置かんと、『琴吹』の収債が面白い。お目に掛つたのが
幸ちやから、些とそのお話を」

「では、明日にでも又、今日は些と急ぎますでございますから」

「そんなに急にお急ぎにならんでも宜いがな。商売上には年寄も若い者も無い、さう嫌は
れてはどうもならん」

姑く推問答の末彼は終に満枝を拉し去れり。迹に貫一は悪夢の覚めたる如く連に太息
ついたりしが、やがて為ん方無げに枕に就きてよりは、見るべき物もあらぬ方に、止だ果

てしな
無く目を奪れるたり。

第五章

檜葉、樅などの古葉貧しげなるを望むべき窓の外に、庭ともあらず打荒れたる広場は、唯麗なる日影のみぞ饒に置余して、そこらの梅の点々と咲初めたるも、自ら怠り勝に風情作らずと見ゆれど、春の色香に出でたるは憐むべく、打霞める空に來馴るる鶉のいとどしく鳴頻りて、午後二時を過ぎぬる院内の寂々たるに、たまたま響くは患者の廊下を緩う行くなり。

枕の上の徒然は、この時人を圧して殆ど重きを覚えしめんとす。書見せると見えし貫一は辛うじて夢を結びゐたり。彼は実に夢ならでは有得べからざる怪き夢に弄ばれて、躬も夢と知り、夢と覺さんとしつつ、なほ睡の中に囚れしを、端無く人の呼ぶに駭かれて、漸く慵き枕を欹てつ。

愕然として彼は瞳を凝せり。ベッドの傍に立てるは、その怪き夢の中に顕れて、終始相離れざりし主人公その人ならずや。打返し打返し視れども訪來れる満枝に紛あらざ

りき。とは謂へ、彼は夢か、あらぬかを疑ひて止まず。さるはその真ならんよりなほ夢の中なるべきを信ずるの当れるを思へるなり、美しさも常に増して、夢に見るべき姿などのやうに四辺も可^{あたり}輝^{かがやかし}く、五六歳ばかりも若^{わかや}ぎて、その人の妹なりやとも見えぬ。まして、六十路に余れる夫有^{つまも}て身と誰^{たれ}かは想ふべき。

髪を台湾銀杏といふに結びて、飾^{かざり}とてはわざと本甲蒔絵の櫛^{くし}のみを挿^さしたり。黒^くろちりめん縮緬の羽織に夢想裏に光琳風の春の野を色入に染めて、納戸縞の御召の下に濃^こいあづき小豆の更紗縮緬、紫根七糸に樂器^{がっき}尽の昼夜帯して、半襟^{はんえり}は色糸の縫^{ぬい}ある肉色なるが、頸^{えり}の白きを匂^{にお}はすやうにて、化粧などもやや濃く、例の腕環のみは燦爛^{さんらん}と煩^{うるさ}し。今日は殊^{こと}に推^おして来にけるを、得堪^{えた}へず心の尤^{とが}むらん風情にて佇^{たたず}める姿限^{すがた}無く嬌^{なまめ}きて見ゆ。「お寝^{やすみ}のところを飛んだ失礼を致しました。私上^{わたくしあが}る筈^{はず}ではないのでございますけれど、是非申上げなければなりません事がございますので、些^{ちよつ}と伺^{うかが}ひましたのでございますから、今日^{こんにち}のところはどうか御堪^{ごかん}忍^{にん}あそばして」

彼の許^{ゆるし}を得んまでは席に着くをだに憚^{はばか}る如く、満枝は漂^{ただよ}しげになほ立てるなり。

「はあ、さやうですか。一昨々日あれ程申上げたのに……」
内に燃ゆる憤^{いかり}を抑^{おさ}ふるとともに貫一の言^{ことば}は絶えぬ。

「鰐淵さんの事なのでございますの。私困りまして、どういたしたら宜いのでございませう……間さん、かうなのでございますよ」

「いや、その事なら何ふ必要は無いのです」

「あら、そんなことを有仰らずに……」

「失礼します。今日は腰の傷部が又痛みますので」

「おや、それは、お劇いことはお在なさらないのでございますか」

「いえ、なに」

「どうぞお樂に在しつて」

貫一は無難作に郡内縞の搔巻引被けて臥しけるを、疎略あらせじと満枝は勤篤に冊きて、やがて己も始めて椅子に倚れり。

「貴方の前でこんな事は私申上げ難いのでございますけれど、実は、あの一昨々日でございますね、ああ云ふ訳で鰐淵さんと御一処に参りましたところが、御飯を食べるから何でも附合へと有仰るので、湯島の天神の茶屋へ寄りましたのでございます。さう致すと、案の定可厭い事をもうもう執濃く有仰るのでございます。さうして飽くまで貴方の事を疑つて、始終それを有仰るので、私一番それには困りました。あの方もお年効の無い、物

の道理がお解りにならないにも程の有つたもので、一体私を何と思召おもほしめしてゐらつしやるのか存じませんが、客商売でもしてを者に戯たはむれるやうな事を、それも一度や二度ではないのでございますから、私残念で、一昨々日なども泣いたのでございます。で、この後二度とそんな事の有仰れないやうに、私その場で十分に申したことは申しましたけれど、変に氣を廻してゐらつしやる方の事でございますから、取とんだ八やつあたり当あたで貴方へ御迷惑が懸りますやうでは、何とも私申訳がございませんから、どうぞそれだけお含み置き下さいまして、悪あしからず……。

今度お会ひあそばしたら、鰐淵よくしさんが何とか有仰るかも知れません。さぞ御迷惑でゐらつしやいませうけれど、そこは宜よろいやうに有仰つて置いて下さいまし。それも貴方が何とか些ちよつとでも思召してゐらつしやる方とならば、そんな事を有仰られるのもまた何でございませうけれど、嫌きら抜ひぬいてお在いであそばす私わたくしのやうな者と訳でもあるやうに有仰おつしやられるのは、さぞお辛くてゐらつしやいませうけれど、私のやうな者に見込れたのが因果とお諦あきらめ遊あそばしまし。

貴方も因果なれば、私も……私は猶なほ因果なのでございますよ。かう云ふのが実に因果と謂いふのでございませうね」

金煙管の莨の独り杳眇と燦るを手にせるまま、満枝は儂さの遣方無げに萎れるた
り。さるをも見向かず、答へず、頑として石の如く横はれる貫一。

「貴方もお諦め下さいまし、全く因果なのでございますから、切てさうと諦めてでもゐて
下されば、それだけでも私幾分か思が透つたやうな気が致すのでございます。

間さん。貴方は過日私がこんなに思つてゐることを何日までもお忘れないやうにと申
上げたら、お志は決して忘れんと有仰いましたね。お覚えあそばしてゐらつしやいませう。
ねえ、貴方、よもやお忘れは無いでせう。如何なのでございますよ」

勢ひて問詰むれば、極めて事も無げに、

「忘れません」

満枝は彼の面を絶に怨視て瞬も為ず、その時人声して闌は徐に啓きぬ。

案内せる附添の婆は戸口の外に立ちて請じ入れんとすれば、客はその老に似気なく、今
更内の様子を心惑せらるる体にて、彼にさへ可憫う小声に言付けつつ名刺を渡せり。

満枝は如何なる人かと瞥と見るに、白髪交りの髻は長く胸の辺に垂れて、篤実の面
貌瘦せたれども賤からず、長は高しとにあらねど、素より腹にもあらざりし肉の自ら齡
の衰に削れたれば、冬枯の峰に抽けるやうに聳えても見ゆ。衣服などさる可く、程を守り

たるが奥おく幽ゆくて、誰とも知らねどさすがに疎おろならず覚えて、彼は早くもこの寶まらうの席どを設けて待てるなりき。

貫一は婆の示せる名刺を取りて、何心無く打見れば、鳴しぎ沢さわ隆りゅう三ざうと誌しるしたり。色を失へる貫一はその堪へかぬる驚愕おどろきに駆れて、忽たちち身みを翻ひるして其方そなたを見向かんとせしが、幾ほとんど同時に又枕して、終つひに動かず。狂ひ出でんずる息を厳きびく閉ぢて、燃もるばかりに瞋いかれる眼まなこは放たず名刺を見入れたりしが、さしも内なる千万無量の思を裏つめる一点の涙は不覺に滾まろび出いでぬ。こは怪しと思ひつつも婆は、

「此方こちらへお通し申しませうで……」

「知らん！」

「はい？」

「こんな人は知らん」

人目あらずば引裂き棄つべき名刺よ、流けがしと投返せば床の上に落ちぬ。彼は強いひて目を塞ふさぎ、身の顫ふるふをば吾と吾手に抱だき窘すくめて、恨は忘れずとも憤いは忍ぶべしと、撻むちたんやうにも己を制すれば、髪は逆さか堅かたち蠢うごきて、頭腦うの裏うちに沸騰わる血はその欲するままに注ぐところを求めて、心も狂へと乱みだ螫れすなり。彼はこれと争ひて猶なほも抑へぬ。面色は漸やうく變じ

て灰の如し。婆は懼れたる目色を客の方へ忍ばせて、

「御存じないお方なので？」

「一向知らん。人違だらうから、断つて返すが可い」

「さやうでございますか。それでも、貴方様のお名前を有仰つてお尋ね……」

「ああ、何でも可いから早く断つて」

「さやうでございますか、それではお断り申しませうかね」

(五) の二

婆は嶋沢の前にその趣を述べて、投棄てられし名刺を返さんとすれば、手を後様
に束ねたるままに受取らで、強ひて面を和ぐるも苦しげに見えぬ。

「ああ、さやうかね、御承知の無い訳は無いのだ。ははは、大分久い前の事だから、お忘れになったのか知れん、それでは宜い。私が直にお目に掛らう。この部屋は間貫一さんだね、ああ、それでは間違無い」

屹と思案せる嶋沢の椅子ある方に進み寄れば、満枝は座を起ち、会釈して、席を薦めぬ。

「貫一さん、私だよ。久う会はんで忘れられたかのう」

室の隅に婆が茶の支度せんとするを、満枝は自ら行きて手を下し、或は指図もし、又自ら持来りて薦むるなど尋常の見舞客にはあらじと、鴨沢は始めてこの女に注目せるなり。貫一は知らざる如く、彼方を向きて答へず。仔細こそあれとは覺ゆれど、例のこの人の無愛想よ、と満枝は傍に見つとも憫に可笑かりき。

「貫一さんや、私だ。疾にも訪ねたいのであつたが、何にしろ居所が全然知れんです。一昨日ふと聞出したから不取敢かうして出向いたのだが、病気はどうかのう。何か、大怪我ださうではないか」

猶も答のあらざるを腹立くは思へど、満枝の居るを幸に、

「睡てをりますですか」

「はい、如何でございますか」

彼はこの長者の窘めるを傍に見かねて、貫一が枕に近く差寄りて窺へば、涙の顔を褥に擦付けて、急上げ急上げ肩息してゐたり。何事とも覺えず驚されしを、色にも見せず、怪まるるをも言に出さず、些の心着さへあらぬやうに擬して、

「お客様がいらつしやいましたよ」

「今も言ひました通り、一向識らん方なのですから、お還し申して下さい」

彼は面を伏せて又言はず、満枝は早くもその意を推して、また多くは間はせず席に復りて、

「お人違ではございませんでせうか、どうも御覚が無いと有仰るのでございます」

長き髻を推揉みつつ鳴沢は為方無さに苦笑して、

「人違とは如何なことで！ 五年や七年会はんでも私は未だそれほど老耄はsenのだ。

然し覚が無いと言へばそれまでの話、覚もあらうし、人違でもなからうと思へばこそ、かうして折角会ひにも来たらうと謂ふもの。老人の私がわざわざかうして出向いて来たのう、そこに免じて、些とでも会うて貰ひませう」

挨拶如何にと待てども、貫一は音だに立てざるなり。

「それぢや、何かい、こんなに言うても不承してはくれんのかの。ああ、さやうか、是非が無い。

然し、貫一さん、能う考へて御覧、まあ、私たちの事をどう思うてゐらるか知らんが、お前さんの爾来の為方、又今日のこの始末は、ちと妥当ならんではあるまいか。とにかく鳴沢の翁に対してかうしたものでなからうと思ふがどうであらうの。成程お前さんの方にも言分はあらう、それも聞きに来た。私の方にも少く言分の無いではない。それも聞

かせたい。然し、かうしてわざわざ尋ねて来たものであるから、此方では既に折れて出て
 るのだ。さうしてお前さんに会って話と謂ふは、決して身勝手な事を言ひに来たぢやな
 い、やはり其方の身の上に就いて善かれと計ひたい老婆心切。私の方ではその当時に在
 つてもお前さんを棄てた覚は無し、又今日も五年前も同じ考量で居るのだ。それを、
 まあ、若い人の血氣と謂ふのであらう。唯一図に思ひ込んで誤解されたのか、私は如何に
 も残念でならん。今日までも誤解されてゐるのは愈よ心外だで、お前さんの住所の知れ
 次第早速出掛けて来たのだ。凡そ此方の了簡を誤解されてゐるほど心苦しい事は無い。
 人の為に謀つて、さうして僅の行違から恨まれる、恩に被せうとて謀つたではないが、
 恨まれやうとは誰にしても思はん。で、ああして睦う一家族で居つて、私たちも死水を取
 つて貰ふ意であつたものを、僅の行違から音信不通の間になつて了ふと謂ふは、何とも
 はや浅ましい次第で、私も誠に寢覚が悪からうと謂ふもの、実に姨とも言暮してゐるのだ。
 私の方では何処までも旧通りになつて貰うて、早く隠居でもしたいのだ。それも然しお
 前さんの了簡が釈けんでは話が出来ん。その話は二の次としても、差当り誤解されてゐる
 一条だ。会って篤と話をしたら直に訳は分らうと思ふで、是非一通りは聞いて貰ひたい。
 その上でも心が釈けん事なら、どうもそれまで。私はお前さんの親御の墓へ詣つて、のう、

抑もお前さんを引取つてから今日までの来歴を在様陳べて、鳴沢はこれこれの事を為、かうかう思ひまする、けれども成行でかう云ふ始末になりましたのは、残念ながら致方が無い、と丁とお分疏を言うて、そして私は私の一分を立ててから立派に縁を切りたいのだ。のう。はや五年も便を為んのだから、お前さんは縁を切つた気であらうが、私の方では未だ縁は切らんのだ。

私は考へる、たとへばこの鳴沢の翁の為た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何にも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。又その我慢が成らんならば、もう少し妥当に事を為てもらひたかつた。私の方に言分のあると謂ふのは其処だ。言はせればその通り私にも言分はある。然し、そんな事を言ひに来たではない、私の方にも如何様手落があつたで、その詫も言はうし、又昔も今も此方には心持に異変は無いのだから、それが第一に知らせたい。翁が久しぶりで来たのだ、のう、貫一さん、今日は何も言はずに清う会うてくれ」

曾て聞かざりし恋人が身の上の秘密よ、と満枝は奇き興を覚えて耳を傾けぬ。

我強くも貫一のなほ言はんとはせざるに、漸く怵へかねたる鳴沢の翁はやにはに椅子を起ちて、強ひてもその顔見んと歩み寄れり。事の由は知るべきやう無けれど、この客の言

を尽せるにも理聞えて、無下に打も棄てられず、されども貫一が唯涙を流して一語を出さず、いと善く識るらん人をば覺無しと言へる、これにもなかなか所謂はあらんと推測するれば、一も二も無く満枝は恋人に与してこの場の急を拯はんと思へるなり。

枕頭を窺ひつつ危む如く眉を攢めて、鳴沢の未だ言出でざる時、

「私看病に参つてをります者でございですが、何方様でゐらつしやいますか存じませんが、この一両日病人は熱の気味で始終昏々いたして、時々譫語のやうな事を申して、泣いたり、慍つたり致すのでございですが、……」

頭を捻向けて満枝に對せる鳴沢の顔の色は、この時故に解きたりと見えぬ。

「はあ、は、さやうですか」

「先程から伺ひますれば、年来御懇意でゐらつしやるのを人違だとか申して、大相失礼を致してをるやうでございですが、やつぱり熱の加減で前後が解りませんのでございしますから、どうぞお氣にお懸け遊ばしませんやうに。この熱も直に除れまするさうでございしますから、又改めてお出を願ひたう存じます。今日は私御名刺を戴いて置きまして、お軽快なり次第私から悉くお話を致しますでございします」

「はあ、それはそれは」

「実は、何でございました。昨日もお見舞にお出で下すつたお方に變な事を申掛けまして、何も病氣の事で為方しかたもございませんけれど、私弱りきりましたのでございます。今日こんにちは又如何致したのでございますか、昨日とは全まるで反対であの通り黙りきつてをりますのですが、却つて無闇むやみなことを申されるよりは始末よろしが宜いでございます」

かくても始末は善しと謂ふかと、翁おぢは打壁うちひそむべきを強しひて易かへたるやうの笑を洩せば、満枝はその言いひ了せしを喜べるやうに笑ひぬ。彼は婆を呼びて湯を易へ、更に熱き茶を薦すすめて、再び客を席に着かしめぬ。

「さう云ふ訳では話も解りかねる。では又上る事に致しませう。手前は鳴沢隆三と申して——名刺を差上げて置きまする、これに住所も誌しるしてあります——貴方は失礼ながらやはり鰐淵わにぶちさんの御親戚でも？」

「はい、親戚ではございませんが、鰐淵さんとは父が極御懇意に致してをりますので、それに宅がこの近所でございますもので、ちよくちよくお見舞に上つてはお手伝を致してをります」

「はは、さやうで。手前は五年ほど掛違うて間とは会ひませんので、どうか去年あたり嫁もらを娶うたと聞きました、如何いかいたしましたな」

彼はこの美き看病人の素性知らまほしさに、あらぬ問をも設けたるなり。

「さやうな事はついに存じませんですが」

「はて、さうとばかり思うてをりましたに」

容儀かたち人の娘とは見えず、妻とも見えず、しかも絢きん繡きう祭さいしう装よう飾かざれる様は色を売る儔たぐひ

にやと疑はれざるにはあらねど、言ものごと辞し行儀の端々はしはものづか自らさにもあらざる、畢ひつきよう竟ようこれ

何者と、鳴沢は容易にその一斑いっばんをも推すいし得ざるなりけり。されども、懇意と謂ふも、手

伝と謂ふも、皆詐いつはりならんとは想ひぬ。正ただし筋の知辺にはあらで、人の娘にもあらず、又貫

一が妻と謂ふにもあらずして、深き訳ある内証者なるべし。若もしさもあらば、貫一はその

身の境遇とともに墮落して性しやうね根も腐れ、身持も頽くうれたるを想ふべし、とかくは好みて昔

の縁つなを繋ぐべきものにあらず。如かくのごと此やからき輩でいりを出入せしむる鳴沢の家は、終つひに不慮の禍わざはひを

招かくに至らんも知るべからざるを、と彼は心中遽に懼にはかおそれを生じて、さては彼の恨深く言ことばを容

れざるを幸さいはひに、今日こんにちは一先ひとまつ立還りて、尚なほ一層の探索と一番の熟考とを遂げて後、

来きたる可べくは再び来らんも晩おそからず、と失望の裏うち別に幾分の得るところあるを私ひそかに喜べり。

「いや、これはどうも図らずお世話様に成りました。いづれ又近日改めてお目に掛ります

るで、失礼ながらお名前を伺つて置きたうござりまするが」

「はい、私は」と紫根塩瀬の手提の中より小形の名刺を取出だして、

「甚だ失礼でございますが」

「はい、これは。赤檉満枝さまと有仰いますか」

この女の素性に於ける彼の疑は益暗くなりぬ。夫有てる身の我は顔に名刺を用意せるも似気無し、まして裏面に横文字を入れたるは、猶可愼からず。応対の雍にして人馴れたる、服装などの当世風に貴族的なる、或は欧羅巴的女子職業に自營せる人などならずや。但しその余に色美きが、又さる際には相応からずも覚えて、こは終に一題の麗き謎を彼に与ふるに過ぎざりき。鳴沢の翁は貫一の冷遇に愼るをも忘れて、この謎の為に苦められつつ病院を辞し去れり。

客を送り出でて満枝の内に入来れば、ベッドの上に貫一の居丈高に起直りて、瘦が尽れたる拳を握りつつ、咄々、言はで忍びし無念に堪へずして、独り疾視の瞳を凝すに会へり。

第六章

数日すじつぜん前より鰐淵わにぶちが家は燈あかしとも点ともる頃を期して、何処いづこより来るとも知らぬ一人の老ろうに女よに訪とほるが例となりぬ。その人は齡よはひ六十路余そぢに傾かたふきて、顔は皺しわみたれど膚はだ清へきよく、切きり髪がみの容かたちなどなかなか由よしありげにて、風俗も見苦からず、唯ただ異様なるは茶微塵ちやみじんの御おめし召ちりめん縮ちぢ緬ひふの被風ひふをも着ながら、更紗さらさの小風呂敷包に油紙うはがけの上掛うはがけしたるを矢筈やはすに負ひて、薄うすきたな穢き護謨底ゴムぞこの運動靴はを履はいたり。

所用は折入あはじつて主に会ひたしとなり。生憎あいにくにも来る度たび他出中なりけれど、本意ほんい無なげにも見えで急ぎ帰り、飽あきもせずして通ひ来るなりけり。お峯やうやは漸やうやく怪おもしろしと思おもひ初はじめぬ。

彼のあだかも三日続きたけて来きたれる日、その挙動きどうの常ならず、殊ことには眼色まなざし凄しずく、憚はばかりも無く人まもを目成めぢりては、時ならぬに独ひとり打笑うちあむ顔かほの坐すざろさむ寒さきまでに可おそろし恐おそきは、狂人なるべし、しかも夜いに入るを候うかがひ、時をも差たがへず訪おもひ来るなど、我家たたりに祟なを作すにはあらずや、とお峯にはかおそれは遽いに懼おそを抱いだきて、とても一度は会ひて、又と足踏かへせざらんやう、ひたすら直行にその始末を頼みければ、今日は用意して、四時頃にはや還かへり来にけるなり。

「どうも貴方あなた、あれは氣違ですよ。それでも品の良いいことは、些ちよどまあ旗本か何かの隠居さんと謂いつたやうな、然し一体、鼻の高い、目の大きい、瘦やせた面長おもながな、怖こはい顔なんです。戸外おもてへ来て案内する時のその声といふものが、実に無いんですよ。毎いづでも極きまつて、

『頼みます、はい頼みます』とかう雍しとやかに、緩ゆつくり二声言ふんで。もうもうその声を聞くと悚然つとして、ああ可厭いやだ。何だつて又あんな氣違なんぞが来出したんでせう。本当に縁起でもない!」

お峯は柱なる時計を仰ぎぬ。燈あかしの点るには未だ間ありと見るなるべし。直行は可難むづかしげに眉まゆを寄せ、唇くちびるを引結びて、

「何者か知らんて、一向心こころあたり。当と謂うては無い。名は言はんて?」

「聞きましたけれど言ひませんの。あの様子ぢや名なんかも解りは為ますまい」

「さうして今晚来るのか」

「来られては困りますけれど、きつと来ますよ。あんなのが毎晩々々来られては耐たまりませんから、貴方本来に来ましたら、篤とつくり説諭して、もう来ないやうに作なつて下さいよ」

「そりや受合へん。他さきが氣違ぢやもの」

「氣違だから私も氣味が悪いからお頼申すのぢやありませんか」

「幾多頼いくらまれたてて、氣違ぢやもの、俺おれも為やうは無い」

頼める夫つまのさしも思はで頼たのみ無ことばき言に、お峯は力落してかつは尠すくなからず心慌あわつるなり。

「貴方でも可けないやうだつたらば、巡查にさう言つて引渡して遣やりませう」

直行は打笑へり。

「まあ、そんなに騒がんとも可え」

「騒ぎはしませんけれど、私は可厭ですもの」

「誰も気違の好えものは無い」

「それ、御覧なさいな」

「何じや」

知らず、その老女は何者、狂か、あらざるか、合力か、物売か、将主の知人か、

正体の顯るべき時はかかる裏にも一分時毎に近くなりき。

終日灰色に打曇りて、薄日をだに吝みて洩さざりし空は漸く暮れんとして、弥増す寒

さは怪からず人に逼れば、幾分の凌ぎにもと家々の戸は例よりも早く鎖れて、なほ稍明

くその色厚氷を懸けたる如き西の空より、隠々として寂き余光の遠く来れるが、遽

に去るに忍びざらんやうに彷徨へる巷の此処彼処に、軒ラムプは既に点じ了りて、新に白

き焰を放てり。

一陣の風は砂を捲きて起りぬ。怪しの老女はこの風に吹出されたるが如く姿を顯はせ

り。切髪は乱れ逆立ちて、披払と飄る裾袂に靡されつつ漂しげに行きつ留りつ、町

の南側を辿り辿りて、鰐淵が住へる横町に入りぬ。銃槍の忍返を打ちたる石塀を溢れて一本の梅の咲誇れるを、斜に軒ラムプの照せるがその門なり。

彼は殆ど我家に帰り来れると見ゆる態度にて、々と寄りて戸を啓けんとしたれど、啓かざりければ、かの雍に緩しと謂ふ声して、

「頼みます、はい、頼みます」

風は颯々と鳴りて過ぎぬ。この声を聞きしお峯は竦みて立たず。

「貴方、来ましたよ」

「うん、あれか」

実には直行も気味好からぬ声とは思へり。小鍋立せる火鉢の角に猪口を措き、燈を持て来よと婢に命じて、玄関に出でけるが、先づ戸の内より、

「はい何方ですな」

「旦那はお宅でございませうか」

「居りますが、何方で」

答はあらで、呟くか、唄くか、小声ながら頻に物言ふが聞ゆるのみ。

「何方ですか、お名前は何と有仰るな」

「お目に掛れば解ります。何に致せ、おおお、まあ、梅が好く咲きましたぢやございませんか。当日の挿花はやつぱりこの梅が宜からうと存じます。さあ、どうぞ此方へお入り下さいまし、御遠慮無しに、さあ」

啓けんあとせしに啓かざれば、彼は戸を打叩うちたたきて劇く案内す。さては狂人なるよと直行も迷惑したれど、このままにては逐ふとも立去るまじきに、一度は会うてとにもかくにも為んと、心ならずも戸を開けば、聞きしに差はぬ老女は入来れり。

「鰐淵は私じやが、何ぞ用かな」

「おお、おまへが鰐淵か！」

つと乗出のりいだしてその面に瞳を据ゑられたる直行は、鬼氣に襲はれて忽ち寒く戦けるなり。熟くつくづと見入る眼を放つと共に、老女は皺手に顔を掩おほひて潜々と泣出せり。呆れ果てたる直行は金壺眼を凝してその泣くを眺むる外はあらざりけり。

彼は泣きて泣きて止まず。

「解らんない！ 一体どう云ふんか、ああ、私に用と云ふのは？」

朽木の自ら頰れ行くらんやうにも打萎うちしをれて見えし老女は、猛然もうねんとして振仰ぎ、血声を搾しぼりて、

「この大おほかたり騙だまめ！」

「何ぢやと！」

「大、大悪人！ おのれのやうな奴が懲役に行かずに、内の……内の……雅まさゆき之のやうな孝行者が……先祖を尋ねれば、甲斐かいのくに国の住人 武田大膳たけだだいぜん太夫たゆう 信玄しんげん入道にゅうどう、田夫野人でんぶやじんの為に欺わたしかれて、このまま断絶する家へ誰が嫁に来る。柏井かしわいの鈴すうちゃんがお嫁に来てくれれば、私の仕合は言ふまでもない、雅之もどんなにか嬉うれからう。子を捨てる藪やぶは有つても、懲役だまに遣る親は無いぞ。二十七にはなつても世間みざ不見みずのあの雅之、能ようも能うもおのれは瞞だましたな！ さあ、さあさ讐かたきを討つから立合ひとりごひなさい」

直行は舌を吐きて独語ひとりごちぬ。

「あ、いよいよ氣違いかりじやわい」

見る見る老女の怒いきりは激して、形相ぎようそう漸くおどろおどろしく、物怪もののけなどの憑ついたるやうに、一挙一動も全くその人ならず、足を踏鳴し踏鳴し、白齒まばらの疎きはなるを牙の如く露あらはして、一念この凝まなじりれる眸ほかは直行の外ほかを見ず、
 「歿なくなられた良人つれあひから懇々くれぐれも頼まれた秘藏ひとりつこの秘藏ひとりつこの一人子ひとりこ、それを瞞なましておのれが懲役なぎなたに遣つたのだ。此方このほうを女あなどと侮あなどつてさやうな不埒ふらちを致したか。長刀ながなたの一手も心得てゐる

ぞよ。恐入つたか」

彼は忽ちさも心地快げに笑へり。

「さうあらうとも、赦します。内には鈴ちゃんが今日を曠と着飾つて、その美しさと謂ふものは！ ほんにまああんな縹致と云ひ、氣立と云ひ、諸芸も出来れば、読書、針仕事、そんなことは言つてゐるところではない。頸を長くして待つてお在だのに、早く歸つて来ないと云ふ法が有るものですか。大きにまあお世話様でございましたね、さあさ、馬車を待たして置いたから、履物はここに在るよ。なあに、おまへ私はね、瀟車で行くから訳は無いとも」

かく言ふ間も忙しげに我が靴を脱ぎて、其処に直すと見れば、背負ひし風呂敷包の中結を釈きて、直行が前に上掛の油紙を披げたり。

「さあさ、お前の首をこの中へ入れるのだ。ころつと落して。直に落ちるから、早く落してお了ひなさい」

さすがに持扱ひて直行の途方に暮れたるを、老女は目を織めて、何処より出づらんやとばかり世にも奇き声を発ちて緩く笑ひぬ。彼は謂知らぬ凄氣に打れて、覚えず肩を聳かせり。

懲役と言ひ、雅之と言ふに因りて、彼は始めてこの狂女の身元を思合せぬ。彼の債務者なる飽浦雅之は、私書偽造罪を以つて彼の被告としてこの十数日前、罰金十円、重禁錮一箇年に処せられしなり。実にその母なり。その母はこれが為に乱心せしか。

爾思へりしのみにて直行はその他に猶も思ふべき事あるを思ふを欲せざりき。雅之の私書偽造罪をもて刑せられしは事実の表にして、その罪は裏面に彼の謀りて陥れたるなり。彼等の用ゐる悪手段の中に、人の借るを求めて連帯者を得るに窮するあれば、その一判にても話合の上は貸さんと称へて先づ誘ひ、然る後、但し証書の体を成さしめんが爲例の如く連帯者の記名調印を要すればとて、仮に可然き親族知己などの名義を私用して、在合ふ印章を捺さしめ、固より懇意上の内約なればその偽なるを咎めず、と手輕に持掛けて、実は法律上有効の証書を造らしむるなり。借方もかかる所業の不義なるを知るといへども、一は焦眉の急に迫り、一は期限内にだに返弁せば何事もあらじと姑息して、この術中には陥るなりけり。

期にびて還さざらんか、彼は忽ち爪牙を露し、陰に告訴の意を示してこれを脅し、散々に不当の利を貪りて、その肉尽き、骨枯るるの後、猶ほ壓く無き慾は、更に件の連帯者に対して寢耳に水の強制執行を加ふるなり。これを表沙汰にせば債務者は論無う刑法の

罪人たらざるべからず、ここに於て誰か恐慌し、狼狽し、悩乱し、号泣し、死力を竭して七所借の調達を計らざらん。この時魔の如き力は喉を扼してその背をつ、人の死と生とは渾て彼が手中に在りて緊握せらる、欲するところとして得られざるは無し。

雅之もこの※に繋りて学友の父の名を仮りて連印者に私用したりき。事の破綻に及びて、不幸にも相識れる学友は折から海外に遊学して在らず、しかも父なる人は彼を識らざりしより、その間の調停成らずして、彼の行為は終に第二百十条の間ふところとなりぬ。

法律は鉄腕の如く雅之を拉し去りて、剰さへ杖に離れ、涙に踰ふ老母をば道の傍に返して顧ざりけり。噫、母は幾許この子に思を繋けたりけるよ。親に仕へて、此上無う優かりしを、柏井の鈴とて美き娘をも見立てて、この秋には妻すべかりしを、又この歳暮には援く方有りて、新に興るべき鉄道会社に好地位を得んと頼めしを、事は皆休みぬ、彼は人の齒せざる国法の罪人となり了れり。耻辱、憤恨、悲歎、憂愁、心を置惑ひてこの母は終に発狂せるなり。

無益に言を用ゐんより、唯手柔に撮み出すに如かじと、直行は少しも逆はずして、「ああ宜いが。この首が欲いか、遣らうとも遣らうとも、ここでは可かんから外へ行かう。さあ一処に来た」

狂女は苦々しげに頭を掉りて、

「お前さんの云ふことは皆妄だ。その手で雅之を瞞したのだらう。それ、それ見なさい、親孝行の、正直者の雅之を瞞着して、散々金を取つた上に懲役に遣つたに相違無いと云ふ一札をこの通り入れたぢやないか、これでも未だ晶しい顔をしてゐるのか」

打披げたりし油紙を取りて直行の目先へ突付くれば、何を包みし移香にや、胸悪き一種の腥氣ありて夥く鼻を撲ちぬ。直行は猶も逆はで已む無く面を背けたるを、狂女は目を睜りつつ雀躍して、

「おおおお、あれあれ！これは嬉しい、自然とお前さんの首が段々細くなつて来る。ああ、それそれ、今にもう落ちる」

地には落さじとやうに慌てき、油紙もて承けんと為る、その利腕をやにはに捉へて直行は格子の外へさんと為たり。彼は推れながら格子に縋りて差理無理争ひ、

「ええ、おのれは他をこの崖から突落す気だな。この老婦を騙討に為るのだな」

喚きつつ身を捻返して、突掛けし力の怪き強さに、直行は踏み込らして尻居に倒るれば、彼は囃し立てて笑ふなり。忽ち起上りし直行は彼の衿上を搔掴みて、力まかせに外方へ突遣り、手早く雨戸を引かんとせしに、軋みて動かざる間に又駈戻りて、狂女

はその凄^{すさまじ}き顔を戸口^あに顕^{あら}はせり。余りの可恐^{おそろ}しさに直行は吾を忘れてその顔をはたと撲^うち、
 痿^{ひる}むところを得たりと鎖^{とぎ}せば、外より割るるばかりに戸を叩きて、

「さあ、首を渡せ。大事な証文も取上げて了つたな、大事な靴も取つたな。靴盗坊^{くつどろぼう}、大^お
 騙^{ほかたり}！ 首を寄来^{よこ}せ」

直行は佇^{たたず}みて様子を候^{うかが}ひるたり。拔足^{ぬきあし}差足^{さしあし}忍^{きた}び来れる妻は、後より小声に呼びて、

「貴方、どうしました」

夫は戸の外を指^{ゆびさ}してなほ去らざるを示せり。お峯は土間に護謨靴^{ゴムぐつ}と油紙^{おちち}との遺散れるを
 見付けて、由無^{よしな}き質を取りけるよと思^{おも}ひ煩^{わづら}へる折しも、

「頼みます、はい、頼みますよ」

と例の声は聞えぬ。お峯は胴顫^{どうぶるひ}して、長くここに留^{とどま}るに堪へず、夫を勧めて奥に入^い
 りにけり。

戸叩く音は後^{のち}も撓^{たゆ}まず響きたりしが、直行の裏口より出でて窺^{うかが}ひける時は、風吹荒^{ふきすさ}ぶ
 門^{かど}の梅^{ひせつ}の飛雪の如く乱点して、燈火の微^{ほのか}に照す処その影は見えざるなりき。

次の日も例刻になれば狂女は又訪^とひ来れり。主^{あるじ}は不在なりとて、婢^{をんな}をして彼の遺^{のこ}せし二^ふ
 品^{たしな}を返さしめけるに、前夜の暴^あれに暴れし気色はなく、殊勝に聞分けて帰り行きぬ。

お峯はその翌日も必ず来るべきを懼れて夫の在宅を請ひけるが、果して来にけり。又試に婢を出して不在の由を言はしめしに、こたびは直に立去らで、

「それぢやお帰来までここでお待ち申しませう。実はね、是非お受取申す品があるので、それを持つて帰りませんと都合が悪いのですから、幾日でもお待ち申しますよ」

彼は戸口に蹲りて動かず。婢は様々に言作へて賺しけれど、一声も耳には入らざらんやうに、石仏の如く応ぜざるなり。彼は已む無くこれを奥へ告げぬ。直行も爲ん術あらねば棄措きたりしに、やや二時間も居て見えずなりぬ。

お峯は心苦がりて、この上は唯警察の手を借らんなど噪ぐを、直行は人を煩すべき事にはあらずとて聴かず。さらば又と来ざらんやうに逐払ふべき手立のありやと責むるに、害を爲すにもあらねば、宿無犬の寝たると想ひて意に介るなどのみ。意に介くまじき如きを故に夫には学ばじ、と彼は腹立く思へり。この一事のみにあらず、お峯は常に夫の共に謀ると謂ふこと無くて、女童と侮れるやうに取合はぬ風あるを、口惜くも可恨くも、又或時は心細さの便無き余に、神を信ずる念は出でて、夫の頼むに足らざるところをば神明の冥護に抛らんと、八百万の神といふ神は差別無く敬神せるが中にも、ここに数年前より新に神道一派を開きて、天尊教と称ふるあり。神体と崇めたる

は、その光紫の一大明^{みようじよう}星^{せい}にて、御名^{おんな}を大御明^{おおみあかり}尊^{のみこと}と申す。天地渾沌^{てんちこんどん}として日^{じつげ}つ月^{つき}も未^{いま}だ成^{なり}らざりし先高天原^{たかまがはら}に出現^{しんげん}ましませしに因^よりて、天上天下万物^{てんじふぶつ}の司^{つかさ}と仰^{おほみ}ぎ、諸^{もろもろ}の足^{たり}らざるを補^{すべ}ひ、総^{すべ}て欠^かけたるを完^まつたせしめんの^{おほみ}大御誓^{みちかひ}をもて国土百姓^{こくすひやくしやう}を寧^{やす}く恵^{めぐ}ませ給^{たま}ふとなり。彼は夙^{つと}に起信^{きしん}して、この尊^{みこと}をば一身一家^{いつしんいつけ}の守護神^{まもりがみ}と敬^{やう}ひ奉^{ほう}り、事^{こと}と有^あれば祈念^{こら}を凝^{ひとへ}して偏^{ひとへ}に頼^{たの}み聞^きゆるにぞありける。

この夜は別^{わか}して身^みを浄^{きよ}め、御燈^{みあかし}の数^{かず}を献^{ささ}げて、災難^{さいなん}即滅^{おんてきたいせん}、怨敵^{おんてきたいせん}退散^{たいさん}の祈願^こを籠^こめたりしが、翌日^{あくるひ}の点燈^{ひともし}頃^{ころ}ともなれば、又来^{また}にけり。夫^そは出^いでて未^{いま}だ帰^{かへ}らざれば、今日^{けふ}若^もし罵^{のの}り噪^{さわ}ぎて、内^{うち}に躍^{をどり}入^いることもやあらば如何^{いかに}せん、前後^{ぜんご}の別知^{わか}らぬばかりに動^{どう}顛^{てん}して、取次^{しゆじ}には婢^いを出^い遣^やり、躬^{みづから}は神棚^{かみだな}の前^{まえ}に駈^{かけ}つけ、顛^{てん}聲^{こゑ}を打^{うち}揚^あげ、丹精^{にじやう}を抽^ぬでて祝詞^{のりと}を宣^のりたり。狂女^{きやうにょ}は不在^{ふざい}と聞^ききて敢^{あへ}て争^{あらそ}はず、昨日^{きのふ}の如^{ごと}く、ここにて帰来^{かへり}を待^{まち}たんとて、同^{おな}じ處^{じこ}に同^{おな}じ形^{かたち}して蹲^{うづく}ま。婢^いは格子^{こし}を鎖^さし固^{かた}めて内^{うち}に入^いりけるが、暫^{しば}くは音^{おと}も為^なざりしに、遽^{にはか}に物語^{ものご}る如^{ごと}き、或^{ある}は罵^{のの}る如^{ごと}き声^{こゑ}の頻^{しきり}に聞^きゆるより主^{あるじ}の知^しらで帰来^{かへり}て、捉^{とら}へられたるにはあらずや、と台所^{だいしよ}の小窓^{せうそう}より差^さ覗^{のぞ}けば、彼の外^{そと}には人も在^あらぬに、在^あるが如^{ごと}く語^{かた}るなり。その語^{かた}るところは婢^いの耳^{みみ}に聞^き分けかねたれど、我子^{われこ}がここの主^{あるじ}に欺^{あそ}かれて無実^{むじつ}の罪^{つみ}に陥^{おと}されし段々^{だんだん}を、前後^{ぜんご}不揃^{ふぞろひ}に泣^ない、つ怒^{いか}り、つ訴^うふるなり。

第七章

子の讐^{かたき}なる直行が首を獲^えんとして夕々^{ゆふべゆふべ}に狂女の訪ひ来ること八日に^{およ}べり。浅まし
とは思へど、逐^おひて去らしむべきにあらず、又門口^{かどぐち}に居たりとて人を騒^{さわ}がすにもあらね
ば、とにかくにも手を着けかねて棄^{すて}措^おかるなりき。直行が言へりし如く、畢^{ひつぎ}竟^{よう}彼は
何等の害をも加ふるにあざれば、犬の寝^ねたると太^はだ扱^はばざるべけれど、縮^{ちりめん}緬^{ひふ}の被^ひ風^{ふう}着^{ちやく}
たる人の形^{かたち}の黄^{わう}昏^{こん}るる門の薄^{はく}寒^{かん}きに踞^{つくば}ひて、灰色の剪^{きり}髪^{がみ}を搔^か乱^{みだ}し、妖^{よう}星^{せい}の光^{ひかり}にも似^そ
たる眼^{まなこ}を睨^ね反^そして、笑ふかと見れば泣^なき、泣くかと見れば憤^いり、己^{おのれ}の胸^{むね}のやうに際^{そこ}も知^ひ
らず黒く濁^{くろ}れる夕暮^{ゆふぐ}の空に向ひてその悲^{かな}と恨^みとを訴^{なぐさ}へ、腥^{なまぐさ}き油^{あぶら}紙^しを拈^{ひね}りては人の首を獲^えん
を待つなる狂女^{きやうにょ}！ よし今は何等の害を加へずとも、終^{つひ}にはこの家に祟^{たたり}を作^なすべき望^{のぞ}を繫^か
くるにあらずや。人の執^{しつ}着^{ちやく}の一念^{いっぴん}は水をも火と成し、山をも海と成し、鉄^{てつ}を劈^{つんぎ}き、巖^{いは}を碎^は
くの例^{たと}、ましてや家^けを滅^{めつ}し、人^{ひと}を塵^{ちり}にすなど、塵^{ちり}を吹くよりも易^{やす}かるべきに、可^{おそ}恐^そしや事^{こと}
無^なくてあれかしと、お峯^{おのね}は独^{ひとり}り謂^い知^ひらず心^{こころ}を傷^{いた}むるなり。

夫^そは決^けして雅^{みや}之^のの私^{おのれ}書^{しよ}偽^ぎ造^{ぞう}を己^{おのれ}の陥^{おと}れし巧^{たくみ}なりとは彼^{かれ}に告^つげざれば、悪^{あく}は正^{ただ}く狂女^{きやうにょ}の子^こ

に在りて、此方こなたに恨を受くべき筋は無く、自おのづからかかる事も出来いでくるは家業の上の勝負にて、又一方には貸倒かしだふれの損耗あるを思へば、所詮しよせんたふ仆し、仆さるるは商あきなひの習と、お峯は自おのづか意こころを強うして、この老女の狂を発せしを、夫の為せる業わざとは毫も思ひ寄るにあらざりき。さは謂いへ、人の親の切なる情を思へば、実げにさぞと肝に徹こたふる節無きにもあらざるめり。大方かかる筋より人は恨まれて、奇き殃にも遭ふなればと唯思過ただおもひすごされては窮無きはまりなき恐怖おそれの募るのみ。

日に日に狂女の忘れず通ひ来るは、陰ながら我等の命を絶たんが為にて、多時しばらくかど門に居て動かざるは、その妄執もうしゆうの念力ねんりきを籠めて夫婦を呪のろふにあらずや、とほとほと信ぜらるるまでにお峯が夕暮の心地は譬たとへん方無く悩されぬ。されば狂女の門に在る間は、大御明尊あかしのみことの御前に打頻うちしきり祝詞のりとを唱ふるにあらざれば凌しのぐ能はず。かかる中にも心に些ちとの弛ゆるみあれば、煌々こうこうと耀かがやき遍わたれる御燈みあかしの影遽かげはかくらに晦みみ行きて、天尊てんそんの御像みかたちも臙おぼろに消失きえうせなんと吾目わがめに見ゆるは、納受のうじゆの恵に泄もれ、擁護おうごの綱も切れ果つるやと、彼は身も世も忘るるばかりに念を籠こめ、烟けむりを立て、汗を流して神慮を驚かすにぞありける。槍やりは降りても必ず来くべし、と震摺おちおそれながら待たれし九日目の例刻になりぬれど、如何いかにしたりけん狂女は見えず。鋭く返返さえかへりたるこの日の寒気は鍼はりもて膚はだへに霜を種ううらんやうに覚えしめ

ぬ。外には烈風怒り号びて、樹を鳴し、屋を撼し、砂を捲き、礫を飛して、曇れる空ならねど吹揚げらるる埃に蔽れて、一天晦く乱れ、日色黄に濁りて、殊に物可恐き夕暮の氣勢なり。

鰐淵が門の燈は硝子を二面まで吹落されて、火は消え、ランプは覆りたり。内の燈火は常より鮮に主が晩酌の喫台を照し、火鉢に架けたる鍋の物は沸々と薫じて、はや一銚子更へたるに、未だ狂女の音容はあらず。お峯は半危みつつも幾分の安堵の思を弄び喜ぶ風情にて、

「氣違さんもこの風には弱つたと見えますね。もう毎もきつと来るのに来ませんから、今夜は来やしますまい、何ほ何でもこの風ぢや吹飛されて了ひませうから。ああ、真に天尊様の御利益があつたのだ」

夫が差せる猪口を受けて、

「お相をませうかね。何は無くともこんな好い心持の時に戴くとお美しいですね。いえ、さう続けてはとも……まあ、貴方。おやおやもう七時廻つたんですよ。そんな断然今晚は来ないと極りましたね。ぢや、戸締を為して了ひませうか、真に今晚のやうな氣の霽々した、心の底から好い心持の事はありませんよ。あの氣違さんぢやどんな

に寿を短めたか知れはしません。もうこれきり来なくなるやうに天尊様へお願い申しませう。はい、戴きませう。御酒もお美しいものです。なあにあの婆さんが唯怖いのぢやありませんよ。それは気味は悪うございますけれどもさ、怖いより、気味が悪いより、何と無く凄くて耐らないのです。あれが来ると、悚然と、惣毛豎つて体が竦むのですもの、唯の怖いとは違ひますわね。それが、何だか、かう執着れでもするやうな気がして、あの、それ、能く夢で可恐い奴なんぞに追懸けられると、逃げるには逃げられず、声を出さうとしても出ないので、どうなる事かと思ふ事がありませう、とんとあんなやうな心持なんです。ああ、もうそんな話は止ませう。私は少し酔ひました」

銚子を更へて婢の持来れば、

「金や、今晩は到頭来ないね、気違さんさ」

「好い塩梅でございます」

「お前には後でお菓子を御褒美に出すからね。貴方、これはあの気違さんとの頃懇意になつて了ひましてね。気違の取次は金に限るのです」

「あら可厭なことを有仰いまし」

吹来り、吹去る風は大浪の寄せては返す如く絶間無く轟きて、その劇きは柱などを

ひちひちと鳴なり揺ゆるがし、物打倒すひしめ犇ひきちぎき、引断る音、圧折へしおる響は此処ここ彼処かしこに聞えて、唯居るさへに胆きもは冷ひやされぬ。長火鉢には怠らず炭を加へ加へ、鉄瓶てつびんの湯気は雲はを噴くこと頻しきりなれど、更に背面を圧する寒は鉄板てつばんなどや負はさるるかと、飲めども多く酔よひ成さざるに、直行は後を牽ひきて已やまず、お峯も心祝こころいはひの数を過して、その地顔あかの赭ニスきをば仮漆布しきたるやうに照り耀かがやして陶然たり。

狂女は果して来こざりけり。 歡よろこび酔よへるお峯も唯酔よへる夫も、褒美貫もらひし婢も、十時近き
比ころほひには皆寐ね鎮づまりぬ。

風は猶も邪に吹募りて、高き梢は箒の掃くが如く撓められ、疎に散れる星の数は終に吹きおろ下されぬべく、層々凝れる寒は殆ど有らん限の生気を吸尽して、さらぬだに陰森たる夜色は益す冥く、益す凄からんとす。忽ちこの黑暗々を劈きて、鰐淵が裏木戸の辺に一道の光は揚りぬ。低く発りて物に遮られたれば、何の火とも弁へ難くて、その迸発の朱く烟れる中に、母家と土蔵との影は臙に踰るるともなく奪はれて、瞬くばかりに消失せしは、風の強きに吹敷れたるなり。やや有りて、同じほどの火影の又映ふと見れば、早くも薄れ行きて、こたびは燃えも揚らず、消えも遣らで、少時明を保ちたりしが、風の僅の絶間を偷みて、閃々と納屋の板戸を伝ひ、始めて騰れる焰は炳然として四辺を照せり。

塀^{へいぎ}際に添^そひて人の形^{かたち}動くと見えしが、なほ暗^{くら}くて了^{さだ}然ならず。

数^す息の間にして火の手は縦横^{はびこ}に蔓^はりつつ、納屋の内に乱入^{ふきい}れば、噴^{くろけふり}出づる黒^{くろ}煙の渦

は或^{あるひくづ}は顔^あれ、或は畳^{たた}みて、その外を引^{ひき}鞆^つむとともに、見え遍^{わた}りし家も土蔵^{うづたか}も堆^あき黯^{あん}黯

の底に没^めして、闇は焰^{けふり}に破^{やぶ}られ、焰は煙に揉^も立てられ、煙は更に風の為^{ため}に碎^くかれつつも、

蒸^あ出す勢^{おびただし}の夥^{おほ}ければ、猶^{ところせ}ほ所狭^{せま}く漲^なりて、文目^{あやめ}も分^わかず攪^か乱^きれたる中より爆^{あきら}然と鳴^なりて、

天も焦^あげよと納屋は一面の猛火^{まう}と変^へじてけり。かの了^{さだ}然ならざりし形はこの時^{あきら}明に輝^あかさ

れぬ。宵^よに來^くべかりし狂女^たの佇^ためるなり。躍^をり狂^{きやう}ふ煙の下に自若^{おも}として、面^{おも}も爛^{ただ}れんとす

ばかりに照^てされたる姿は、この災^{わざ}を司^{つかさど}る鬼女^{おに}などの現^{あら}れ出^ででにけるかと疑^ぎはしむ。實^{じつ}に彼

は火^かの如^いかに焚^もえ、如^いかに燬^やくや、と嚴^{おご}に監^{かん}るが如^{ごと}く皆^{みな}を裂^ききて、その立^たてる處^{ところ}を一步^{いっ}も

移^{うつ}さず、風^{ふう}と煙^{えん}と焰^{えん}との相^あ雜^ひり、相^あ争^{せう}ひ、相^あ勢^{せき}ひて、力^{ちから}の限^{かぎ}を互^{たがひ}に奮^{ふる}ふをば、

妙^いくも為^なしたりとや、漫^{そぞろ}笑^{わら}を洩^もせる顔^{がん}色^{しよく}はこの世^よに匹^{たぐ}ふべきものありとも知らず。

風の暴^あ頻^れる響^{きやう}動^{どう}に紛^まれて、寝^ね耳^{みみ}にこれ^こを聞^き着^{つく}る者^{もの}も無^なかりければ、誰^{たれ}一人^{ひとり}出^いて噪^{さわ}が

ざる間に、火^かは烈^め々^らと下^げ屋^やに延^しきて、厨^{くりや}の燃^も立つ底^{そこ}より一^{いっ}声^{せい}叫^{きやう}喚^{わん}せるは誰^{たれ}、狂^{きやう}女^{にょ}は

々^きとして高^{たか}く笑^{わら}ひぬ。

(七)の二

人々出合ひて打騒ぐ比には、火元の建物の大半は烈火となりて、土蔵の窓々より焰を出し、はや如何にも為んやうあらざるなり。さしもの強風なりしかど、消防力めたりしに抛りて、三十幾戸を焼きしのみにて、午前二時にびて鎮火するを得たり。雑踏の裏より怪き奴は早くも拘引せられしと伝へぬ。かの狂女の去りも遣ざりしが捕れしなり。火元と認定せらるる鰐淵方は塵一筋だに持出さずして、憐むべき一片の焦土を遺したるのみ。家族の消息は直ちに警察の訊問するところとなりぬ。婢は命辛々逃了せけれども、目覚むると齊く頭面は一面の火なるに仰天し、二声三声奥を呼捨てにし走り出でければ、主たちは如何になりけん、知らずと言ふ。夜明けぬれど夫婦の出で来ざりけるは、過など有りしにはあらずやと、警官は出張して搜索に及べり。

熱灰の下より一体の屍の半焦爛れたるが見出されぬ。目も当てられず、浅ましう愠き限を尽したれど、主の妻と輒く弁ぜらるべき面影は焚残れり。さてはとその邇くを限無く搔起しけれど、他に見当るものは無くて、倉前と覚き辺より始めて焦壞れたる人骨を掘出せり。酔ひて遁惑ひし故か、貪りて身を忘れし故か、とにもかくにも主

夫婦ふうふはこの火の為に落命せしなり。家屋も土蔵も一夜の烟けふりとなりて、鰐淵の跡としては赤土と灰との外に覓もとむべきものもあらず、風吹迷ふ長烟短焰ちようえんたんえんの紛糾する処に、独り無事の形を留めたるは、主が居間に備へ付けたりし金庫のみ。

別居せる直道ただみちは旅行中にて未だ還らず、貫一はあだかもお峯の死体の出でし時病院より駈着かけつけたり。彼は三日の後には退院すべき手筈てはずなりければ、今は全く癒えて務を執るをも妨げざれど、事の極きはめて不慮なると、急激なると、瑣小さしょうならざるとに心惑こころまどひのみせられて、病後の身を以てこれに当らんはいと苦くるかりけるを、尽瘁じんすいして万端を処理しつつ、ひたすら直道の帰京を待てり。

枕をも得え挙げざりし病人の今かく健すこやかに起きて、常に來ては親く慰められし人の頑かたくなにも強あきらかりしを、空むなしく燼余じんよの断骨に相見あひみて、弔ことばふ言だにあらざらんとは、貫一の遽にはかにその真まことをば真あたとし能あたはざるところなりき。人は皆死ぬべきものと人は皆知れるなり。されどもその常に相見る人の死ぬべきを思ふ能はず。貫一はこの五年間の家族を迫せめての一人も余さず、家倉と共に焚やきつく尽されて一夜の中に儚はかなくなり了れるに会ひては、おのれが懷裡ふところの物の故ゆゑ無く消失せにけんやうにも頼み難く覚えて、かくては我身の上の今宵如何いかに成りなんをも料はかられざるをと、無常の愁しきは頻しばしばに腸に沁しむなりけり。

住むべき家の痕跡あとかたも無く焼失せたりと謂いふだに、見果てぬ夢の如し、まして併あはせて頼めし主夫婦あるじを喪うしなへるをや、音容幻おんまぼろしを去らずして、ほとほと幽明さかひの界を弁あまつさぜず、剩あまつさへ久く病院の乾燥せる生活に困こうじて、この家を懷おもふこと切なりければ、追慕の情は極きはまりて迷執し、迫せめては得るところもありやと、夜の晩おそきに貫一は市ヶ谷いちやなる立退所たちきじよを出でて、杖つゑに扶たすけられつつ程遠からぬ焼跡を弔へり。

連日風立ち、寒かりしに、この夜は遽にはに緩ゆるみて、朧おぼろの月の色も暖あたたか、曇るともなく打うち霞すめる町筋は静に眠れり。燠いぶり臭くさき悪気は四辺あたりに充満みちみちて、踏荒されし道は水にしり、燼もえがに埋れ、焼杭やけくひ焼瓦やけがはらなど所狭く積重ねたる空地くうちを、火元とて板いた囲がこひも得え為せず、それとも分かぬ焼原の狼藉ろうぜきとして、鰐淵いへみが家居は全く形を失へるなり。黒焦に削れたる幹みきのみ短く残れる一列ひとつらの立木の傍かたはらに、塊堆くわいぐわいく盛りたるは土蔵の名残なごりと踏み行けば、灰燼かいじんの熱気いまは未だ冷めずして、微ほのかに面を撲おこつ。貫一は前杖まへづゑ拄ついて悵ちやうぜん然ぜんとして佇たたずめり。その立てる二三歩の前は直行が遺骨おこを発おこせし所なり。恨むと見ゆる死顔の月は、肉の片きれの棄りてられたるやうに朱あかく敷しける満地の瓦を照して、目に入るものは皆伏し、四望の空りく寥ようり々ようたるに、黒く点せる人の影を、彼おのづかは自ら物凄ものすごく顧おもらるるなりき。

立尽せる貫一が胸には、在りし家居の状さまの明かに映じて、赭あかく光れるお峯が顔も、苦にがき

口付せる主が面も眼に浮びて、歴々と相對へる心地もするに、姑くはその境に己を忘れたりしが、やがて徐に仰ぎ、徐に俯して、さて徐に一步を行きては一步を返しつつ、いと思に沈みては、折々涙をも推拭ひつ。彼は転た人生の凄涼を感じて禁ずる能はざりき。苟くもその親める者の半にして離れ乖かざるはあらず。見よ或はかの棄てられし恨を遺し、或はこの奪はれし悲に遭ひ、前の恨の消えざるに又新なる悲を添ふ。棄つる者は去り、棄てざる者は逝き、然として吾独り在り。在るが故に慶ぶべきか、亡きが故に悼むべきか、在る者は積憂の中に活き、亡き者は非命の下に殞る。抑もこの活とこの死とは孰を哀み、孰を悲まん。

吾が煩悶の活を見るに、彼等が慘憺の死と相同からざるなし、但殊にするところは去ると留るとのみ。彼等の死ありて聊か吾が活の苦きをも慰むべきか、吾が活ありて、始めて彼等が死の傷きを弔ふに足らんか。吾が腸は断たれ、吾が心は壊れたり、彼等が肉は爛れ、彼等が骨は砕けたり。活きて爾苦める身をも、なほさすがに魂も消ぬべく打駭かしつる彼等が死状なるよ。産を失ひ、家を失ひ、猶も身を失ふに尋常の終を得ずして、極悪の重罪の者といへども未だ曾て如此き虐刑の辱を受けず、犬畜生の末までも箇様の業は曝さざるに、天か、命か、或は応報か、然れども独り吾が直行をもて

世間に善を作さざる者と為すなかれ。人情は暗中に刃を揮ひ、世路は到る処に陷阱を設け、陰に陽に悪を行ひ、不善を作さざるはなし。若し吾が直行の行ふところをもて咎むべしと為さば、誰か有りて咎められざらん、しかも猶甚きを為して天も憎まず、命も薄んぜず、応報もこれを避るもの有るを見るにあらずや。彼等の惨死を辱むるなかれ、適ま奇禍を免れ得ざりしのみ。

かく念へる貫一は生前の誼深かりし夫婦の死を歎きて、この永き別を遣方も無く悲み惜むなりき。さて何時までかここに在らんと、主の遺骨を出せし辺を拝し、又妻の屍の横はりし処を拝して、心怛く立去らんとしたりしに、彼は怪くも遽に胸の内の搔乱るる心地するとともに、失せし夫婦の弔ふ者もあらで闇路の奥に打棄てられたるを悲く、あはれ猶少時留らずやと、いと迫めて乞ひ繼ると覚ゆるに、行くにも忍びず、又立還りて積みたる土に息へり。

實に彼も家の内に居て、遺骸の前に限知られず思ひ乱れんより、ここには亡き人の傍にも近く、遺言に似たる或る消息をも得らん想して、立てたる杖に重き頭を支へて、夫婦が地下に齎せし念々を冥搜したり。やがて彼は何の得るところや有りけん、繁き涙は滂沱と頬を伝ひて零れぬ。

夜陰に轟く車ありて、一散に飛し来りけるが、焼場の際に止りて、翩と下立ちし人は、直ちに鰐淵が跡の前に尋ね行きて歩を住めたり。
 焼瓦の踏破かるる音に面を擡げたる貫一は、件の人影の近く進来るをば、誰ならんと認むる間も無く、

「間さんですか」

「おお、貴方は！ お帰来でしたか」

その人は待ちに待たれし直道なり。貫一は忙しく出迎へぬ。向ひて立てる両箇は月明に面を見合ひけるが、各口吃して卒に言ふ能はざるなりき。

「何とも不慮な事で、申上げやうもございません」

「はい。この度は留守中と云ひ、別してお世話になりました」

「私は事の起りました晩は未だ病院に居りまして、かう云ふ事とは一向存じませんで、夜明になつて漸く駈着けたやうな始末、今更申したところが愚痴に過ぎんですけれど、私が居りましたらまさかこんな事にはお為せ申さんかつたと、実に残念でなりません。又お二人にしても余り不覚な、それしきの事に狼狽される方ではなかつたに、これまでの御壽命であつたか、残多い事を致しました」

直道は塞ぎし眼を怠げに開きて、

「何もかも皆焼けましたらうな」

「唯一品、金庫が助りました外には、すっかり焼いて了ひました」

「金庫が残りました？ 何が入つてゐるのですか」

「貨も少しは在りませうが、帳簿、証書の類が主でございます」

「貸金に關した？」

「さやうで」

「ええ、それが焼きたかつたのに！」

口惜しとの色は絶かその面に上れり。貫一は彼が意見の父と相容れずして、年来別居

せる内情を詳かに知れば、迫めてその喜ぶべきをも、却つてかく憂と為す故を曉れるなり。

「家の焼けたの、土蔵の落ちたのは差支無いのです。寧ろ焼いて了はんければ成らんの

でしたから、それは結構です。両親の歿つたのも、私であれ、貴方であれ、かうして泣い

て悲む者は、ここに居る二人きりで、世間に誰一人……さぞ衆が喜んでゐるだらうと思ふ

と、唯親を喪したのが情無いばかりではないのですよ」

されども堰敢へず流るるは恩愛の涙なり。彼を憚りし父と彼を畏れし母とは、決して共

に子として彼を慈むを忘れざりけり。その憚られ、畏れられし点を除きては、彼は他の憚られ、畏れられざる子よりも多く愛を被りき。生きてこそ争ひし父よ。亡くての今は、その聴れざりし恨より、親として事へざりし不孝の悔は直道の心を責むるなり。

なまあたか

生

暖き風は急に來りてその外套の翼を吹捲りぬ。こはここに失せし母の賜ひしを、

と端無く彼は憶起して、

はしな おもひおこ

さばかりは有のすさびに徳とも為ざりけるが、世間に量り知

られぬ人の数の中に、誰か故無くして一紙を与ふる者ぞ、我は今聘せられし測量地より歸

來れるなり。

この學術とこの位置とを与へて恩と為ざりしは誰なるべき。外にこれを

求むる能はず、重ねてこれを得べからざる父と母とは、相携へて杳に迢に隔つる世の人となりぬ。

炎々たる猛火の裏に、

うち

その父と母とは苦み悶えて援を呼びけんは幾許ぞ。彼等は果

いかばかり

して誰をか呼びつらん。思ここに到りて、直道が哀咽は渾身をして涙に化し了らしめ

んとするなり。

「喜ぶなら世間の奴は喜んだが可いです。貴方一箇のお心持で御両親は御満足なさるので

あなたひとり

すから。こんな事を申上げては実に失礼ですけれども、貴方が今日まで御両親をお持ち

になつてゐられたのは、私などの身から見ると何より可羨いので、この世の中に親

子の情愛ぐらゐる詐の無いものは決して御座いませんな、私は十五の歳から孤児になりま
したのですが、それは、親が附いてをらんと見縊られます。余り見縊られたのが自棄の本
で、遂に私も真人間に成損つて了つたやうな訳で。固より己の至らん罪ではありません
けれど、抑も親の附いてをらんかつたのが非常な不仕合で、そんな薄命な者もかうして
在るのですから、それはもう幾歳になつたから親に別れて可いと謂ふ理窟はありませんけ
れど、聊か慰むるに足ると、まあ、思召さなければなりません」

貫一のこの人に向ひて親く物言ふ今夜の如き例はあらず、彼の物言はずとよりは、この
人の惡み遠けたりしなり。故は、彼こそ父が不善の助手なれと、始より畜生視して、得べ
くば撲つて殺さんとも念ずるなりければ、今彼が言の端々に人がましき響あるを聞きて、
いと異しと思へり。

「それでは、貴方真人間に成損つたとお言ひのですな」

「さうでございます」

「さうすると、今は真人間ではないと謂ふ訳ですか」

「勿論でございます」

直道は俯きて言はざりき。

「いや貴方のやうな方に向つてこんな太腐れた事を申しては済みません。さあ、参りませうか」

彼はなほ俯き、なほ言はずして、頷くのみ。

夜は太く更けにければ、さらでだに音を絶てる寂靜はここに澄徹りて、深くも物を思入る苦しさに直道が蹂躪る靴の下に、瓦の脆く割るるが鋭く響きぬ。地は荒れ、物は毀れたる中に一箇は立ち、一箇は偃ひて、言あらぬ姿の佗しげなるに照すとも無き月影の隠々と映添ひたる、既に彷彿として悲の図を描成せり。

かくて暫く有りし後、直道は卒然言を出せり。

「貴方、真人間に成つてくれませんか」

その声音の可愁き底には情も籠れりと聞えぬ。貫一は粗彼の意を曉れり。

「はい、難有うございます」

「どうですか」

「折角のお言ではございますが、私はどうぞこのままにお措き下さいまし」

「それは何為ですか」

「今更真人間に復る必要も無いのです」

「さあ、必要はありますまい。私も必要から貴方にお勧めするのではない。もう一度考へてから挨拶あいさつをして下さいな」

「いや、お気に障さはりましたらお赦ゆるし下さいまし。貴方とは従これまで来浸々しみじみお話を致した事もございまして私といふ者はどんな人物であるか、御承知はございますまい。私の方では毎々お噂うはさを伺つて、能く貴方を存じてをります。極ごく潔きよいお方なので、精神的に傷きずいたところの無い御人物、さう云ふ方に対して我々などの心事を申上げるのは、實際恥入る次第で、言ふ事は一々曲つてゐるのですから、正ただしい、直すぐなお耳みみへは入らんとくころではない。逆ふのでございませう。で、潔い貴方と、拗ねぢけた私とは、始からお話は合はんですから、それでお話を為る以上は、どうぞ何事もお聞きき流ながしに願ひます」

「ああ、善く解りました」

「真人間になつてくれんかと有おつしや仰つて下すつたのが、私は非常に嬉うれいのでございます。こんな商売は真人間の為る事ではない、と知つてゐながらかうして致してゐる私の心中、辛いのでございます。そんな思をしつつ何なぜ為してゐるか！ 曰いはく言難いひがたしで、精神的に酷ひどく傷きずけられた反動と、先まづ思おほしめ召して下さいまし。私が酒が飲めたら自暴酒やけざけでも吃くらつて、体を毀こはして、それきりに成つたのかも知れませんが、酒は可いかず、腹を切る勇氣は無し、

究竟^{つまり}は意氣地の無いところから、こんな者に成つて了つたのであらうと考へられます」

彼の潔^{きよ}しと謂^いふなる直道が潔き心の同情は、彼の微見^{ほのめか}したる述懐^{やや}の為に稍動^{やや}されぬ。

「お話を聞いて見ると、貴方が今日^{こんにち}の境遇になられたに就いては、余程深い御様子が有るやう、どう云ふのですか、悉く^{くはしきか}聞^きして下さいませんか」

「極愚^{ごく}な話で、到底お聞せ申されるやうな者ではないのです。又自分もこの事は他^{ひと}には語るまい、と堅く誓つてゐるのでありますから、どうも申上げられません。究竟^{つまり}或事に就いて或者に欺かれたのでございます」

「はあ、それではお話はそれで措^おきませう。で、貴方もあんな家業は眞人間の為べき事ではない、と十分承知してゐらるる、父などは決して愧^はづべき事ではない、と謂つて剛情を張り通した。実に浅ましい事だと思ふから、或時は不如^{いっそ}父の前で死んで見せて、最後の意見を為るより外は無い、と決心したことも有つたのです。父は飽くまで聴かん、私も飽くまで棄てては措^おかん精神、どんな事をしてでも是非改心させる覚悟で居つたところ、今度の災難で父を失つた、残念なのは、改心せずに死んでくれたのだ、これが一生の遺憾^{いかん}で。一時に両親^{ふたおや}に別れて、死目にも逢^あはず、その臨終と謂へば、氣の毒とも何とも謂ひやうの無い……凡^{およ}そ人の子としてこれより上の悲^{かなしみ}が有らうか、察し給へ。それに就けても、改心

せずに死なしたのが、愈いよよ残念で、早く改心さへしてくれたらば、この災難のがは免れたに違ちが無い。いや私はさう信じてゐる。然し、過ぎた事は今更為方が無いから、父の代かはりに是非貴方に改心して貰もらひたい。今貴方が改心して下されば、私は父が改心したと同じと思つて、それで満足するのです。さうすれば、必ず父の罪も滅はびる、私の念も霽はれる、貴方も正しい道を行けば、心安く、樂く世に送られる。

成程、お話の様子では、こんな家業に身を墜おとされたのも、已やむを得ざる事情の爲とは承知してをりますが、父への追善、又その遺族の路頭に迷つてゐるのを救ふのと思つて、金を貸すのは罷やめて下さい。父に關した財産は一切貴方へお譲り申しますからそれを資本に何ぞ人をも益するやうな商売をして下されば、この上の喜よろこびは有りません。父は非常に貴方を愛してをつた、貴方も父を愛して下さるでせう。愛して下さるなら、父に代つて非あらためて下さい」

聴きゐる貫一は露あしたの晨の草の如く仰みぎ視みず。語をり訖はれども猶仰みぎ視みず、如何いかにと問るるにも仰みぎ視みざるなりけり。

忽たちまち一閃いつせんの光ありて焼跡を貫く道の畔ほとりを照しけるが、その燈ともの此方しなたに向むかひて近くは、巡査の見尤みとがめて寄来よりくるなり。両箇ふたりは一様みむかにへて、待つとしもなく動かずゐたりければ、

その前に到れる角燈の光は隈無く彼等を曝しぬ。巡査は如何に驚きけんよ、かれもこれも
各惨として蒼き面に涙垂れたり——しかもここは人の泣くべき処なるか、時は正に午前二
時半。

続金色夜叉

与紅葉山人書

学海居士

紅葉山人足下。僕幼嗜讀稗史小說。當時行於世者。京伝三馬一九。及曲亭柳亭春水數輩。雖有文辭之巧麗。構思之妙絕。多是舐古人之糟粕。拾兔園之殘簡。聊以加己意焉耳。独曲亭柳亭二子較之余子。學問該博。熟慣典故。所謂換骨奪胎。頗有可觀者。如八犬弓張俠客伝。及田舎源氏諸國物語類是也。然在當時。讀此等書者。不過閭巷少年。畧識文字。間有涉獵史伝者。識見淺薄。不足以判其巧拙良否焉。而文學之士斥為鄙猥。為害風素俗。

禁子弟不得縱讀。其風習可以見矣。一年二十一二。稍讀水滸西遊金瓶三国紅樓諸書。兼及我源語竹取宇津保俊蔭等書。乃知稗史小說。亦文学之一途。不必止游戲也。而所最喜。在水滸金瓶紅樓。及源語。能尽人情之隱微。世態之曲折。用筆周到。渾思巧緻。而源氏之能描性情。文雅而思深。金瓶之能写人品。筆密而心細。蓋千古無比也。近時小説大行。少好文辞者。莫不爭先攘臂其間。然率不過陋巷之談。鄙夫之事。至大手筆如金瓶源氏等者。寥乎無聞何也。僕及讀足下所著諸書。所謂細心邃思者。知不使古人專美於上矣。多情多恨金色夜叉類。殆与金瓶源語相似。僕反覆熟讀不能置也。惜範圍狹。而事跡微。地位卑而思想偏。未足以展布足下之大才矣。盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。僕老矣。若得足下之一大著述。快讀之。是一生之願也。足下以何如。

第一章

時を錢^{ぜに}なりとしてこれを換算せば、一秒を一毛に見積りて、^{いちにんまへ}壺人前の睡^{ねぶり}量^{だか}凡^{およ}そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、実に金五円七拾六錢に相当す。これを三百六十五日の一年に合計すれば、金貳千壹百〇貳円四拾錢の巨額に上るにあらずや。さればここに

二十七日と推薄^{おしつま}りたる歳末の市中は物情^{きようきよう}恟々^{きようきよう}として、世界絶滅の期の終^{つひ}に宣告せられたらんもかくやとばかりに、坐りし人は出でて歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足も空に、合ふさ離る^きさの氣立^{けたたまし}く、肩相摩^{けんあひま}しては傷^{きず}き、轂相擊^{こくあひう}ちては砕けぬべきをも覺えざるは、心々^{こころこころ}に今を限^{かぎり}と慌^{あわ}て騒ぐ事ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去の十一箇月を虚^{あだ}に送りて、一秒の塵^{ちり}の積める貳千余円の大金を何処^{いづく}にか振落し、後悔の尾^{しり}に立ちて今更に血眼^{ちまなこ}を瞪^みき、草を分け、瓦を揜^{おこ}しても、その行方^{ゆくへ}を尋ねんと為るにあらざるなし。かかる間にも常は止一毛に値する一秒の壹錢乃至拾錢にも暴騰せる貴々^{ききち}重^{きもち}ようちよう

々の時は、速射砲を連^{つる}発^{はうち}にするが如く飛過^{とびすく}るにぞ、彼等の恐慌は更に意^{こころ}

言^{ことば}も及ばざるなる。

その平生^{へいぜい}に怠^{おこたり}無^なかりし天は、又今日に何の変易^{へんえき}もあらず、悠々^{ゆうゆう}として蒼^{あを}く、昭々^{ひろ}として闊^{ひろ}く、浩々^{こうこう}として静に、しかも確然としてその覆^{おほ}ふべきを覆ひ、終^{ひね}日北^{ひく}の風^{ふう}を下^{おろ}し、夕^{ゆふ}づく日の影を耀^{かがや}して、師走^{しはす}の塵^{ちり}の表^{おもて}に高く澄めり。見遍^{みわた}せば両行^{かど}の門^{かど}飾^{かざり}は一樣^いに枝葉^{えだ}の末^{すえ}広^{ひろ}く寿山^{じゆざん}の翠^{みどり}を交^かし、十^{じつ}町の軒端^{のきば}に続^つく注連繩^{しめなは}は、福海^{ふくかい}の霞^{かす}揺^{あう}曳^えして、繁華を添^そふる春待^{はるまち}つ景色^{けしき}は、転^{うた}た旧^{ふる}り行く歳^{とし}の魂^{こん}を驚^{おど}ろかす。

かの人々の貳千余円を失^はひて馳^{はせ}違^{ちが}ふ中^なを、梅提^{うめ}げて通^{とほ}るは誰^たが子^こ、狛銃^{かた}担^{かた}げ行くは誰

が子、妓ぎと車を同おなじうするは誰が子、唧くはへようじ楊枝して好き衣きぬ着たるは誰が子、或あるひは二頭立だちの馬車かを驅かる者、結納ゆひのうの品々担つらする者、雜誌など読よみもて行く者、五人の子を数珠ずずつなぎ繫なにして勸工場かんこうばに入る者、彼等おのおのは各若干の得たるところ有りて、如かくのごと此く自ら足れりと為するにかあらん。これ等すこしの少く失へる者は喜び、彼等の多く失へる輩はいは憂うれひ、又稀まれには全く失はざりし人の樂めるも、皆内あくそくには齷齪あくそくとして、盈みてるは虧かけじ、虧けるは盈みたんと、孰いづれかその求むるところに急ならざるはあらず。人の世は三の朝より花の昼、月の夕にもその思おもひの外ほかはあらざれど、勇ゆうきよう怯おそは死地しちに入りて始あきらて明なる年の関を、物の数とも為せざらんほどを目にも見よとや、空臆からすねの酔よひを踏ふみ、鉄鞭てつべんを曳ひき、一卷のブックを懷ふところにして、嘉平治かへいじ平ひらの袴はかまの焼海苔やきのりを綴つづれる如きを穿うがち、フネルの浴衣ゆかたの洗あらひ曬さらして垢染あかぞめにしたるに、文あ目めも分わかぬ木綿もめん縞じまの布ぬの子を襲かきねて、ジオンソン帽かほらいろの瓦なみなみ色いろに化けたるを頂つまき、焦茶地あやふ材よはひの人より豊なるに絡まとひたれば、例の袴は風ふきにや吹断ふきちぎれんと危あやふくも閃ひらめきつつ、その人は齡よはひ三十六七と見えて、形かたち癭やせたりとにはあらねど、寒樹さんじゆの夕空ゆふぞらに倚よりて孤ふぜいなる風情ふうせい、独ひとり負げふ氣け無なく麗うつくしくも富める髭髯ひげは、下したには乳ちの辺あたりまで、寒樹さんじゆの夕空ゆふぞらに倚よりて孤ふぜいなる風情ふうせい、八字はちの蔓つるを巻まきて耳の根おこにも、びぬ。打見うちみれば面目めんもく爽はやかに、稍やや傲おごれる色有さかしれど峻さかしくはあ

らず、しかも今陶々然として酒興を発し、春の日長の野辺を辿るらんやうに、西筋の横町をこの大路に出で来らんとす。

「瓢空く夜は静にして高楼に上り、酒を買ひ、簾を卷き、月を邀へて酔ひ、酔中剣を払へば光月を射る」

彼は節をかしく微吟を放ちて、行く行くかつ楽むに似たり。打晴れたる空は瑠璃色に夕榮えて、俄に冴え勝るの目口に沁みて磨鍼を打つらんやうなるに、烈火の如き酔顔を差付けては太息噓いて、右に一步左に一步ときつつ、

「往々悲歌して独り流涕す、君山を却して湘水平に桂樹を却して月更に明ならんを、丈夫志有りて……」

と唱ひ出づる時、一隊の近衛騎兵は南頭に馬を疾めて、真一文字に行手を横断するに会ひければ、彼は鉄鞭を植てて、舞立つ砂煙の中に魁の花を装へる健児の参差として推行く後影をば、壮なる哉と謂まほしげに看送りで、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して薬を施す成都の市」

と漫にその詩の首をば小声朗に吟じゐたり。さては往來の遑き目も皆牽れて、この節季の修羅場を独天下に吃ひ酔へるは、何者の暢気か、自棄か、豪傑か、悟か、醉生児か、

と異^{あや}し姿を見て過^{すぐ}る有れば、面^{おもて}を識^しらんと窺^{うかが}ふ有り、又はその身の上など思ひつつ行くも有り。彼は太^{いた}く酔^よへれば総^{すべ}て知らず、町の殷賑^{いぎはひ}を眺^{なが}め遣^やりて、何方^{いづれ}を指して行かんとも心定^{しづ}らず姑^{しば}く立てるなりけり。

さばかり人に怪^{あや}まるれど、彼は今日のみこの町に姿を顯^{あら}したるにあらず、折々散步^{めづ}すらんやうに出来^{いで}ることあれど、箇^か様の酔態^{よたい}を認^めむるは、兼て注目^{ちゆめ}せる派出所の巡查^{めづ}も希しと思^{おも}へるなり。

やがて彼は鉄鞭^{てつべん}を曳^ひ鳴^なして大路^{だい}を右に出でしが、二町ばかりも行きて、乾^{いぬ}の方^{かた}より狭^せき坂道^{さかみち}の開^{ひら}きたる角^{かど}に來^きにける途端^{とたん}に、風^{かぜ}を帯^おびて馳^はせくだ^りりたる俤^{くるま}は、生憎^{あいにく}其方^{そなた}によろめける酔客^{よいかく}の膝^{ひざ}の辺^{あたり}を一衝^{ひとあ}撞^てたりければ、彼は卻^はずみ含^みを打^うつて二間も彼方^{そなた}へ撥^はね飛ば^{とば}さるる^けと齊^{ひとし}く、大地^ちに横面^{よこづら}擦^すつて僵^{たふ}れたり。不思議にも無難^{ふみとど}に踏^ふ留^{とど}りし車夫^{くるま}は、この僂忽^{そこつ}に氣^きを奪^{うば}れて立ちたりしが、面倒^{めんどう}なる相手^{あひま}と見たりけん、そのまま轡^{かぢ}を回^{かへ}して逃^にれんとするを、俤^{くるま}の上なる黒綾^{くろあや}の吾妻^{あづま}コオト着^きて、素鼠^{すねずみ}縮^{ちぢ}緬^{めん}の頭巾^{づきん}被^かぶれる婦人^{かばい}は棒色^{かばいろ}無地^{むじ}の絹臘虎^{きぬらつこ}の膝掛^{ひざかけ}を推除^{おしの}けて、駐^とめよ、返^{かへ}せと悶^もゆるを、猶^{なほ}聴^きかで曳^{えい}々と挽^ひき行く後^{うしろ}より、

「待^{まち}て、こら！」と喝^{かつ}する声^{こゑ}に、行く人の始^{はじ}て事^{こと}有^ありと覺^{さと}れるも多く、はや車夫^{くるま}の不情^{ふじやう}を

尤^{とが}むる語^{ことば}も聞^{きこ}ゆるに、耐^{たま}りかねたる夫人^{しひ}は強^{そこ}て其^{そこ}処^{ところ}に下車^{しや}して返^{きた}り来^{きた}りぬ。

例^{れい}の物見^{ものみ}高^{たか}き町中^{まちぢゆう}なりければ、この忙^{せは}き際^{きは}をも忘^{わす}れて、寄^{より}来^{きた}る人数^{にんず}は蟻^{あり}の甘^{あま}きを探^{さが}りたるやうに、一面^{いっぺん}には遭難^{そうなん}者の土^{つち}に踞^{つくば}へる周^{めぐり}辺^{へん}を擁^{よう}し、一面^{いっぺん}には婦人^{ふじん}の左^{ひだり}右^{みぎ}に傍^{そば}ひて、目に物見^{ものみ}んと揉^も立^たてたり。婦人^{ふじん}は途^{みち}を来^{きた}つ被^かり物^{もの}を取りぬ。紋羽^{もんは}二重^{ふたへ}の小豆^{あづき}鹿子^{かのこ}の手絡^{てがら}したる円^{まる}鬘^{わけ}に、鼈^{べつ}甲^{こう}脚^{あし}の金^{きん}七^{しち}宝^{ぼう}の玉^{たま}の後^{うしろ}簪^{さし}を斜^{ななめ}に、高^{たか}蔭^{まき}絵^えの政^{まさ}子^こ櫛^{くし}を翳^かして、粧^{よそほ}は実^{じつ}に塵^{ちり}をも怯^{おそ}えぬべき人の謂^いひ知^しらず思^{おも}惑^{まど}へるを、可^{いた}痛^はしの嵐^{あらし}に堪^たへぬ花^{かな}の顔^げや、と群^{ぐん}集^{じゆ}は自^{おの}ら声^{こゑ}を斂^{をさ}めて肝^{かん}に徹^{てつ}ふるなりき。

いと更^{おもて}に面^つの裏^{うら}まほしきこの場^ばを、頭巾^{かぶり}脱^だぎたる彼^{かれ}の可^は羞^{づか}しきと切^きなさとは幾^い許^かなりけん、打^{うち}赧^{あか}めたる顔^{かほ}は措^おき所^{ところ}あらぬやうに、人^{ひと}堵^どの内^{うち}を急^{いそ}足^{あし}に辿^{たど}りたり。帽子^{ぼうし}も鉄^{てつ}鞭^{べん}も、懷^{ふと}にせしブツ^{ぶつ}も、薩^{さつ}摩^ま下^げ駄^だの隻^{しか}も投^な散^{さん}されたる中に、酔^{すい}客^{かく}は半^{はん}ば身^みを撞^もつて血^ちを流^{なが}せる右^{みぎ}の高^{たか}頬^ほを平^{へい}手^てに掩^{おほ}ひつつ寄^{より}来^{きた}る婦人^{ふじん}を打^{うち}見^み遣^やりつ。彼^{かれ}はその前^{まえ}に先^まづ懦^なれず会^あ釈^{しやく}して、

「どうも取^とんだ鹿^{ぞう}相^{そう}を致^{いた}しまして、何^{なん}とも相^さ済^{さい}みませんでございます。おや、お顔^{かほ}を！ お目^めを打^ぶちましたか、まあどうも……」

「いや太^{たい}した事^{こと}は無いのです」

「さやうでございますか。何処どこぞお痛め遊ばしましたでございませう」

腰を得立てずあるを、婦人はなほ氣遣きづかへるなり。

車夫は数あまたたび次こし腰を屈めて主人の後方うしろより進出すすみでけるが、

「どうも、旦那だんな、誠に申訳もございませぬ、どうか、まあ平ひらに御勘弁を願ひます」

眼まなこを其方に転じたる酔客は悲いかれるとしもなければど声こゑ 肅おごそかに、

「貴様は善くないぞ。麁相そそうを為たと思うたら何為車なげを駐めん。逃げやうとするから呼止め
たんじや。貴様の不心得から主人にも恥かかを搔かする」

「へい恐入りました」

「どうぞ御勘弁あそばしまして」

俤くるまの主の身を下くだして辞ことばを添ふれば、彼も打領うちうなづきて、

「以来氣を着けい、よ」

「へい……へい」

「早う行け、行け」

やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主従よろこびひきかの喜よろこびに引易ひきかへて、見物の飽氣無あつけなさは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝居に会へる想して、余あまりに落着だびの蛇尾振はざるを悔みて、

はや^{いそがはし}忙々^{きびす}き踵^{かへ}を回すも多かりけれど、又見栄^{みばえ}あるこの場の模様^{なごり}に名残^{なごり}を惜みつつ去り
敢^あへぬもありけり。

車夫は起ち悩める酔客を扶^{たす}けて、履物^{はきもの}を拾ひ、鞭^{むち}を拾ひて宛行^{あてが}へば、主人は帽を清め、
ブツを取上げて彼に返し、頭巾を車夫に与へて、懇^{ねんこうがい}に外套^{はかま}、袴の泥を払はしめぬ。免^{ゆる}さ
れし罪は消えぬべきも、歴々^{まぎまぎ}と挫傷^{すりきず}のその面に残れるを見れば、疚^{やまし}きに堪へぬ心は、な
ほ為^なすべき事あるを吝^{をし}みて私^{わたくし}せるにあらざりと省られて、彼はさすがに見捨てかねたる人
の顔を始^{いた}は可^{いた}傷^ましと眺^{なが}めたりしに、その眼色^{まなざし}は漸く鋭く、かつは疑ひかつは怪むらんや
うに、忍びては矚^{まも}りつつ便無^{びんな}げに佇^{たたず}みけるに、いでや長居は無益^{むやく}とばかり、彼は蹠^{よろよろ}蹠^{よろ}と
踏^{ふみ}出^{いだ}せり。

婦人はとにもかくにも遣^{やり}過^すせしが、又何とか思^{おも}ひ直^{ひた}しけん、遽^{にはか}に追行きて呼止めた
り。頭^{かしら}を捻^{ねぢ}向^むけたる酔客^{くも}は、れる眼^{まなこ}を屹^きと見据^{みよ}ゑて、自^{われ}か他^{ひと}かと訝^{いぶ}しさに言^{こと}も出^{いだ}さず。

「もしお人^{ひと}違^{ちがひ}でございましたら御免あそばしまして。貴方^{あなた}は、あの、もしや荒尾さん
ではゐらつしやいませんか」

「は？」彼は覺えず身を回^{かへ}して、丁^{ちやう}と立てたる鉄鞭^{てつべん}に仗^より、こは是^{これ}白日^{はくじつ}の夢か、空華^{くうげ}の形
か、正体見んと為れど、酔眼^{むなし}の空く張るのみにて、益^{ます}す霽^はれざるは疑^{うたがひ}なり。

「荒尾さんでゐらつしやいましたか！」

「はあ？　荒尾です、わたくし私荒尾です」

「あの間貫一を御承知の？」

「おお、間貫一、旧友でした」

「私はわたくし鳴沢の宮でございます」

「何、鳴沢……鳴沢の……宮と有仰る……？」

「はい、間の居りました宅の鳴沢」

「おお、宮さん！」

奇遇に驚かされたる彼の酔はあひ頓に半は消えて、せめて昔の倂を認むるや、とその人を打う眺ちながむるより外はあらず。

「お久しぶりで御座いました」

宮はようこ懽び勇みてひし犇と寄りぬ。

今は美き俤の主ならず、路傍の酔客ならず名宣合なりのあへるかれとこれとの思は如何。間貫一が鳴沢の家に在りし日は、彼の兄の如く友として善かりし人、彼の身の如く契りていと怜かりし人にあらずや。その日の彼等は又同胞はらからにも得べからざる親を以て、膝ひざをも交まじへ心をも

語りしにあらずや。その日の彼等は多少の転変を覚悟せし一生の中に、今日の奇遇を算へざりしなり。よしきりとも、一たび同胞と睦合へりし身の、弊衣を飄して道に酔ひ、流車を駆りて富に驕れる高下の差別の自ら種有りて作せるに似たる如き、彼等は更に夢ざりしなり。その算へざりし奇遇と夢ざりし差別とは、咄々、相携へて二人の身上に逼れるなり。女気の脆き涙ははや宮の目に湿ひぬ。

「まあ大相お変り遊ばしたこと！」

「貴方も変りましたな！」

さしも見えざりし面の傷の可恐きまでに益す血を出すに、宮は持たりしハンカチーフを与へて拭はしめつつ、心も心ならず様子を窺ひて、

「お痛みあそばすでせう。少しお待ちあそばしまし」

彼は何やらん吩咐けて車夫を遣りぬ。

「直この近くに懇意の医者が居りますから、其処までいらしつて下さいまし。唯今俾を申附けました」

「何の、そんなに騒ぐほどの事は無いです」

「あれ、お殆うございますよ。さうして大相召上つてゐらつしやるやうですから、ともか

くもお傳でお出あそばしまし」

「いんや、宜い、大丈夫。時に間はその後どうしましたか」

宮は胸先を刃の透るやうに覚ゆるなりき。

「その事に就きまして色々お話も致したので御座います」

「然し、どうしてゐますか、無事ですか」

「はい……」

「決して、無事ぢやない筈です」

生きたる心地もせずして宮の慙ぢ慄ける傍に、車夫は見苦からぬ一台の辻車を伴

ひ来れり。漸く面を挙げば、いつ又寄りしとも知らぬ人立を、可忌くも巡査の怪みて

近くなり。

第二章

鬚深き横面に貼薬したる荒尾讓介は既に蒼く酔醒めて、煌々たる空気ラ
ムプの前に襷もあらぬ袴の膝を丈六に組み、接待蓑の葉巻を燻しつつ意氣肅

に、打^{うち}萎^{しを}れたる宮と熊の敷皮^{ななめ}を斜^{ななめ}に差向^{さむか}ひたり。こはこれ、彼の識^しれると謂^いひし医師の奥二階にて、畳敷にしたる西洋造の十畳間なり。物語ははや緒^{いとぐち}を解^いきしなるべし。

「間^{はざま}が影を隠す時、僕に遺^{のこ}した手紙が有る、それで悉^{くはし}い様子を知つてをるです。その手紙を見た時には、僕も顫^{ふる}へて腹が立つた。直^{すぐ}に貴方^{あなた}に会^あうて、是非これは思返すやうに飽^うくまで忠告して、それで聴かずば、もう人間の取扱は為ちやをられん、腹の癒^いゆるほど打^{うち}めして、一生結婚の成らんやう立派な不具^{かたは}にしてくれやう、と既にその時は立上つたですよ。然し、間^{ことば}が言^いを尽しても貴方が聴かんと云ふ、僕の言^{ことば}を容^いれやう道理が無い。又間^{きら}を嫌^{きら}うた以上は、貴方は富山への売物じや。他^{ひと}の売物に疵^{きず}を附けちや済まん、とさう思うて、そりや実に矢も楯^{たて}も耐^たらん胸^{むね}を、つて了^{しま}うたんです」

宮が顔を推^{おし}当^あてたる片袖^{かたそで}の端^{はし}より、連^{しきり}に眉^{まゆ}の顰^{ひそ}むが見えぬ。

「宮さん、僕は貴方はさう云ふ人ではないと思うた。あれ程互に愛してをつた間^{はざま}さへが欺^あかれたんぢやから、僕の欺^あれたのは無理も無いぢやらう。僕は僕として貴方^{うら}を怨^{うら}むばかりでは嫌^{あきた}らん、間に代つて貴方を怨^{うら}むですよ、いんや、怨^{うら}む、七^{しち}生^{しょう}まで怨^{うら}む、きつと怨^{うら}む！」

終^{つひ}に宮が得^え堪^たへぬ泣^{なく}音^ねは洩^もれぬ。

「間の一身を誤つたのは貴方が誤つたのぢや。それは又間にしても、高が一婦女子に棄てられたが為に志を挫いて、命を抛つたも同然の墮落に果てる彼の不心得は、別に間として大いに責めんけりやならん。然し、間が如何に不心得であらうと、貴方の罪は依然として貴方の罪ぢや、のみならず、貴方が間を棄てた故に、彼が今日の有様に墮落したのであつて見れば、貴方は女の操を破つたのみでない。併せて夫を刺殺したも……」

宮は慄然として振仰ぎしが、荒尾の鋭き皆は貫一が怨も憑りたりやと、その見る前に身の措所無く打竦みたり。

「同じですよ。さうは思ひませんか。で、貴方の悔悟されたのは善い、これは人として悔悟せんけりやならん事。けれども残念ながら今日に及んでの悔悟は業に晚い。間の墮落は間その人の死んだも同然、貴方は夫を持つて六年、なあ、水は覆つた。盆は破れて了うたんじや。かう成つた上は最早神の力も逮ぶことではない。お気の毒じやと言ひたいが、やはり貴方が自ら作せる罪の報で、固よりかく有るべき事ぢやらうと思ふ」

宮は俯きてよよと泣くのみ。

呵、吾が罪！　さりとて知らで犯せし一旦の吾が罪！　その吾が罪の深さは、あの人ならぬ人さへかくまで憎み、かくまで怨むか。さもあらば、必ず思知る時有らと言ひしそ

の人の、争で争で吾が罪を容すべき。吁、吾が罪は終に容されず、吾が恋人は終に再び見る能はざるか。

宮は胸潰れて、涙の中に人心地をも失はんとすなり。

おのれ、利を見て愛無かりし匹婦、憎しとも憎しと思はざるにあらぬ荒尾も、当面に彼の悔悟の切なるを見ては、さすがに情は動くなりき。宮は際無く顔を得挙げずるなり。

「然し、好う悔悟を作った。間が容さんでも、又僕が容さんでも、貴方はその悔悟に因つて自ら容されたんじや」

由無き慰藉は聞かじとやうに宮は俯しながら頭を掉りて更に泣入りぬ。

「自にても容されたのは、誰にも容されんのは勝つてをる。又自ら容さるるのは、終には人に容さるるそれが始ぢやらうと謂ふもの。僕は未だ未だ容し難く貴方を怨む、怨みは為るけれど、今日の貴方の胸中は十分察するのです。貴方のも察するからには、他の者の間の胸中もまた察せにやならん、可いですか。さうして孰が多く憐むべきであるかと謂へば、間の無念は抑どんなぢやらうか、なあ、僕はそれを思ふんです。それを思うて見ると、貴方の苦痛を傍観するより外は無い。

かうして今日図らずお目に掛つた。僕は婦人として生涯の友にせうと思うた人は、後

にも先にも貴方ばかりじや。いや、それは段々お世話にもなつた、忝かたじけないと思つた事も幾いくた度たびか知れん、その媛レディフレンド友に何年ぶりかで逢うたのぢやから、僕も実に可なつかし懐なつかしう思ひました」

宮は泣音なくねの進ほしらんとするを咬緊くひしめて、濡浸ぬれひたれる袖そでに犇ひしひし々と面を擦付おもてすりつたり。

「けれど又、円鬚まるわけに結うて、立派いはにしてゐるのを見りや、決して可愛かはゆうはなかつた。幸ひ貴方が話したい事が有ると言いはる、善し、あの様に間を詐いつはつた貴方じや、又僕を幾何どれほど詐ることぢやらう、それを聞いた上で、今日こそは打うちしてくれやうと待つてをつた。然るに、貴方の悔悟、僕は陰ひそかに喜んで聴いたのです。今日の貴方はやはり僕の友フレンドの宮さんぢやつた。好う貴方悔悟なすつた！ さも無かつたら、貴方の顔にこの十倍の疵きずを附けにや還かへさんぢやつたのです。なあ、自ら容されたのは人に赦さるる始——解りましたか。

で、間に取成してくれい、詫わびを言うてくれい、とのお囑たまちやけれど、それは僕は為せん。為んのは、間に対してどうも出来んのぢやから。又貴方に罪有りと知つてをりながらその人から頼まるる僕でない。又僕が間であつたらば、断じて貴方の罪は容さんのぢやから。かうして親友の敵かたきに逢うてからに、指も差さずに別るる、これが荒尾の貴方に対する寸

志と思うて下さい。いや、久しぶりで折角お目に掛りながら、可厭な言ばかり聞せました。それぢや、まあ、御機嫌好う、これでお暇します」

会釈して荒尾の身を起さんとする時、

「暫く、どうぞ」宮は取乱したる泣顔を振挙げて、重き瞼の露を払へり。

「それではこの上どんなに願ひ申ししても、貴方はお詫を為つては下さらないので御座いますか。さうして貴方もやはり私を容さんと有仰るので御座いますか」

「さうです」

忙しげに荒尾は片膝立ててゐたり。

「どうぞもう暫くゐらしつて下さいまし、唯今直に御飯が参りますですから」

「や、飯なら欲うありませんよ」

「私は未だ申上げたい事が有るのでございますから、荒尾さんどうかお坐り下さいまし」
「いくら貴方が言うたつて、返らん事ぢやありませんか」

「そんなにまで有仰らなくても、……少しは、もう堪忍なすつて下さいまし」
火鉢の縁に片手を翳して、何をか打案ずる様なる目を翳しつつ荒尾は答へず。

「荒尾さん、それでは、とてもお聴入はあるまいと私は諦めましたから、貫一さんへ

お詫の事はもう申しますまい、又貴方に容して戴く事も願ひますまい」

咄嗟とつさに荒尾の視線は転じて、猶語かたりつづく 続つづる宮が面おもてを掠かすめ去りぬ。

「唯一目私は貫一さんに逢ひまして、その前でもつて、私の如何いかにも悪かつた事を思ふ存あやま分あやま謝りたいたので御座います。唯あの人の目の前で謝りさへ為たら、それで私は本望なのでございます。素もとより容してもらはうとは思ひません。貫一さんが又容してくれやうとも、ええ、どうせ私は思ひは致しません。容されなくても私はかまひません。私はもう覚悟を致し……」

宮は苦しげに涙を呑みて、

「ですから、どうぞ御一所にお伴れなすつて下さいまし。貴方がお伴れなすつて下されば、貫一さんはきつと逢つてくれます。逢つてさへくれましたら、私は殺されましたも可よいので御座います。貴方と二人で私を責めて責めて責め抜いた上で、貫一さんに殺さして下さいまし。私は貫一さんに殺してもらひたいので御座います」

感に打れて霜置く松の如く動かざりし荒尾は、忽たちまちその長き髯ひげを振りて領うなづけり。

「うむ、面白い！ 逢うて間に殺されたいとは、宮さん好いう言はれた。さうなけりやならんじや。然し、なあ、然しじや、貴方は今は富山の奥さん、唯ただつづ継と云ふ夫の有る身じや、

滅多な事は出来んですよ」

「私のかまひません！」

「可かん、そりや可かん。間に殺されても辞せんと云ふその悔悟は可いが、それぢや貴方は間有るを知つて夫有るのを知らんのじや。夫はどうなさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。

して見りや、始には富山が為に間を欺き、今又間の為に貴方^{あなた}は富山を欺くんじや。一人ならず二人欺くんじや！ 一方には悔悟して、それが為に又一方に罪を犯したら、折角の悔悟の効は没^{なくな}つて了ふ」

「そんな事のかまひません！」

無慙^{むざん}に唇を咬^{くちびる}みて、宮は抑へ難くも激せるなり。

「かまはんぢや可かん」

「いいえ、かまひません！」

「そりや可かん！」

「私^{わたくし}はもうそんな事のかまひませんのです。私の体はどんなになりませうとも、疾^{とつ}から棄ててをるので御座いますから、唯もう一度貰一さんにお目に掛つて、この氣の済むほど謝

りさへ致したら、その場でもつて私は死にましても本望なのですから、富山の事などは：
 …不如いっそさうして死んで了ひたいので御座います」

「それそれさう云ふ無むかんがへ考くな、訳の解らん人に僕は与くみすることは出来んと謂ふんじや。

一体さうした貴方は了りようけん簡かんぢやからして、始に間をも棄てたんじや。不埒ふらちです！ 人の

妻たる身で夫を欺いて、それでかまはんとは何事ですか。そんな貴方が了簡であつて見り

や、僕は寧むしろ富山を不憫ふびんに思ふです、貴方のやうな不貞不義の妻を有つた富山その人の不

幸あはれを慫まんけりやならん、いや、慫む、貴方よりは富山に僕は同情を表する、愈いよいよ憎むべ

きは貴方じや」

四途しどろ乱うるほに湿しへる宮の目は焚もゆらんやうに耀かがやけり。

「さう有おつしや仰おほしめつたら、私はどうして悔悟したら宜よろしいので御座いませう。荒尾さん、どうぞ

助けると思おほしめ召をしてお誨をへなすつて下さいまし」

「僕には誨へられんで、貴方がまあ能よう考へて御覧なさい」

「三年も四年も前から一日でもその事を考へません日と云つたら無いのでございます。それが為に始終ぶらぶら怏まる々と全で疾わづらつてをるやうな気分あで、噫あもうこんななら、いつそ死しまんで了はう、と熟つくづくさうは思ひながら、唯ただもう一目、一目で可うございますから貫かん一いつさんに逢

ひませんでは、どうも死ぬにも死なれないので御座います」

「まあ能う考へて御覧なさい」

「荒尾さん、貴方それでは余りでございますわ」

ひとり 独に余る心細さに、宮は男の袂を執りて泣きぬ。理切めて荒尾もその手を払ひかね

つつ、吾ならぬ愁に胸塞れて、実にもと覚ゆる宮が衰容に眼を凝しゐたり。

「荒尾さん、こんなと思つて私は悔悟してをるのぢやございせんか、昔の宮だと思召して頼に成つて下さいまし。どうぞ、荒尾さん、どうぞ、さあ、お誨へなすつて下さいまし」

涙に昏れてその語は能くも聞えず、階子下の物音は膳運び出づるなるべし。

果して人の入来て、夕餉の設すとして少時紛されし後、二人は謂ふべからざる佗き無言の中に相對するのみなりしを、荒尾は始て高く咳きつ。

「貴方の言る事は能う解つてをる、決して無理とは思はんです。如何にも貴方に誨へて上げたい、誨へて貴方の身の立つやうな処置で有るなら、誨へて上げんぢやないです。けれどもじや、それが誨へて上げられんのは、僕が貴方であつたらかう為ると云ふ考量に止るので……いや、いや、そりや言れん。言うて善い事なら言ひます、人に對して言ふべき事でない、況や誨ふべき事ではない、止だ僕一箇の了簡として肚の中に思うたまでの事、

究竟^{つまり}荒尾的空想に過ぎんのぢやから、空想を誨へて人を誤つてはどうもならんから、僕は何も言はんで、言はんぢやない、實際言得んのじや、然し猶^{なほ}能^よう考へて見て、貴方に誨へらるる方法を見出^{みいだ}したら、更にお目に掛つて申上げやう。折が有つたら又お目に掛ります。は、僕の居住^{すまひ}？ 居住は、まあ言はん方が可い、蟹^{あま}が子^こなれば宿も定めずじや。言うても差^さ支^しは無^ないけれど、貴方に押掛けらるると困るから、まあ言はん。は、如何^{いか}にもこんな態^{なり}をしてをるので、貴方は吃驚^{びっくり}なすつたか、さうでせう。自分にも驚いてをるのでやけれどどうも為方が無い。僕の身の上に就ては段々子細^{こまごま}が有るですとも、それもお話したいけれど、又この次に。

酒は余り飲むな？ はあ、今日のやうに酔うた事は希^{まれ}です。忝^{かたじけな}い、折角の御忠告ぢやから今後は宜^{よろ}い、氣を着くるです。

力に成つてくれと言うたとて、義として僕は貴方の力には成れんぢやないですか。貴方の胸中也聴いた事ぢやから、敵にはなるまい、けれど力には成られんですよ。

間にもその後逢はんのですとも。一遍逢うて聞きたい事も言ひたい事も頗^{すこぶ}る有るのぢやけれども。訪ねもせんので。それにや一向意味は無^ないですとも。はあ、一遍訪ねませう。明日^{あす}訪ねてくれい？ さうは可^いかん、僕もこれでなかなか用が有るのぢやから。ああ、貴

方も浮世が可厭か、僕も御同様じや。世の中と云ふものは、一つ間違ふと誠に面倒なもので、僕なども今日の有様では生効の無い方じやけれど、このままで空く死ぬるも残念でな、さう思うて生きてはをるけれど、苦しみつつ生きてをるなら、死んだ方が無論勝です。何故命が惜いのか、考へて見ると頗る解なくなる」

語りつつ彼は食を了りぬ。

「嗚呼、貴方に給仕して貰ふのは何年ぶりと謂ふのかしらん。間も善う食うた」

宮は差含む涙を啜れり。尽きせぬ悲を何時までか見んとやうに荒尾は俄に身支度して、

「こりや然し却つてお世話になりました。それぢや宮さん、お暇」

「あれ、荒尾さん、まあ、貴方……」

はや彼は起てるなり。宮はその前に塞りて立ちながら泣きぬ。

「私はどうしたら可いのでせう」

「覚悟一つです」

始て誨ふるが如く言放ちて荒尾の排け行かんとするを、彼は猶も縋りて、

「覚悟とは？」

「読んで字の如し」

驚破、彼の座敷を出づるを、送りも行かず、坐りも遣らぬ宮が姿は、寂くも壁に向ひて動かざりけり。

第三章

門々の松は除かれて七八日も過ぎぬれど、なほ正月機嫌の失せぬ富山唯継は、今日も明日もと行処を求めては、夜に継ぎて打廻るなりけり。宮は毫かもこれも咎めず、出づるも入るも唯彼の為すに任せて、あだかも旅館の主の為らんやうに、形ばかりの送迎を怠らざると謂ふのみ。

この夫に対する仕向は両三年来の平生を貫きて、彼の性質とも病身の故とも許さるるまでに目慣されて又彼方よりも咎められざるなり。それと共に唯継の行も曩日とは漸く變りて、出遊に耽らんとする傾も出で来しを、浅瀬の浪と見し間も無く近き頃より俄に深 陷して浮ると知れたるを、宮は猶しも措きて咎めず。他は如何にとも為よ、吾身は如何にとも成らば成れと互に咎めざる心 易さを偷みて、異き女夫の契を繋ぐにぞありける。

かかれども唯繼はなほその妻を忘れんとはせず。始終の憂に痺れたる宮は決して美き色
 を減ぜざりしよ。彼がその美しさを變へざる限は夫の愛は虧くべきにあらざりき。抑もこ
 こに嫁ぎしより一点の愛だに無かりし宮の、今に到りては啻に愛無きに止らずして、陰に
 厭ひ憎めるにあらずや。その故に彼は漸く家庭の樂からざるをも感ずるにあらずや。その
 故に彼は外に出でて憂を霽すに忙きにあらずや。されども彼の忘れず塙に歸り来るは、又
 この妻の美き顔を見んが為のみ。既にその顔を見れば、何ばかりの樂のあらぬ家庭は、
 彼をして火無き燂の傍に処しむるなり。彼の凍えて出でざること無し。出づれば幸ひ
 にその金力に頼りて勢を得、媚を買ひて、一時の慾を肆まし、其処には樂むとも知らず
 樂み、苦むとも知らず苦みつつ宮が空き色香に溺れて、内にはかかる美きものを手活の花
 と眺め、外には到るところに当世の翫を鳴して推廻すが、此上無う紳士の願足れりと心
 得たるなり。

いで、その妻は見るも厭き夫の傍に在る苦を片時も軽くせんとして、彼の繁き外出を見赦
 して、十度に一度も色を作さざるを風引かぬやうに召しませ猪牙とやらの難有き賢女
 の志とも戴き喜びて、いと堅き家の守とかつは等閑ならず念ひにけり。さるは独り夫の
 みならず、本家の両親を始親属知辺に至るまで一般に彼の病身を憫みて、おとなしき嫁よ

と賞め揚さぬはあらず。実に彼は某の妻のやうに出行かず、くれがしの夫人のやうに氣儘ならず、又は誰々の如く華美を好まず、強請事せず、しかもそれ等の人々より才も容も立勝りて在りながら、常に内に居て夫に事ふるより外を為ざるが、最怜しと見ゆるなるべし。宮が裏める秘密は知る者もあらず、躬も絶えて異なるべき穂を露さざりければ、その夫に事へて捗々しからぬ偽も偽とは為られず、却りて人に憫まるるなんと、その身には量無き幸を享くる心の内に、独り遣方無く苦める不幸は又量無しと為ざらんや。

十九にして恋人を棄てにし宮は、昨日を夢み、今日を嘆ちつつ、過せば過さるる月日を累ねて、ここに二十あまり五の春を迎へぬ。この春の齋せしものは痛悔と失望と憂悶と、別に空くその身を老しむる齡なるのみ。彼は釈れざる囚にも同かる思を悩みて、元日の明るよりいとど懊悩の遣る方無かりけるも、年の始といふに臥すべき病ならねば、起きるままに本意ならぬ粧も、色を好める夫に勧められて、例の美しと見らるる浅ましきより、猶甚き浅ましさをその人の陰に陽に恨み悲むめり。

宮は今外出せんとする夫の寒凌ぎに葡萄酒飲む間を暫く長火鉢の前に冊くなり。木振賤からぬ二鉢の梅の影を帯びて南縁の障子に上り尽せる日脚は、袋棚に据ゑたる福寿草の五六輪咲揃へる葩に輝きつつ、更に唯繼の身よりは光も出づらんやうに、

彼は昼ひるまばゆ眩くらき新調の三枚襲さんまいがさねを着飾りてその最も珍ちんと為る里昂製リヨンの白の透すかし織おりの絹き
 ぬえりまきめて 引ひきつくる ひ、左に宮の酌を受けながら、

「あ、拙まづい手付てつき……ああ零こぼれる、零れる！ これは恐入おそいつた。これだからつい余所よそで飲む
 気にもなりますと謂いつて可い位のものだ」

「ですから多度たんとあが上つていらつしやいまし」

「よろし
 宜よろいかい。宜いね。宜い。今夜は遅いよ」

「何時頃お歸来かへりになります」

「遅いよ」

「でも大約おほよそ時間を極めて置いて下さいませんか、お待ち申してをる者は困ります」

「遅いよ」

「それぢや十時には皆寝みんなみますから」

「遅いよ」

「又言またふも煩わづらはしくて宮は口を閉ぢぬ。」

「遅いよ」

「……………」

「驚くほど遅いよ」

「……………」

「おい、些ちよつと」

「……………」

「おや。お前まへ慍おこつたのか」

「……………」

「慍おこらんでも可いぢやないか、おい」

彼は続け様に宮の袖そでを曳ひけば、

「何なにを作るのよ」

「返事を為なんからさ」

「お遅おそいのは解とりましたよ」

「遅くはないよ、実は。だからして、まあ機嫌きげんを直すべし」

「お遅いなら、お遅いで宜よろうございますから……」

「遅くはないと言ふに、お前は近來ちき直に慍おこるよ、どう云ふのかね」

「一つは病氣せみの所為せみかも知れませんが」

「一つは俺の浮気の所為かい。恐入つたね」

「……………」

「お前一つ飲まんかい」

「私沢山」

「ぢや俺が半分助けて遣るから」

「いいえ、沢山なのですから」

「まあさう言はんで、少し、注ぐ真似」

「欲くもないものを、貴方は」

「まあ可いさ。お酌は、それかう云ふ塩梅に、愛子流かね」

妓の名を聞ける宮の如何に言ふらん、と唯継は陰に樂み待つなる流眊を彼の面に送れるなり。

宮は知らず貌に一口の酒を啣みて、眉を顰めたるのみ。

「もう飲めんのか。ぢや此方にお寄来し」

「失礼ですけれど」

「この上へもう一盃注いで貰はう」

「貴方、十時過ぎましたよ、早くいらつしやいませんか」

「可いよ、この二三日は別に俺の為る用は無いのだから。それで実はね今日は少し遅くなるのだ」

「さうでございますか」

「遅いと云つたつて怪いのぢやない。この二十八日に伝々会の大温習おほざらひが有るといふ訳だらう、そこで今日五時から糸川いとがわの処へ集つて下温習したざらひを為るのさ。俺は、それお特得はこの、

「親々おやおや いざなに誘はれ、難波なにわの浦うらを船出して、身を尽したる、憂きおもひ、泣いてチチチあ

かしのチントン風待かぜまちにテチンチンツン……」

厭いとほしげに宮の余所よそ見せるに、乗地のりぢの唯継いよいよは愈よ声を作りて、

「たまたま逢ひはア——ア逢ひイ——ながらチツンチツンチツンつれなき嵐あらしに吹分ふきわけられ
エエエエエエ、ツンツンツンテツテツトン、テツトン国ちちへ帰ればアアア父ちちイイイ
イ母ははのチチチンチンチンチンチンチン「思おもひも寄よらぬ夫つま定さだめ……」

「貴方もう好加減いいかげんになさいましよ」

「もう少し聴いてくれ、」みさを「立つる操を破ら……」

「又寛ゆつくり伺うかがひますから、早くいらつしやいまし」

「然し、巧くなつたらう、ねえ、些^{ちよつ}と聞けるだらう」

「私には解りませんです」

「これは恐入つた、解らないのは情無いね。少し解るやうに成つて貰^{もら}はうか」

「解らなくても宜うございます」

「何、宜いものか、浄瑠璃^{じよるり}の解らんやうな頭脳^{あたま}ぢや為方^{しかた}が無い。お前は一体冷淡な頭脳^{あたま}を有^もつてゐるから、それで浄瑠璃などを好まんに違無い。どうもさうだ」

「そんな事はございません」

「何、さうだ。お前は一体冷淡さ」

「愛子はどうでございます」

「愛子か、あれはあれで冷淡でないさ」

「それで能く解りました」

「何が解つたのか」

「解りました」

「些^{ちつと}も解らんよ」

「まあ可^ようございますから、早くいらつしやいまし、さうして早くお歸りなさいまし」

「うう、これは恐入つた、冷淡でない。ぢや早く帰る、お前待つてゐるか」

「私は何時いつでも待つてをりますぢや御座いませんか」

「これは冷淡でない！」

やうや

漸やうやく唯繼たちあがの立起たちあがれば、宮は外套がいとうを着せ掛けて、

不取敢とりあへず彼に握手を求めぬ。こは決けし

て宮の冷淡ならざるを証するに足らざるなり、故ゆゑは、この女夫めをとの出しゅつ入にゅうに握手するは、

夫の始より命じて習せし躰しつけなるをや。

(三) の二

夫を玄関に送り出いでし宮は、やがて氷の窖あなぐらなどに入いるらん想おもひしつつ、是非無あゆみき歩あゆみを運び

て居間に還かへりぬ。彼はその夫と偕ともに在るを謂いはんやう無むき累つらひと為なれど、又その独ひとりを守り

てこの家に処おかるをも堪たへ難いく愜いきものに思へるなり。必かならずしも力つとむるとにはあらねど、夫

の前には自おのづから氣の張ありて、とにかくにさるべくは振舞へど恣ほしいままる身み一箇ひとつとなれば、遽にはか

に慵ものうく打うち勞つかれて、心は整すべへん術も知らず紊みだれに乱るが常なり。

火鉢ひばちに倚よりて宮は、我を喪うしなへる体ていなりしが、如何いかに思おもひ入いり、思おもひ回まはし思おもひ窮ひつむれば

とて、解くべきにあらぬ胸の内の、終に明けぬ闇に彷徨へる可悲しさは、在るにもあられず身を起して彼は障子の外なる縁に出でたり。

麗く冴えたる空は遠く三四の風の影を転じて、見遍す庭の名残無く冬枯れたれば、浅からさまなる日の光の眩きのみにて、啼狂ひし梢の鶯の去りし後は、隔てる隣より憂々

と羽子突く音して、なかなかここにはその寒さを忍ぶ値あらぬを、彼はされども少時居て、又空を眺め、又冬枯を見遣り、同じ日の光を仰ぎ、同じ羽子の音を聞きて、抑へんとは

したりけれども抑へ難さの竟に苦く、再び居間に入ると見れば、其処にも留らで書斎の次

なる寝間に入るより、身を抛ちてベツトに伏したり。

厚き蓐の積れる雪と真白き上に、乱置める幾重の衣の彩を争ひつつ、妖なる姿を意

も介かず横はれるを、窓の日の帷を透して隠々照したる、実に匂も零るるやうにして彼は

浪に漂ひし人の今打揚げられたるも現ならず、ほとほと力竭きて絶入らんとするが如く、

止だ手枕に横顔を支へて、力無き眼を瞪れり。竟には溜息响きてその目を閉づれば、

片寝に倦める面を内に向けて、裾の寒さを佗しげに身動したりしが、猶も底止無き思の淵

は彼を沈めてさざるなり。

隅棚の枕時計は突と秒刻を忘れぬ。益す静に、益す明かなる闇の内には、空しとも

空き時の移るともなく移るのみなりしが、忽ち差入る鳥影の軒端に近く、俯したる宮が肩
 頭に打連りて翻きつ。

やや有りて彼は嬾くベツトの上に起直りけるが、鬢の縛れし頭を傾けて、帷の際より僅
 に眺めらるる庭の面に見るとしもなき目を遣りて、当所無く心の彷徨ふ蹤を追ふなりき。

久からずして彼はここをも出でて又居間に還れば、直に筆笥の中より友禅縮緬の帯
 揚げ取り出し、心に籠めたりし一通の文とも見ゆるものを抜きて、こたびは主の書斎に

持ち行きて机に向へり。その巻紙は貫一が遺せし筆の跡などにはあらで、いつかは宮の彼
 に送らんとて、別れし後の思の丈を窃に書聯ねたるものなりかし。

往年宮は田鶴見の邸内に彼を見しより、いとど忍びかねたる胸の内の訴へん方もあ
 らぬ切なさに、唯心寛の仮初に援りける筆ながら、なかなか口には打出し難き
 事を最好く書きて陳けも為しを、あはれかのひとの許に送りて、思ひ知りたる今の悲しさ
 を告げばやと、一函の意をも定めしが、又案ずれば、その文は果して貫一の手に触れ、目
 にも入るべきか。よしさればとて、憎み怨める怒の余に投返されて、人目に曝さる事な
 どあらば、徒に身を滅す疵を求めて終りなんをと、遣れば火に入る虫の危く、捨つるは惜
 くも、やがて好き首尾の有らんやうに扱、無き頼を繋けつつ、彼は懊惱に堪へざる毎

に取出では写し易かたはふる傍あるら、或は書添へ、或は改めなどして、この文に向へば自おのづからその人に向ふが如く、その人に向ひてはほとほと言いひつく尽して心こころのこり残のあらざる如く、止ただこれに因よりて欲するままの夢をも結ぶに似たる快きを覚ゆるなりき。かくして得送らぬ文は写せしも灰となり、反古ほごとなりて、彼の帶揚に籠こめられては、いつまで草の可哀あはれや用らるる果も知らず、宮が手習は実げに久ひさなりぬ。

些かごと箇に慰められて過せる身の荒尾に邂めぐりあ逅ひ嬉しきは、何に似たりと謂いはんも愚おろかにて、この人をこそ仲立ちて、積る思を遂とげんと頼みしを、仇あだの如く与くみせられざりし悲しさに、さらでも切なき宮が胸は搔かき乱みだれて、今は漸やうやく危きを懼おそれざる覚悟も出いで来て、いつまで草のいつまでかくてあらんや、文は送らんと、この日頃思ひ立ちてけり。

紙の良きを扱えらび、筆の良きを扱えらび、墨の良きを扱えらび、彼は意こころしてその字の良きを殊ことに扱えらびて、今日の今ぞ始めて仮かり初そめならず写さんと為すなる。打うち顫ふるふ手に十行余認あまじめしを、つと裂きて火鉢に差さしければ、焰ほの急に炎々と騰のぼるを、可うと疎しと眺めたる折しも、紙門ふすまを啓あけてその光に惧おびえし婢をんなは、覚えあるず主の気色けしきを異あやみつつ、

「あの、御本家の奥様がお出いで遊ばしました」

第四章

あるじ
主夫婦を併せて焼亡せし鰐淵が居宅は、さるほど貫一の手に頼りてその跡に改築せられぬ、有形よりは小体に、質素を旨としたれど専ら旧の構造を摸して差はざらんと勉めしに似たり。

間貫一と陶札を掲げて、彼はこの新宅の主になれるなり。家督たるべき直道は如何にせし。彼は始よりこの不義の遺産に手をも触れざらんと誓ひ、かつこれを貫一に与へて、その物は正業の資たれ。その人は改善の人たれと冀しを、貫一は今この家の主となれるに、なほ先代の志を翻さずして、益す盛に例の貪を営むなりき。然れば彼と貫一との今日の関繋は如何なるものならん。絶えてこれを知る者あらず。凡そ人生箇々の裏面には必ずかくのごとく如き内情若くは秘密とも謂ふべき者ありながら、幸に他の穿鑿を免れて、曖昧の裏に葬られ畢んぬる例尠からず。二代の鰐淵なる間の家のこの一件もまた貫一と彼との外に洩れざるを得たり。

かくして今は鰐淵の手代ならぬ三番町の間は、その向に有数の名を成して、外には善く貸し、善く斂むれども、内には事足る老婢を役ひて、僅に自炊ならざる男世帯を張りて、

なほも奢らず、樂まず、心は昔日の手代にして、趣は失意の書生の如く依然たる変物の名を失はでゐたり。

出でてはさすがに勞れて日暮に歸り来にける貫一は、彼の常として、吾家ながら人氣無き居間の内を、旅の木蔭にも休へる想しつつ、稍興冷めて坐りも遣らず、物の悲き夕を特に独の感じれば、老婢はラムプを持ち来りて、

「今日三時頃でございました、お客様が見えまして、明日又今頃来るから、是非内に居てくれるやうにと有仰つて、お名前を伺つても、学校の友達だと言へば可い、とさう有仰つてお歸りになりました」

「学校の友達？」

臆測にも知る能はざるはこの藪から棒の主なり。

「どんな風の人かね」

「さやうでございますよ、年紀四十ばかりの蒙茸と髭髯の生えた、身材の高い、剛い顔の、全で壮士みたやうな風体をしてお在でした」

「……………」

些の憶起す節もありや、と貫一は打案じつつも半は怪むに過ぎざりき。

「さうして、まあ大相横柄な方なのでございます」

「明日三時頃に又来ると？」

「さやうでございますよ」

「誰か知らんな」

「何だか誠に風の悪さうな人体で御座いましたが、明日参りましたら通しませうで御座いますか」

「ぢや用向は言つては行かんのだね」

「さやうでございますよ」

「宜い、会つて見やう」

「さやうでございますか」

起ち行かんとせし老婢は又居直りて、

「それから何でございました、間もなく赤檉さんがいらつしやいまして」

貫一は慄ばざる色を作してこれに応へたり。

「神戸の蒲鉾を三枚、見事なのでございます。それに藤村の蒸羊羹を下さいます、私まで毎度又頂戴物を致しましたので御座います」

彼は益す不快を禁じ得ざる面色して、応答も為で聴きゐたり。

「さうして明日、五時頃些とお目に掛りたいから、さう申上げて置いてくれと有仰つて御座いました」

可しとも彼は口には出さず、寧ろ止めよとやうに忙しく領けり。

(四) の二

学校友達と名宣りし客はその言の如く重ねて訪ひ来ぬ。不思議の対面に駭き惑へる貫一は、迅雷の耳を掩ふに違あらざらんやうに劇く吾を失ひて、頓にはその惘然たるより覚むるを得ざるなりき。荒尾譲介は席の温る間の手弄に放ちも遣らぬ下髯の、長く忘れたりし友の今を如何にと観るに忙かり。

「殆ど一昔と謂うても可い程になるのぢやから話は沢山ある、けれどもこれより先に聞きたいのは、君は今日でも僕をじや、この荒尾を親友と思うてをるか、どうかと謂ふのじや」

答ふべき人の胸はなほ自在に語るべくもあらず乱れたるなり。

「考へるまではなからう。親友と思うてをるなら、をる、さうなけりや、ないと言ふまで
 イエスノウ
 で是か否かの一つじや」

「そりや昔は親友であつた」

彼は覺束無げに言出せり。
 おぼつかな
 いひいだ

「さう」

「今はさうぢやあるまい」

「何為にな」
 なぜ

「その後五六年も全く逢はずにゐたのだから、今では親友と謂ふことは出来まい」

「なに五六年前も一向親友ではありやせんぢやつたではないか」
 ぜん

貫一は目を側めて彼を訝りつ。
 そば
 いぶか

「さうぢやらう、学士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談
 せ
 も為んのみか、それなり失踪してうたのは何処が親友なのか」
 しつそう
 どこ

その常に慙ぢかつ悔る一事を責められては、癒えざる瘡をも割るる心地して、彼は苦し
 は
 くゆ
 い
 きず
 さか
 げに容を斂め、声をも出さでゐたり。
 かたちをさ
 いだ

「君の情人は君に負いたぢやらうが、君の友は決して君に負かん筈ぢや。その友を何為に
 い
 ろ
 そむ
 フレンドけ
 はず
 フレンドなぜ

君は棄てたか。その通り棄てられた僕ぢやけれど、かうして又訪ねて来たのは、未だ君を
実は棄てんのじやと思ひ給へ」

学生たりし荒尾！ 参事官たりし荒尾！！ 尾羽打枯せる今の荒尾の姿は変りたれど、
猶^{なほ}一片の変わらぬ物ありと知れる貫一は、夢とも消えて、去りし、去りし昔の跡無き跡を悲
しと慄^{しの}ぶなりけり。

「然し、僕が棄てても棄てんでも、そんな事に君は痛痒^{つうよう}を感じるぢやなからうけれど、
僕は僕で、友^{フレンド}の徳義としてとにかく一旦は棄てんで訪ねて来た。で、断然棄つるも、又棄
てんのも、唯^{つもり}今日^{こんにち}にある意じや。

今では荒尾を親友とは謂へん、と君の言うたところを以つて見ると、又今更親友である
ことを君は望んではをらんやうじや。さうであるならば僕の方でも敢^{あへ}て望まん、立派に名^な
宣^のつて僕も間貫一を棄つる！」

貫一は頭^{かしら}を低^たれて敢て言はず。

「然し、今日^{こんにち}まで親友と思うてをつた君を棄つるからには、これが一生の別^{わか}れになるのぢ
やから、その餞^{はなむけ}行^いとして一言^{いちごん}云はんけりやならん。

間、君は何の為に貨^{かね}を殖^{こし}ゆるのぢや。かの大いなる楽^{たのしみ}とする者を奪れた為に、それに易^か

へる者として金銭マネエといふ考を起したのか。それも可からう、可いとして措くお。けれどもじや、それを獲える為に不義不正の事を働く必要が有るか。君も現在他ひとから苦められてゐる軀からだではないのか。さうなれば己おのれが又他ひとを苦むるのは尤も用捨すべき事ぢやらうと思ふ。それが他ひとを苦むると謂うても、難儀に附入つけいつて、さうしてその血を搾しぼるのが君の営業、殆ど強奪に等しい手段を以つて金を殖こしらえつつ、君はそれで今日慰められてをるのか。如何に金銭マネエが總すべての力であるか知らんけれど、人たる者は悪事を行つてをつて、一刻でも安樂に居らるるものではないのじや。それとも、君は怡然いぜんとして楽しんでをるか。長閑な日に花の盛さかりを眺むるやうな氣持で催促に行つたり、差押さしおさへを為たりしてをるか。どうかい、間」

彼は愈いよいよ口を閉ぢたり。

「恐くじや。さう云ふ氣持の事は、この幾年間に一日でも有りはせんものぢやらう。君の顔が色しよくを見い！ 全まるで罪人じやぞ。獄中に居る者の面つらじや」

別人と見るまでに彼の浅ましく瘁やつれたる面おもてを矚まもりて、讓介は涙の落つるを覚えす。

「間、何で僕が泣くか、君は知つてをるか。今の間ぢや知らんぢやらう。幾多貨いくらかねを殖こしらへたところで、君はその分では到底慰めらるる事はありません。病が有るからと謂うて毒を飲んで、その病が瘥なほるぢやらうか。君はあたかも藥を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕

フレンドの友であつた間はそのな痴漢ぢやなかつた、して見りや発狂したのじや。発狂してからに馬鹿な事を為居る奴は尤むるに足らんけれど、一婦人の為に発狂したその根性を、彼のフレンド友として僕が慙ぢざるを得んのじや。間、君は盗人と言れたぞ。罪人と言れたぞ、狂人と言れたぞ。少しは腹を立てい！ 腹を立てて僕を打つとも蹴るとも為て見い！」

彼は自ら言ひ、自ら憤り、尚自ら打ちも蹴も為んずる色を作して速々答を貫一に逼れり。

「腹は立たん！」

「腹は立たん？ それぢや君は自身に盗人とも、罪人とも……」

「狂人とも思つてゐる。一婦人の為に発狂したのは、君に対して実に面目無いけれど、既に発狂して了つたのだから、どうも今更為やうが無い。折角ぢやあるけれど、このまま棄置いてくれ給へ」

貫一は纔にかく言ひて已みぬ。

「さうか。それぢや君は不正な金銭で慰められてをるのか」

「未だ慰められてはをらん」

「何日慰めらるるのか」

「解らん」

「さうして君は妻君を娶うたか」

「娶はん」

「何故娶はんのか、かうして家を構へてをるのに独身ぢや不都合ぢやらうに」

「さうでもないさ」

「君は今では彼の事をどう思つてをるな」

「彼とは宮の事かね。あれは畜生さ！」

「然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心は有つちやをらん、人の心が無

けりや畜生じや」

「さう云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか」

「僕も畜生かな」

「……………」

「間、君は彼が畜生であるのに激してやはり畜生になつたのぢやな。若し彼が畜生であつたのを改心して人間に成つたと為たら、同時に君も畜生を罷めにやならんじやな」

「彼が人間に成る？ 能はざる事だ！ 僕は高利を食ふ畜生だけれど、人を欺く事は為ん

のだ。詐^{いつは}つて人の誠を受けて、さうしてそれを売るやうな残忍な事は決して為^なんだ。始から高利と名^な宣^のつて貸すのだから、否^{いな}な者は借^かりんが可^よいので、借^かりん者を欺^{あざむ}いて貸すのぢやない。宮の如^{ごと}き畜生が何で再び人間に成^なり得^えるものか」

「何^{なぜ}為^な成^なり得^えんのか」

「何^{なぜ}為^な成^なり得^えるのか」

「さうなら君は彼の人間に成^なり得^えんのを望^{のぞ}むのか」

「望^{のぞ}むも望^{のぞ}まんも、あんな者に用^{もち}は無^ない！」

寧^{むし}ろその面^{めん}に唾^{つば}せんと思^{おも}へる貫^{くわん}一の氣^け色^{しき}なり。

「そりや彼には用^{もち}は無^ないぢやらうけれど、君の為^{ため}に言^いふべきことぢやと思^{おも}ふから話^わすのぢやが、彼は今では大いに悔^{くわい}悟^ごしてをるぞ。君に對^{たい}して罪^{つみ}を悔^{くわい}いてをるぞ！」

貫^{くわん}一は吾^{われ}を忘^{わす}れて嗤^{あざわ}笑^らひぬ。彼はその如^{ごと}かに賤^{いやし}むべきか、謂^いはんやうもあらぬを念^{おも}ひて、更に嗤^{あざわ}笑^らひ猶^{なほ}嗤^{あざわ}笑^らひぬ、遏^やめんとして又^{また}嗤^{あざわ}笑^らひぬ。

「彼もさうして悔^{くわい}悟^ごしてをるのぢやから、君も悔^{くわい}悟^ごするが可^よからう、悔^{くわい}悟^ごする時^{とき}ぢやらうと思^{おも}ふ」

「彼の悔^{くわい}悟^ごは彼の悔^{くわい}悟^ごで、僕^{あづか}の与^よる事^{こと}は無^ない。畜^{ちく}生^{せい}も少しは思^{おも}知^ちつたと見える、それも可

からう」

「先頃計らず彼に逢うたのじや、すると、僕に向うて涙を流して、そりや眞実悔悟してを
 るのじや。さうして僕に詫^{わび}を為てくれ、それが成らずば、君に一遍逢せてくれ、と縋^{すが}つて
 頼むのじやな、けれど僕も思ふところが有るから拒絶はした。又君に對しても、彼がその
 様に悔悟してゐるから容^{ゆる}して遣れと勧めは為^せん、それは別問題じや。但^{ただ}僕として君に言ふ
 ところは、彼は悔悟して独^{ひと}り苦んでをる。即^{すなは}ち彼は自ら罰せられてをるのぢやから、君は
 君として怨^{うらみ}を釈いて可からうと思ふ。君がその怨を釈いたなら、昔の間に復^{かへ}るべきぢやら
 うと考へるのじや。

君は今のところ慰められてをらん、それで又、何日慰^いめらるるとも解らんと言うたな、
 然しじや、彼が悔悟してからにその様に思つてをると聞いたたら、君はそれを以つて大いに
 慰められはせんかな。君がこの幾年間に得た金^{マネエ}錢、それは幾多^{いくた}か知らんけれど、その寡^{すくな}
 らん金^{マネエ}錢よりは、彼が終^{つひ}に悔悟したと聞いた一言^{いちごん}の方が、遙^{はるか}に大いなる力を以つて君の心
 を慰むるであらうと思ふのじやが、どうか」

「それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん為の悔悟だらう。宮が前非を悟
 つた為に、僕が失つた者を再び得られる訳ぢやない、さうして見れば、僕の今日^{こんにち}はそれ

に因つて少しも慰められるところは無いのだ。憎いことは彼は飽くまで憎い、が、その憎さに僕が慰められずにゐるのではないからして、宮その者の一身に向つて、僕は棄てられた怨を報いやうなどとは決して思つてをらん、畜生に讐を復す価は無いさ。

今日になつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひたいけれど、これは固よりさう有るべき事なのだ。始にあんな不心得を為なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得であつた、非常な不心得であつた！」

彼は黯然として空く懷へるなり。

「僕は彼の事は言はんのじや。又彼が悔悟した為に君の失うた者が再び得らるる訳でないから、それぢや慰められんと謂ふのなら、それで可いのじや。要するに、君はその失うた者が取返されたら可いのぢやらう、さうしてその目的を以つて君は貨を殖へてをるのぢやらう、なあ、さうすりやその貨さへ得られたら、好んで不正な營業を為る必要は有るまいが。君が失うた者が有る事は知つてをる。それが為に常に樂まんのも、同情を表してゐる、そこで金銭の力に頼つて慰められやうとしてゐる、に就いては異議も有るけれど、それは君の考に委する。貨を殖ゆるも可い、可いとする以上は大いに富むべしじや。けれど、富むと云ふのは貪つて聚むるのではない、又貪つて聚めんけりや貨は得られんのではない、

不正な手段を用^{もちろ}んでも、富む道は幾多^{いくら}も有るぢやらう。君に言ふのも、な、その目的を變へようではない、止^ただ手段を改めよじや。路^{みち}は違へても同じ高嶺^{たかね}の月を見るのじやが」

「辱^{かたじけ}ないけれど、僕の迷は未だ覚めんのだから、間は発狂してゐる者と想つて、一切^{いっせつ}かまひ付けずに措いてくれ給へ」

「さうか。どうあつても僕の言^{ことば}は用^{もちろ}られんのじやな」

「容^{ゆる}してくれ給へ」

「何を容すのじや！ 貴様は俺を棄てたのではないか、俺も貴様を棄てたのじやぞ、容すも容^{ゆる}さんも有るものか」

「今日^{こんにち}限^{かぎり}互に棄てて別れるに就いては、僕も一箇^{ひとつ}聞きたい事が有る。それは君の今の身の上だが、どうしたのかね」

「見たら解るぢやらう」

「見たばかりで解るものか」

「貧乏してをるのよ」

「それは解つてゐるぢやないか」

「それだけじや」

「それだけの事が有るものか。何で官途を罷めて、さうしてそんなに貧乏してゐるのか、様子が有りさうぢやないか」

「話したところで狂人^{きちがひ}には解らんのよ」

荒尾は空嘯^{そらうそぶ}きて起たんと為^すなり。

「解つても解らんでも可いから、まあ話すだけは話してくれ給へ」

「それを聞いてどう為る。ああ貴様は何か、金でも貸さうと云ふのか。No 《ノオ》 thank 《サンク》 じゃ、赤貧洗ふが如く窮してをつても、心は怡然^{いぜん}として楽しんでゐるのじゃ」

「それだから猶^{なほ}、どう為てさう窮して、それを又楽しんでゐるのか、それには何か事情が有るのだらう、から、それを聞せてくれ給へと言ふのだ」

荒尾は故^こらに哈^{こう}々として笑へり。

「貴様如^{むけ}き無^む血^{けつ}虫^{ちゅう}がそんな事を聞いたとて何が解るもので。人間らしい事を言ふな」

「さうまで辱^{はづ}められても辞^{ことば}を返すことの出来ん程、僕^{からだ}の軀は腐つて了つたのだ」

「固よりじゃ」

「かう腐つて了つた僕の軀^{からだ}は今更為方が無い。けれども、君は立派に学位も取つて、参事官の椅子にも居た人、国家の為に有用^{うつは}の器であることは、決して僕の疑はんところだ。で、

僕は常に君の出世を予想し、又陰ひそかにそれを構いつてをつたのだ。君は僕を畜生と言ひ、狂人と言ひ、賊と言ふけれど、君を懷おもふ念の僕の胸中を去つた事はありませんよ。今日こんにちまで君の外には一人いちにんの友も無いのだ。一昨年をとしであつた、君が静岡へ赴任すると聞いた時は、嬉くもあり、可なつかし懷くもあり、又考へて見れば、自分の身が悲くもなつて、僕は一日飯も食はんでゐた。それに就けても、久し振で君に逢つて慶賀よろこびも言ひたいと念おもつたけれど、どうも逢れん僕の軀からだだから、切せめて陰ながらも君の出世の姿が見たいと、新橋の停車場へ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何もかも忘れて僕は唯嬉くて涙が出た」

さてはと荒尾も心陰こころひそかに頷うなづきぬ。

「君の出世を見て、それほど嬉かつた僕が、今日こんにち君のそんなに零落してゐるのを見る心持はどんなであるか、察し給へ。自分の身を顧おもうにかう云ふ事を君に向つて言ふべきではないけれど、僕はもう己おのれを棄ててゐるのだ。一婦女子いつふじよしの詐いつはりごと如ごときに憤つて、それが為に一身を過つたと知りながら、自身の覚悟を以て匡きやうせい正せいすることの出来んと謂ふのは、全く天性愚劣の致すところと、自ら恨むよりは無いので、僕は生きながら腐れて、これで果てるのだ。君の親友であつた間貫一は既に亡き者に成つたのだ、とさう想つてくれ給へ。であるから、これは間が言ふのではない。君の親友の或者が君の身を愛をしんで忠告するのだ

として聴いてくれ給へ。どう云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の軀は十分自重して、社会に立つて壮なる働を作して欲しいのだ。君はさうして窮迫してゐるやうだけれど、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信ずるのだから、一箇人として己の為に身を愛みたまへと謂ふのではなく、国家の為に自重し給へと願ふのだ。君の親友の或者は君がその才を用る為に社会に出やうと為るならば、及ぶ限の助力を為る精神であるのだ」

貫一の面は病などの忽ち癒えけんやうに輝きつつ、如く潔くも麗き辞を語れるなり。

「うう、それぢや君は何か、僕のかうして落魄してをるのを見て気毒と思ふのか」

「君が謂ふほどの畜生でもない！」

「其処じや、間。世間に貴様のやうな高利貸が在る為に、あつぱれ用らるべき人才の多くがじや、名を傷け、身を誤られて、社会の外に放逐されて空く朽つるのじやぞ。国家の為に自重せい、と僕の如き者にでもさう言うてくるのは忝ないが、同じ筆法を以つて、君も社会の公益の為にその不正の業を罷めてくれい、と僕は又頼むのじや。今日の人才を滅す者は、日く色、日く高利貸ぢやらう。この通り零落れてをる僕が気毒と思ふなら、君

の為に艱なやまされてをる人才の多くを一層不敏ふびんと想うて遣れ。

君が愛ラヴに失敗して苦むのもじや、或人が金錢マネエの為に苦むのも、苦むと云ふ点に於ては差異はりは無いぞ。で、僕もかうして窮迫してをる際ぢやから、憂を分つ親友の一人は誠欲おもいのじや、昔の間貫一のやうな友が有つたらばと思はん事は無い。その友が僕の身を念うてくれて、社会へ打つて出て壮さかんに働け、一臂いつびの力を仮さうと言うのであつたら、僕は如何いかに嬉からう！ 世間に最も喜ぶべき者は友、最も惡むべき者は高利貸ぢや。如何いかに高利貸の惡むべきかを知つてをるだけ、僕は益ますす友を懷ふふのじや。その昔の友が今日こんにちの高利貸——その惡むべき高利貸！ 吾又何をか言はんじや」

彼は口を閉ぢて、貫一を疾視しせり。

「段々の君の忠告、僕は難ありがた有い。猶自分にも篤と考へて、この腐れた軀からだが元の通潔白な者に成り得られるなら、それに越した幸は無いのだ。君もまた自愛してくれ給へ。僕には棄てられても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用られなければならんその人が、さうして不遇で居るのは、残念であるよりは僕は悲い。そんなに念おもつてもゐるのだから一遍君の処を訪ねさしてくれ給へ。何処どこに今居るかね」

「まあ、高利貸などは来て貫もらはん方が可い」

「その日は友として訪ねるのだ」

「高利貸に友は持たんものな」

雍かに紙門を押啓きて出来るを、誰かと見れば満枝なり。彼如何なれば不躰に

もこの席には顕れけん、と打駭ける主よりも、荒尾が心の中こそ更に匹ふべくもあら

ざるなりけれ。いでや、彼は窺みてその長き髻をば痛に拵りつ。されど狼狽へたりと見ら

れんは口惜しとやうに、遽にその手を胸高に拱きて、動かざること山の如しと打控へ

たる様も、自らわざとらしくて、また見好げにはあらざりき。

満枝は先づ主に挨拶して、さて荒尾に向ひては一際礼を重く、しかも躬は手の動き、

目の視るまで、専ら貴婦人の如く振舞ひつつ、笑むともあらず面を和けて姑く辞を出さず。

荒尾はこの際なかなか黙するに堪へずして、

「これは不思議な所で！ 成程間とは御懇意かな」

「君はどうして此方を識つてゐるのだ」

左瞻右視して貫一は呆るのみなり。

「そりや少し識つてをる。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに失敬した」

「荒尾さん」

満枝はのが さじと呼留めて、

「かう云ふ処で申上げますのも如何いかがで御座いますけれど」

「ああ、そりや此こゝで聞くべき事ぢやない」

「けれど毎いづも御不在ばかりで、お話が付きかねると申して弱り切つてをりますで御座いますから」

「いや、会うたところからに話の付けやうもないのじや。遁にげも隠れも為んから、まあ、時節を待つて貰はうさ」

「それはどんなにもお待ち申上げますけれど、貴方の御都合の宜よろいやうにばかり致してはをられませんで御座います。そこはお察しあそばしませな」

「うう、随分酷ひどい事を察しさせられるのじやね」

「近日に是非わたくし願ひ申しに伺ひますで御座いますから、どうぞ宜く」

「そりや一向宜くないかも知れん」

「ああ、さう、この前でございましたか、あの者が伺ひました節、何か御無礼な事を申上げましたとかで、大相な御立腹で、お刀をお抜き遊ばして、斬きつて了しまふとか云ふ事が御座いましたさうで」

「有つた」

「あれ、本当にさやうな事を遊ばしましたので？」

満枝は彼に耻ぢよとばかり嗤あざわら笑ひぬ。さ知つたる荒尾は飽くまで真顔を作りて、

「本当とも！ 實際那奴あやつたきき却つて了はうと思うた」

「然しお考へ遊ばしたで御座いませう」

「まあその辺ぢや。あれでも犬猫ぢやなし、斬捨てにもなるまい」

「まあ、怖い事ぢや御座いませんか。こほ私なぞは滅多に伺ふ訳には参りませんで御座います

ね」

そは誰たが事を言ふならんとやうに、荒尾は頂うなじを反して噪き笑ひぬ。のめ

「僕が美人を斬るか、その目で僕が殺さるか。どれ歸つて、刀でも拭ふいて置かう」

「荒尾君、夕飯ゆふめしの支度が出来たさうだから、食べて行つてくれ給へ」

「それは折角ぢやが、盗泉の水は飲まんで」

「まあ貴方、私お給仕を勤めます。さあ、まあお下にゐらしつて」

満枝は荒尾の立てる脚下あしもとに褥しとねを推付けて、実げに還かへさじと主あるじにも劣おとらず最惜いとをしむ様なり。

「全で御夫婦のやうじやね。これは好一對じや」

「そのお意で、どうぞお席にゐらしつて」

もともと 固より留らざるべき荒尾は終に行かんとしつゝ、

「間、貴様は……」

「……………」

「……………」

彼は唇の寒かるべきを思ひて、空く鬱抑して帰り去れり。その言はざりし語は直に貫一が胸に響きて、彼は人の去にける迹も、なほ聴くに苦き面を得挙げざりけり。

(四) の三

程も有らずラムプは点されて、止だに在りけるままに竦みゐたる彼の傍に置るとともに、その光に照さるる満枝の姿は、更に粧をも加へけんやうに怪しからず妖艶に、宛然色香を壇にせる牡丹の枝を咲撓めたる風情にて、彼は親しげに座を進めつ。

「間さん、貴方どうあそばして、非常にお鬱ぎ遊ばしてゐらつしやるぢや御座いませんか」
貫一は怠くも纔に目を移して、

「一体貴方はどうして荒尾を御存じなのですか」

「私よりは、貴方があの方の御朋友ごほうゆうであらつしやるとは、実に私意外で御座いますわ」

「貴方はどうして御存じなのです」

「まあ債務者のやうな者なので御座います」

「債務者？ 荒尾が？ 貴方の？」

「私が直接に關係した訳ぢや御座いませんのですけれど」

「はあ、さうして額たかは若干しよれほどなのですか」

「三千円ばかりでございますの」

「三千円？ それでその直接の貸主かしぬしと謂ふのは何処どこの誰ですか」

滿枝は彼の遽にはかに振向ねぢむきて膝ひざの前すすむをさへ覚えざらんとするを見て、歪ゆがむる口角くちもとに笑ゑみを

忍しのびつ、

「貴方は実に現金であらつしやるのね。御自分のお聴いぜいになりたい事は熱心にお成りで、平生私がお話でも致すと、全まるで取合つても下さいませぬのですもの」

「まあ可いです」

「些ちよつとも可い事はございませぬ」

「うう、さうすると直接の貸主と謂ふのが有るのですね」

「存じません」

「お話し下さいな、様子に由つてはその金は私から弁償しやうとも思ふのですから」

「私貴方からは戴きません」

「上げるのではない、弁償するのです」

「いいえ、貴方とは御相談になりません。又貴方が是非弁償なさると云ふ事ならば、私あの債権を棄てて了ひます」

「それは何為なぜですか」

「何為ようしでも宜う御座いますわ。ですから、貴方が弁償なさらうと思召おぼしめすなら、私に債権を棄てて了へと有仰おつしやつて下さいまし、さう致せば私喜んで棄てます」

「どう云ふ訳ですか」

「どう云ふ訳で御座いますか」

「甚はなはだ解らんぢやありませんか」

「勿論もちろん解らんので御座いますとも。私自分で自分が解らんくらゐで御座いますもの。然し貴方も間さん、随分お解りに成りませんのね」

「いいや、僕は解つてゐます」

「ええ、解つてゐらつしやりながら些ちよつともお解りにならないのですから、私も益ますす解らな
くなりますですから、さう思つてゐらつしやいまし」

満枝は金煙管きんぎせるに手炉てあぶりの縁ふちを丁ちようと拍うちて、男の顔に流ながしめしめの怨うらみみを注ぐなり。

「まあさう云ふ事を言はずに、ともかくもお話をなすつて下さい」

「御勝手ねえ、貴方は」

「さあ、お話し下さいな」

「唯今お話致しますよ」

満枝は遽にはかに煙管きせるを索もとめて、さて傍かたはらに人無ごき若とく緩ゆるに煙やを吹ふきぬ。

「貴方の債務者であらうとは実に意外だ」

「……………」

「どうも事実として信ずる事は出来んくらゐだ」

「……………」

「三千円！ 荒尾が三千円の負債を何で為たのか、殆ど有得ほとんべき事でないのだけれど、…

…」

「……………」

唯見れば、満枝はなほも煙管を放たざるなり。

「さあ、お話し下さいな」

「こんなに遅々してをりましたら、さぞ貴方憤つたくてゐらつしやいませう」

「憤つたいのは知れてゐるぢやありませんか」

「憤つたいと云ふものは、決して好い心持ちやございませんのね」

「貴方は何を言つてお在なのです！」

「はいはい恐入りました。それぢや早速お話を致しませう」

「どうぞ」

「蓋か御承知でゐらつしやいましたらう。前に宅に居りました向坂と申すの、あれが静岡へ参つて、今では些と盛に遣つてをるので御座います。それで、あの方は静岡の参事官で在なのでした。さやうで御座いましたらう。その頃向坂の手から何したので御座います。究竟あの方もその件から諭旨免官のやうな事にお成なすつて、又東京へお還りにならなければ為方が無いので、彼方を引払ふのに就いて、向坂から話が御座いまして、宅の方へ始は委任して参つたので御座いましたけれど、丁度去年の秋頃から全然此方へ引継い

で了ふやうな都合に致しましたの。

然し、それは取立に骨が折れるので御座いましてね、ああして止と遊んでお在も同様で、翻訳か何か少ばかり為さる御様子なので、今のところではどうにも手の着けやうが無いので御座いますわ」

「はあ成程。然し、あれが何で三千円と云ふ金を借りたかしらん」

「それはあの方は連帯者なので御座います」

「はあ！ さうして借主は何者ですか」

「大館朔郎とおおだちさくろうと云ふ岐阜の民主党員で、選挙に失敗したものですから、その運動費の後肚だとか云ふ話でございました」

「うむ、如何にも！ 大館朔郎……それぢや事実でせう」

「御承知であらつしやいますか」

「それは荒尾に学資を給した人で、あれが始終恩人と言つてをつたその人だ」

「はやその言の中に彼の心は急に傷みぬ。己の敬愛せる荒尾讓介の窮して戚々たらず、

天命を樂むと言ひしは、真に義の為に功名を擲ち、恩の為に富貴を顧ざりし故にあらずや。

彼の貧きは万々人の富めるに優れり。君子なる吾友よ。さしも潔き志を抱ける者にして、

その酬らるる薄倖はつこうの彼の如く甚く酷なるを念ひて、貫一は漫ろ涙の沸く目を閉ぢたり。

第五章

遽にはかに千葉に行く事有りて、貫一は午後五時の本所発を期して車を飛せしに、咄嗟あなや、一歩の時を遅れて、二時間後の次回を待つべき倒懸とうけんの難に遭へるなり。彼は悄々停車場前の休憩処に入りて奥の一間なる縞毛布しまケットの上に温茶ぬるちやを啜りたりしが、門を出づる折受取りし三通の郵書の鞆かばんに打込みしままなるを、この時取出せば、中に一通の M. Shigis

——と裏書せるが在り。

「ええ、又寄来した！」

彼はこれのみ開封せずして、やがて他の読よみと一つに投入れし鞆を礮はたと閉づるや、枕に引寄せて仰臥あふぎいふすと見れば、はや目を塞ぎて睡ねむりを促さんと為るなりき。されども、彼は能く睡るを得べきか。さすがにその人の筆の蹟あとを見ては、今更に憎しとも恋しとも、絶えて念には懸けざるべしと誓へる彼の心も、睡らるるまでに安かる能はざるなり。

いで、この文こそは宮が送りし再度の懇うつたへにて、その始て貫一を驚かせし一札いつさつは、約そ

二週間前に彼の手に入りて、一字も漏れずその目に触れしかど、彼は曩に荒尾に答へしと同様の意を以てその自筆の悔悟を読みぬ。こたびとてもまた同じ繰言なるべきを、何の未練有りて、徒に目を汚し、懷を傷けんやと、氣強くも右より左に搔遣りけるなり。

宮は如何に悲しからん！ この兩度の消息は、その苦き胸を剖き、その切なる誠を吐きて、世をも身をも忘れし自白なるを。事若し誤らば、この手証は生ながら葬らるべき罪を獲るに余有るものならずや。さしも覚悟の文ながら、彼はその一通の力を以て直に貫一の心を解かんとは思設けざりき。

故に幾日の後に待ちて又かく聞えしを、この文にもなほ驗あらずば、彼は弥増す悲の中に定めて三度の筆を援るなるべし。知らずや、貫一は再度の封をだに切らざりしを——三度、五度、七度重ね重ねて十百通に及ばんとも、貫一は断じてこの愚なる悔悟を聴かじと意を決せるを。

静に臥したりし貫一は忽ち起きて鞆を開き、先づかの文を出し、燂児を搜りて、封のまなるその端に火を移しつつ、火鉢の上に差翳せり。一片の焰は烈々として、白く颯るものは宮の思の何か、黒く壊落つるものは宮が心の何か、彼は幾年の悲と悔とは嬉くも今その人の手に在りながら、すげなき烟と消えて跡無くなりぬ。

貫一は再び鞆を枕にして始の如く仰臥せり。

間有りて婢どもの口々に呼邀ふる声して、入来し客の、障子越なる隣室に案内されたる氣勢に、貫一はその男女の二人連なるを知れり。

彼等は若き人のやうにもあらず頗る沈寂に座に着きたり。

「まだ沢山時間が有るから寛り出来る。さあ、鈴さん、お茶をお上んなさい」

こは男の声なり。

「貴方本当にこの夏にはお帰んなさいますのですか」

「盆過には是非一度帰ります。然しね、お話をした通り尊父さんや尊母さんの気が變つ

て了つてお在なのだから、鈴さんばかりそんなに思つてゐておくれでも、これがどうして、

円く納るものぢやない。この上はもう唯諦めるのだ。私は男らしく諦めた！」

「雅さんは男だからさうでせうけれど、私は諦めません。さうぢやないと言ひなさるけ

れど、雅さんは阿父さんや阿母さんの為方を慍つてお在なのに違無い。それだから私まで

が憎いので、いいえ、さうよ、私は何でも可いから、若し雅さんが引取つて下さらなけれ

ば、一生何処へも適きはしませんから」

女は処々聞き得ぬまでの涙声になりぬ。

「だつて、尊父さんや尊母さんが不承知であつて見れば、幾許いくら私の方で引取りたくつても引取る訳に行かないぢやありませんか。それも、誰たれを怨むうら訳も無い、全く自分が悪いからで、こんな軀からだに疵きずの付いた者に大事の娘をくれる親は無い、くれないのが尤もつともだと、それは私は自分ながら思つてゐる」

「阿父さんや阿母さんがくれなくても、雅さんさへ貰もらつて下されば可いのぢやありませんか」

「そんな解らない事を言つて！ 私だつてどんなに悔くやしいか知れはしない。それは自分の不心得からあんな罪にも陥ちただけれど、実を謂へば、高利貸の※わなに雇かかつたばかりで、自分の軀からだには生涯の疵きずを付け、隻ひとりの母親は……殺して了ひ、又その上に……許いひなづけ婚は破談にされ、……こんな情無い思を為る位なら、不如いっそ私は牢ろうの中で死んで了つた……方が可かつた！」

「あれ、雅さん、そんな事を……」

両箇ふたりは一度に哭なき出いだせり。

「阿母さんがあん畜生ちきしようの家を焼いて、夫婦とも焼死んだのは好い肚癒はらいせぢやあるけれど、一旦私の軀からだに附いたこの疵は消えない。阿母さんも来月は鈴すずさんが来てくれると言つ

て、朝晩にそればかり樂たのしみにして在あすつた……のだし」

女をんなはつと出でし泣音なくねの後を怵こらへ怵こらへて啜すすり上げぬ。

「私わたしも破談わたに為する氣は少も無いけれど、これは私の方から断るのが道だから、必ず悪く思つて下さるな」

「いいえ……いいえ……私は……何も……断られる訳はありません」

「私に添へば、鈴さんの肩身も狭くなつて、生涯何のかのひと人に言れなけりやならない。それがお氣毒だから、私は自分から身を退ひいて、これまでの縁あきと諦あきらめてゐるので、然し、鈴さん、私は貴方の志は決して忘れませんよ」

女は唯い愈い咽むびゐたり。音も立てず臥ふしたりし貫一はこの時忍び起きて、障子の其そこ処こ処こより男を隙すき見みせんと為たりけれど、竟に意つひの如ごとくならで止みぬ。然しかれども彼まさは正ただしくその声音こゐねに聞き覺おぼえあるを思合せぬ。かの男は鰐淵あくらまの家に放火せし狂女の子にて、私書偽造罪を以て一年の苦役を受けし飽浦雅之あくらまさゆきのならずと為せんや。さなり、女のその名を呼べるにても知らるるを、と独ひとり領うきつつ貫一は又ひ潜ひそりて聴耳立てたり。

「嘘うそにもさうして志は忘れないなんて言つて下さる程なら、やつぱり約束通り私を引取つて下さいな。雅さんがああ云ふ災難にお遭あひなので、それが為に縁を切る意つもりなら、私は、雅

さん、……一年が間……塩断しほだちなんぞ為はしませんわ」

彼は自らその苦節を憶おもひて泣きぬ。

「雅さんが自分に悪い事を為てあんな訳に成つたのぢやなし、高利貸の奴に瞞だまされて無実の罪に陥ちたのは、雅さんの災難だと、私は俱ともども共に悔くやし……悔くやし……悔くやいとは思つてゐても、それで雅さんの軀に疵が附いたから、一処になるのは迷惑だなんと何時いつ私が思つて！ 雅さん、私はそんな女ぢやありません、そんな女ぢや……ない！」

この心を知らずや、と情じよう極きはまりて彼の悶もだえ慨なげくが手に取る如き隣には、貫一が内俯うつぶしに頭を擦すり付つけて、巻ま苳きたばこの消えしを擎ささげたるままに横よこはれるなり。

「雅さんは私をそんな女だと思ひのは、貴方がお留守中の私の事を御存じないからです。私は三月みつぎの余よも疾わづらつて……そんな事も雅さんは知つてお在いぢやないのでせう。それは、阿父おとつさんや阿母おつかさんは雅さんのところへ上げる氣は無いにしても、私は私の了簡りようけんで、若しああ云ふ事が有つたので雅さんの肩身が狭くなるやうなら、私は猶更雅さんのところへ適ゆかずにはゐられない。さうして私も雅さんと一処に肩身が狭くなりたいのですから。さうでなけりや、子供の内からあんなに可愛かはいがつて下すつた雅さんの尊母おつかさんに私は濟まない。親が不承知なのを私が自分の了簡りようけん通とほりに為るのは、そりや不孝かも知れませんか

ど、私はどうしても雅さんのところへ適ゆきたいのですから、お可い厭やでなくば引取つて下さいましな。私の事はかまひませんから雅さんが貰つて下さるお心持あんがお有あなさるのか、どうだか唯それを聞して下さいな」

貫一は身を回めぐして臂ひざまくら枕うちあふに打仰うちあふぎぬ。彼は己おのれが与へし男の不幸よりも、添そはれぬ女の悲かなしみよりも、先まづその娘が意氣の壮さかんなるに感じて、あはれ、世にはかかる切なる恋の焚もゆる如き誠もあるよ、と頭かしらは熱し胸とどろは轟くなり。

さて男の声は聞ゆ。

「それは、鈴すうさん、言ふまでもありはしない。私もこんな目にさへ遭あはなかつたら、今頃は家内三人で睦むつまじく、笑つて暮してゐられるものを、と思へば猶の事、私は今日の別が何とも謂いはれないほど情無い。かうして今では人に顔向かほむけも出来ないやうな身に成つてゐる者をそんなに言つてくれるのは、この世の中に鈴さん一人だと私は思ふ。その優しい鈴さんと一処に成れるものなら、こんな結構な事は無いのだけれど、尊父をぢさん、尊母をばさんの心にもなつて見たら、今の私には添そはされないので、決して無理の無いところで、子を念ふ親じやうの情は、何処どこの親でも差違かはりは無い。そこを考へればこそ、私は鈴さんの事は諦あきらめると云ふので、子として親に苦勞を懸けるのは、不孝どころではない、悪事だ、立派な罪だ！ 私は自分の

不心得から親に苦勞を懸けて、それが為に阿母さんもああ云ふ事に成つて了つたのだから、実は私が手に掛けて殺したも同然。その上に又私ゆゑに鈴さんの親達に苦勞を懸けては、それぢや人の親まで殺すと謂つたやうな者だから、私も諦められないところを諦めて、これから一働して世に出られるやうに成るのを樂に、やつぱり暗い処に入つてゐる氣で精一杯勉強するより外は無い、と私は覺悟してゐるのです」

「それぢや、雅さんは内の阿父さんや阿母さんの事はそんなに思つて下すつても、私の事は些ちつとも思つては下さらないのですね。私の軀なんぞはどうなうと、雅さんはかまつては下さらないのね」

「そんな事が有るものぢやない！ 私だつて……」

「いいえ、可うございます。もう可いの、雅さんの心は解りましたから」

「鈴さん、それは違つてゐるよ。それぢや鈴さんは全まるで私の心を酌んではおくれでないのだ」

「それは雅さんの事よ。阿父さんや阿母さんの事をさうして思つて下さる程なら、本人の私の事だつて思つて下さりさうな者ぢやありませんか。雅さんのところへ適ゆくと極きまつて、その為に御嫁入道具まで丁ちゃんこと調へて置きながら、今更外へ適ゆかれますか、雅さんも考へて見

て下さいな。阿父さんや阿母さんが不承知だと謂つても、そりや余り酷いわ、余り勝手だわ！ 私は死んでも他へは適きはしませんから、可いわ、可いわ、私は可いわ！」

女は身を顫して泣沈めるなるべし。

「そんな事をお言ひだつて、それぢやどう為うと云ふのです」

「どう為ても可う御座います、私は自分の心で極めてゐますから」

亜いで男の声は為ざりしが、間有りて孰より語り出でしとも分かず、又一時密々と

話声の洩れけれど、調子の低かりければ此方には聞知られざりき。彼等は久くこの細語を息めずして、その間一たびも高く言を出さざりしは、互にその意に逆ふところ無かりしなるべし。

「きつと？ きつとですか」

始て又明かに聞えしは女の声なり。

「さうすれば私もその気で居るから」

かくて彼等の声は又低うなりぬ。されど益す絮々として飽かず語れるなり。貫一は心陰に女の成效を祝し、かつ雅之たる者のこれが為に如何に幸ならんかを想ひて、あたかも妙なる楽の音の計らず洩聞えけんやうに、憂かる己をも忘れんとしつ。

今かの娘の宮ならば如何ならん、吾かの雅之ならば如何ならん。吾は今日の吾たるを
扱えらぶ可べきか、将はたかの雅之たるを希こひはんや。貫一は空むなしうかく想へり。

宮も嘗かつて己に對して、かの娘に遜ゆづるまじき誠を抱いだかざるにしもあらざりき。彼にして若も
し金剛石ダイヤモンドの光を見ざりしならば、また吾をも刑余に慕ひて、その誠を全まつたうしたらんや。
唯ただ繼つぐの金力を以て彼女を脅おびしたらんには、またかの雅之を入獄の先に棄てたりけんや。
耀かがやける金剛石ダイヤモンドと汚けがれたる罪名とは、孰いづれか愛を割さくの力多かる。

彼は更にかく思へり。

唯その人を命として、己も有おのれらず、家も有らず、何処いづこの野末のすゑにも相あひ從したがはんと誓へる
かの娘の、竟つひに利の為に志を移さざるを得べきか。又は一旦その人に与へたる愛を吝をしみて、
再び価高く他に売らんと為るなきを得べきか。利と争ひて打勝れたると、他の愛と争ひて
敗れたると、吾等の恨は孰に深からん。

彼は又かくも思へるなり。

それ愛の最も篤あつからんには、利にも惑はず、他に又易やすふる者もあらざる可きを、仮かり初そめ
もこれの移るは、その最も篤あつきにあらざるを明あかせるなり。凡およそ異性の愛は吾愛の如く篤か
るを得ざる者なるか、或あるは己の信あずらんやうに、宮の愛の特ことに己にのみ篤からざりしなる

か。吾は彼の不義不貞を憤るが故に世上の恋なる者を疑ひ、かつ渾てこれを斥けぬ。されどもその一旦の憤は、これを斥けしが為に消ゆるにもあらずして、その必ず得べかりし物を失へるに似たる怏々^{おうおう}は、吾心を食^は尽^{みつ}し、終に吾身を斃^{たふ}すにあらざれば、得やは去るまじき悪^{あく}靈^{りよう}の如く執念^{しゅうね}く吾を苦むるなり。かかれは何事にも樂むを知らざりし心の今日偶^{たまた}ま人の相^{あひ}悦^{よろこ}ぶを見て、又躬^{みづか}も怡^{よろこ}びつつ、樂^{たのし}の影を追ふらんやうなりしは何の故ならん。よし吾は宮の愛ならずとも、これに易ふる者を得て、とかくはこの心を慰めしむ可きや。

彼はいよいよ思廻^{おもひめぐ}せり。

宮はこの日頃吾に篤^{あつ}からざりしを悔いて、その悔を表せんには、何等の事を成さんも唯吾命^{めい}のままならんとぞ言来^{いひこ}したる。吾はその悔の為にはかの憤^{いきどほり}を忘るべきか、任他^{さはれ}吾恋^{こひ}の旧^{むかし}に復りて再び完^{まつた}かるを得るにあらず、彼の悔は彼の悔のみ、吾が失意の恨は終に吾が失意の恨なるのみ。この恨は富山に数倍せる富に因^よりて始て償はるべきか、或^{あるひ}はその富を獲んとする貪^{どん}欲^{よく}はこの恨を移すに足るか。

彼は苦^{くる}き息^{いき}を嘘^ふきぬ。

吾恋^{こひ}を壊^{やぶ}りし唯繼^{ただつぎ}！ 彼等の恋を壊らんと為^せしは誰^たぞ、その吾の今千葉^{おもむ}に赴^{おもむ}くも、又或

は壊り、或は壊らんと為るにあらざる無きか。しかもその貪欲は吾に何をか与へんとすらん。富か、富は吾が狂疾を医すべき特效剤なりや。かの妨げられし恋は、破鏡の再び合ふを得て樂み、吾が割れし愛は落花の復る無くして畢らんのみ！ いで、吾はかくて空く埋るべきか、風に因りて飛ぶべきか、水に落ちて流るべきか。

貫一は船橋を過る燈暗き汽車の中に在り。

第六章

千葉より歸りて五日の後 M. Shigis —— の書信は又來りぬ。貫一は例に因りて封のまま火中してけり。その筆の跡を見れば、忽ち浮ぶその人の面影は、唯繼と並び立てる梅園の密会にあらざる無きに、彼は殆ど當時に同じ憤を発して、先の二度なるよりはこの三度に及べるを、徑廷くも廻らぬ筆の力などを以て、旧に返し得べき未練の吾に在りと思へる、愚なる精衛の來りて大海を填めんとするやと、却りて頑に自ら守らんとも為なり。

さりとも知らぬ宮は蟻の思を運ぶに似たる片便も、行くべき方には音づるを、さ

てかの人の如何に見るらん、書綴れる吾誠の千に一つも通ずる事あらば、掛けても願へる一筋の緒ともなりなんと、人目あらぬ折毎には必ず筆採りて、その限無き思を写してぞ止まざりし。

唯継は近頃彼の専ら手習すと聞きて、その善き行を感じる余に、良き墨、良き筆、良き硯、良き手本まで自ら求め来ては、この難有き心掛の妻に遣りぬ。宮はそれ等を汚はしとて一切用ること無く、後には夫の机にだに向はずなりけり。かく怠らず綴られし文は、又六日を経て貫一の許に送られぬ。彼は四度の文をも例の灰と棄てて顧ざりしに、日を経ると思ふ程も無く、五度の文は来にけり。よし送り送りて千束にも余れ、手に取るからの烟ぞと侮れる貫一も、曾て宮には無かりし執着のかばかりなるを謂知らず異みつ、今日のみは直にも焚かざりしその文を、一度は披き見んと為たり。

「然し……」

彼は輒く手を下さざりき。

「赦してくれと謂ふのだらう。その外には、見なければ成らん用事の有る訳は無い。若し有ると為れば、それは見る可からざる用事なのだ。赦してくれなら赦して遣る、又赦さんでも既に赦れてゐるのではないか。悔悟したなら、悔悟したで、それで可い。悔悟したか

ら、赦したからと云つて、それがどうなるのだ。それが今日の貫一と宮との間に如何なる影響を与へるのだ。悔悟したからあれの操の疵が愈えて、又赦したから、富山の事が無い昔に成るのか。その点に於ては、貫一は飽くまでも十年前の貫一だ。宮！貴様は一生汚れた宮ではないか。ことの破れて了つた今日になつて悔悟も赦してくれも要つたものか、無益な事だ！少も汚れん宮であるから愛してをつたのだ、それを貴様は汚して了つたから怨んだのだ。さうして一遍汚れた以上は、それに対する十倍の徳を行つても、その汚れたのを汚れざる者に改めることは到底出来んのだ。

であるから何と言つた！熱海で別れる時も、お前の外に妻と思ふ者は無い、一命に換へてもこの縁は切られんから、俺のこの胸の中を可憐と思つて、十分決心してくれ、と実に男を捨てて頼んだではないか。その貫一に負いて……何の面目有つて今更悔悟……晚い！」

彼はその文を再三柱に鞭ちて、終に繩の如く引振りぬ。

打続きて宮が音信の必ず一週に一通来ずと謂ふこと無くて、披れざるに送り、送らるるに披かざりしも、はや算ふれば十通に上れり。さすがに今は貫一が見る度の憤も弱りて、待つとはあらねど、その定りて来る文の繁きに、自ら他の悔い悲める宮在るを忘るる能

はずなりぬ。されど、その忘るる能はざるも、遽にはかに彼を可なつかし懷むにはあらず、又その憤の弱れるも、彼を赦し、彼を容れんと為るにあらずして、始はじめに恋ひしをば棄てられ、後には棄てしを悔らるる身の、その古き恋はなほ己おのれに存し、彼の新なる悔は切に貪まつはるも、徒に凍えて水を得たるに同かるこの両ふたつの者の、相對して相あひすく拯ふ能はざる苦くげん艱を添ふるに過ぎざるをや。ここに於て貫一は披かぬ宮が文に向へば、その幾倍の悲きものを吾と心に讀みて、かの恨ならぬ恨も生じ、かの憤ならぬ憤も発して、憂身独うきみひとりの儚はかなき世をば如何にせんやうも知らで、唯安からぬ昼夜を送りつつ、出づるに入るに茫々ぼうぼうとして、彼は屢しばしばばその貪むさぼるをさへ忘るる事ありけり。劇はげしく物思ひて寝ねざりし夜の明方近く疲睡を催せし貫一は、新緑の雨に暗き七時の闇に覺るる夢の苦く頻しきりうめに呻きしを、老婢ろうひよばに喚れて、覺めたりと知りつつ現ならず又睡りけるを、再び彼に揺ゆりおこさ起れて驚けば、

「お客様でございます」

「お客？ 誰だ」

「荒尾さんと有おつしや仰いました」

「何、荒尾？ ああ、さうか」

主あるじの急ぎ起きんとすれば、

「お通し申しますで御座いますか」

「おお、早くお通し申して。さうしてな、唯今起きましたところで御座いますから、暫く失礼致しますとさう申して」

貫一はかの一別の後三度まで彼の隠家を訪ひしかど、毎に不在に会ひて、二度に及べる消息の返書さへあらざりければ、安否の如何を満枝に糺せしに、変る事無く其処に住めりと言ふに、さては真に交を絶たんとすならんを、姑く強て追はじと、一月余も打絶えたりしに、彼方より好くこそ来つれ、吾がこの苦を語るべきは唯彼在るのみなるを、朋の来れるも、実にかくばかり樂きはあらざらん。今日は酒を出して一日彼を還さじなど、心忙しまでに飲ばれぬ。

絶交せるやうに疏音なりし荒尾の、何の意ありて卒に訪来れるならん。貫一はその何の意なりやを念はず、又その突然の来叩をも怪まずして、畢竟彼の疏音なりしはその飄然主義の拘らざる故、交を絶つとは言ひしかど、誼の吾を棄つるに忍びざる故と、彼はこの人のなほ己を友として来れるを、有得べからざる事とは信ぜざりき。

手水場を出来し貫一は腫暈の赤きを連きつつ、羽織の紐を結びも敢へず、つと客間の紙門を排けば、荒尾は居らず、かの荒尾讓介は居らで、美う装へる婦人の独り差

含^{まし}う控^うへたる。打^{うち}惑^{まど}ひて入りかねたる彼の目前^{まのあたり}に、可^う疑^{たがはし}き女客^いも未^{いま}だ背^{そむ}けたる面^{おもて}を回^{めぐら}さず、細雨^{さいりゅう}静^{じやう}に庭樹^{ていじゆ}を撲^うちて滴^{した}る翠^{たみどり}は内^{うち}を照^てせり。

「荒尾^{あらい}さんと有^{おつしや}仰^{おほ}るのは貴方^{あなた}で」

彼は先づかく会釈^{かいしゃく}して席^{せき}に着^きけるに、婦人^{ふじん}は猶^{なほ}も面^{おもて}を示^しさざらんやうに頭^{かしら}を下^{くだ}げて礼^{れい}を作^なせり。しかも彼は輒^{たやす}くその下^{くだ}げたる頭^{かしら}と挂^{つか}へたる手^てとを挙^あげざるなりき。始^{はじめ}に何者^{なにもの}なりやと驚^{おどろか}されし貫一^{くわんいち}は、今^{いま}又何事^{なニニ}なりやと弥^{いよいよ}呆^{あき}れて、彼の様子^{ようす}を打^{うち}晒^{まも}れり。乍^{たちま}ち有^{あり}て貫一^{くわんいち}の眼^{まなこ}は慌^{あわ}忙^{ただし}く覓^{もと}むらん色^{いろ}を作^なして、婦人^{ふじん}の俯^{うつむ}けるを乞^きと窺^{うかが}ひたりしが、

「何ぞ御用^{ごよう}でございますか」

「……………」

彼は益^{ますます}す急^{とみ}に左瞻^{さかん}右視^{かうみ}して窺^{うかが}ひつ。

「どう云^いふ御用^{ごよう}向^{むか}でございますか。伺^{うかが}ひませう」

「……………」

露置^{ゆり}く百合^{はく}の花^{はな}などの仄^{ほのか}に風^{ふう}を迎^{むか}へたる如^{ごと}く、その可^う疑^{たがはし}き婦人^{おんな}の面^{おもて}は術^{じゆつ}無^なげに拳^{こぶし}らんとして、又^{また}慙^はぢ懼^{おそ}れたるやうに遲疑^{たゆた}ふ時^{とき}、

「宮^{みや}!!」と貫一^{くわんいち}の声^{こゑ}は筒^{つつ}抜^ぬけて走^{はし}りぬ。

宮は嬉し悲しの心こころ味あじみて、身も世もあらず泣伏したり。

「何用有つて来た！」

怒いかるべきか、この時。恨むべきか、この時。辱はぢむべきか、悲むべきか、号さけぶべきか、冒のるべきか、責むべきか、彼は一時に万感の相あひ乱れて急なるが為に、吾を吾としも覚ゆる能はずして打顫うちふるひるたり。

「貫かんい一さん！ どうぞ堪かん忍にんして下さいまし」

宮は漸やうやう顔を振挙げしも、凄すさまじく色を変へたる貫一の面おもてに向ふべくもあらで萎しれ俯ふしぬ。

「早く帰れ！」

「……………」

「宮！」

幾いくとせ年ねん間かんかざりしその声ならん。宮は危なつみつつも可なつ懐しと見る目を覚えず其方そなたに転うつせば、鋭みくむかふる貫一の眼まなこの湿うるほへるは、既に如何いかなる涙の催せしならん。

「今更お互に逢ふ必要は無い。又お前もどの顔で逢つふ意か。先達せんだ而つつから頻しきりに手紙を寄来よこすが、あれは一通でも開封したのは無い、来れば直すくに焼棄たいぎて了ふのだから、以来は断じて寄来さんやうに。私わたしは今病中で、かうしてゐるのも太儀たいぎでならんのだから、早く帰つて

貰ひたい」

彼は老婢を召して、

「お客様のお立だ、お供にさう申して」

取附く島もあらず 思 悩める宮を委きて、貫一は早くも独り座を起たんとす。

「貫一さん、^{わたし}私は今日は死んでも可い意でお目に掛りに来たのですから、貴方の存分にどんな目にでも遭せて、^{あは}さうしてそれでもかくも今日は勘弁して、お願ですから私の話を聞いて下さいまし」

「何の為に！」

「私は全く後悔しました！ 貫一さん、私は今になつて後悔しました!! 悉い事はこの間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、^{まる}全で見ても下さらないのでは、後悔してゐる私のどんな切ない思をしてゐるか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばかり、^{たと}設ひ書けない私の筆でも、あれをすっかり見て下すつたら、些とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。色々お詫^{わび}は為る意でも、かうしてお目に掛つて見ると、^{めんぼく}面目が無いやら、悲いやらで、何一語も言へないのですけれど、貫一さん、とても私は来られる筈でない処へかうして来たのには、死ぬほどの覺悟をしたのと

思つて下さいまし」

「それがどう為たのだ」

「さうまで覺悟をして、是非お話を為たい事が有るのですから、御迷惑でもどうぞ、どうぞ、貫一さん、ともかくも聞いて下さいまし」

涙ながらに手を拄へて、吾が足下に額叩く宮を、何為らんとやうに打見遣りたる貫一は、

「六年前の一月十七日、あの時を覚えてゐるか」

「……………」

「さあ、どうか」

「私は忘れは為ません」

「うむ、あの時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ」

「堪忍して下さい」

唯見る間に出行く貫一、咄嗟、紙門は鉄壁よりも堅く閉てられたり。宮はその心に張充めし望を失ひてはたと領伏しぬ。

「豊、豊！」と老婢を呼ぶ声劇く縁続の子亭より聞ゆれば、直に走り行く足音の響き

しが、やがて返し来れる老婢は客間に頭れぬ。宮は未だ頭を挙げずゐたり。可憐き束髪しをらしの頸元深く、黄蘗染の半衿はんえりに紋御召の二枚衿にまいあはせを重ねたる衣紋の綾先あやまつ謂はんやう無く、肩状優う内俯したる脊そびらに金茶地の東綴あづまつづれの帯高く、勝色裏かついろうらの敷乱しきみだれつつ、白羽二重のハンカチーフに涙を掩おほへる指に赤く、白く指環リングの玉を耀かがやしたる、殆ど物語の画をも看みるらん心地して、この美き人の身の上に何事の起りけると、豊は可おそろし恐きやうにも覚ゆるぞかし。

「あの、申上げますが、主人は病中の事でございますもので、唯今生憎あいにくと急に気分が悪くなりまして、相済みませんで御座いますが中座を致しました。恐入りますで御座います、どうぞ今日はこれで御立帰おたちかへりを願ひますで御座います」

面を抑へたるままに宮は涙を噉すすりて、

「ああ、さやうで御座いますか」

「折角お出いでのところを誠にどうもお気毒さまで御座います」

「唯今些ちよつと支度を致しますから、もう少々置いて戴いたきますよ」

「さあさあ、貴方御遠慮あなた無く御寛ごゆるりと遊ばし。又何だか降出して参りまして、今日はいつそお寒過ぎますで御座います」

彼の起ちし迹あとに宮は身支度を為るにもあらで、始よみがへて甦りたる人の唯在るが如くに打沈みてぞゐたる。やや久かるに客の起たんとする模様あらねば、老婢は又出来いできたり。宮はその時にはか遽に身みづくろいして、

「それではお暇を致します。些ちよつと御挨拶だけ致して参りたいのですから、何方どちらにお寝よつてお在いでですか……」

「はい、あの何でございます、どうぞもうおかまひ無く……」

「いいえ、御挨拶だけ些ちよつと」

「さやうで御座いますか。では此方こちらへ」

主あるじの本意ほいならじとは念おもひながら、老婢は止むを得ず彼を子亭はなれに案内あないせり。昨夜ゆふべの収めざる蓐とこの内に貫一は着のまま打仆うちたふれて、夜着よぎも搔かき巻まきも裾すその方かたに蹴放けはなし、枕まくらに辛うじてその端はしに幾度いくたびか置おき易かへられし頭かしらを載のせたり。

思ひも懸けず宮の入来いりくるを見て、起回おきかへらんとせし彼の膝下ひざもとに、早くも女の転まろび来て、立たんと為れば袂たもとを執り、猶なほも犇ひしと寄添よひて、物をも言はず泣伏なしたり。

「ええ、何の真似まねだ！」

突返さんとする男の手を、宮は両手に抱いだき緊しめて、

「貫一さん！」

「何を為る、この恥はぢしらず不知！」

「私が悪かつたのですから、堪忍して下さいまし」

「ええ、やかまし、聴い！　ここを放さんか」

「貫一さん」

「放さんかと言ふに、ええ、もう！」

その身を楯たてに宮は放さじと争ひて益ますす放さず、両箇ふたりが顔は互に息の通はんとすばかり近く合ひぬ。一生又相見あひみじと誓へるその人の顔の、おのれ眺めたりし色は疾とく失せて、誰たれゆゑ今の別べつに豔えんなるも、なほ形のみは変らずして、実げにかの宮にして宮ならぬ宮と、吾は如い何かにしてここに逢へる！　貫一はその胸の夢むる間ひまうつつに現ともなく彼を矚まもれり。宮は殆ど情ほとん極きはまりて、纔わづかに狂せざるを得たるのみ。

彼は人の頭かしらより大いなるダイヤモンドを乞ふが為に、この貫一の手を把とる手をば釈とかざらん。大いなるダイヤモンドか、幾いかにばかり許大いなるダイヤモンドも、宮は人の心の最も小き誠に値せざるを既に知りぬ。彼の持もたるダイヤモンドはさせる大いなる者ならざれど、その棄去りし人の誠は量はかりな無きものなりしが、嗟乎ああ、今何処いづこに在りや。その嘗かつて誠を恵み

し手は冷かに残れり。空くその手を抱きて泣かんが為に來れる宮が悔は、実に幾許大
いなる者ならん。

「さあ、早く歸れ！」

「もう二度と私はお目には掛りませんから、今日のところはどうとも堪忍して、打つなり、
殴くなり貫一さんの勝手にして、さうして少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た訳を聞
いて下さい」

「ええ、煩い！」

「それぢや打つとも殴くともして……」

身悶して宮の縋るを、

「そんな事で俺の胸が霽れると思つてゐるか、殺しても慊らんのだ」

「ええ、殺れても可い！ 殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひたい、さあ、殺し
て下さい、死んで了つた方が可いのですから」

「自分で死ぬ！」

彼は自ら手を下して、この身を殺すさへ屑からずとまでに己を鄙むるか、余に辛しと
宮は唇を咬みぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を為すに何為死ぬまで立派に棄て通さんのだ」

「私は始から貴方を棄てる気などは有りはしません。それだから篤りとお話を為たいのです。死んで了へとお言ひでなくても、私はもう疾から自分ぢや生きてゐると思つてゐません」

「そんな事聞きたくはない。さあ、もう帰れと言つたら帰らんか！」

「帰りません！ 私はどんな事してもこのままぢや……帰れません」

宮は男の手をば益す弛めず、益す激する心の中には、夫もあらず、世間もあらずなりて、唯この命を易ふる者を失はじと一向に思入るなり。

折から縁に足音するは、老婢の来るならんと、貫一は取られたる手を引放たんとすれど、こは如何、宮は些も弛めざるのみか、その容をだに改めんと為ず。果して足音は紙門の外に逼れり。

「これ、人が来る」

「……………」

宮は唯力を極めぬ。

不意にこの体を見たる老婢は、半啓けたる紙門の陰に顔引入れつつ、

「赤檉さんがお出になりまして御座います」

窮厄の色はつと貫一の面に上れり。

「ああ、今其方へ行くから。——さあ、客が有るのだ、好加減に帰らんか。ええ、放せ。

客が有ると云ふのにどうするのか」

「ぢや私はここに待つてゐますから」

「知らん！ もう放せと言つたら」

用捨もあらず宮は捻倒されて、落花の狼藉と起き敢へぬ間に貫一は出行く。

(六) の二

座敷外に脱ぎたる紫裏の吾妻コオトに目留めし満枝は、嘗て知らざりしその内曲の客を問はで止む能はざりき。又常に厚く恵る老婢は、彼の為に始終の様子を告るの労を吝まざりしなり。さてはと推せし胸の内は瞋恚に燃えて、可憎き人の疾く出で来よかし、如何なる貌して我を見んと為らんと焦心に待つ間のいとどしう久かりしに、貫一は

なかなか出で来ずして、しかも子亭のほとほと人氣もあらざらんやうに打鎮れるは、
我に忍ぶかと、弥よ満枝は忪へかねて、

「お豊さん、もう一遍旦那様にさう申して来て下さいな、私今日は急ぎますから、些とお目に懸りたいと」

「でも、私は誠に参り難いので御座いますよ、何だかお話が大変込入つてお在のやうで御座いますから」

「かまはんぢやありませんか、私がさう申したと言つて行くのですもの」

「ではさう申上げて参りますです」

「はあ」

老婢は行きて、紙門の外より、

「旦那さま、旦那さま」

「此方にお在は御座いませんよ」

かく答へしは客の声なり。豊は紙門を開きて、

「おや、さやうなので御座いますか」

実に主は在らずして、在るが如くその枕頭に坐れる客の、猶悲の残れる面に髪

をば少し打乱し、左の二寸ばかりも裂けたるままに姿も整はずゐたりしを、遽に引

きつくる
枢 ひつつ、

「今し方其方へお出なすつたのですが……」

「おや、さやうなので御座いますか」

「那裡のお客様の方へお出なすつたのでは御座いませんか」

「いいえ、貴方、那裡のお客様が急ぐと有仰つてで御座いますものですから、さう申上げに参つたので御座いますが、それぢやまあ、那边へいらつしやいましたらう！」

「那裡にもゐらつしやいませんの！」

「さやうなので御座いますよ」

老婢はここを倉皇起ちて、満枝が前に、

「此方へもいらつしやいませんで御座いますか」

「何が」

「あの、那裡にもゐらつしやいませんで御座いますか」

「旦那様が？ どうして」

「今し方這裡へ出てお在になつたのださうで御座います」

「嘘、嘘ですよ」

「いいえ、那裡にはお客様が一人であつしやるばかり……」

「嘘ですよ」

「いいえ、どういたして貴方、決して嘘ぢや御座いません」

「だつて、此方へお出なさりは為ないぢやありませんか」

「ですから、まあ、何方へいらつしやつたのかと思ひまして……」

「那裡にきつと隠れてでもお在なのですよ」

「貴方、そんな事が御座いますものですか」

「どうだか知れはしません」

「はてね、まあ。お手水ですかしらん」

随処尋ねんとて彼は又倉皇起ちぬ。

有効無きこの侵辱に遭へる吾身は如何にせん、と満枝は無念の遣る方無さに色を

変へながら、些も騒ぎ惑はずして、知りつつ食みし毒の験を耐へ忍びゐたらんやうに、得

も謂れず窃に苦めり。宮はその人の遁れ去りしこそ頼の綱は切られしなれと、はや留るべ

き望も無く、まして立歸るべき力は有らで、罪の報は悲くも何時まで儚きこの身ならんと、

打俯し、打仰ぎて、太息ためいきのつみ。

颯と空の昏み行く時、軒打つ雨は漸く密なり。

戸棚、押入の外捜さざる処もあらざりしに、終に主を見出さざる老婢は希有なる貌し

て又子亭に入来れり。

「何方にもゐらつしやいませんで御座いますが……」

「あら、さやうですか。ではお出掛にでも成つたのでは御座いませんか」

「さやうで御座いますね。一体まあどうなすつたと云ふので御座いませう、那裡にも這裡にもお客様を置去に作つてからに。はてね、まあ、どうもお出掛になる訳は無いので御座いますけれど、家中には何処にもゐらつしやらないところを見ますと、お出掛になつたので御座いますかしらん。それにしても……まあ御免あそばしまして」

彼は又満枝の許に急ぎ行きて、事の由を告げぬ。

「いいえ、貴方、私は見て参りましたので御座いますよ。子亭にゐらつしやりは致しませ

ん、それは大丈夫で御座います」

彼は遽に心着きて履物を検め来んとて起ちけるに、踵いで起てる満枝の庭前の縁に出づると見れば、々と行きて子亭の入口に頭れたり。

宮は何^{なに}人^{びと}の何^{いり}の爲^{きた}に入^ま来^{おどろ}れるとも知らず、先^まづ愕^{おどろ}きつつも彼^{かれ}を迎^かへて容^{かたち}を改^{あらた}めぬ。

吾^{われ}が恋人^{こいじん}の恋人^{こいじん}を拝^をまんとてここ^{こゝ}に来^きにける満^み枝^えの、意^い外^{がい}にも敵^{かたき}の己^{おのれ}より少^{すく}く、己^{おのれ}より美^{うつく}く、己^{おのれ}より可^{しを}憐^{うれ}く、己^{おのれ}より貴^{たつ}きを見^みたる妬^{ねた}さ、憎^{にく}さは、唯^{ただ}この者^{もの}有^ありて可^{いと}怜^{かわ}しき故^{ゆゑ}に、他^{ひと}の情^{なさけ}も誠^{まこと}も彼^{かれ}は打^う忘^{わす}れるよとあはれ、一^{ひと}念^{ごん}の力^{ちから}を剣^{けん}とも成^{なり}して、この場^ばを去^さらず刺^さ殺^{ころ}さまほしう、心^{こゝろ}は躍^{をど}り襲^かり、躍^{をど}り襲^からんと爲^なるなりけり。

宮^{みや}は稍^{やや}羞^{はぢ}ひて、葉^は隠^{かく}に咲^は遅^{おそ}れたる花^{はな}の如^{ごと}く、夕^{ゆふ}月^{げつ}の涼^{すず}う棟^{むね}を離^{はな}れたるやうに満^み枝^えは彼^{かれ}の前^{まえ}に進^{すす}出^でて、互^{たがひ}に対^{たい}面^{めん}の礼^{れい}せし後^{のち}、

「始めましてお目に掛^かりますで御^ご座^ざいますが、間^ま様^{さま}の……御^ご親^{しん}戚^{せき}? でゐらつしやいますで御^ご座^ざいますか」

憎^{にく}き人^{ひと}をば一^{ひと}番^{ばん}苦^くめんの満^み枝^えが底^{そこ}意^いなり。

「はい親^{しん}類^{るい}筋^{しん}の者^{もの}で御^ご座^ざいました」

「おや、さやうでゐらつしやいますか。手^て前^{まえ}は赤^{あか}檜^へ満^み枝^えと申しまして、間^ま様^{さま}とは年^{とし}来^{らい}の御^ご懇^{こん}意^いで、もう御^ご親^{しん}戚^{せき}同^{どう}様^{さま}に御^ご交^{こう}際^{さい}を致^{いた}して、毎^{まい}々^{まい}お世^せ話^わになつたり、又^{また}及^{およ}ばずながらお世^せ話^わも致^{いた}したり、始^{はじ}終^{しゅう}お心^{こゝろ}易^{やす}く致^{いた}してをりますで御^ご座^ざいますが、ついぞ、まあ従^{これ}来^{まで}お見^み上^うげ申しませんで御^ご座^ざいました」

「はい、つい先日まで長らく遠方に参つてをりましたもので御座いますから」

「まあ、さやうで。余程何でございますか、御遠方です？」

「はい……広島の方に居りまして御座います」

「はあ、さやうで。唯今は何方に？」

「池端いけのはたに居ります」

「へえ、池端、お宜い処で御座いますね。然し、夙かねて間様のお話では、御自分は身寄も何も無いから、どうぞ親戚同様に末の末まで交際したいと有おつ仰るもので御座いますから、全くさうとばかり私信わたくしじてをりましたので御座いますよ。それに唯今かうして伺ひますれば、御立派な御親戚がお有り遊ばすのに、どう云ふお意つもりであんな事を有仰つたので御座いませう。何も親戚のお有りあそばす事をお隠しになるには当らんぢや御座いませんか。あの方は時々さう云ふ水臭い事を一体な作るので御座いますよ」

疑うたがひの雲は始て宮が胸かかに懸りぬ。父が嘗かつて病院にて見し女の必ず訳有るべしと指させしはこれならん。さては客来きやくらいと言ひしも詐いつはりにて、或は内縁の妻と定れる身の、吾を咎とがめて邪魔立せんとか、但ただしは彼人かのひとのこれ見よとてここに引出ひきいせしかと、今更に差たがはざりし父が言を思ひて、宮は仇あだの為に病めるを咎むちうたるるやうにも覚ゆるなり。いよいよ長く居るべき

にあらぬ今日のこの場はこれまでと潔く座を起たんとしたりけれど、何処にか潜めゐる彼かのひと

人の吾が還るを待ちて忽ち出で来て、この者と手を把り、面を並べて、可哀なる吾をばののし笑ひ罵りもやせんと想へば、得堪へず口惜くて、如何にせば可きと心苦く遅ひゐたり。

「お久しぶりで折角お出のいでところを、生憎と余義無い用向の使が見えましたもので、お出掛になつたので御座いますが、些と遠方でございますから、お帰来かへりの程は夜にお成りで御座いませう、近日どうぞ又御寛りとお出で遊ばしまして」

「大相長座ちやうざを致しまして、貴方の御用のお有り遊ばしたところを、心無いお邪魔を致しまして、相済みませんで御座いました」

「いいえ、もう、私共は始終上つてをるので御座いますから、些とも御遠慮には及びませんで御座います。貴方こそさぞ御残念でゐらつしやいませう」

「はい、誠に残念でございます」

「さやうで御座いませうとも」

「四五年ぶりで逢ひましたので御座いますから、色々昔話でも致して今日は一日遊んで参らうと樂たのしみに致してをりましたのを、実に残念で御座います」

「大きに」

「さやうなら私はお暇を致しませう」

「お帰来で御座いますか。丁度唯今小降で御座いますね」

「いいえ、幾多降りましたところが俤で御座いますから」

互に憎し、口惜しと鑄を削る心の刃を控へて、彼等は又相見ざるべしと念じつつ別れにけり。

第七章

家の内を隈無く尋ぬれども在らず、さては今にも何処よりか帰来んと待てど暮せど、姿を晦せし貫一は、我家ながらも身を容るる所無き苦紛れに、裏庭の木戸より傘も擎さで忍び出でけるなり。

されど唯一目散に脱れんとのみにて、卒に志す方もあらぬに、生憎降頻る雨をば、辛くも人の軒などに凌ぎつつ、足に任せて行くほどに、近頃思立ちて折節通へる碁会所の前に出でければ、ともかくも成らんとて、其処に躍入りけり。

客は三組ばかり、各静に窓前の竹の清韻を聴きて相對せる座敷の一間奥に、主は乾魚

の如き親仁の黄なる髯を長く生したるが、兀然として独り盤を磨きある傍に通りて、彼は先づ濡れたる衣を炙らんと火鉢に寄りたり。

異み問はるるには能くも答へずして、貫一は余りに不思議なる今日の始末を、その余波は今も轟く胸の内に痛か思回して、又空く神は傷み、魂は驚くといへども、我や怒る可き、事や哀むべき、或は悲む可きか、恨む可きか、抑も喜ぶ可きか、慰む可きか、彼は全く自ら弁ぜず。五内渾て燃え、四肢直に氷らんと覺えて、名状すべからざる感情と煩悶とは新に來りて彼を襲へるなり。

主は貫一が全濡の姿よりも、更に可訝きその気色に目留めて、問はでも椿事の有りしを疑はざりき。ここまで身は遁れ來にけれど、なかなか心安からで、兩人を置去に爲し跡は如何、又我が為んやうは如何など、彼は打惑へり。沸くが如きその心の騒しきには似で、小暗き空に満てる雨声を破りて、三面の盤の鳴る石は断続して甚だ幽なり。主はこの時窓際の都合觀に呼れたれば、貫一は独り残りて、未だ乾ぬ袂を翳しつつ、愈よ限無く惑ひるたり。遽に人の騒立つるに愕きて顔を挙げば、座中尽く頸を延べて己が方を眺め、声々に臭しと喚はるに、見れば、吾が羽織の端は火中に落ちて黒煙を起つるなり。直に揉消せば人は静るとともに、彼もまた前の如し。

少頃^{しばし}有りて、門^{かど}に入^{いり}来^きし女^{おとな}の訪^{おも}ふ声^{こゑ}して、

「宅^{だんな}の旦那様^{だんな}はもしや這^こ裡^ちへいらつしやりは致^ししませんで為^なたらうか」
主^{たちま}は忽^ひち髻^げの頤^{おとがめぐら}を回^{くわ}して、

「ああ、奥^{おく}にお在^いで御座^{いで}いますよ」

豊^{とよ}かと差^さ覗^{しのぞ}きたる貫^{くわん}一^{いち}は、

「おお、傘^{かさ}を持^もつて来^きたのか」

「はい。此^こ方^ちにお在^いなので御座^{いで}いましたか、もう方々^{かたがた}お捜^{さが}し申^ましました」

「さうか。客^{きやく}は帰^{かへ}つたか」

「はい、疾^{とう}にお帰^{かへ}りなりましたして御座^{いで}います」

「四谷^{よつたに}のも帰^{かへ}つたか」

「いいえ、是非^{ぜひ}お目に掛^かりたいと有^あ仰^{おつ}いまして」

「居^ゐる？」

「はい」

「それぢや見^み付^づからんと言^いつて措^おけ」

「ではお帰^{かへ}りに成^なりませんので？」

「も少し経つたら帰る」

「直にもうお中食で御座いますが」

「可いから早く行けよ」

「未だ旦那様は朝御飯も」

「可いと言ふに！」

老婢は傘と足駄とを置いて悄然還りぬ。

程無く貫一も焦げたる袂を垂れて出行けり。

彼はこの情緒の劇く紛乱せるに際して、可煩き満枝に責らるる苦悩に堪へざるを思

へば、その歸去らん後までは決して還らじと心を定めて、既に所在を知られたる碁会所を

立出でしが、いよいよ指して行くべき方は有らず。はや正午と云ふに未だ朝の物さへ口に

入れず、又半銭をも帯びずして、如何に為んとするにか有らん、猶降りに降る雨の中を茫

々然として彷徨へり。

初夏の日は長かりけれど、纔に幾局の勝負を決せし盤の上には、殆ど惜き夢の間に昏れ

て、折から雨も霽れたれば、好者どもも終に碁子を斂めて、惣立に帰るをあたかも送

らんとする主の忙々く燈ともす比なり、貫一の姿は始て我家の門に顕れぬ。

彼は内に入るより、

「飯を、飯を！」と婢を叱して、颯と奥の間の紙門を排けば、何ぞ図らん燈火の前に人の影在り。

彼は立てるままに目を睜りつ。されど、その影は後向に居て動かんとも為ず。満枝は未だ往かざるか、と貫一は覚え高く舌打したり。女は尚も殊更に見向かぬを、此方もわざと言を掛けずして子亭に入り、豊を呼びて衣を更へ、膳をも其処に取寄せしが、何とか為けん、必ず入来べき満枝の食事を了るまでも来ざるなりき。却りて仕合好しと、貫一は打勞れたる身を暢かに、障子の月影に肱枕して、姑く喫烟に耽りたり。敢て恋しとにはあらねど、苦しげに羸れたる宮が面影の幻は、頭を回れる一蚊の聲の去らざらんやうに襲ひ来て、彼が切なる哀訴も従ひて憶出でらるれば、なほ往きかねて那邊に忍ばずやと、風の音にも幾度か頭を挙げし貫一は、婆娑として障子に揺る竹の影を疑へり。

宮は何時までここに在らん、我は例の孤なり。思ふに、彼の悔いたるとは誠ならん、我の死を以て容さざるも誠なり。彼は悔いたり、我より容さば容さるべきを、さは容さずして堅く隔つる思も、又怪きまでに貫一は佗くて、その釈き難き怨に加ふるに、或種の哀に

似たる者有るを感じずるなりき。いと淡き今宵の月の色こそ、その哀にも似たるやうに打眺めて、他の憎しとよりは軋た自を悲しと思続けぬ。彼は竟に堪へかねたる気色にて障子を推啓れば、涼き空に懸れる片割月は真向に彼の面に照りて、彼の愁ふる眼は又痛かにその光を望めり。

「間さん」

居たるを忘れし人の可疎き声に見返れば、はや背後に坐れる満枝の、常は人を見るに必ず笑を帯びざる無き目の秋波も乾き、顔色などは殊に槁れて、などかくは浅ましきと、心陰に怪む貫一。

「ああ、未だ御在でしたか」

「はい、居りました。お午前から私お待ち申してをりました」

「ああ、さうでしたか、それは大きに失礼しました。さうして何ぞ急な用でも」

「急な用が無ければ、お待ち申してをつては悪いので御座いますか」

語氣の卒に厲きを駭ける貫一は、空く女の顔を見遣るのみ。

「お悪いで御座いませう。お悪いのは私能く存じてをります。第一お待ち申してをりましたのよりは、今朝ほど私の参りましたのが、一層お悪いので御座いませう。飛だ御娯

のお邪魔を致しまして、間さん、誠に私相済みませんで御座いました」

その眼色まなざしは怨の銚うらむつぎを露あらはして、男の面上を貫かんとやうに緊きびしく見据みよゑたり。

貫一は苦笑して、

「貴方あなたは何をばか、な事を言つてゐるのですか」

「今更かくお庠はくしなさるには及びませんさ。若い男と女が一間ひとまに入つて、取付とつき引付ひつきして泣いたり笑つたりしてをれば、訳は大概知れてをるぢや御座いませんか。私あれに控へてをりまして、様子は大方存じてをります。七歳ななつや八歳やつの子供ななつちや御座いません、それ位の事は誰にだつて直ちきに解りませうでは御座いませんか。

爾それから後貴方がお出掛になりますと私直ちきにここのお座敷へ推掛おしかけて参つて、あの御婦人にお目に掛りましたので御座います」

絮くどしと聞流せし貫一も、ここに到りて耳そばを欬だてぬ。

「さうして色々お話を伺ひまして、お二人の中も私能く承知致しました。あの方も又おつし有ありやうなくとも可なきさうな事までお話をな作ないますので、それは随分聞難ききにい事まで私伺ひました」

為失しなしたりと貫一は密ひそに術じゆつ無なき拳こぶしを握れり。満枝は猶なほも言足らで、

「然し、間さん、^{さすが}遠に貴方で御座いますのね、私敬服して、了ひました。失礼ながら貴方のお腕前に驚きましたので御座います。ああ云つた美婦人を御^{おたのしみ}娛にお持ち遊ばしてゐながら、世間へは偏人だ事の、一^{いっくもの}国者だ事のと、その方へ掛けては実に奇麗なお顔を遊ばして、今日の今朝まで何年が間と云ふもの秘^{ひしかくし}隠に隠し通してゐらしたお手^{てぎこ}際には私実に驚入つて一言も御座いません。能く^{すこ}凄いか何とか何とか申しますが、貴方のやうなお方の事をさう申すので御座いませう」

「もうつまらん事を……、貴方何ですか」

「お口ぢやさう有^{おつしや}仰つても、実はお^{うれし}嬉しいので御座いませう。あれ、ああしちや考へてゐらつしやる！ そんなにも恋^{こひし}くてゐらつしやるのですかね」

されば我が^{いでゆ}出行きし^{あと}迹をこそ案ぜしに、果して^{わざはひ}かかるは出で来にけり。由^{よしな}無き者の目には触れけるよ、と貫一はいと苦く心^{こころぐくま}踊りつつ、物言ふも憂き唇を閉ぢて、唯月に打向へるを、女は此^{こなた}方より熟^{つくづく}々と見^{みすか}透して目も放たず。

「間さん、貴方さう黙つてゐらつしやらんでも宜^{よろし}いでは御座いませんか。ああ云ふお^{うつくし}美いのを御覧に成つた後では、私如き者には口をお^き利きに成るのもお可^{いや}厭なのでゐらつしやいませう。私お察し申してをります。ですから私決して^{くど}絮い事は申上げません。少し聞いて

戴きたい事が御座いますのですから、庶かそれだけ言^{いは}して下さいまし」

貫一は冷^{ひややか}に目を転^{うつ}して、

「何なりと有^{おつしや}仰い」

「私もう貴方を殺して了^{しま}ひたい！」

「何です」

「貴方を殺して、あれも殺して、さうして自分も死んで了^{しま}ひたく思ふのです」

「それも可いでせう。可いけれど何で私^{わたし}が貴方に殺されるのですか」

「間さん、貴方はその訳を御存^{ごぞんじ}無いと有^{おつしや}仰るのですか、どの口で有^{おつしや}仰るのですか」

「これは怪^{けし}からん！ 何ですと」

「怪からんとは、貴方も余^{あんま}りな事を有^あ仰るでは御座いませんか」

既に恨み、既に瞋^{いか}りし満枝の眼は、ここに到^{いた}りて始て泣きぬ。いと有^あるまじく思掛^{おも}けざ

りし貫一は寧^{むし}ろ可恐^{おそろ}しと念^{おも}へり。

「貴方はそんなにも私が憎くてゐらつしやるのですか。何で又さうお憎みなさるのですか。

その訳をお聞せ下さいまし。私それが伺^{うかが}ひたい、是非伺はなければ措^おきません」

「貴方を何^い日私^{わたし}が憎みました。そんな事は有りません」

「では、何で怪からんなどと有^{おつしや}仰います」

「怪からんぢやありませんか、貴方に殺される訳が有るとは。私は決^けして貴方に殺される覚^{おぼえ}は無い」

満枝は口惜^{くちを}しげに頭^{かしら}を掉^ふりて、

「有ります！ 立派に有ると私信じてをります」

「貴方^{ひとり}が独で信じても……」

「いいえ、独で有らうが何で有らうが、自分の心に信じた以上は、私それを貫きます」

「私を殺すと云ふのですか」

「随分殺しかねませんから、覚悟をなすつてゐらつしやいまし」

「はあ、承知しました」

いよいよ昇れる月に木草の影もをかしく、庭の風情^{ふぜい}は添^{そは}りけれど、軒端^{のきば}なる芭蕉葉^{ばしようば}の露^{つゆ} 夥^{おびただし}く夜氣の侵すに堪^たへで、やをら内に入りたる貫一は、障子を閉^たてて燈^ひを明^{あか}うし、故^{ことごと}に床の間の置時計を見遣りて、

「貴方、もうお帰りに成つたが可いでせう、余り晚^{おそ}くなるですから。ええ？」

「憚^{はづか}り様で御座います」

「いや、御注意を申すのです」

「その御注意が憚り様で御座いますと申上げるので」

「ああ、さうですか」

「今朝のあの方なら、そんな御注意なんぞは遊ばさんで御座いませう。如何ですか」
憎さげに言放ちて、彼は吾矢の立つを看みんとやうに、姑しばく男の顔色を候うかひしが、

「一体あれは何者なので御座います！」

犬にも非ず、猫にも非ず、汝なんぢに似たる者よと思ひけれど、言い争ひあらそはんは愚なりと勘弁して、彼は才わづかに不快の色を作なせしのみ。満枝は益す独り憤じれて、

「旧ふるいお馴染なじみださうで御座いますが、あの恰かつ好こうは、商売人ではなし、万更の素人しろうとでもないやうな、貴方も余程よつほど不思議な物をお好み遊ばすでは御座いませんか。然し、間さん、

あれは主有ぬしある花で御座いませう」

妄みだりに言へるならんと念おもへど、如何いかにせん貫一が胸は陰に轟ひそかとどろけるを。

「どうですか、なあ」

「さう云ふ者を対手あひてに遊ばすと、別べつしてお楽たのしみが深いとか申しますが、その代かはりに罪も深いので御座いますよ。貴方が今日こんにちまで巧たくみに隠し抜いてゐらした訳も、それで私能く解りま

した。こればかりは余り公に御自慢は出来ん事で御座いますもの、秘密に遊ばしますのは
 実に御尤で御座います。

その大事の秘密を、人も有らうに、貴方の嫌ひの嫌ひの大御嫌ひの私に知られたのは、
 どんなにかお心苦くゐらつしやいませう。私十分お察し申してをります。然し私に取りま
 しては、これ程幸な事は無いので御座います。貴方が余り片意地に他を苦めてばかりゐら
 したから、今度は私から思ふ様これで苦めて上げるのです。さう思召してゐらつしや
 い！」

聞きをは
 聞 詫りたる貫一は吃々として窃笑せり。

「貴方は氣でも違ひは為んですか」

「少しは違つてもをりませう。誰がこんな氣違には作すつたのです。私氣が違つてゐる
 なら、今朝から變に成つたので御座いますよ。お宅に詣つて氣が違つたのですから、元の
 正氣に復してお還し下さいまし」

彼は擦寄り、擦寄りて貫一の身近に逼れり。浅ましく心苦かりけれど逃ぐべくもあらね
 ば、臭き物に鼻を掩へる心地しつ、貫一は身を側め側め居たり。満枝は猶も寄添はまほ
 しき風情にて、

「就きましては、私一言貴方に伺ひたい事が有るので御座いますが、これはどうぞ御遠慮無く貴方の思召す通を丁と有仰つてお聞せ下さいまし、宜う御座いますか」

「何ですか」

「なんですかでは可厭です、宜いと截然有仰つて下さい。さあ、さあ、貴方」

「けれども……」

「けれどもちや御座いません。私の申す事だと、貴方は毎も気の無い返事ばかり遊ばすのですけれど、何も御迷惑に成る事では御座いませんのです、私の申す事に就て貴方が思召す通を答へて下されば、それで宜いのですから」

「勿論答へます。それは当然の事ぢやないですか」

「それが当然でなく、極打明けて少しも裏まずに言つて戴きたいのですから」

「善と貫一は領きつ。」

「では、きつと有仰つて下さいまし。間さん、貴方は私をい奴だと思召してゐらつしやるで御座います。私始終さう思ひながら、貴方の御迷惑もかまはずにやつぱりかうして附纏つてゐるのは、自分の口から箇様な事を申すのも、甚だ可笑いので御座いますけれど、私、実に貴方の事は片時でも忘れは致しませんのです。それは如何に思つてをりました

たところが、元来私と云ふ者を嫌ひ抜いて御在なのですから、あの歌が御座いますね、行く水に数画くよりも儚きは、思はぬ人を思ふなりけりとか申す、実にその通り、行く水に数を画くやうな者で、私の願の慇ふ事は到底無いので御座います。もうさうと知りながら、それでも、間さん、私こればかりは諦められなので御座います。

こんな者に見込れて、さぞ御迷惑ではあらつしやいませうけれども私がこれ程までに思つてゐると云ふ事は、貴方も御存であらつしやいませう。私が熱心に貴方の事を思つてゐると云ふ事で御座います、それはお了解に成つてゐるで御座います。

「さうですな……そりや或はさうかも知れませんか……」

「何を言つてゐらつしやるのですね、貴方は、或はもさうかもないでは御座いませんか！さも無ければ、私何も貴方にがられる訳は御座いませんさ、貴方も私を、いと思召すのが、現に何よりの証拠で。漆膠くて困ると御迷惑してゐらつしやるほど、承知を遊ばしておいては御座いませんか」

「それはさう謂へばそんなものです」

「貴方から嫌はれ抜いてゐるにも関らず、こんなに私が思つてゐると云ふ事は、十分御承知なので御座います」

「さう」

「で、私從來これまでに色々申上げた事が御座いましたけれど、些ちよつとでもお聴き遊ばしては下さ
いませんでした。それは表面の理窟りくつから申せば、無理なお願かも知れませんが、私は
又私で別に考へるところが有つて、決して貴方の有仰おつしやるやうな道に外はづれた事とは思ひま
せんのです。よしんばさうでありましたが、こればかりは外の事とは別で、お互にかうと
思つた日には、其処そこに理窟も何も有るのでは御座いません。究竟つまり貴方がそれを口実にして
遁にげてゐらつしやるのは、始から解り切つてゐるので。然し、貴方も人から偏屈あんなだとか、
一国だとか謂れてゐらつしやるのですから、成程儀剛ぎごうな片意地なところもお有なすつて、
色恋の事なんぞには貪とんちやく着くを遊ばさん方で、それで私の心も汲分けては下さらんのかと、
さうも又思つたり致して、実は貴方の頑固がんこなのを私齒痒はがゆいやうに存じてをつたので御座い
ます……ところが！」

と言ひも敢あへず煙管きせるを取りて、彼は貫一の横膝よこひざをば或る念力ねんりき強く痛いたか推したり。

「何なを作るのです！」

払へば取直すその煙管にて、手とも云はず、膝とも云はず、当るを幸さいはひに満枝は又打ち被か
る。

こは何事と駭ける貫一は、身を避る暇もあらず三つ四つ撃れしが、遂に取つて抑へて両手を働かせじと為れば、内俯に引据ゑられたる満枝は、物をも言はで彼の股の辺に咬付いたり。怪からぬ女哉、と怒の余に手暴く振放せば、なほ辛くも縋れるままに面を擦付けて咽泣に泣くなりき。

貫一は唯不思議の爲、体に呆れ惑ひて言も出でず、漸く泣ゐる彼を排斥けんとして、膠の附きたるやうに取縋りつつ、益す泣いて泣いて止まず。涙の湿は単衣を透して、この難面き人の膚に沁みぬ。

捨置かば如何に募らんも知らずと、貫一は用捨無く※放して、起たんと為るを、彼は虚さず賣りて、又泣顔を擦付れば、忪へかねたる声を励す貫一、

「貴方は何を為るのですか！ 好い加減になさい」

「……………」

「さうして早くお帰りなさい」

「帰りません！」

「帰らん？ 帰らんけりや宜い。もう明日からは貴方のここへ足蹈の出来んやうに為て了ふから、さうお思ひなさい」

「私死んでも参ります！」

「今まで我慢をしてゐたですけれど、もう抛はなつて置かれんから、私は赤檉さんに会つて、貴方の事をすっかり話して了ひます」

満枝は始て涙に沾うるほへる目を挙げたり。

「はあ、お話し下さい」

「……………」

「赤檉に聞えましたら、どう致すので御座います」

貫一は齒を鳴して急せきあ上げたり。

「貴方は……実に……驚おどろき入いった根性ですな！ 赤檉は貴方の何ですか」

「間さん、貴方は又赤檉を私の何だと思召してゐらつしやるのですか」

「怪けしからん！」

彼は憎き女の頬ほほをば撃つて撃つて打割うちわる能あたはざるを憾うらみと為すなるべし。

「定さだめてあれは私の夫だと思召すので御座いませうが、決けしてさやうでは御座いませんです」

「そんなら何なんですか」

「往いづ日もお話致しましたが、金力で無理に私を奪つて、遂にこんな体にしてつた、謂

はば私の讐かたきも同然なので。成程人は夫婦とも申しませうが私の気では何とも思つてをりは致しません。さうですから、自分の好いた方かたに惚ほれて騒ぐ分は、一向差支さしつかへの無い独ひとり身みも同じので御座います。

間さん、どうぞ赤檉にお会ひ遊ばしたら、満枝の奴が惚れてゐて為方が無いから、内の御膳炊ごぜんたきに貰つて遣るから、さう思へと、貴方が有仰おつしやつて下さいまし。私豊とよの手伝でも致して、此方こなたに一生奉公を致します。

貴方は大方赤檉に言ふと有仰おつしやつたら、震へ上つて私が怖こはがりでも為ると思召すのでせうが、私驚きも恐れも致しません、寧ろ勝手なのですけれど、赤檉がそれは途方に昧くられるで御座いませう」

貫一はほとほと答ふるところを知らず。満枝も然しかこそは呆あきれつらんと思へば、

「それは実際に御座いますの。若し話が一つ間違つて、面倒な事でも生じましたら、私が困りますよりは余程赤檉の方が困るのは知れてゐるのですから、私を遠とほざけやう為に、お話をなさるのなら、徒爾むだな事で御座います。赤檉は私を恐れてをりませうとも、私些ちよつともあの人を恐れてはをりませんです。けれども、折角さう思召おほしめすものなら、物は試ためしで御座いますから、間さん、貴方、赤檉にお話し遊ばして御覧なさいましな。

私も貴方の事を吹聴致します。ああ云ふ主有る婦人と関係遊ばして、始終人目を忍んで逢引してゐらつしやる事を触散しますから、それで何方が余計迷惑するか、比較事を致しませう。如何で御座います」

「男勝りの機敏な貴方にも似合はん、さすがは女だ」

「何で御座います？」

「お聞きなさい。男と女が話をしてゐれば、それが直ちに逢引ですか。又妙齡の女でさへあれば、必ず主有るに極つてゐるのですか。浅膚な邪推とは言ひながら、人を誣ふも太甚い！失敬千萬な、氣を着けて口をお利きなさい」

「間さん、貴方、些と此方をお向きなさい」

手を取りて引けば、振釈き、

「ええ、もう貴方は」

「おいでせう」

「勿論」

「私向後もつと、もつともつとくして上げるのです。さあ、貴方、今何と有仰つたので御座います、浅膚な邪推ですつて？貴方こそ少し氣を着けてお口をお利き遊ば

せな、貴方も男子であらうしやるなら、何^{なぜ}為立派に、その通だ。情婦^{をんな}が有るのがどうしたと、かう打付^{ぶつ}けて有仰^{うやう}らんです。間さん、私貴方に向つてそんな事をかれこれ申す権利は無い女なので御座いますよ。幾多^{いくた}さう云ふ権利を有ちたくても、有つ事が出来ずにゐるので御座います。それに、何も私の前を憚^{はば}つて、さう向^むに成つてお隠し遊ばすには当^あらんです御座いませんか。

私実を申しませうか、箇様^{かよう}なので御座います。貴方が余所外^{よそほか}に未だ何百人愛してゐらつしやる方^{かた}が有^ありませうとも、それで愛相^{あいそ}を尽^{つか}して、貴方の事を思切^{おも}るやうな、私そんな浮氣^{うき}な了^り簡^{けん}ではないのです。又貴方の御迷惑に成る秘密を洩^{もら}しましたところで、慇^{かな}はな願^{ねが}が慇^{かな}ふ訳ではないので御座います。どう思召^{おも}してゐらうしやるか存^{ぞん}じませんけれど、私それ程卑怯^{ひきよう}な女ではない積^つで御座います。

世間へ吹聴^{ふし}して貴方を困らせるなどと申したのは、あれは些^{ほん}のその場の憎まれ口で、私決^けしてそんな心は微塵^{みじん}も無いので御座いますから、どうかそのお積^つで、お心持を悪く遊ばしませんやうに。つい口が過ぎましたのですから、御勘弁遊ばしまして。私この通お託^{わづ}を致します」

満枝は惜まらず身を下^{くだ}して、彼の前に頭^{かしら}を低^さぐる可憐^{しをら}しさよ。貫一は如何^{いか}にとともに為^する能^よは

ずして、ひそかかうべ窃に首を搔いたり。

「就つきましては、私今から改めて折入った御願が有るので御座いますが貴方も従これまで来の貴方ではなしに、十分人情を解してゐらつしやる間さんとして宣告を下して戴きたいので御座います。そのお辞次第ことばで、私もう断然何方どちうに致しても了簡を極めて了ひますですから、間さん、貴方も庶どうか齒きぬに衣を着せずに、お心に在る通りをそのまま有仰つて下さいまし。宜よろしう御座いますか。

今更新く申上げませんでも、私の心は奥底まで見通しに貴方は御存ごぞんじでゐらつしやるのです。従これまで来も随分絮くどく申上げましたけれど、貴方は一図に私をお嫌きらひ遊ばして、些ちよつとでも私の申す事は取上げては下さらんです——さやうで御座いませう。貴方からそんなに嫌きらはれてゐるのですから、私もさう何時まで好い耻はぢを搔かずとも、早く立派に断念して了へば宜よいのです。私さう申すと何で御座いますけれど、これでも女子をんなにしては極未練の無い方で、手短てみじかに一か八か決して了ふ側がはなので御座います。それがこの事ばかりは実に我ながら何なぜ為かう意気地が無からうと思ふ程、……これが迷つたと申すので御座いませう。自分では物に迷つた事と云ふは無い積の私、それが貴方の事ばかりには全く迷ひました。ですから、唯その胸の中うちだけを貴方に汲んで戴けば、私それで本望なので御座います。

これ程に執心致してをる者を、徹頭徹尾貴方がお嫌ひ遊ばすと云ふのは、能く能くの因果で、究竟貴方と私とは性が合はなので御座いませうから、それはもう致方いたしかたも有りませんが、そんなに為れてまでもやつぱりかうして慕つてゐるとは、如何にも不敏な者だと、設たとひその当人はお氣に召しませんが、その心情はお察し遊ばしても宜いでは御座いませんか。決してそれをお察し遊ばす事の出来ない貴方ではないと云ふ事は、私今朝の事実で十分確めてをります。

御自分が恋こひしく思召すのも、人が恋いのも、恋いに差かはりは無いで御座いませう。増まして、貴方、片思かたおもひに思つてゐる者の心の中はどんなに切ないでせうか、間さん、私貴方を殺して了しひたいと申したのは無理で御座いますか。こんな不束ふつつかな者でも、同じに生れた人間一人が、貴方の為には全まるて奴隷どれいのやうに成つて、しかも今貴方のお辞ことばを一言聞きさへ致せば、それで死んでも惜くないとまでも思込んでゐるので御座います。其処そこをお考へ遊ばしたら、如何に好かん奴であらうとも、零しづぐらゐの情なさけは懸かけて遣やらう、と御不承が出来さうな者では御座いせんか。

私もさう御迷惑に成る事は望みませんです、せめて満足致されるほどのお辞ことばを、唯一ひとい言ことで宜いのですから、今までのお馴染なじみ効かひにどうぞ間さん、それだけお聞かせ下さいまし」

終に近く益す顫^{ふる}へる声は、竟^{つひ}に平生^{へいぜい}の調^{ちよう}をさへ失ひて聞えぬ。彼は正^{まさ}くその一言^{いちごん}の爲には幾千円の公正証書を挙げて反古^{ほぐ}に爲^なれども、なかなか吝^{をし}からぬ気色を帯びて逼^{せま}れり。息は凝^こり、面^{おもて}は打蒼^{うちあを}みて、その袖^{そで}よりは劔^{つるぎ}を出さんか、その心よりは笑^{ゑみ}を出さんか、と胸^{むね}を跳^ねらせて片時^{へんじ}も苦く待つなりき。

切なりと謂はば實^けに極^{きは}めて切なる、可憐^{しをら}しと謂はば又極めて可憐き彼の心の程は、貫一もいと善く知れれど、他の己^{たのおのれ}を愛するの故^{ゆゑ}を以^もて直^{ただ}ちに蛇蝎^{だかつ}に親まんや、と却^{かへ}りてその執念^{しつねん}をば難堪^{たへがた}く浅ましと思へるなり。

されど又情^{はげし}として厲^{はげし}く言ふを得ざるこの場の仕儀なり。貫一は打悩^{うちなや}める眉^{まゆ}を強^{しひ}て披^{ひら}かせつつ、

「さうして貴方が満足するやうな一言^{いちごん}?……どう云ふ事を言つたら可いのですか」

「貴方もまあ何^{おつしや}を有^{おつしや}仰^{おつしや}つてゐらつしやるのでせう。御自分の有^{ひと}仰^{おつしや}る事を他^{ひと}にお聞き遊ばしたつて、誰^{たれ}が存^{ぞん}じてをりますものですか」

「それはさうですけど、私にも解らんから」

「解るも解らんも無いでは御座いませんか。それが貴方は何か巧^{にげ}い遁^{ごん}口^{こう}上^{じよう}を有^{おつしや}仰^{おつしや}らうとなさるから、急に御考も無いので、貴方に対する私、その私が満足致すやうな一言と

申したら、間さん、外には有りは致しませんわ」

「いや、それなら解つてゐます……」

「解つてゐらつしやるなら些と有仰つて下さいましな」

「それは解つてゐますけれど、貴方の言れるのはかうでせう。段々お話の有つたやうな訳であるから、とにかくその心情は察しても可からう、それを察してゐるのが善く解るやうな挨拶あいさつを為てくれと云ふのぢやありませんか。實際それは余程難いむづかしい、別にどうも外に言ひ様も無いですわ」

「まあ何でも宜う御座いますから、私の満足致しますやうな御挨拶をなすつて下さいまし」
「だから、何と言つたら貴方が満足なさるのですか」

「私のこの心を汲んでさへ下されば、それで満足致すので御座います」

「貴方の思召は實に難有ありがたいと思つてゐます。私は永く記憶してこれは忘れません」

「間さん、きつとで御座いますか、貴方」

「勿論です」

「きつとで御座いますね」

「相違ありません！」

「きつと？」

「ええ！」

「その証拠をお見せ下さいまし」

「証拠を？」

「はあ。口頭くちさきばかりでは私可厭いで御座います。貴方もあれ程確たしかに有仰おつしやつたのですから、万更心まんげしんに無い事をお言ひ遊あそばしたのでは御座いますまい。さやうならそれだけの証拠しやうきょがある訳です。その証拠をお見せ下さいますか」

「みせられる者なら見せますけれど」

「見せて下さいますか」

「見せられる者なら。然し……」

「いいえ、貴方が見せて下さる思召しめぞならば……」

驚破すはや、障子おしひらを推開おしひらきて、貫一は露つめたけき庭をどに躍り下りぬ。つとその迹あとに顕あらはれたる満枝まんしの面おもては、斜ななめに葉越はなこしの月の冷き影かげを帯びながらなほ火の如く燃えに燃えたり。

第八章

家の内には己と老婢との外に、今客も在らざるに、女の泣く声、語る声の聞ゆるは甚だ
 いはれな^{おのれ ろうひ} 謂無し、我或は夢むるにあらずやと疑ひつつ、貫一は枕せる頭を擡げて耳を澄せり。
 さわがし^{わあるひ}

その声は急に噪く、相争ふ氣勢さへして、はたはたと紙門を薙かすは、愈よ怪しと
 よぎはねの^{さわがし} 夜着排却けて起ち行かんとする時、ばつさり紙門の倒ると斉く、二人の女の姿は貫一が
 めさき^{あひあらそ} 目前に転び出でぬ。
 まう^{けはひ}

苛まれしと見ゆる方の髪は浮藻の如く乱れて、着たるコートは霰するばかり雨に濡れた
 さいな^{かた} り。その人は起上り様に男の顔を見て、嬉しや、可懐しやと心も空なる気色。
 さま^{うきも}

「貫一さん」と匍ひ寄らんとするを、薄色魚子の羽織着て、夜会結に為たる後
 かんいつ^は 姿の女は躍り被つて引据れば、
 がた^{をど} ひきすう

「あれ、貫、貫一さん!」

拯を求むるその声に、貫一は身も消入るやうに覺えたり。彼は念頭を去らざりし宮なら
 すくひ^{しちしよう} ずや。七生までその願は聴かじと卻けたる満枝の、我の辛さを彼に移して、先の程よ
 なほあきた^{しりぞ} り打ちも語りもしたりけんを、猶慊らで我が前に責むるかと、貫一は怵へかねて顫ひ
 ほしいま^{ちと} るたり。満枝は縦まに宮を据へて些も動かせず、徐に貫一を見返りて、
 とら^{しづか}

「間さん、貴方のお大事の恋人と云ふのはこれで御座いませう」

頸髪取つて宮が面を引立てて、

「この女で御座いませう」

「貫一さん、私は悔う御座んす。この人は貴方の奥さんですか」

「私奥さんならどうしたのですか」

「貫一さん！」

彼は足擦して叫びぬ。満枝は直ちに推伏せて、

「ええ、聴い！ 貫一さんは其処に一人居たら沢山ではありませんか。貴方より私が間さ

んには言ふ事が有るのですから、少し静にして聴いてお在なさい。

間さん、私想ふのですね、究竟かう云ふ女が貴方に腐れ付いてゐればこそ、どんなに申

しても私の言は取上げては下さらるので御座いませう。貴方はそんなに未練がお有り遊ば

しても、元この女は貴方を棄てて、余所へ嫁に入つて了つたやうな、実に畜生にも劣つた

薄情者なのでは御座いませんか。——私善く存じてゐますわ。貴方も余り男らしくなくて

お在なざる。それは如何にお可愛いのか存じませんが、一旦愛相を尽して逃げて行つ

た女を、いつまでも思込んで遅々してゐらつしやるとは、まあ何たる不見識な事でせう

！ 貴方はそれでも男子ですか。私ならこんな女は一息に刺殺して了ふのです」

宮は跂返さんと為しが、又抑へられて声も立てず。

「間さん、貴方、私の申上げた事をば、やあ道ならぬの、不義のと、実に立派な口上を有仰いましたでは御座いませんか、それ程義のお堅い貴方なら、何為こんな淫乱の非人を阿容活けてお置き遊ばすのですか。それでは私への口上に対しても、貴方男子の一分が立たんで御座いませう。何為成敗は遊ばしません。さあ、私決してもう二度と貴方には何も申しませんから、貴方もこの女を見事に成敗遊ばしまし。さもなければ、私も立ちませんです。」

間さん、どう遊ばしたので御座いますね、早く何とか遊ばして、貴方も男子の一分を立てなさらんければ済まるところでは御座いせんか。私ここで拝見致してをりますから、立派に遣つて御覧あそばせ。卒と云ふ場で貴方の腕が鈍つても、決して為損じの無いやうに、私好い刃物をお貸し申しませう。さあ、間さん、これをお持ち遊ばせ」

彼の懷を出でたるは蠟塗の晃く一口の短刀なり。貫一はその殺氣に撲れて一指をも得動かさず、空く眼を輝して満枝の面を睨みたり。宮ははや氣死せるか、推伏せられたるままに声も無し。

「さあ、私かうして抑へてをりますから、吭^{のど}なり胸なり、ぐつと一^{ひとつき}突に遣^やつてお了^{しま}ひ遊ばせ。ええ、もう貴方は何を遅^{ぐつぐつ}々してゐらつしやるのです。刀の持^{もち}様さへ御存じ無いのですか、かうして抜いて！」

と片手ながらに一^{ひとつり}揮^ふ揮^ふれば、鞘^{さや}は発^{はつ}矢と飛散つて、電光^{たもとめ}袂^ぐを廻る白刃^{しらば}の影は、忽^{たち}ち翻^{がへ}つて貫一が面上三寸の処に落^{おち}来^{きた}れり。

「これで突けば可^よいのです」

「……………」

「さては貴方はこんな女に未^まだ未練が有つて、息の根を止めるのが惜くてゐらつしやるので御座いますね。殺して了はうと思ひながら、手を下す事が出来んのですね。私代つて殺して上げませう。何の雑作も無い事。些^{ちよつ}と御覽あそばせな」

言^{ごん}下に勿^{こつ}焉と消えし刃^{やいば}の光は、早くも宮が乱^{らん}鬢^{びん}を掠^{かす}めて頭^あれぬ。啊^あ呀と貫一の号^{さけ}ぶ時^{とき}、妙くも彼は跂^{はね}起^おきざまに突来る鎧^{きつさき}を危^{あや}く外^{はづ}して、

「あれ、貫一さん！」

と満枝の手首に縋^{すが}れるまま、一心不乱の力を極^{きは}めて振^{ねぢ}伏^ふせ振^{ねぢ}伏^ふせ、仰^の様^げに推^{おし}重^{かさ}りて仆^{たふ}したり。

「貫、貫一さん、早く、早くこの刀を取つて下さい。さうして私を殺して下さい——貴方の手に掛けて殺して下さい。私は貴方の手に掛けて死ぬのは本望です。さあ、早く殺して、私は早く死にたい。貴方の手に掛けて死にたいのですから、後生だから——」思に殺して下さい！

この恐るべき危機に瀕して、貫一は謂知らず自ら異くも、敢て拯の手を藉さんと為るにもあらず、しかも見るには堪へずして、空く悶えに悶えゐたり。必死と争へる両箇が手中の刃は、或は高く、或は低く、右に左に閃々として、あたかも一鉤の新月白く風の柳を縫ふに似たり。

「貫一さん、貴方は私を見殺になさるのですか。どうでもこの女の手に掛けて殺すのですか！ 私は命は惜くはないが、この女に殺されるのは悔い！ 悔い！！ 私は悔い！！」彼は乱せる髪を夜叉の如く打振り打振り、五体を揉みて、唇の血を嘔きぬ。彼も殺さじ、これも傷けじと、貫一が胸は車輪の廻るが若くなれど、如何にせん、その身は内より不思議の力に緊縛せられたるやうにて、逸れど、躁れど、寸分の微揺を得ず、せめては声を立てんと為れば、吭は又塞りて、鋏丸を啣める想。

力も今は絶々に、はや危しと宮は血声を揚げて、

「貴方が殺して下さいさなければ、私は自害して死にますから、貫一さん、この刀を取つて、私の手に持せて下さい。さ、早く、貫一さん、後生です、さ、さ、さあ取つて下さい」

又激く振合ふ卻合に、短刀は戛然と落ちて、貫一が前なる畳に突立つたり。宮は虚さず躍り被りて、我物得つと手に為れば、遣らじと満枝の組付くを、推隔つる腋の下より後突に、も透れと刺したる急所、一声号びて仰反る満枝。鮮血！ 兇器！ 殺傷！

死体！ 乱心！ 重罪！ 貫一は目も眩れ、心も消ゆるばかりなり。宮は瞬と寄添ひて、

「もうこの上はどうで私は無い命です。お願ですから、貫一さん、貴方の手に掛けて殺して下さい。私はそれで貴方に赦された積で喜んで死にますから。貴方もうぞそれでも堪忍して、今までの恨は霽して下さいまし、よう、貫一さん。私がこんなに思つて死んだ後までも、貴方が堪忍して下さいなれば、私は生替死替して七生まで貫一さんを怨みますよ。さあ、それだから私の迷はないやうに、貴方の口からお念仏を唱へて、これで一思ひに、さあ貫一さん、殺して下さい」

朱に染みたる白刃をば貫一が手に持添へつつ、宮はその可懐き拳に頻回頻擦したり。

「私はこれで死んで了へば、もう二度とこの世でお目に掛けることは無いのですから、せめ

て一遍の回向えこうをして下さると思つて、今はの際きはで唯一言赦ただひとことして遣ると有仰おつしやつて下さい。

生きてゐる内こそどんなにも憎くお思ひでせうけれど、死んで了へばそれつきり、罪も恨も残らず消えて土に成つて了ふのです。私はかうして前非を後悔して、貴方の前で潔く命を捨てるのも、その御詫おわびが為たいばかりなのですから、貫一さん、既往これまでの事は水に流して、もう好い加減に堪忍して下さいまし。よう、貫一さん、貫一さん！

今思へばあの時の不心得が実に悔くやしくて悔くて、私は何とも謂ひやうが無い！ 貴方が涙を零こぼして言つて下すつた事も覚えてゐます。後のち来きつと思おもひ中あたるから、今夜の事を忘れ

るなどと言ひの声も、今だに耳に付いてゐるわ。私の一図の迷とは謂ひながら何なぜ為あの時に些少すこしでも気が着かなかつたか。愚おろかな自分を責めるより外は無いけれど、死んでもこんなととりかへし

回復くわふくの付かない事を何で私は為ましたらう！ 貫一さん、貴方の罰ばちが中あたつたわ！ 私は生きてゐる空そらが無い程、貴方の罰が中つたのだわ！ だから、もうこれで堪忍して下さい。よ、貫一さん。

さうしてとてもこの罰の中つた軀からだでは、今更どうかうと思つても、願なんぞの慇かなふと云ふのは愚な事、未だ未だ憂目うれめを見た上に思おもひ死に死にでも為なければ、私の業ごうは滅めつしないのでせうから、この世に未練は沢山有るけれど、私は早く死んで、この苦艱くげんを埋うめて了

つて、さうして早く元の淨い軀に生れ替つて来たいのです。さう為たら、私は今度の世には、どんな艱難辛苦かんなんしんくを為ても、きつと貴方に添そひと遂とげて、この胸に一杯思つてゐる事もすつかり善く聴いて戴いたき、又この世で為遺しのこした事もその時は十分為てお目に掛けて、必ず貴方にも悦よろこばれ、自分も嬉しい思を為て、この上も無い楽しい一生を送る氣です。今度の世には、貫一さん、私は決してあんな不心得は為ませんから、貴方も私の事を忘れずにゐて下さい。可ようござんすか！ きつと忘れずにゐて下さいよ。

人は最期さいごの一念で生を引くと云ふから、私はこの事ばかり思おも窮ひつめて死にます。貫一さん、この通だから堪忍して！

声震はせて絶すがると見れば、宮は男の膝ひざの上なる銚目掛けて岸破がと伏したり。

「や、行つたな！」

貫一が胸は劈つんざけて始てこの声を出せるなり。

「貫一さん！」

無残やな、振仰ぐ宮が喉は血に塗まみれて、刃の半を貫けるなり。彼はその手を放たで苦き眼を睜まなみきつつ、男の顔を視みんと為るを、貫一は氣も漫そぞろに引抱へて、

「これ宮、貴様は、まあこれは何事だ！」

大事の刃を抜取らんと為れど、一念凝りて些も弛めぬ女の力。

「これを放せ、よ、これを放さんか。さあ、放せと言ふに、ええ、何為放さんのだ」

「貫、貫一さん」

「おお、何だ」

「私は嬉しい。もう……もう思遺す事は無い。堪忍して下すつたのですね」

「まあ、この手を放せ」

「放さない！ 私はこれで安心して死ぬのです。貫一さん、ああ、もう気が遠く成つて来たから、早く、早く、赦すと言つて聞せて下さい。赦すと、赦すと言つて！」

血は滾々と益す流れて、末期の影は次第に黯く逼れる気色。貫一は見るにも堪へず心乱れて、

「これ、宮、確乎しろよ」

「あい」

「赦したぞ！ もう赦した、もう堪……堪……堪忍……した！」

「貫一さん！」

「宮！」

「嬉しい！ 私は嬉しい！」

貫一は唯胸も張裂けぬ可く覚えて、言は出でず、抱き緊めたる宮が顔をば紛り下つる熱湯の涙に浸して、その冷たき唇を貪り吮ひぬ。宮は男の唾を口に移に辛くも喉を潤して、
「それなら貫一さん、私は、吁、苦いから、もうこれで一思ひに……」

と力を出して刳らんと為るを、緊と抑へて貫一は、
「待て、待て待て！ とにかくもこの手を放せ」

「いいえ、止めずに」

「待てと言ふに」

「早く死にたい！」

漸く刀を挽放せば、宮は忽ち身を回して、輾けつ転びつ座敷の外に脱れ出づるを、

「宮、何処へ行く！」

遣らじと伸べし腕は速はず、苛つて起ちし貫一は唯一掴と躍り被れば、生憎満枝が死骸に躓き、一間ばかり投げられたる其処の敷居に膝頭を碎けんばかり強く打れて、
りしままに起きも得ず、身を竦めて呻きながらも、

「宮、待て！ 言ふことが有るから待て！ 豊、豊！ 豊は居ないか。早く追掛けて宮を

留めろ！」

呼べど号べど、宮は返らず、老婢は居らず、貫一は阿修羅の如く憤りて起ちしが、又仆れぬ。仆れしを漸く起回りて、忙々々々四下を睭せど、はや宮の影は在らず。その歩々に委せし血は苧環の糸を曳きたるやうに長く連りて、畳より縁に、縁より庭に、庭より外に何処まで、彼は重傷を負ひて行くならん。

磐石を曳くより苦く貫一は膝の疼痛を怵へ怵へて、ともかくにも塀外にひ出づれば、宮は未だ遠くも行かず、有明の月冷かに夜は水の若く白みて、ほのぼのと狭霧罩めたる大路の寂として物の影無き辺を、唯独り覺束無げに走れるなり。

「宮！ 待て！」

呼べば訝は返せども、雲は幽にして彼は応へず。齒咬を作して貫一は後を追ひぬ。固より間は幾許も有らざるに、急所の血を出せる女の足取、引掣ふるに何程の事有らんと、侮りしに相違して、彼は始の如く走るに引易へ、此方は漸く息疲るるに及べども、距離は竟に依然として近く能はず。こは口惜し、と貫一は満身の力を励し、僵るるならば僵れよと無二無三に走ったり。宮は猶脱るるほどに、帯は忽ち颯と釈けて脚に絡ふを、右に左に払ひつつ、跌きては進み、行きては跟ぎ、彼もはや力は竭きたりと見えながら、

如何に為ん、其処に伏して復起きざる時、躬も終に及ばずして此処に絶入せんと思へば、貫一は今に当りて纔に声を揚ぐるの術を余すのみ。

「宮！」と奮つて呼びしかど、憫むべし、その声は苦き喘の如き者なりき。我と吾肉を啖はんと思ふばかりに躁れども、貫一は既に声を立つべき力をさへ失へるなり。さては効無き己に憤を作して、益す休まず狂呼すれば、彼の吭は終に破れて、汨然として一涌の鮮紅を嘔出せり。心晦みて覚えず倒れんとする耳元に、松風驀然と吹起りて、吾に復れば、眼前の御壕端。只看る、宮は行き行きて生茂る柳の暗きに分入りたる、入水の覚悟に極れりと、貫一は必死の声を擗りて連に呼べば、咳入り咳入り数口の略血、斑爛として地に委ちたり。何思ひけん、宮は千条の緑の陰より、その色よりは稍白き面を露して、追来る人を熟と見たりしが、竟に疲れて起きも得ざる貫一の、唯手を抗げて遙に留むるを、免し給へと伏拝みて、つと茂の中に隠れたり。

彼は己の死ぬべきを忘れて又起てり。駈寄る岸の柳を潜りて、水は深きか、宮は何処に、と葎の露に踏滑る身を危くも淵に臨めば、輅と瀉ぐ早瀬の水は、駭く浪の体を尽し、乱るる流の文を捲いて、眼下に幾個の怪き大石、かの鰲背を聚めて丘の如く、その勢を拒がんと為れど、触るれば払ひ、当れば翻り、長波の邁くところ滔々として破らざる

為き奮迅ふんじんの力は、兩岸も為に震ひ、坤軸こんじくも為に轟き、蹈居ふみゐる土も今にや崩れなんと疑ふところ、衣袂いべいの雨濃あめこまやかに灑そそぎ、鬢髪びんぱつの風転うたた急なり。

あな凄じすさま、と貫一は身毛も弥堅よだちて、縋すがれる枝を放ちかねつつ、看れば、叢くさむらの底に秋蛇だの行くに似たる徑こみち有りて、ほとほと逆落さかおとしに懸崖けんがいを下るべし。危あやふき哉かなと差覗さしのぞけば、茅葛かやかつらの頻しきりに動きて、小笹棘をささうばらに見えつ隠れつ段々と迂すべり行くは、求むる宮なり。

その死を止めんの一念より他たあらぬ貫一なれば、かくと見るより心も空に、足は地を踏む違いとまもあらず、唯遅れじと思ふばかりよ、壑間たにまの嵐あらしの誘まかふに委まかせて、驀直ましぐらに身を墮おとせり。或は摧あるひくだけて死ぬべかりしを、恙つつがな無きこそ天の佑たすけと、彼は数歩の内に宮を追ひしが、流ひたれる巖いはほを渉わたりて、既に渦巻く滝津瀬たきつせに生憎あやにく！ 花は散りかかるを、

「宮！」

と後うしろに呼ぶ声残りて、前には人の影も在らず。

咄嗟とつさの遅おくれを天に叫び、地に号わめき、流に悶もたえ、巖に狂へる貫一は、血走る眼に水を射て、此処ここや彼処かしこと恋こひき水屑みくづを覓もとむれば、正まさく浮木芥うきぎの類あくとも見えざる物の、十間じっけんばかり彼方あを揉なみに揉なんで、波間なみま隠かくれに推流おしながさるるは、人ならず哉や、宮みやなるかと瞳ひとみを定むる折しもあれ、水勢そこ其処そこに一段急なり、在りける影は弦つるを放れし箭飛やとびを作して、行方ゆくへも知らずと

胸潰るれば、忽ち遠く浮き出でたり。

嬉しやと貫一は、道無き道の木を攀ち、崖を伝ひ、或は下りて水を蹠え、石を躡み、巖を廻り、心地死ぬべく踉蹌として近き見れば、緑樹蔭愁ひ、潺湲声咽びて、浅瀬に繋れる宮が骸よ！

貫一は唯その上に泣伏したり。

吁、宮は生前に於て纔に一刻の前なる生前に於て、この情の熱き一滴を幾許かは忝なみけん。今や千行垂るといへども効無き涙は、徒に無心の死顔に濺ぎて宮の魂は知らざるなり。

貫一の悲は窮りぬ。

「宮、貴様は死……死……死んだのか。自殺を為るさへ可哀なのに、この浅ましい姿はどうだ。

刃に貫き、水に溺れ、貴様はこれで苦くはなかつたか。可愛い奴め、思迫めたなあ！
宮、貴様は自殺を為た上身を投げたのは、一つの死では慊らずに、二つ命を捨てた気か。
さう思つて俺は不敏だ！

どんな事が有らうとも、貴様に対するあの恨は決して忘れんと誓つたのだ。誓つたけれ

ども、この無残な死しにぎま状を見ては、罪も恨うらみも皆消えた！ 赦したぞ、宮！ 俺おれは心の底から赦したぞ！

今はの際きはに赦したと、俺わがが一ひと言云つたらば、あの苦い息の下から嬉しいと言つたが、宮、貴様は俺に赦されるのがそんなに嬉しいのか。好く後悔した！ 立派な悔悟だぞ！！

余り立派で、貫一は恥入つた！ 宮、俺は面目めんもく無い！ これまでの精神とは知らずに見み殺ころしに為たのは残念だつた！ 俺あやまりが過あやまりだ！ 宮、赦してくれよ！ 可いいか、宮、可いいか。

嗚呼死んで了つたのだ※」

貫一は彼の死の余りに酷むごく、余りに潔きを見て、不貞の血は既に尽く沃がれ、旧悪はだへの膚はだは全く洗れて、残れる者は、悔の為に、誠の為に、己おのれの為に捨てたる亡骸なきがらの、実げに憐あはれみても憐むべく、悲みても猶なほ及ばざる思の、今は唯極きはめて切なる有るのみ。

かの烈々れつれつたる怨念おんねんの跡無く消ゆるとともに、一旦ひと涸かれにし愛慕の情は又泉の涌わくらんやうに起りて、その胸に漲りぬ。苦からず哉や、人亡なき後の愛慕は、何の思かこれに似る者あらん。彼はなかなか生ける人にこそ如何いかなる恨をも繋かくるの忍やすび易きを今ぞ知るなる。

貫一は腸断ちようたんち涙なみだ連りて、我を我とも覚ゆる能はず。

「宮、貴様に手向たむけるのは、俺のこの胸の中うちだ。これで成仏してくれ、よ。この世の事は

宮、貴様が俺に対して悔悟するならば、俺は人たるの道に対して悔悟しなけりや済まん
 軀だ。からだ 貴様がかうして立派に悔悟したのを見て、俺は実に愧入りはぢいも為りや、可うらやまし 羨くも
 ある。はじめ 当初貴様に棄てられた為に、かう云ふ墮落をした貫一ならば、貴様の悔悟と共に俺
 も速すみやかに心を懊あたらめて、人たるの道に負ふところのこの罪を贖つぐなはなけりや成らん訳だ。
 嗟ああ乎、然し、何に就つけても苦くるい世の中だ！

人間の道は道、義務は義務、樂たのしみは又樂で、それも無けりや立たん。俺も嶋沢しまざわに居て宮
 を対あいて手に勉強してをつた時分は、この人世と云ふ者は唯面白い夢のやうに考へてゐた。

あれが浮世なのか、これが浮世なのか。

爾来あれから、今日までの六年間、人らしい思を為た日は唯の一日でも無かつた。それで何が
 頼たので俺は生きてゐたのか。死を決する勇氣が無いので生きてゐたやうなものだ！ 生きて

ゐたのではない、死しにぞくな 損しんつてゐたのだ！！

鰐淵わにぶちは焚死やけしに、宮は自殺した、俺はどう為するのか。俺のこの感情の強いのでは、又向こ

来宮れからのこの死顔が始終目に着いて、一生悲い思を為なければ成らんのだらう。して見り
 や、今までよりは一層苦くるしみを受けるのは知れてゐる。その中で俺は生きてゐて何を為るのか。

人たるの道を尽す？ 人たるの行おこなひを為る？ ああ、い、い！ 人としてをればこそ

そんな義務も有る、人でなくさへあれば、何も要らんのだ。自殺して命を捨てるのは、^{いっ}の罪惡だと謂ふ。^{あるひ}或は罪惡かも知れん。けれども、茫々然と呼吸してゐるばかりで、世間に対しては何等の益するところも無く、自身に取つてはそれが苦痛であるとしたら、自殺も一種の身始末だ。^{みじまつ}増して、俺が今死ねば、^{たちま}忽ち何十人の人が助り、何百人の人が懽ぶかも知れん。

俺も一箇の女故に身を誤つたその余が、盗人家業の高利貸とまで墮落してこれでやみやみ死んで了ふのは、余り無念とは思ふけれど、当初に出損つたのが一生の不覚、あれが抑も不運の貫一の軀は、もう一遍鍛直して出て来るより外為方が無い。この世の無念はその時霽す！

さしも遣る方無く悲めりし貫一は、その悲を立るに抜くべき術を今覺れり。看々涙の頬の乾ける辺に、異く昂れる氣有りて青く耀きぬ。

「宮、待つてゐろ、俺も死ぬぞ！ 貴様の死んでくれたのが余り嬉しいから、さあ、貫一の命も貴様に遣る！ 来世で二人が夫婦に成る、これが結納だと思つて、幾久く受けてくれ。貴様も定めて本望だらう、俺も不足は少しも無いぞ」

さらば往きて汝の陥りし淵に沈まん。沈まば諸共と、彼は宮が屍を引起して背に負へ

ば、その軽きこと一片の紙に等し。怪しと見返れば、更に怪し！
 一朵の白百合大さ人面の若きが、満開の葩を垂れて肩に懸れり。
 不思議に愕くと為れば目覚めぬ。覚むれば暁の夢なり。

芳芬鼻を撲ちて、

続続金色夜叉

第一章

貫一が胸は益ますます苦く成り愈またりぬ。彼を念おもひ、これを思ふに、生きて在るべき心地はせで、寧ろかの怪あやしき夢の如く成りなんを、快からずやと疑へるなり。

彼は空むなしく万事を抛なげうちて、懊おうのうの間に三日ばかりを過すごしぬ。

これを語らんに人無く、懣うったへんには友無く、しかも自ら拯すくふべき道は有りや。有りとも覚え、無しとは知れど、煩わづらふ者の煩ひ、悩む者の悩みて縦ほしいままなるを如何いかにせん。彼は実にこの昏迷こんめいらんじよう乱擾らんじようせる一いつ根の悪障いっこんを袂くじりさ去りて、猛火に燬やかんことを冀こひねがへり。その時彼は死ぬべきなり。生か、死か。貫一の苦悶くもんは漸やうやく急にして、終つひにこの問題の前に首かうべを垂

るるに至れり。

値無き吾が生存は、又同く値無き死亡を以つて畢へしむべき者か。悔に堪へざる吾が生の値無かりしを結ばんには、これを償ふに足る可き死を以て為ざる可からざるか、或は、ここに過多き半生の最期を遂げて、新に他の値ある後半の復活を明日に計るべきか。彼は強ちに死を避けず、又生を厭ふにもあらざれど、両ながらその値無きを、私に屑しと為ざるなり。当面の苦は彼に死を勧め、半生の悔は耻を責めて仮さず。苦を抜かんが為に、我は値無き死を辞せざるべきか、過を償はんが為に、我は楽まざる生を忍ぶべきか。碌々の生は易し、死は即ち難し。碌々の死は易し、生は則ち難し。我は悔いて人と成るべきか、死してその愚を完うすべきか。

貫一は活を求めて得ず、死を覓めて得ず、居れば立つを念ひ、立てば臥すを想ひ、臥せば行くを懷ひ、寐ぬれば覺め、覺むれば思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらで、唯憂ひ惑へる己一個の措所無く可煩きに悩乱せり。

あだかもこの際抛ち去るべからざる一件の要事は起りぬ。先に大口の言込有りし貸付の緩々急に取引迫りて、彼は些の猶予も無く、自ら野州塩原なる畑下と云へる温泉場に出向き、其処に清琴楼と呼べる湯宿に就きて、密に云々の探知すべき必要

を生じたるなり。

謂知らずいひし うるさしと腹立たれけれど、行懸ゆきがかりの是非無く、かつは難得えがたき奇景の地と聞及べば、少時しばし うさの憂を忘るる事も有らんと、自ら努めて結束し、かの日より約一週間の後、彼はほとほと進まぬ足を曳ひきて家を出でぬ。その晨横雲あし雲白く明方あけがたの空に半輪の残月を懸けたり。一番列車を取らんと上野に向ふ俾くるまの上なる貫一は、この暁の眺矚ながめ うたに撲れて、覚えず悚然しょうぜんたる者ありき。

(一)の二

車は駛はせ、景は移り、境は転じ、客は改まれど、貫一は易かはらざる他の悵鬱ゆううつを抱いだきて、遣やる方無き五時間の独ひとりに倦うみ憊つかれつつ、始て西那須野にしなすのの駅に下車せり。

直ただちに西北に向ひて、今尚茫々いまなほ ぼうぼうたる古の那須野原いにしへなすのがはらに入れば、天は濶ひろく、地は遐はるかに、

唯平蕪ただへいぶの迷ひ、断雲の飛ぶのみにして、三里の坦途たんと、一帯の重巒ちようらん、巒むら、塩原は其処そこぞと

見えて、行くほどに跡は窮みちきらず、漸く千本松を過ぎ、進みて関谷村せきやむらに到れば、人家の尽

る処に淙々そうそうの響有りて、これに架かれるを入勝橋にゆうしようきようと為す。

輒^{すなは}ち橋を渡りて僅^{わづか}に行けば、日光冥^{くら}く、山厚く疊み、嵐氣冷^{らんきやかたにふか}に壑^{たに}深く陥^{おち}りて、幾^{いくめぐ}
 廻^{めぐ}せる葛^{つづら}折^{をり}の、後^{のち}には密樹^{みつじゆ}に声々^{せいせい}の鳥呼^うび、前^{まへ}には幽草^{ゆうそう}歩々^{ほほ}の花を発^{ひら}き、い
 よいよ躋^{のぼ}れば、遙^{はるか}に木隱^{こかくれ}の音のみ聞えし流^{みなかみ}の水^{みづ}上^{うへ}は浅^{あは}く露^{あらは}れて、驚破^{おどろ}や、ここに空^{くうき}
 山^{さん}の雷^{いかづち}白光^{はくわう}を放ちて頹^{くづ}れ落ちたるかと凄^{すさま}じかり。道の右は山^{さん}を^きりて長壁^{ちやうへき}と成し、石^{いし}
 幽^{ゆう}に蘚^{こけ}碧^{あを}うして、幾^{いくすぢ}条^{じょう}とも白糸^{はくし}を乱^{みだ}し懸^かけたる細瀑^{ほそたき}小瀑^{こたき}の珊^{さん}々^{さん}として濺^{そそ}げるは、
 嶺^{れいじよう}上^{うへ}の松^{しょう}の調^{しらべ}も、定^{さだめ}てこの緒^をよりやと見捨^みて難^{がた}し。
 俚^かを駆^かりて白羽^{しらは}坂^{さか}を踰^こえてより、回顧^{みかへり}橋^{ばし}に三十尺^{ひゃくく}の飛瀑^ふを^ふみて、山中^{さんちゆう}の景^{けい}は始^はて
 奇^きなり。これより行きて道有^{みち}れば、水有^{みづ}り、水有^{みづ}れば、必ず橋有^{はし}り、全溪^{せんけい}にして三十橋、
 山有^{やま}れば巖^{いは}有^あり、巖有^{いは}れば必ず瀑^{たき}有^あり、全嶺^{ぜんれい}にして七十瀑。地有^ちれば泉有^{いづみ}り、泉有^{いづみ}れば
 必ず熱有^{あつ}り、全村^{ぜんむら}にして四十五湯。猶^{なほ}数^{かず}ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰^{たれ}か一々^{ささづ}探^{さぐ}
 り得^えべき。

抑^{そもそ}も塩原^{しほや}の地形^{ちけい}たる、塩谷^{しほや}郡^{ぐん}の南^{みなみ}より群峰^{ぐんぷう}の間^まを分^わけて深^{ふか}く西北^{しよくぱく}に入り、綿々^{わた}として
 箒^は川^{がわ}の流^{なが}に沂^{さか}る片^{かた}岨^{そは}の、四里^{しり}に岐^{わか}れ、十一里^{じゅういちり}に互^わりて、到^{いた}る処^{ところ}巉^{さん}巖^{がん}の水^{みづ}を夾^{はさ}まぎ
 る無^なきは、宛^{さながら}然^{さながら}青銅^{せいどう}の葉^は研^{けん}に瑠璃^{るり}末^{まつ}を碎^{くだ}くに似^にたり。先^{まづ}づ大網^{おほあみ}の湯^ゆを過^すれば、根^ね本^{もと}
 山^ま、魚^{うお}止^{どめ}滝^{たき}、児^{ちご}ヶ淵^{ふち}、左^{ひだり}鞆^{うづ}の險^{けん}は古^{ふる}りて、白雲^{はくうん}洞^{どう}は朗^{はう}に、布^ぬ滝^{たき}、竜^{りゆう}ヶ鼻^{はな}、

材木石、五色石、船岩などと眺行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、
福渡の里に入るなり。

途すがら前面の崖の処々に躑躅の残り、山藤の懸れるが、甚だ興有りと目留まれば、
又この辺殊に谿浅く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は陰
々として眠るに似たり。貫一は覺えず踏止りぬ。

かの逆巻く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其処の景色に、似たりとも酷
だ似たる岸の布置、茂の状況、乃至は漾ふる水の文も、透徹る底の岩面も、広さの
程も、位置も、趣も、子細に看來ればいよいよ差はず。

彼は眦を決きて寒慄せり。

怪むべき哉、曾て経たりし場をそのままに夢むる例は有れ、所抛も無く夢みし跡を、
歴々とかく目前に見ると云ふも有る事か。宮の骸の横はりし処も、又は己の追来し筋も、
彼処よ、此処よと、陰に一々指しては、限無く駭けるなり。

車夫を顧みて、処の名を問へば、不動沢と言ふ。

物可恐しげなる沢の名なるよ。げに思へば、人も死ぬべき処の名なり。我も既に死なん
とせしがと、さすが現の身にも沁む時、宮にはあらで山百合の花なりし怪異を又懷ひて、

彼は肩頭寒く顫ひぬ。

卒に踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、咄々、何等の物か、と先驚かざる異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見挙る絶頂には、はらはら松も危く立竦み、幹竹割に割放したる断面は、半空より一文字に垂下して、炭々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。

貫一は惘然として佇めり。

彼が宮を追ひて転び落ちたりし谷間の深さは、正にこの天辺の高きより投じたらんやうに、冉々として虚空を舞下る危惧の堪難かりしを想へるなり。

我未だ嘗て見ざりつる絶壁！ 危しとも、可恐しとも、夢ならずして争か飛下り得べき。又この人並ならぬ雲雀骨の粉微塵に散つて失せざりしこそ、洵に夢なりけれど、身柱冷かに瞳を凝す彼の傍より、これこそ名にし負ふ天狗巖、と為たり貌にも車夫は案内す。

貫一はかの夢の奇なりしより、更に更に奇なるこの塩原の実覺をば疑ひ懼れつつ立尽せり。

既に如此くなれば、怪は愈よ怪に、或は夢中に見たりし踪の猶着々活現し来り

て、飽くまで我を脅さざれば休まざらんと為るにあらずや、と彼は胸安からずも足に信せて、かの巖の頭上に聳ゆる辺に到れば、谿急に激折して、水これが為に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の乱れ競ふが如し。この乱流の間に横はりて高さ二丈に余り、その頂は平に濶りて、寛に百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳経る膚は死灰の色を成して、鱗も添はず、毛も生ひざれど、状可恐しげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬りて、夜な夜な天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。

その古蒲生飛驒守氏郷この処に野立せし事有るに因りて、野立石とは申す、と例のが説出すを、貫一は領きつつ、目を放たず打眺めて、独り窃に舌を巻くのみ。

彼は実に壑間の宮を尋ぬる時、この大石を眼下に窺ひ見たりしを忘れざるなり。

又は流るる宮を追ひて、道無きに困める折、左右には水深く、崖高く、前には攀づべからざる石の塞りたるを、攀ぢて半に到りて進退谷りつる、その石もこれなりけん、と肩は自と聳えて、久く留るに堪へず。

数歩を行けば、宮が命を沈めしその淵と見るべき処も、彼が釈けたる帯を曳きしその巖も、歴然として皆在らざるは無し！ 貫一が髪毛は針の如く豎ちて戦げり。彼の思は前夜の悪夢を反復すに等き苦悩を辞する能はざればなり。

夢ながら可^{おそろし}恐くも、浅ましくも、悲くも、可^{いたまし}傷くも、分く方無くて唯一図に切なかり

しを、事もし一場の夢にして止^{とどま}らざらんには、抑^{そもそ}も如何^{いかん}！ 今や塩原の実景は一^{いち}々^{いち}夢中

の見たところ、然らばこの景既に夢ならず！ 思^{おもひが}掛けずもここに来にける吾身もまた夢

ならず！ 但^{ただ}夢に欠く者としては宮一箇^{ひとり}のみ。纔^{わづか}に彼のここに来^{きた}らざるのみ！！

貫一はかく思到りて、我又夢に入りたるにあらざるかと疑はんとも為つ。夢ならずと為^せ

ば、我は由^{よしな}無き処に来にけるよ。幸^{さいはひ}に夢に似る事無くてあれかし。異^{あや}しとも甚^{はなは}だ異し！

疾^とく往きて、疾^{かへ}く還らんと、遽^{にはかひきあくるま}に率し俚に乗りて、白倉山の麓^{ふもと}、塩釜^{しおがま}の湯^ゆ、高尾塚^{たかおづか}、

離^{はなれむろ}室^{あまゆざわ}、甘湯沢^{あにおととのたき}、兄弟^{あに}滝^{たまただれのせ}、玉簾^{こたろうがぶち}瀬^{みち}、小太郎淵^{ほとり}、路の頭に高きは寺山^{てらやま}、低

きに人家の在る処、即ち畑下戸^{はたおり}。

第二章

一村十二戸、温泉は五箇所に涌^わきて、五軒の宿あり。ここに清琴楼と呼べるは、南^{あた}に方

りて^{ははきがわ}箒^{ゆるめく}川の緩く廻れる磧^{かはら}に臨み、俯^ふしては、水石^{すいせき}の粼^{りん}々^{りん}たるを弄^{もてあそ}び、仰げば西に、

富士^{きじゅうろく}、喜十六の翠巒^{すいらん}と対して、清風座に満ち、袖^{そで}の沢を落^{おちく}来る流は、二十丈の絶壁に

懸りて、素^{ねりぎぬ}縑^を垂れたる如き吉井滝^{よしのたき}あり。東北は山又山を重ねて、琅玕^{ろうかん}の玉簾^{ぎよくれん}深く夏日^{おそ}の畏るべきを遮りたれば、四面遊目^{ゆうもく}に足りて丘^{きゅうかく}壑^{ほし}の富を擅にし、林泉^{おごり}の奢^をを窮め、又有るまじき清福自在の別境なり。

貫一はこの絵を看る如き清^{せい}穩^{いん}の風景に値ひて、かの途^{みち}上^{すがら}險^{けし}き巖^{いは}と峻^{はさ}き流との為に幾^{いく}度^{たび}か魂^{こん}飛^ひび肉^{にく}銷^{しょう}して、理^をむる方^{かた}無く搔^{かき}乱^{みだ}されし胸の内は靄^{あい}然^{ぜん}として頓^{とみ}に和^{やはら}ぎ、恍^{こう}然^{ぜん}として総^{すべ}て忘れたり。

彼は以^{おも}為^へらく。

誠に好くこそ我は来^きつれ！なんぞ来^{きた}るの甚^{はな}だ遅^はかりし。山の麗^{うる}しと謂^いふも、壤^{つちうづたか}の堆^きき者^ののみ、川の暢^{のどけ}しと謂^いふも、水の逝^ゆくに過ぎざるを、牢^{ろう}として抜^ぬく可^べからざる我が半生^{はんせい}の痼^こ疾^{しつ}は、争^{いか}で壤^{つち}と水との医^いすべき者ならん、と齒^し牙^がにも掛^かけず侮^{あなど}りたりし己^{おのれ}こそ、先^{まづ}づ侮^{あなど}らるべき愚^{おろか}の者ならずや。

看^みよ、看^みよ、木々の緑も、浮^ひべる雲も、秀^{ひい}る峰も、流^たるる溪^{たに}も、峙^{そば}つ巖^{だいは}も、吹^ふくる風も、日^ひの光^{ひかり}も、鶏^{とり}の鳴^なく音^ねも、空^{おのづか}の色も、皆^{みな}自^{みづか}ら浮世^{うきよ}の物ならで、我^{われ}はこ^こに憂^{うれ}ひを忘^{わす}れ、悲^{かな}しみを忘^{わす}れ、苦^{くる}を忘^{わす}れ、勞^つを忘^{わす}れて、身^みはかの雲と軽^{かろ}く、心^{こころ}は水と淡^{たん}く、希^{こひ}はくは今^{いま}より如^{かくのこ}此^こくして我生^{わがな}を了^はらん哉^{かな}。

恋も有らず、怨も有らず、金錢も有らず、權勢も有らず、名譽も有らず、野心も有らず、榮達も有らず、墮落も有らず、競争も有らず、執着も有らず、得意も有らず、失望も有らず、止だ天然の無垢にして、形骸を安きのみなるこの里、我思を埋むるの里か、吾骨を埋るの里か。

性来多く山水の美に親まざりし貫一は、殊に心の往くところを知らざるばかりに愛で悦びて、清琴楼の二階座敷に案内されたれど、内には入らで、始より滝に向へる欄干に倚りて、偶ま人中を迷ひたりし子の母の親にも逢ひけんやうに、少時はその傍を離れ得ざるなりき。

楼前の緑は漸く暗く、遠近の水音沍えて、はや夕暮るる山風の身に沁めば、先づ湯浴などせばやと、何気無く座敷に入りたる彼の眼を、又一個驚かす物こそあれ。
 鞆を置いたる床間に、山百合の花のいと大きなるを唯一輪棒挿に活けたるが、茎形に曲り傾きて、あたかも此方に向へるなり。

貫一は覺えず足を踏止めて、その瞪れる眼を花に注ぎつ。宮ははやここに居たりとやうに、彼は卒爾の感に衝れたるなり。

既に幾処の実景の夢と符合するさへ有るに、またその殊に夢の夢なる一本百合の

ここに在る事、^{ひつきよう}畢竟偶合に過ぎずとは謂へ、さりとは余りにかの夢とこの旅との照
 応急に、因縁深きに似て、などかくは我を驚かすの太甚き！^{はなはだし}

奇を弄して益出づる不思議に、彼は益懼を作して、或はこの裏に天意の測り難き者有る
 なからんや、とさすがに惑ひ苦めり。

やがて傍^{そばちか}近く寄りて、幾^{いかに}許^か似たると眺むれば、打披ける葩は凜として玉を割いた
 る如く、濃香芬々と迸り、葉色に露氣有りて緑^{みどり}鮮^{あざやか}に、定て今朝や剪りけんと覺き花
 の勢なり。

少く樂まされし貫一も、これが為に興^{きよう}冷めて、俄に重き頭を花の前に支へつつ、又か
 の愁を徐々に喚起さんと為つ。

「お風呂へ御案内申しませう」

その声に彼は婢^{をんな}を見返りて、

「ああ、姐^{ねえ}さん、この花を那裏^{そつち}へ持つて行つておくれでないか」

「はあ、その花で御座いますか。旦那様^{だんな}は百合の花はお嫌ひで？」

「いや、匂^{におひ}が強くて、頭痛がして成らんから」

「さやうで御座いますか。唯今直に片付けますです。これは唯^{ただ}一つ早咲^{はやさき}で、珍^{めづらし}う御座い

ましたもんですから、先程折つてまゐつて、徒に挿して置いたんで御座います」

「うう、成程、早咲だね」

「さやうで御座います。来月あたりに成りませんと、余り咲きませんので、これが唯一つ有りましたんで、紛れ咲なので御座いますね」

「うう紛れ咲、さうだね」

「御案内致しませう」

風呂場に入れば、一箇の客先在りて、未だ燈点さぬ微黯の湯槽に漬りけるが、何様の来るに駭けると覺く、甚だ忙しげに身を起しつ。貫一が入れば、直に上ると齊く洗場の片隅に寄りて、色白き背を此方に向けたり。

年紀は二十七八なるべきか。やや孱弱なる短軀の男なり。頻に左視右胆すれども、明々地ならぬ面貌は定かに認め難かり。されども、自ら見識越ならぬは明なるに、何が故に人目を避るが如き態を作すならん。華車なる形成は、ここ等辺の人にあらず、何人にして、何が故になど、貫一は徒に心牽れてゐたり。

やがて彼が出づれば、待ちけるやうに男は入替りて、なほ飽くまで此方を向かざらんと為つつ、蕭索に浴を行ふ音を立つるのみ。

その膚はだの色の男に似氣にげ無く白きも、その骨ほね纖ほそに肉の瘦うせたるも、又はその挙動ふるまひの打う湿しめりたるも、その人を懼おそるる氣色けしきなるも、総すべて自ら尋常おのづかたならざるは、察さするに精神病者しんけんびやうの類たぐひなるべし。さては何の怪むところ有らん。節は初夏の未まだ寒き、この寥々りようりようたる山中ちやうとに來り宿とまれる客なれば、保養鬱散いふさんの爲ならずして、湯治の目的なるを思ふべし。誠にさなり、彼は病客なるべきをと心こころ積こけては、はや目も遣らずなりける間に、男おとこは浴ゆみ果はてて、貸浴衣かしのゆかた引ひ絡きひつつ出で行きけり。

暮色ゆのかはいよいよ濃こまに、軋うた激げきき川音がわおとの寒さを添ふれど、手寡てずかなればや燈あかりも持來きたらず、湯香ゆのか高く蒸騰むしる煙けむりの中に、独り影暗ひとく蹲うづくまるも、少すこく凄しさき心地こころして、程ほど無く貫一くわんいちも出でて座敷に返れば、床間とこのまには百合の花も在らず煌々こうこうたる燈火ともしびの下に座を設け、膳ぜんを据すゑて傍かたはらに手焙てあぶりを置き、茶器食籠じきろうなど取揃とりそろへて、この一目さすがに旅つかれの勞を忘るべし。先づ衣桁いこうに在りける襦袍どてらを被かつぎ、夕冷ゆふびえの火も恋こひく引寄せて莨たばこを吃くしゐれば、天地しづか靜しづかに石走いはばしる水の響こずゑ、梢こずゑを渡る風の聲、颯々さつさつ淅々しやくしやくと鳴りて、幽なること太古の如し。乍たちまちはたはたと跽あしおと音長ひく廊下あるしに曳ひいて、先にはあらぬ小婢こをんなの夕餉ゆふげを運きたび來れるに引添ひきひて、其處そこに出でたる宿の主は、

「今日は好ようこそ御越おこし下さいまして、さぞ御勞おつかれ様さまでゐらつしやいませうで御座りま

す。ええ、又唯今程は格別に御茶料を下し置れまして、甚だ恐入りました儀で、難有う
存じまして、厚く御礼を申し上げますで御座います。

ええ前ぜんもつ以てお詫わびを申上げ置きますのは、召上り物のところで御座りまして一向はや
御覽の通何も御座りませんで、誠に相済みません儀で御座いますが、実は、未だ些ちよつと時
候もお早いので、自然お客様のお越こしも御座りませんゆゑ、何分用意等とうも致し置きませんや
うな次第で、然し、一両日いちりょうにち中にはお麓そまつ末ながら何ぞ差上げますやうに取計けいひます
で御座いますで、どうぞ、まあ今明日こんみょうにちのところは御勘弁ごかんべんを下さしまして、御寛ごくわんと御
逗留りゆう下さいまするやうに。——これ、早う御味噌汁おみおつけをお易かへ申して来ないか」

主あるじの辞し去りて後、貫一は彼の所謂いはゆる何も無き、碗わんも皿も皆黄なる鶏子たまご一色の膳いっしきに向
へり。

「内にはお客は今幾箇いくたり有るのだね」

「這箇こちらの外にお一ひと方かたで御座りやす」

「一箇ひとり？ あのお客は单身ひとりなのか」

「はい」

「先さつきに湯殿ちよつあで些と遇つたが、男の客だよ」

「さよで御座りやす」

「あれは病人だね」

「どうで御座りやすか。——そんな事無^ねえで御座りやせう」

「さうかい。何^{どこ}処も不良^{わる}いところは無いやうかね」

「無^ねえやうで御座りやすな」

「どうも病人のやうだが、さうでないかな」

「ああ、旦那様はお医者様で御座りやすか」

「貫一は覚え^{ふんばん}ず嘔^{ふんばん}飯^{ふんばん}せんと為^なつ、

「成程、好い事を言ふな。俺は医者ぢやないけれど、どうも見たところが病人のやうだから、さうぢやないかと思つたのだ。もう長く来てゐるお客か」

「いんえ、昨日^{きのふ}お出^{いで}になりやしたので」

「昨日来たのだ？ 東京の人か」

「はい、日本橋の方のお方で御座りやす」

「それぢや商^{あきんど}人か」

「私能く知りやせん」

「どうだ、お前達と懇意にして話をするか」

「そりやなさりやす」

「俺と那箇どつちが為る」

「旦那様とですけ？ そりや旦那様のやうにはなさりやせん」

「うむ、さうすると、俺の方がお饒しやべり舌なのだな」

「あれ、さよぢや御座りやせんけれど、那裏あちらのお客様は黙つてゐらつしやる方が多う御座りやす。さうして何でもお連つれさま様が直ちきにいらしやる筈はずで、それを、まあ酷えらう待つてお在いでなさりやす」

「おお、伴つれが後から来るのか。いや、大きに御馳走ごちそうだつた」

「何も御座りやせんて、お鹿そまつさま末様で御座りやす」

婢をんなは膳を引き起ちぬ。貫一は顛然ころりと臥ねたり。

二十間も座敷の数有る大おほがまへ構くまの内に、唯二人の客を宿せるだに、寂寥さびしさは既に余んぬるを、この深山幽谷の暗夜に蔽おほはれたる孤村の片かたほとり辺よに倚よれる清琴楼の間毎に亘わたる長廊下は、星の下行く町の小路より、幾いかに許ばかり心細くも可おそろし恐おそろしき夜道ならんよ。戸一重外とひとへそとには、山やま風まろしの絶えずおどろおどろと吹廻ふきめぐりて、早瀬の波の高鳴たかなりは、真に放鬼の名をも懷おも

ふばかり。

折しも唾壺打つ音は、二間ばかりを隔てて甚だ蕭索に聞えぬ。

貫一は何の故とも知らで、その念頭を得放れざるかの客の身の上をば、独り様々に案じ入りつつ、彼既に病客ならず、又我が識る人ならずと為ば、何を以つて人を懼るる態を作すならん。抑も彼は何者なりや。又何の尤むるところ有りて、さばかり人を懼るるや。

貫一はこの秘密の鑰を獲んとして、左往右返に暗中摸索の思を費すなりき。

(二) の二

明る朝の食後、貫一は先づこの狭き畑下戸の隅々まで一遍見周りて、略ぼその状況を知るとともに、清琴楼の家格を考へなどして、礪に出づれば、浅瀬に架れる板橋の風情面白く、渡れば喜十六の山麓にて、十町ばかり登りて須巻の滝の湯有りと教へらるるまに、遂に其処まで往きて、午近き頃宿に帰りぬ。

汗を流さんと風呂場に急ぐ廊下の交互に、貫一はあたかもかの客の湯上りに出会へり。こたびも彼は面を見せじとやうに、慌忙く打背きて過行くなり。

今は疑ふべくもあらず、彼は正く人目を避けんと為るなり。則ち人を懼るるなり。故は、自ら尤るなり。彼は果して何者ならん、と貫一は愈よ深く怪みぬ。

昨日こそ誰乎彼の黯黠にて、分明に面貌を弁ぜざりしが、今の一目は、躬も奇なりと思ふばかり奇くも、彼の不用意の間に速写機の如き力を以てして、その映じ来りし形を総て脱さず捉へ得たりしなり。

貫一はその相貌の瞥見に縁りて、直ちに彼の性質を占はんと試るまでに、いと善く見極めたり。されども、いかにせん、彼の相するところは始に疑ひしところと頗る一致せざる者有り。彼若し実に人を懼るると為ば、彼の人を懼るる所以と、我より彼の人を懼るる所以と為す者とは、或は稍趣を異にせざらんや。又想ふに、彼は決して自ら尤るところなど有るに非ずして、止だその性の多羞なるが故のみか、未だ知るべからず。この二者の前のをも取り難く、さすがに後のにも領きかねて、彼は又新に打惑へり。

午飯の給仕には年嵩の婢出でたれば、余所ながらかの客の事を問ひけるに、箸をも取らで今外に出で行きしと云ふ。

「はあ、飯も食はんで？ 何処へ行つたのかね」

「何でも昨日あたりお連様がお出の筈になつてをりましたので御座いませう。それを大

相お待ちなすつてゐらつしやいましたところが、到頭お着が無いもんで御座いますから、
今朝から御心配遊あそびして、停車場まで様子を見がてら電報を掛けに行くと有仰おつしやいまして、
それでお出ましに成つたので御座います」

「うむ、それは心配だらう。能く有る事だ。然し、飯も食はずに氣を揉もんでゐるとは、ど
う云ふ伴つれなのかな。——年寄としよりか、婦をんなでもあるか」

「如何で御座いますか」

「お前知らんのか」

「私わたくし存ぞんじません」

彼は覺えず小首を傾かたむくれば、

「旦那も大相御心配ぢや御座いませんか」
だんな

「さう云ふ事を聞くと、俺おれも氣になるのだ」

「ぢや旦那も余よつぽど程苦勞性の方ですね」

「大きにさうだ」

「それぢやお連様がいらしつて見て、お年寄か、お友達なら宜よろう御座いますけれど、もし
も、ねえ、貴方あなた、お美うつくしい方か何かだつた日には、それこそ旦那は大変で御座いますね」

「どう大変なのか」

「又御心配ぢや御座いませんか」

「うむ、大きにこれはさうだ」

風恬かぜしづかに草香かをりて、唯居るは惜き日和ひよりに奇痒こそばゆく、貫一は又出でて、塩釜の西南十町

ばかりの山中なる塩の湯と云ふに遊びぬ。還かへれば寂さびしく夕暮るる頃なり。例の如く湯に入りて、上あがれば直ぢきに膳ぜんを持出で、燈あかしも漸かく耀やきしに、かの客、未いまだ帰こり来きず、

閑寂しづかなものも可いけれど、外に客と云ふ者が無くて、全まるでかう独法師ひとりぼつちも随分心細いね」

託言かごとがましく貫一は言出づれば、

「さやうでゐらつしやいませう、何と申したつてこの山奥で御座いますから。全体旦那がお一人でゐらつしやると云ふお心こころががけ懸かが悪いので御座いますもの、それは為方が御座いません」

婢はわざとらしう高たか笑わらひしつ。

「成程、これは恐入つた。今度から善く心得て置く事だ」

「今度なんて仰おつしや有あらずに、旦那も明日あしたあたり電信でお呼よび寄よせになつたら如何いかで御座います」

「五十四になる老婢ばあやを呼んだつて、お前、始らんぢやないか」

「まあ、旦那はあんな好い事を言つてゐらつしやる。その老婢さんの方でないのをお呼びなさいましょ」

「氣の毒だが、内にはそれつきりより居ないのだ」

「ですから、旦那、づつと外ほかにお在んなさるので御座いませう」

「そりや外には幾多いくたでも在るとも」

「あら、御馳走で御座いますね」

「なあに、能く聴いて見ると、それが皆人みんなの物ださうだ」

「何ですよ、旦那。貴方、本当の事を有仰おつしやるもんですよ」

「本当にも嘘うそにもその通だ。私わたしなんぞはそんな意気な者が有れば、何なに為にこんな青臭い山の中へ遊びに来るものか」

「おや！ どうせ青臭い山の中で御座います」

「青臭いどころか、お前、天狗てんぐいわ巖だ、七不思議だと云ふ者が有る、可おそろし恐い山の中に違ちが無いぢやないか。そこへ彷徨のそのそ、閑ひまさうな貌かほをして唯ただひとり一箇で遣やつて来るなんぞは、能よくよく々々
の間まぬけ抜と思はなけりやならんよ」

「それぢや旦那は間拔なのぢや御座いませんか。そんな解らない事が有るものですか」

「間拔にも大間拔よ。宿帳を御覧、東京間拔一人と附けて在る」

「その傍そばに小く、下女塩原間拔一人と、ぢや附けさせて戴いたきませう」

「面白い事を言ふなあ、おまへは」

「やつぱり少し抜けてゐる所せみ為で御座います」

彼は食事をを了りて湯浴し、少しばらく焉ありて九時を聞きけれど、かの客は未だ帰らず。寢床に入りて、程無く十時の鳴りけるにも、水声むなし空く楼を繞りて、松の嵐の枕ちんじょう上に落つる有るのみなり。

始よりその人を怪まざらんにはこの咎とがむるに足らぬ瑣細ささいの事も、大いなる糺糊もこの影を作なして、いよいよ彼が疑の眼を遮り来らんとするなりけり。貫一はほとほと疑ひ得らるる限みづから疑ひて、躬も其の妄ほうに過るの太甚はなはだしきを驚けるまでに至りて、始て罷やめんと為たり。

これに垂ついで、彼は抑も何の故有りて、肥瘠ひせきも閑せざるかの客に對して、かくばかり輕々しく思を費し、又念おもひを懸るの固執なるや、その謂いは無き己おのれをば、敢て自ら解かんと試みつ。

されども、人は往々にして自ら率ひきあるその己を識る能はず。貫一は抑へて怪まざらんと為せ

ば、理に於て怪まずしてあるべきを信ずるものから、又幻視せるが如きその大いなる影の冥^{めい}想^{そう}の間に纏^{てん}綿^{めん}して、或^{ある}は理外^ひに在る者有る無からんや、と疑はざらんと為る傍^{かたはら}より却^{かへ}りて惑^{まどは}しむるなり。

表階^{おもてばし}子の口に懸^かれる大時計は、病^{つか}み憊^{つか}れたるやうの鈍^なき響^なを作して、廊下^{やみ}の闇^{さまよ}に彷徨^{さまよ}ふを、数^{たま}ふれば正^{まじ}に十一時なり。

かの客はこの深^{しん}更^{こう}に及^{いた}べども未^{いま}だ帰^こり来^こず。

彼は帰^{かへ}り来^こらざるなるか、帰^{かへ}り得^えざるなるか、帰^{かへ}らざるなるかなど、又思^{おも}ひ放^{はな}つ能^なはずして、貫^ぬ一^{くわ}は寝^ね苦^{くる}き枕^{しん}を頻^{あまた}回^た易^かへたり。今や十二時にも成^なりなんと心に懸^かけながら、その音は聞^きくに及^{いた}ばずして遂^{つひ}に眠^ねを催^{むり}せり。日高^{ひだか}き朝景色の前に起^お出^でづれば、座敷の外^をを小婢^{こをんな}は雑巾^{ぞうきん}掛^{かけ}してゐたり。

「お早^{ねむ}う御座^ごりやす」

「睡^{ねむ}さうな顔^{かほ}をしてゐるな」

「はい、昨夜^{よんべ}那裏^{あた}のお客^か様^{へり}が帰^{かへ}りになるかと思^{おも}つて、遅^{おそ}うまで待^{まち}つてをりやしたで、今朝^{けさ}睡^{ねむ}うござりやす」

「ああ、あのお客^{ゆふべ}は昨夜^{けふ}は帰^{かへ}らずか」

「はい、お帰が御座りやせん」

貫一はかの客の間の障子を開放したるを見て、唾楊枝のまま欄杆伝ひに外を眺め行く態して、その前を過れば、床の間に小豆革の手鞆と、浅黄キヤリコの風呂敷包とを並べて、傍に二三枚の新聞紙を引※ね、衣桁に絹物の袷を懸けて、その裾に紺の靴下を畳置きたり。

さては少く本意無きまでに、座敷の内には見出すべき異状も有らで、彼は宿帳に拠りて、洋服仕立商なるを知りたると、敢て背くところ有りとも覚えざるなりき。

拍子抜して返れる貫一は、心私にその臆測の鑿なりしを、ぢぎるにもあらざれど、又これが為に、直ちに彼の濡衣を剥去るまでに釈然たる能はずして、好し、この上はその待人の如何なる者なるかを見て、疑は決すべしと、やがてその消息を齎し来るべき彼の帰來の程を、陰ながら更に遅しと待てり。

夜は山精木魅の出でて遊ぶを想はしむる、陰森凄幽の気を凝すに反してこの霽朗なる昼間の山容水態は、明媚争か画も如かん、天色大氣も殆ど塵境以外の感無くんばあらず。黄金を織作せる羅にも似たる麗き日影を蒙りて、万斛の珠を鳴す谷間の清韻を樂みつ、欄頭の山を枕に恍惚として消ゆらんやうに覚えたりし貫一は、急遽き登

しおと
音の廊下を動し来るに駭かれて、起回りさまに頭を捻向れば、何事とも知らず、年
嵩の婢の駈着るなり。

些と旦那、参りましたよ、参りましたよ！ 早くいらしつて御覧なさいまし。些と早く」

「何が来たのだ」

「何でも可いんですから、早くいらつしやいましよ」

「何だ、何だよ」

「早く階子の所へいらしつて御覧なさい」

「おお、あの客が還つたのか」

彼ははや飛ぶが如くに引返して、貫一の言は五間も後に残されたり。彼が注進の模様は、見るべき待人を伴ひ帰れるならんをと、直ぐに起ちて表階子の辺に行く時、既に晩し両箇の人影は欄の上に顕れたり。

鏢広なる藍鼠の中折帽を前斜に冠れる男は、例の面を見せざらんと為れど、

かの客なり。引連れたる女は、二十歳を二つ三つも越したる可し。銀杏返を引約めて、本甲蒔絵の挿櫛根深に、大粒の淡色瑪瑙に金脚の後簪、堆朱彫の玉根掛をして、鬢の一髪をも乱さず、極めて快く結び做したり。葡萄茶の細格子の縞御召

に勝色裏かついろうらの衿あはせを着て、羽織は小紋縮緬こもんちりめんの一紋ひとつもん、阿蘭陀模様オランダの七糸しつちんの袱紗帶ふくさおびに金き鎖子んぐさりの織ほそきを引入なまめかしれて、嬌なまめかしき友禅染じゆばんの襦袢そでの袖そでして口元くちぐを拭ぬぐひつつ、四季袋しきふくろを紐ひも短じかに拈さげたるが、弗ふと此方こなたを見向みむかける素顔あをの色蒼あをく、口の紅べにも点さで、やや裏うら寂さびくも花の咲過やつれぎたらんやうの蕭衰やつれを帯おびびたれど、美目みめの盼へんたる色香いろかなほ尚こまや濃なにして、漫そでろ人に染しむばかりなり。

両箇ふたりは彼の見る目の顕露あらはなるに気き怯おくれせる様子にて、先を争あふ如く足早あしはやに過行あやきぬ。貫くわん一いつもまたその逢ほうちやく着ちやくの唐突たうとつなるに打惑うちまどひて、なかなか精くはく看みるべき違いとまあらざりけれど、その女は万々彼の妻つまなどにはあらじ、と独ひとり合点あてせり。

第三章

かの男女なんによは、しさに堪たへざらんやうに居寄ゐよりて、手に手を交まじへつつ密々ひそやかに語かたれり。

「さうなの、だから私はどんなに心配しんぱしたか知れやしない。なかなか貴方あなたがここで想おもつてゐるやうな訳わけに行いきは為しませんとも。そりや貴方の心配しんぱもさうでせうけれど、私の心配しんぱと云いつたら、本当に無なかつたの。察しするが可いいつて、そりや貴方、お互ちやありませんか。

「あゝ 吁、私は今だに胸が悸々どきどきして、後から追掛おつかけられるやうな氣持がして、何だか落着かなくて可いけない」

「まあ何でも、かうして約束通り逢あへりや上首尾なんだ」

「全くよ。をとひ一昨日の晩あたりの私の心配と云つたら、こりやどうだかと、さう思つたくら

ゐ、今考へて見れば、自分ながら好く出られたの。やつぱり尽きない縁なのだわ」

些ちよと男の顔を睥みりて、濡ぬる臉まぶたを軽く拭ぬぐへり。

「その縁の尽きないのが、究竟彼我の身の窮迫つまりなのだ。俺おれもかう云ふ事に成らうとは思はなかつたが、成程、悪縁と云ふ者は為方しかたの無いものだ」

女は尚なほひそ竊そに泣きゐる面を背けたるまま、

「貴方は直ちきに悪縁だ、悪縁だと言ふけれど、悪縁ならどうするんです！」

「悪縁だからかうなつたのぢやないか」

「かう成つたのがどうしたんですよ！」

「今更あどうするものか」

「あたりまへ当然たうぜんさ！ 貴方は一体水臭いんだ!!」

「おい、お静しず、水臭いとは誰の事だ」

色なを作せる男の眼まなこは、つと湧わく涙に輝けり。

「貴方の事さ！」

女の目よりは漣はらはら々と零こぼれぬ。

「俺の事だ　お静……手前てめへはそんな事を言つて、それで済むと思ふのか」

「済んでも済まなくても、貴方が水臭いからさ」

「未だまそんな事を言やがる！　さあ、何が水臭いか、それを言へ」

「はあ、言ひますとも。ねえ、貴方は他の顔ひとさへ見りや、直ちきに悪縁だと云ふのが癖ですよ。彼我ふたりの中の悪縁は、貴方がそんなに言いはなくたつて善く知つてゐまさね。何も貴方一箇ひとりの悪縁ぢやなし、私だつてこれでも随分謂いふに謂いれない苦労を為てゐるんぢやありませんか。それを貴方がさもさも迷惑さうに、何ぞの端はしには悪縁だ悪縁だと言ひなさるけれど、聞きかされる身に成つて御覧なさいな。余あんまり好いい心持は為やしません。それも不断ならともかくもですさ、この場になつてまでも、さう云ふ事を言ふのは、貴方の心が水臭いからだ——何がさうでない事が有るmondですか」

「悪縁だから悪縁だと言ふのぢやないか。何も迷惑して……」

「悪縁でも可ごござんすよ！」

彼等は相背あひそむきて姑しほらく語無ことばなかりしが、女は忍びやかに泣きゐたり。

「おい、お静、おい」

「貴方きつと迷惑なんぞでせう。貴方がそんな氣ぢや、私は……実に……つまらない。私はどうせう。情無い！」

お静は竟つひに顔を掩おほうて泣きぬ。

「何だな、お前も考へて見るが可いぢやないか。それを迷惑とも何とも思はないからこそ、世間を狭くするやうな間なかにも成りさ、又かう云ふ……なあ……訳なのぢやないか。それを嘘うそにも水臭いなんて言いはれりや、俺だつて悔くやしいだらうぢやないか。余り悔くて俺は涙が出た。お静、俺は何も芸人ぢやなし、お前に勤めてゐるんぢやないのだから、さう思つてゐてくれ」

「狭山さやまさん、貴方もそんなに言はなくなつて可いぢやありませんか」

「お前が言出すからよ」

「だつて貴方がかう云ふ場になつて迷惑さうな事を言ふから、私は情無くなつて、どうしたら可からうと思つたんでさね。ぢや私が悪かつたんだから謝あやまります。ねえ、狭山さん、些ちよいと」

お静の顔を打^{うち}晒^{まも}りつつ、男は茫^{ぼう}然^{ぜん}たるのみなり。

「狭山さんてば、貴方何を考へてゐるのね」

「知れた事さ、彼^{ふたり}我の身の上をよ」

「何だつてそんな事を考へてゐるの」

「……………」

「今更何も考へる事は有りはしないわ」

狭山は徐々^{おもむろ}に目を転^{うつ}して、太息^{といき}を洩^ついたり。

「もうそんな溜^{ため}息^{いき}なんぞを洩^よくのはお舍^よしなさいつてば」

「お前二十……二だつたね」

「それがどうしたの、貴方が二十八さ」

「あの時はお前が十九の夏だつてかな」

「ああ、さう、何でも袷^{あはせ}を着てゐたから、丁度今時分でした。湖月^{こげつ}さんのあの池に好いお

月^さが映^{あつ}してゐて、暖^{あつ}い晩^{たか}で、貴方と一処に涼みに出たんですよ、善く覚えてゐる。あれが

十九、二十、二十一、二十二と、全^{まる}三年に成るのね」

「おお、さうさう。昨日^{きのふ}のやうに思つてゐたが、もう三年に成るなあ」

「何だか、かう全で夢のやうね」

「^{あゝ}吁、夢だなあ！」

「夢ねえ！」

「お静！」

「狭山さん！」

両箇^{ふたり}は手^とを把^とり、膝^{ひざ}を重ねて、同じ思^なを猶^{なお}悲^{かな}く、

「ゆ……ゆ……夢だ！」

「夢だわ、ねえ！」

声立てじと男の胸に泣附く女。

「かう成るのも皆^{みんな}約束事ぢやあらうけれど、那^{あいつ}奴^{やつ}さへ居なかつたら、貴方だつて余計な苦
勞は為はしましい。私は私で、ああもかうも思つて、未始終の事も大概考へて置いたのだ
から、もう少しの間時節が来るのを待つてゐられりや、曩^{いつか}日の御神籤^{おみくじ}通^{とほり}な事に成れるの
は、もう目に見えてゐるのを、那^{あいつ}奴^{やつ}が邪魔して、横^{よこ}紙^{がみ}を裂くやうな事を為やがるばかり
に大事に為なけりや成らない貴方の体に、取つて返し^{かへ}の付かない傷まで附けさせて、私は、
狭山さん、余^{あんま}り申訳が無い！ 堪^{かん}……忍^{にん}……して下さい」

「そりやなあに、お互の事だ」

「いいえ、私がもう少し意気地が有つたら、かうでもないんだらうけれど、胸には色々在つても、それが思切つて出来ない性分だもんだから、ついこんな破滅はめにも成つて了つて、私は実に濟まないと、自分の身を考へるよりは、貴方の事が先に立つて、さぞ陰ぢや迷惑もしてお在いでなんだらうに、逢たふ度に私の身を案じて、毎いも優うくして下さるのは仇あだや疎おろな事ぢやないと、私は嬉うれいより難ありがたと思つてゐます。だものだから、近頃ぢや、貴方に逢あふと直ちに涙が出て、何だか悲くばかりなるのが不思議だと思つてゐたら、果や然つかう云ふ事になる識しだつたんでせう。

貴方にはお気の毒だ、お気の毒だ、と始終自分が退ひけてゐるのに、悪縁だなんぞと言れると、私は体が縮るやうな心持がして、ああ、さうでもない、貴方が迷惑してゐるばかりなら未だ可いけれど、取んだ者に懸り合つた、ともしや後悔してお在いでなんぢやなからうかと思ふと、私だつて好い気持はしないもんだから、つい向者さつきはあんなに言過ぎて、私は誠に濟みませんでした。それはもう貴方の言ふ通り悪縁には差ち無がいんだけれど、後生だからそんな可厭いやな事は考へずにゐて下さい。私はこれで本望だと思つてゐる」

「生木なまきを割さいて別れるよりは、まあ愈ましだ」

「別れる？　吁！　可厭だ！　考へても慄然とする！　切れるの、別れるのなんて事は、
那奴が来ない前には夢にだつて見やしなかつたのを、切れろ切れろぢや私もどの位内で責
められたか知れやしない。さうして挙句がこんな事に成つたのも、想へば皆那奴のお蔭だ。
ええ、悔い！　私はきつと執着いても、この怨は返して遣るから、覚えてゐるが可い！」
女は身を顫せて罵るとともに、念入りて呪ふが如き血相を作せり。
不知、この恨み、罵り、呪はるる者は、何処の誰ならんよ。

「那奴も好加減な馬鹿ぢやないか！」

男は齒咬しつつ苦しげに嗤笑せり。

「馬鹿も大馬鹿よ！　方図の知れない馬鹿だわ。畜生！　所歡の有る女が金で靡くか、靡
かないか、些は考へながら遊ぶが可い。来りや不好きな顔を為て遣るのに、それさへ解らず
に、もうく附けつ廻しつつして、了局には人の恋中の邪魔を為やがるとは、那奴も能く能
くの芸無猿に出来てゐるんだ。憎さも憎し、私はもう悔くて、悔くて、狭山さん、実は
ね、私はこの世の置土産に、那奴の額を打割つて来たんでさね」

「ええ、どうして！」

「なあにね、貴方に別れたあの翌日あくるひから、延続のべつに来てゐやがつて、ちつとでも傍そばを離さないんぢやありませんか。這箇こつちは気が氣ぢやないところへ、もう惡漆膠わるしつこくて耐たまらないから、病氣だと謂いつて内へ遁にげて来りや、直すぐに追懸おつかけて来て、附絡つきまとつてゐるんでせう。さうすると寸法は知れてまさね、丁ちゃんと渉わたりが付いてゐるんだから、阿母おつかさんは傍そばから『ちやほや』して、そりや貴方、真面目まじめぢや見ちやゐられないお手厚てあつさ加減なんだから、那奴は図に乗つて了つて、やあ、風呂を沸わかせだ事の、ビールを冷ひやせだ事のと、あの狭い内へ一個で幅しを為やがつて、なかなか動いきさうにも為らないんぢやありませんか。

私は全いけとりで生捕いけとりに成つたやうなもので、出るには出られず、這箇こつちの事が有るから、さうしてゐる空そらは無し、あんな氣の揉もめた事は有りはしない——本ほん当とにどうせうかと思つた。ええ、なあに、あんな奴は打抛おつぽり出して措おいて、這箇こつちは搔かき巻まきを引被ひつかぶつて一心に考へてゐたんですけれど、もう憤じれたくて耐らなくなつて来たから、不い如そかまはず飛出して了はうかと、余程よつぽどさう念つたものの、丹子たんこの事も、ねえ、考へて見りや可哀かはいさうだし、あの子を始め阿母さんまで、私ばかりを頼たよりに為てゐるものを、さぞや私の亡ない後には、どんなにか力も落さうし、又あの子も為ないでも好い苦勞を為なけりやなるまいと、そればかりに牽ひかされて、色々話も有るものだから、あの子の阿母さんにも逢つて遣りたし、それに、私

も出るに就いちや、為て置かなけりやならない事も有るし為るので、到頭遅々して出損つて了つたんです。

さうすると、どうでせう、まあ、那奴はその晩二時過までうで付いてゐて、それでも不承々に還つたのは可い。すると翌日は半日阿母さんのお談義が始まつて、好加減に了簡を極めろでせう。さう言つちや済まないけれど、育てた恩も聞飽きてゐるわ。それを追繰返し、引繰返し、悪体交りには、散々聴せて、了局は口返答したと云つて足蹴にする。なあに、私は足蹴にされたつて、撲れたつて、それを悔いとは思やしないけれど、這箇だつて貴方と云ふ者が有ると思ふから、もう一生懸命に稼いで、為るだけの事は丁と為であるのに、何ほ慾にきりが無いと謂つても、自分の言条ばかり通さうとして、他には些でも樂を為せない算段を為る。私だつて金属で出来た機械ぢやなし、さうさう駆使はれてお為にばかり成つてゐちや、這箇の身が立ちはしない。

別にどうしてくれなくても、訳さへ解つてゐてくれりや、辛いぐらゐは私は辛抱する。所歛は堰いて了ふし、旦那取は為ると云ふ。そんな不可な真似を為なくても、立派に行くやうに私が稼いであるんぢやありませんか。それをさう云ふ無理を言つてからに、素直でないの、馬鹿だのと、足蹴に為るとは……何……何……何事で……せう！

それぢや私も赫^{かつ}として、もう我慢が為切れなく成つたから、物も言はずに飛出さうとする途端に、運悪く又那奴^{あいつ}が遣つて来たんぢやありませんか。さあ、捉^{つか}つて了つて、其処^{そこ}の場^ば図^づで逃^にるには逃^げられず、阿母^{おつか}さんは得^えたり賢^{かしこ}しなでせう、一処^いに行け行けと聒^{やかまし}く言ふし、那奴は何でも来いと云つて放さない。私も内を出た方が都合が好いと思つたから、まあ言ふなりに成つて、例の処^{ひつば}へられて行つたとお思ひなさい。あの長^{なが}尻^{ぢり}だから、さあ又還らない、さうして何か所思^{おもはく}でも有つたんでせうよ、何だか知らないけれど、その晩に限つて無闇^{むやみ}とお酒を強^{しひ}るんでさ。這箇^{こつち}も鬱^{むしやく}勃^く肚^{はら}で、飲めも為ないのに幾多^{いくち}でも引受けたんだけれど、酔ひさうにも為やしない。

その内に漸^{そろそろ}々又お極^{きま}りの氣障^{きざ}な話を始めやがつて、這箇^{こつち}が柳に受けて聞いてゐて遣りや、可いかと思つて増長して、呆^{あき}れた真似^{まね}を為やがるから、性の付く程^{つけつけ}々さう言つて遣つたら、さあ自棄^{やけ}に成つて、それから毒吐^{どくつ}き出して、やあ店番の埃^{ほこり}被^かだの、冷飯^{ひやめし}吃^{くら}ひの雇^{やとひにん}人がどうだのと、聞いちゃゐられないやうな腹の立つ事を言やがるから、這箇^{こつち}も思切つて随分な悪^{あく}体^{たい}を吐^ついて遣つたわ、私は。

さうすると、了局^{しまひ}に那奴は何と言ふかと思ふと、幾許^{いくち}七顛^{しちた}八倒^{はた}しても金で縛^{しば}つて置いた体だなんぞ、と利^きいた風な事を言ふんぢやありませんか。だから、私はさう言つて遣つた、

お気の毒だが、貴方は大方目が眩くらんで、そりやお袋を縛つたんだらうつて」

聴きゐる狭山は小気味好こきみよしとばかりに頷うなづけり。

「それで那奴あいつは全然すつかりおこ然ぜん慍おこつて了つて、それから騷擾さわぎでさ。無礼な奴だとか何とか言つて、私は襟えりを持つて引擦ひきずり仆たふされた。随分飲んでゐたから、やつぱり酔つてゐたんでせう。その時はもう全まるで夢中で、唯那奴ただの憎らしいのが胸一杯に込こみ上げて、這畜生こんちくしょうと思ふと、いきなりそこ突いきなりそこ如其処そこのに在つたお皿を那奴の横面へ叩たた付けて遣つた。丁度それが眉間みけんへ打ぶつて血が淋漓だらだら流れて、顔が半分真赤に成つて了つた。これは居ちや面倒だと思つたから、家中大騒を遣つてゐる隙すきを見て、窃そつと飛出した事は飛出したけれど、別に往ゆきどころ所も無いから、丹子の阿母おつかさんの処へ駈かけ込んだの。

ところが、好かつた事には、今旅から歸つたと云ふところなんで、時間を見ると、十時よつぽど余程廻つてゐるんでせう。瀕車きしやはもう出ず、氣ばかりは急せくけれど、若箇道間に合どつちみちふんぢやなし、それに話は有るし為るもんだから、一晚厄介に成る事にして、髪なんぞを結んでももらひながら、些ちつと訳が有つて、貴方と一処に当分身を隠すのだと云ふやうに話を為てね、それから丹子の事も悉くはしく言置いて遣りましたら——善い人ね、あの阿母さんは——おいおい泣出して、自分の子の事はふつつりとも言はずに、唯私の身ばかりを案じて、あ

あのかうのと色々言つてくれたその実意と云つたら……噫、同じ人間でありながら、内の
 阿母さんは、実に、あなた、鬼ですわ！ 私もあの子の阿母さんのやうな実の親が有つた
 らば、こんな苦勞は為やしまいし、又貴方のやうな方の有るのを、さぞかし力に念つて、
 喜びも為やうし、大事にも為る事だらうと思つたら、もうもう悲くなつて、悲くなつて、
 如何に何でも余り情無くて、私はどんなに泣きましたらう。

それに、私をばあんなに頼に為てゐた阿母さんの事だから、当分でも田舎へ行つて了ふ
 と云ふのを、それは心細がつて、力を落したの何のと云つたら、私も別れるのが氣の毒に
 成るくらゐで、先へ落付いたら、どうぞ一番に住所を知せてくれ、初中終旅を出行いて
 ゐる体だから、直に御機嫌伺ひに出ると、その事をあんなに懇々も頼んでゐましたから、
 後で聞いたたら、さぞ吃驚して……きつと疾ひでも為るでせうよ。考へて見りや、丹子も可
 愛し、あの阿母さんも怜いし。吁、吁！

すすりなき
 歎 歎 して彼は悶えつ。

「さう云ふ訳ぢや、猶更内ぢや大騒をして搜してゐる事だらう」

「大變でせうよ」

「それだと余り遅々しちやゐられないのだ」

「どうで、狭山さん、先は知れてる……」

「さうだ」

「だからねえ、もう早い方が可ござんすよ」

女は咽びて其処に泣伏しぬ。狭山は涙を連き、

「お静、おい、お静や」

「あ……あい。狭山さん！」

憐むべし、情極りて彼等の相擁するは、畢竟尽きせぬ哀歎を抱くが如き者な

らんをや。

(三)の二

両箇は此方にかつ泣きかつ語れる間、彼方の一箇は徒然の柱に倚りて、やうやう傾く日影に照されたり。

その待人の如何なる者なるかを見て、疑は決すべしと為せし貫一も、かの伴ひ還りし女を見るにびて、その疑はいよいよ錯雑して、しかも新なる怪訝の添はるのみなり。

如何なればや、女の顔色も甚だ勝れず、その点の男といと善く似たるは、同じ憂を分つにあらざる無からんや。我聞く、犯罪の底には必ず女有りと、若し信なりとせば、彼は正しく彼女ゆゑに如何なる罪をも犯せるならんよ。その罪の故に男は苦み、その苦の故に女は憂ふると為ば、彼等は誠に相愛するの堅き者ならず哉。

知らず、彼等は何の故に相率てこの人目稀なる山中には来れる。その罪を、れんが為か、その苦と憂とを忘れんが為か、或はその愛を全うせんが為か、明に彼等は夫婦ならず、又は、女の芸者風なるも、決して尋常の隠遊にあらずして、自から穂に露るるところ有り。さては何等の密会ならん。

貫一は彼を以て女を偷みて奔る者ならずや、と先推しつつ、尚ほ如何にやなど、飽かず疑へる間より、忽ち一片の反映は閃きて、朧にも彼の胸の黯きを照せり。

彼はこの際熱海の旧夢を憶はざるを得ざりしなり。

世上貫一の外に愛する者無かりし宮は、その貫一と奔るを諾はずして、僅に一瞥の富の前に、百年の契を蹂躪りて吝まざりき。噫我が当時の恨、彼が今日の悔！ 今彼女は日夜に栄の銜ひ、利の誘ふ間に立ち、守るに難き節を全うして、世の容れざる愛に随つて奔らんと為るか。

爾思^{しかおも}へる後の彼は、陰^{ひそか}にかの兩個^{ふたり}の先に疑^{うたが}ひし如^{ごと}き可^い忌^{まは}しき罪人^{ざいじん}ならで、潔く愛の為に奔^{はし}る者たらんを、縛^いるばかりに冀^{こひねが}へり。若^もしさもあらば、彼は具^{つづ}に彼等^{かたがた}の苦^{くる}き身の上と切^きなる志とを聴^きかんと念^{おも}ひぬ。

心永^{こころ}く瘠^{しず}きて恋に敗^{やぶ}れたる貫一^{くわんいち}は、殊^{こと}更^{さら}に他の成敗^{せいばい}に就^ついて観^みるを欲^ほせるなり。彼は己^{おのれ}の不幸^{ふこう}の幾^い許^{かばかり}不幸^{ふこう}に、人の幸^{さち}の幾^い許^{かばかり}幸^{さち}ならんかを想^{おも}ひて、又己^{おのれ}の失敗^{しぱい}の幾^い許^{かばかり}無残^{むざん}に、人の成効^{せいけう}の幾^い許^{かばかり}十分^{じふぶん}ならんかを想^{おも}ひて、又己^{おのれ}の契^{けい}の幾^い許^{かばかり}薄^{うす}く、人の縁^{えん}の幾^い許^{かばかり}深^{ふか}からんかを想^{おも}ひて、又己^{おのれ}の受^うけし愛^{あい}の幾^い許^{かばかり}浅^あく、人の交^かせ^なせる情^{なさけ}の幾^い許^{かばかり}篤^{あつ}からんかを想^{おも}ひて、又己^{おのれ}の恋^{こひ}の障^{さまたけ}碍^がの幾^い許^{かばかり}強^{つよ}く、人の容^{よう}れられぬ世^よの幾^い許^{かばかり}狭^{せま}からんかを想^{おも}ひて。嗟^あ呼^あ、既^{すで}に己^{おのれ}の恋^{こひ}は敗^{やぶ}れに破^{やぶ}れたり。知^しるべからざる人の恋^{こひ}の末^{つひ}終^はに如^{いか}何^{なん}ならんかを想^{おも}ひて。

昼間^{ひるま}の程^{ほど}は助^{つと}めて籠^{こも}りるしかの兩^{ふた}個^{たり}の、夜^よに入りて後^{うち}打^{うち}連^つれて入浴^{にゅうよく}せるを伺^{うかが}ひ知^しりし貫一^{くわんいち}は、例^{れい}の益^{ます}す人^{ひと}目^めを避^{さく}るならんよと念^{おも}へり。

還^きり来^きて多^{しば}時^{らく}酒^{さけ}など酌^{くみ}交^{かは}す様子^{ようす}なりしが、高^{たか}声^{こゑ}一つ立^たつるにもあらで、唯障子^{しょうじ}を照^てす燈^{ともし}のみいと瞭^{さやか}に、内^{うち}の寂^{さび}しさは露^{つゆ}をも置^おきけんやうにて、さてはかの吹^ふ絶^てえぬ松風^{しょうふう}に、彼等^{かたがた}は竟^{つひ}に醉^{ゑひ}を成^なさざるならんと思^{おも}ひ覺^さゆばかりなりき。

為^なす事^{こと}もあらねば、貫一^{くわんいち}は疾^とく臥^{ふしど}内^{うち}に入りけるが、僅^{わず}かに為^なれば直^{ちき}に、寤^さめて、そ

のままに睡ねむりは失るとともに、様々の事思ひゐたり。

夜の静なるを動かして、かの男女なんによの細語ひそめきは洩もれ来きぬ。甚だはなは玄微かすかなれば聞知るべくもあらねど、びび々として絶えず枕に打響うきては、なかなか大いなる声にも増して耳みみ煩わづらはしかり。

さなきだに寝難いねがたかりし貫一は、益す氣の澄み、心の洩さえ行くに任せて、又徒いたづらにとやかくと、彼等の身上みのおへを推測おしはかり推測おもひめくり思回らすの外はあらず。彼方あなたもその玄微かすかなる声に語り語

りて休やまざるは、思の丈たけの短夜たんやに余らんとするなるか。
乍たちまち有りて、逆ほとぼしれるやうにその声はつと高く揚れり。貫一は愕然がくぜんとして枕そばだを欹よこてつ。
女にはかは遽なきいだに泣なき出でせるなり。

その時男の声音こゐねは全く聞えずして、唯独ひとり女の縦ほしまに泣音なくねを洩もらすのみなる。寤ひめたる貫一は弥いが上やに寤ゆゑめて、自ら故ゆゑを知らざる胸とどろかを轟とどろせり。

少焉しばし泣きたりし女の声は漸やうやく鎮りて、又湿しめり勝がちにも語り初そめしが、一たび情じようの為に激せし声音は、自おのづから始はよりは高く響けり。されどなほその言ふところは聞知り難くて、男の聲は却かへりて前さきよりも仄ほのかなり。

貫一は咳しはぶきも遣らで耳を澄せり。

或は時に断ゆれども、又^{あるひ}続き、又^{あるひ}続きで、彼等の物語は蚕^{かひこ}の糸を吐きて倦^うまざらんやうに、限も知らず長く亘^{わた}りぬ。げにこの積る話を聞きも聞せもせんが為に、彼等はここに來つるにやあらん。されども、日は明日^{あす}も明後日^{あさつて}も有るを、甚だ忙^{はなはせはし}くも語るもの哉^{かな}。さばかり間遠^{まじほ}なりし逢瀬^{あふせ}なるか、言はでは裂けぬる胸の内か、かく有らでは慊^{あきた}らぬ恋中^{こひなか}か、なと思ふに就けて、彼はさすがに我身の今^{こんじやく}昔に感無き能はず、枕を引入れ、夜着^{よぎ}引被^{ひきかつ}ぎて、寐^{ねがへ}返りたり。

何時^{いつや}罷^やみしとも覚えで、彼等の寐物語は漸く絶えぬ。

貫一も遂に短き夢を結びて、常よりは蚤^{はや}かりけれど、目覚めしままに起出^{おきい}でし朝^{あさ}冷^{びえ}を、走り行きて推啓^{おしあ}けつる湯殿の内に、人は在らじと想ひし眼^{まなこ}を驚^{おどろ}して、かの男女^{なんによ}は浴^ゆしむたり。

貫一はたと閉^{とぎ}して急ぎ返りつ。

第四章

両箇^{ふたり}はやや熱かりしその日も垂籠^{たれこ}めて夕^{ゆふべ}に抵^{いた}りぬ。むづかしげに暮山^{ぼさん}を繞^{めぐ}りし雲は、果

して雨と成りて、冷々と密下るほどに、宵の燈火も影更けて、壁に映ふ物の形皆寂く、
 愁ひに起きて在るべき夜頃ならず。さては貫一も枕に就きたり。

ラムプを細めたる彼等の座敷も甚だ静に、宿の者さへ寐急ぎて後十一時は鳴りぬ。

凄き谷川の響に紛れつつ、小歇もせざる雨の音の中に、かの病懣れたるやうの柱時計
 は、息も絶氣に半夜を告げわたる時、両箇が闇の燈は乍ち明かに耀けるなり。

彼等は俱に起出でて火鉢の前に在り。

「膳を持つて来ないか」

「ええ」

女は么微なる声して答へけれど、打菱れて、なかなか立ちも遣らず。

「狭山さん、私は何だか貴方に言残した事が未だ有るやうな心持がして……」

「吁、もうかう成つちやお互に何も言はないが可い。言へばやつぱり未練が出る」

彼は熟と内向きて、目を閉ぢたり。

「貴方、その指環を私のと取替事して下さいね」

「さうか」

各その手に在るを抜きて、男は実印用のを女の指に、女はダイヤモンド入のを男の指に、

さは

しりてもなほ離れかねつつ、物は得言はでゐたり。

颯と鳴りて雨は一時繁く灑ぎ来れり。

「ああ、大相降つて来た」

「貴方は不断から雨が所好だつたから、きつとそれで……暇……乞に降つて来たんですよ」

「好い折だ。あの雨を肴に……お静、もう覚悟を為ろよ！」

「あ……あい。狭山さん、それぢや私も……覚……悟したわ」

「酒を持つて来な」

「あい」

お静も今は心を励して、宵の程詔へ置きし酒肴の床間に上げたるを持来て、両箇が中に膳を据れば、男は手早く燗して、その間に各服を更むる忙しさは、忽ち衣の擦り、帯の鳴る音高く絆※と乱れ合ひて、転た雨濃なる深夜を驚かせり。

「ええ、もう好かない！」

帯緊めながら女はその端を振りて身悶せるなり。

「どうしたのだ」

「なあにね、帯がこんなに結ばつて了つて」

「帯が結ばつた？」

「ああ！ あなた釈といて下さい、よう」

「何か吉いい事が有るのだ」

「私はもしも遣やり損そこなつて、耻はぢでも曝さらすやうな事が有つちやと、それが苦勞に成つて耐たまらなかつたんだから、これでもう可いわ」

「それは大丈夫だから安心するが可い。けれど、もしもだ、お静、そんな事はないとは念ふけれど、運悪く遅れたら、俺われはきつと後から往くから——どんなにしても往くから、恨まずに待つてゐてくれ。よ、可……可いか」

つと俯ふしたるお静は、男の膝を咬かみて泣きぬ。

「その代り、偶ひよつとしてお前が後になるやうだつたら、俺は死んでも……魂たましひはおまへの陰身かげみを離れないから、必ず心こころ變がを……す、するなよ、お静」

「そんな事を言はないで、一処に……連れて……往つて……下さいよ」

「一処に往くとも！」

「一処に！ 一処に往きますよ！」

「さあ、それぢやこ、この世の……別に一盃いっぱい飲いむのだ。もう泣くな、お静」

「泣、泣かない」

「さあ、那裏あそこへ行つて飲まう」

男は先づ起ちて、女の手を把とれば、女はその手に縋すがりつつ、泣く泣く火鉢そばの傍に座を移しても、なほ離はなれ難がたに寄添よきひるたり。

「猪口ちよくでなしに、その湯吞ゆのみに為やう」

「さう。ぢや半分づつ」

熱爛あつがんの酒は烈々れつれつと薰くんじて、お静が顫ふるふ手元より狭山が顫ふるふ湯吞に注ながれぬ。

女の最も悲かりしは、げにこの刹那せつなの思なり。彼は人の為に酒を佐たすくるに嫺ならひし手も、などや今宵の恋の命も、儚はかなき夢か、うたかたの水みづ盃さかづきのみづからに、酌取たくらんとは想の外なりしを、唄うたにも似たる身の上哉かなと、漫そぞろに逼る胸の内、何に譬たとへん方かたもあらず。

男は嫺ひさしの過ぎたるに口を着けかねて、少時しばし手にせるままに眺めれば、よし今は憂くも苦くも、久く住慣れしこの世を去りて、永く返らざらんとする身には、僅わずかに一いっ盃ぱいの酒に對するも、又哀別離苦あいべつりくの感無き能はざるなり。

念おもへ、彼等の逢初めあひそし夕ゆふべ、互に意有いこうりて銜ふくみしもこの酒ならずや。更に兩個ふたりの影に伴たのしみひて、人の情なさけの必こまず濃やかなれば、必かうず芳ばしかりしもこの酒ならずや。その恋中の樂たのしみを添そへて、三み

とせうさ　歳とせうさの憂うれを霽はらせしもこの酒さけならずや。彼はその酒を取りて、吉よき事積たりし後の凶きつなる今夜まつこの末期まつこに酬むくゆるの、可哀あはれに余あり、可かな悲しきに過すくるを觀みじては、口くちにこそ言いはざりけれど、玉成たます涙なみだは点々ほろほろと散ちりて零こぼれぬ。

「おまへの酌しやくで飲のむのも……今夜こんやきりだ」

「狭山さやまさん、私はこんなに苦勞くろうを為なして置おきながら、到頭とうとう一日いちにちでも……貴方あなたと一處いっしょに成なれず

に、芸者げいしや風情ふうせいで死しんで了しまふのが……悔くやしい、私わたしは！」

聞きくも苦くしと、男おとこは一息ひとやすみに湯吞なつかばの半あふを呷ありて、

「さあ、お静しずか」

女おんなは何氣なにか無なく受うけながら、思おもへば、別わかの盃さかずきかと、手てに取とるからに胸潰むねつぶれて、

「狭山さやまさん、私は今更いまさらお礼れいを言いふと云いふのも、異いな者ものだけれど、貴方あなたは長い月日げつじつの間、私わたしのやうなこんな不束者ふつかものの我儘わがまま者を、能あくも愛相あいそを尽つくかさずに、深切しんせつに、世話せわをして下くだすつた。

私わたしは今まで口くちには出でさなかつたけれど、心こころの内うちぢや、狭山さやまさん、嬉うれいなんぞと謂いふのは通とおり越こして、実じつに難あたいと思おもつてゐました。その御礼ごれいを為なしたいにも、知しつてゐる通とおの阿母おつかさんが在あるばかりに唯たださう思おもふばかりで、どうと云いふ事ことも出で来きず、本當ほんとうに可恥はづかしいほど

行届かないだらけで、これぢや余り済まないから、一日も早く所帯でも持つやうに成つて、さうしたら一度にこの恩返しを為ませうと、私は、そればかりを樂に、出来ない辛抱も為てゐただけれど、もう、今と成つちや何もかも水……水……水の……泡。

つい心易立から、浸々お礼も言はずにゐたけれど、狭山さん、私の心は、さうだ

つたの。もうこれぎりで、貴方も……私も……土に成つて了へば、又とお目には掛れ、ないんだから、せめては、今改めて、狭山さん、私はお礼を申します」

男は身をも搾らるるばかりに怵へかねたる涙を出せり。

「もうそ、そ、そんな事……言つて……くれるな！ 冥路の障だ。両箇が一処に死なれり

や、それで不足は無いとして、外の事なんぞは念はずに、お静、お互に喜んで死なうよ」

「私は喜んでゐますとも、嬉しいんですとも。嬉しくなくてどうしませう。このお酒も、祝つて私は飲みます」

涙諸共飲干して、

「あなた、一つお酌して下さいな」

注げば又呷りて、その余せるを男に差せば、受けて納めて、手を把りて、顔見合せて、抱緊めて、惜めばいよいよ尽せぬ名残を、いかにせばやと思惑へる互の心は、唯それ

なりに息も絶えよと祈る可かめり。

男は抱ける女の耳のあたかも唇に触る時、現ともなく声誘はれて、

「お静、覚悟は可いか」

「可いわ、狭山さん」

「可けりや……」

「不如もう早く」

狭山は直に枕の下なる袱紗包の紙入を取上げて、内より出せる一包の粉剤こそ、正に兩個が絶命の刃に易ふる者なりけれ。

女は二つの茶碗を置並ぶれば、玉の如き真白の粉末は封を披きて、男の手よりその内に頒たれぬ。

「さあ、その酒を取つてくれ。お前のは俺が酌をするから、俺のにはお前が」

「ああ可うござんす」

雨はこの時漸く霽れて、軒の玉水絶々に、怪禽鳴過る者両三声にして、跡松風の音颯々たり。

狭山はやがて銚子を取りて、一箇の茶碗に酒を澆げば、お静は目を閉ぢ、合掌して、

聞えぬほどの忍しの音びねに、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

代りて酌する彼の想は、吾手男わがての胸元むなもとに刺違さしちがふる銚きつさきを押当おしあてつるにも似たる苦しさおのづに、
自おのづから洩出もれいづる声も打震うひて、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無……阿弥陀……南無阿弥……陀……仏、南無……」

と兩個ふたりは心も消入ふらんとする時、俄にはかに屋鳴震動やなりしんどうして、百雷一処ひゃくらいいつしよに墮おちたる響おに、男は顛たふれ、女は叫こびて、前後不覚ぜんごふかくの夢か現の人影うつつは、乍たちまち顛あられて燈火ともしびの前に在り。

「貴方あなた方は、怪からん事を！ 可かけませんぞ」

男は漸あく我かへに復おりて、惧おどろぢ愕おどろける目を瞪みひらき、

「ああ！ 貴方あなたは」

「お見覚みおぼえありませう、あれに居る泊客とまりきやくです。無断にお座敷へ入つて参りまして、甚はなはだ失礼しやうぜんぢや御座いますけれど、実に危い所！ 貴下方はどうなすつたのですか」

悄然しやうぜんとして面おもてを挙げざる男、その陰に半ば身を潜めたる女、貫一ふたりは兩個ふたりの姿みまはを、し
つつ、彼の答を待てり。

「勿論もちろんこれには深い事情がお有んなさるのでせう。ですから込入こみいつたお話は承うけたまはらんで

も宜い、但何故に貴下方は生きてをられんですか、それだけお聞せ下さい」

「……………」

「お二人が添ふに添れん、と云ふやうな事なのですか」

男は甚だ微に頷きつ。
はなはかすかうなづ

「さやうですか。さうしてその添れんと云ふのは、何故に添れんのです」
なにゆゑ

彼は又黙せり。

「その次第を伺つて、私の力で及ぶ事でありましたら、随分御相談合手にも成らうかと、
あひて

実は考へるので。然し、お話の上で到底私如きの力には及ばず、成程生きてをられんのは

御尤だ、他人の私でさへ外に道は無い、と考へられるやうなそれが事情でありました
ごもつとも わたし

ら、私は決してお止め申さん。ここに居て、立派に死なれるのを拝見もすれば、介錯
とどめ かいしやく

もして上げます。

私もこの間に入つた以上は、空く手を退く訳には行かんです。貴下方を拯ふ事が出来
わたくし むなし

るか、出来んか、那一箇です。幸に拯ふ事が出来たら、私は命の親。又出来なかつたら、
どつちか さいはひすく

貴下方はこの世に亡い人。この世に亡い人なら、如何なる秘密をここで打明けたところが、
な いかに

一向差支無からうと私は思ふ。若し命の親とすればです、猶更その者に裏み隠す事は無
さしつかへな も なおさら

いぢやありませんか。私は何も洒落しやれに貴下方のお話を聴かうと云ふのぢやありません、可うございますか、顯然ちやんと聴くだけの覺悟を持つて聴くのです。さあ、お話し下さい！」

第五章

貫一は氣を嚴肅おごそかにして逼せまれるなり。さては男も是非無げに声出いだすべき力も有らぬ口を開きて、

「はい御深切に……難有ありがたう存じます……」

「さあ、お話し下さい」

「はい」

「今更お裏つみなさる必要は無からう、と私は思ふ。いや、つい私は申し上げてをつたが、東京の麴こうじまち町の者で、間貫一はざまと申して、弁護士です。かう云ふ場合にお目に掛るのは、好々よくよくこれは深い御縁なのであらうと考へるのですから、決して貴下方の不為ふために成るやうには取計ひません。私も出来る事なら、人間兩個ふたりの命を拯すくふのですから、どうにでもお助け申して、一生の手柄に為て見たい。私はこれ程までに申すのです」

「はい、段々御深切に、難有う存じます」

「それぢや、お話し下さるか」

「はい、お聴に入れますで御座います」

「それは忝かたじけない」

彼は始めて心安う座を取れば、恐る惶おそる狭山は先づその姿を偷ぬすみ見て、

「何からお話し申して宜よろいやら……」

「いや、その、何ですな、貴下方は添おつふに添しやれんから死ぬと有おつ仰しやる——！ 何なぜ為添なれんのですか」

「はい、実は私は、恥を申しませんければ解りませんが、主人の金を大分遣つかひ込みましたので御座います」

「はあ、御主人持もちですか」

「さやうで御座います。私は南伝馬町みなみてんまちようの幸菱こうびしと申します紙問屋の支配人を致してをりまして、狭山元輔さやまもとすけと申します。又これは新橋に勤を致してをります者で、柏屋かしわやの愛子と申しまする」

名宣なのられし女は、消えも遣やらでゐたりし人陰くらの闇くらきより僅わずかに蹣にじり出でて、面伏おもぶせにも貫

一が前に会釈しつ。

「はあ、成程」

「然るところ、昨今これに身請みうけの客が附きまして」

「ああ、身請の？ 成程」

「否でもその方へ参らんければ成りませんやうな次第。又私はその引負ひきおひの為に、主人から告訴致いたしされまして、活いきてをりますれば、その筋の手に掛りますので、如何にとも致いたし方かたが御座いませぬゆゑ、無分別とは知りつつも、つい突迫つきつめまして、面目次第も御座いませぬ」

彼等はその無分別を慙はぢたりとよりは、この死しにぞこな失なひし見苦しさを、天にも地にも曝さらしかねて、俯ふしも仰うぎも得うざる項うなじを疎すくめ、尚なほも為なん方無さの目を閉ぢたり。

「ははあ。さうするとここに金さへ有れば、どうにか成るのでせう！ 貴方の費つかひ消こだつて、その金額を弁償して、宜よろしく御主人に詫わびたら、無論内済に成る事です。婦人の方は、先方で請出すと云ふのなら、此方こつちでも請出すまでの事。さうして、貴方の引負ひきおひは若干いくちばかりの額たかに成るのですか」

「三千円ほど」

「三千円。それから身請の金は？」

狭山は女を顧みて、二言三言ふたことみこと小声に語合かたひたりしが、

「何やかやで八百円ぐらゐは要いりますので」

「三千八百円、それだけ有つたら、貴下方は死なずに済むのですな」

打算きたし来れば、真に彼等の命こそ、一人前一千九百円に過ぎざるなれ。

「それぢや死ぬのはつまらんですよ！ 三千や四千の金なら、随分そこらに滾ころつてゐやうと私は思ふ。就いては何とか御心配して上げたいと考へるのですが、先づとにかく貴下方の身の上を一番悉くお話し下さらんか」

かかる際きはには如何ばかり嬉ことばき人の言ならんよ。彼はその偽いつはりと真まことを思ふに違いあらずして、遣る方も無うきき憂身うきみの憂こひねがはきを、冀ことばくば跡も留めず語りて竭つくさんと、弱りし心は雨の柳の、漸く風に揺れたる勇いさみを作なして、

「はい、ついに一面識も御座こといません私共、殊に痴情の果に箇かよう様な不始末ぶしまつを為しだしました、何なにともはや申しやうも無い爛死蛇やくざものに、段々と御深切のお心遣こころづかひ、却つて恥入はりまして、実に面目次第も御座いません。

折角の御言おことばで御座いますから、思召おぼしめしに甘えまして、一通りお話致しますで御座います

が、何から何まで皆恥で、人様の前ではほとほと申上げ兼ねますので御座います。

実は、只今申上げました三千円のつかひこみ費消と申しますのは、究竟遊蕩を致しました為に、店の金に手を着けましたところ、始の内はどうなり融通も利ききましたので、それが病付やみつに成つて、段々と無理を致しまして、長い間にうかうか々穴を開けましたのが、積り積つて大だいぶ分に成りましたので御座います。

然しかるところ、もう八方塞ふさがつて遣やり繰くりは付きませず、いよいよ主人には知れますので、苦く紛るれに相場に手を出したのが怪我けがの元で、ちよろりと取られますと、さあそれだけ穴

が大きく成りましたものですから、愈いよいよ為方御座いませぬ、今度はどうかで、もうさう成つては私も死物狂しにもものぐるひで、無理の中から無理を致して、続くだけ遣りましたところが、到頭逐おひたふ倒されて了ひまして、三千円と申上げました費消つかひこみも、半分以上はそれに注込みましたので御座います。

然し、これだけの事で御座いますれば、主人も従来これまでの勤勞つとめに免じて、又どうにも勘弁は致してくれましたので御座います。現にこの一条が発覚致しまして、主人の前に呼付けられました節も、この度の事は格別を以つて赦し難ゆるいところも赦して遣ると、箇様に申しはくれましたので」

「成程」

「と申すのには、少し又仔細しさいが御座いますので。それは、主人の家内の姪めひに当ります者が、内に引取つて御座いまして、これを私に妻めあはせやうと云ふ意衷つもりで、前々ぜんぜんからその話は有りましたので御座いますが、どうも私は気が向きませんもので、何と就かずに段々言延いひのほして御座いましたのを、決然いよいよどうかと云ふ手詰てづめの談に相成あひなりましたので。究竟つまり、費消つかひこみは赦して遣るから、その者を家内に持て、と箇様に主人は申すので御座います」

「大きに」

「其処そこには又千百事情いろいろが御座いまして、私の身に致しますと、その縁談は実に辞ことわるにも辞りかねる義理に成つてをりますので、それを不承知などと吾儘わがままを申しては、なかなか済む訳の者ではないので御座います」

「ああ、さうなのですか」

「そこへ持つて参つて、此度こんどの不都合で御座います、それさへ大目に見てくれやうと云ふので御座いますから、全で仇まるをば恩で返してくれまますやうな、申分まをしぶんの無い主人の所はから計ひ。それを乖もどきましては、私は罰ばちが中あたりますので御座います。さうとは存じながら、やっぱり私の手前勝手で、如何いかにともその氣に成れまませんので、已むやを得ず縁談の事は拒ことわ

絶^りを申しましたので御座います」

「うむ、成程」

「それが為に主人は非常な立腹で、さう吾^{わがまま}儘を言ふのなら、費^{つかひ}消^{こみ}を償^まへ、それが出来ずば告訴する。さうしては貴様の体に一生の疵^{きず}が附く事だから、思^{おもひ}反^{かへ}して主人の指^さ図^{しず}に従へと、中に人まで入れて、未^まだ未^まだ申してくれましたのを、何処^{どこ}までも私は剛情を張通して了つたので御座います」

「吁^{あゝ}！ それは貴方が悪いな」

「はい、もう私の善いところは一つでも有るのぢや御座いません。その事に就きまして、主人に書^{かき}置^{おき}も致しましたやうな次第で、既に覺悟を極^{きは}めました際^{きは}まで、心懸^{こころがかり}と申すのは、唯そればかりなので御座いました。」

で又その最中にこれの方の身請騷^{みうけさわぎ}が起りましたので」

「成程！」

「これの母親と申すのは養母で御座いまして、私も毎々話を聞いてをりますが、随分それは非道な強慾な者で御座います。まあ悉^{くは}く申上げれば、長いお話も御座いますが、これも娘と申すのは名のみで、年季で置いた抱^{かか}も同様の取^{とり}扱^{あつかひ}を致して、為て遣る事は為ない

のが徳、稼かせげるだけ稼がせないのは損だと云つたやうな了りようけん簡で、長い間無理な勤を為させまして、散々に搾しぼり取つたので御座います。

で、私の有る事も知つてはをりましたが、近頃私が追々廻らなく成つて参つたところから、さあ聒やかましく言出しまして、毎日のやうに切れる切れるで責め抜いてをります際に、今の身請の客が附いたので御座います。丁度去年の正月頃から来出した客で、下谷したやに富山銀行といふのが御座います、あれの取締役で」

「え!! 何……何……何ですか!」

「御承知で御座いますか、あの富山唯継ただつぐと云ふ……」

「富山? 唯継!」

その面色、その声音こゐね! 彼は言下ごんかに鼓怒こどして、その名に躍り被からんとする勢いきほひを示せば、愛子は駭おどろき、狭山は懼おそれて、何事とも知らず狼狽うろたへたり。貫一は轟く胸を推鎮おししづめても、なほ眼色まなざしの燃ゆるが如きを、両個ふたりが顔に忙せはしく注ぎて、

「その富山唯継が身請の客ですか」

「はい、さやうで御座いますが、貴方は御存じであらつしやいますので?」

「知つてゐます! 好く……知つてゐます!」

狭山の打惑ふ傍に、女は密に驚く声を放てり。

「那奴が身請の？」

問はるる愛子は、会釈して、

「はい、さやうなんで御座います」

「で、貴方は彼に退かされるのを嫌つたのですな」

「はい」

「さうすると、去年の始から貴方はあれの世話に成つてをつたのですか」

「私はある人の世話なんぞには成りは致しません！」

「はあ？ さうですか。世話に成つてゐたのぢやないのですか」

「いいえ、貴方。唯お座敷で始終呼れますばかりで」

「ああ、さうですか！ それぢや旦那に取つてをつたと云ふ訳ぢやないのですか」

女は聞くも穢しと、さすが謂ふには謂れぬ尻目遣して、

「私には、さう云ふ事が出来ませんので、今までついにお客なんぞを取つた事は、

まるつき
全

然無いで御座います」

「ああ、さうですか！ うむ、成程……成程な……解りました、好く解りました」

狭山は俯きゐたり。

「それではかう云ふのですな、貴方は勤を為てを つとめ つても、外の客には出ずに、この人一個を守つて——さうですね」

「さやうです」

「さうして、余所の身請を辞つて——富山唯継を振つたのだ！ さうですな」

「はい」

倏忽に瞳を凝せる貫一は、愛子の面を熟視して止まざりしが、やがてその眼の中に浮びて、輝くと見れば霑ひて出づるものあり。

「嗚呼……感心しました！ 実に立派な者です！ 貴方は命を捨てても……この人と……添ひたいのですか！」

何の故とも分かず彼の男泣に泣くを見て、兩個は空く呆るのみ。

貫一が涙なるか。彼はこの色を売るの一匹婦も、知らず誰か爾に教へて、死に抵るまで尚この頼り難き義に頼り、守り難き節を守りて、終に奪はれざる者あるに泣けるなり。其の泣く所以なるか。彼はこの人の世に、さばかり清く新くも、崇く優くも、高く麗くも、又は、完くも大いなる者在るを信ぜざらんと為るばかりに、一度は目前睹るを得て、

その倒懸の苦を寛ゆるうせん、と心こころくが如く望みたりしを、今却りて浮萍うきくさの底に沈める泥中の光に値あへる卒爾そつじの歎よろこび極きはまれればなり。

「勿論さう無けりや成らん事！ それが女の道と謂ふもので、さう有るべき事です、さう有るべき事です。今日こんにちのこの輕薄極きはまつた世の中に、とてもそんな心掛のある人間は、私は決して在るものではないと念つてをつた。で、もし在つたらば、どのくらゐ嬉からうと、さう念つてをつたのです。私は実に嬉しい！ 今夜のやうに感じた事は有りません。私はこの通泣いてゐる——涙が出るほど嬉しいのです。私は人事ひとこととは思はん、人事とは思はん訳が有るので、別して深く感じたのです」

かく言ひて、貫一は忙いそがし々はなうちかく鼻洩打みづみつ。

「ふむ、それで富山はどうしました」

「来る度たびに何のかのと申しますのを、体好く辞ていよるんで御座いますけれど、もううるさく来ちや、ひとつきり

一頻あげづめなんぞは毎日揚詰あげづめに為れるんで、私はふつつつ不い好やなんで御座います。それに、あの人があれで大の男自慢で、さうして独ひとりで利巧ぶつて、可おつそろし恐おそい意気がりで、二言目ふたことめには金々と、金の事さへ言へば人は難有ありがたがるものかと思つて、俺おもがかうと思や千円出すと

か、ここへ一万円積んだらどうするとか、始終そんな有余るやうな事ばかり言ふのが癖だ
 もんですから、衆が『御威光』と云ふ仇名あだなを附けて了つて、何処へ行つたつて氣障きざがられ
 てゐる事は、そりや太甚ひどいんで御座います」

「ああ、さうですか」

「そんな風なんですから、体好く辞つたくらゐぢや、なかなか感じは為ませんので、可いけ
 もしない事を不相変執あひかはらずしつとど煩どく、何だかと言つてをりましたけれど、這箇こつちも剛情で思ふや
 うに行かないもんですから、了局しまひには手を易かへて、内のお袋へ親談ぢかだんをして、内々話を出
 来たんで御座んせう。どうもそんなやうな様子で、お袋は全で氣違のやうに成つて、さあ、
 私を責めて責めて、もう箸はしの上下あげおろしには言れますし、狭山と切れる切れるの聒やかましく成りました
 のも、それからなので、私は辛つらさは辛つらし、熟つくづくこんな家業は為る者ぢやないと、何も解なんにら
 ずに面白可笑おもしろをかしく暮してゐた夢も全く覺めて、考へれば考へるほど、自分の身が余あんまりつま
 らなくて、もうどうしたら可いいんだらう、と鬱ふさぎ切つてゐる矢先へ、今度は身請と来たん
 で御座います」

「うむ、身請——けれども、貴方を別にどう為たと云ふ事も無くて、直すぐに身請と云ふので
 すか」

「さうなので」

「変な奴な！ さう云ふ身請の為方しかたが、然し、有りますか」

「まあ御座いませんです」

「さうでせう。それで、身請をして他ほかへ廻かこつて置かうとでも云ふのですか」

「はい、これまで色々な事を申しても、私が聴きませんもんで、未始終氣樂に暮せるやうにして遣つたら、言分は無からうと云つたやうな訳で、まあ身請と出て来たんで。何ですか、今の妻君は、あれはどうだから、かう為るとか、ああ為るとか、好いやうな嬉うれがらせを言つちやをりましたけれど」

眉まゆを昂あげたる貫一、なぞ彼の心の裏うちに震ふものあらざらんや。

「妻君に就いてどう云ふ話が有るのですか」

「何んですか知りませんが、あの人の言ふんでは、その妻君は、始終寐てゐるも同様の病人で、小供は無し、用には立たず、有つても無いも同然だから、その内に隠居でもさせて、私を内へ入れてやるからと、まあさう云つたやうな口くちぶり氣きなんで御座います」

「さうして、それは事実なのですか、妻君を隠居させるなどと云ふのは」

「随分ちやらつぽあてこを言ふ人なんですから、なかなか信あてにはなりは致しませんが、妻君の

病身の事や、そんなこんなで余り内の面白くないのは、どうも全くさうらしいんで御座んす」

「ははあ」

彼は遽にはかに何をや打案ずらん、夢むる如き目を放ちて、

「折合が悪いですか！……病身ですか！……隠居をさせるのですか！……ああ……さうですか！」

宮の悔、宮の恨、宮の歎なげき、宮の悲、宮の苦くるしみ、宮の愁うれひ、宮が心の疾やまひ、宮が身的不幸、噫ああ、竟つひにこれ宮が一生の惨禍！ 彼の思は今將たこの憐あはれむに堪へたる宮が薄命の影を追ひて移るなりき。

貫一はかの生ける宮よりも、この死なんと為る女の幾いかばかり許幸かへにかつ愚ならざるかを思ひて、又躬みづからの、先には己の愛する者を拯すくふ能はずして、今却りて得知らぬ他人に恵みて余有る身の、幾許幸無くも又愚なるかを思ひて、謂ふばかり無く悲めるなり。

時に愛子は話を継ぎぬ。貫一は再び耳を傾けつ。

「そんな捫もんちやく憚はな最中に、狭山さんの方が騷擾さわぎに成りましたんで、私の事はまあどうでも、ここに三千円と云ふお金が無い日には、訴へられて懲役に遣られると云ふんですから、私

は吃驚して了つて、唯もう途方に昧れて、これは一処に死ぬより外は無いと、その時直にさう念つたんで御座います。けれども、又考へて、背に腹は替へられないから、これはいつそ不如富山に訳を話して、それだけのお金をどうにでも借りるやうに為やうかとも思つて見まして、狭山さんに話しましたところ、俺の身はどうでも、お前の了簡ぢや、富山の処へ行くのが可いか、死ぬのが可いか、とかう申すので御座いませう」

「うむ、大きに」

「私はあんな奴に自由に為れるのはさて置いて、これまでの縁を切るくらゐなら死んだ方が愈ましだと、初中終言つてをりますんですから、あんな奴に身を委まかせるの、不い好は知れてゐます」

「うむ、さうとも」

「さうなんですけれど金ゆゑで両個ふたりが今死ぬのも余り悔いから、三千円きつと出すか、出さないか、それは分りませんけれど、もし出したらば出さして、なあと私は那裏あつちへ行つたつて、直に逃ちぎげて来さへすりや、切れると云ふんぢやなし、少すこの間不まい好な夢を見たと思へば、それでも死ぬよりは愈ましだらう、と私はさう申しますと、狭山さんは、それは詐取かたりだ……」

「それは詐欺だ！ さうとも」

あだかも我名の出でしままに、男はこれより替りて陳べぬ。

「詐欺で御座いますとも！ 情婦を種に詐欺を致すよりは、費消の方が罪は軽う

御座います。そんな悪事を働いてまでも生きてゐやうとは、私は決して思ひは致しません。又これに致しましても、あれまで振り通した客に、今と成つて金ゆゑ体を委せるとは、如何なる事にも、余り意気地が無さ過ぎて、それぢや人間の皮を被つてゐる効が御座りませんです。私は金に窮つて心中なんぞを為た、と人に嗤れましても、情婦の体を売つたお陰で、やうやう那奴等は助つてゐるのだ、と一生涯言れますのは不好で御座います。そんな了簡が出ます程なら、兩個の命ぐらゐ助ける方は外に幾多も御座いますので。

ここに生きてゐやうと云ふには、どうしてもこの上の悪事を為んければ成りませんので、とても死ぬより外は無い！ 私は死ぬと覚悟を為たが、お前の了簡はどうか、と実は私が申しましたので」

「成程。そこで貴方が？」

「私は今更富山なんぞにどうしやうと申したのも、究竟私ゆゑにそんな訳に成つた狭山さんが、どうにでも助けたいばかりなんで御座いますから、その人が死ぬと言ふのに、私一

箇残つてゐたつて、為様が有りは致しません。貴方が死ぬなら、私も死ぬ——それぢや一処にと約束を致して、ここへ参つたんで御座います」

「いや、善く解りました！」

貫一は宛然我が宮の情急に、誠壮に、凛たるその一念の言を、かの當時に聴くらん想して、独り自ら胸中の躍々として痛快に堪へざる者あるなり。

正にこれ、垠も知らぬ失恋の沙漠は、濛々たる眼前に、麗き一望のミレエジは清絶の光を放ちて、甚だ饒に、甚だ明かに浮びたりと謂はざらん哉。

彼は幾どこの女の宮ならざるをも忘れて、その七年の憂憤を、今夜の今にして始めて少頃も破除するの間を得つ。信に得難かりしこの間こそ、彼が宮を失ひし以来、唯これに易へて望みに望みたりし者ならずと為んや。

嗚呼麗きミレエジ！

貫一が久渴の心は激く動されぬ。彼は声さへやや震ひて、

「さう申しては失礼か知らんが、貴方の商売柄で、一箇の男を熟と守つて、さうしてその人の落目に成つたのも見棄てず、一方には、身請の客を振つてからに、後來花の咲かうといふ体を、男の為には少しも惜まずに死なうとは、実に天晴なもの！ 余り見事な貴

方のその心掛に感じ入つて、私は……涙が……出ました。

貴方は、どうか生涯その心掛を忘れずにゐて下さい！ その心掛は、貴方の宝ですよ。

又狭山さんの宝、則ち貴下方夫婦の宝なのです！

今後とも、貴方は狭山さんの為には何日でも死んで下さい。何日でも死ぬと云ふ覚悟は、始終きつと持つてゐて下さい。可う御座いますか。

千万人の中から唯一人見立てて、この人はと念つた以上は、勿論その人の為には命を捨てるくらゐの了簡が無けりや成らんのです。その覚悟が無いくらゐなら、始から念はん方が可いので、一旦念つたら骨が舍利に成らうとも、決して志を変へんと云ふのでなければ、色でも、恋でも、何でもないです！ で、若し好いた、惚れたと云ふのは上辺ばかりで、その実は移気な、水臭い者とも知らず、這箇は一心に成つて思窮めてゐる者を、いつか寝返を打れて、突放されるやうな目に遭つたと為たら、その棄てられた者の心の中は、どんなだと思ひますか」

彼の声音は益す震へり。

「さう云ふのが有ります！ 私は世間にはさう云ふの方が多いと考へる。そんな徒爾な色恋は、為た者の不仕合、棄てた者も、棄てられた者も、互に好い事は無いのです。私

は現にさう云ふのを睹てゐる！ 睹てゐるから今貴下方がかうして一処に死ぬまでも離れまいと云ふまでに思合つた、その満足はどれ程で、又そのお互の仕合は、実に謂ふに謂はれん程の者であらう、と私は思ふ。

それに就けても、貴方のその美しい心掛、立派な心掛、どうかその宝は一生肌身に附けて、どんな事が有らうとも、決して失はんやうに為て下さい！——可う御座いますか。さうして、貴下方はお二人とも末長く、です、毎も今夜のやうなこの心を持つて、睦く暮して下さい、私はそれが見たいのです！

今は死ぬところでない、死ぬには及びません、三千円や四千円の事なら、私がどうしても為て上げます」

聞きき乞をほりし両ふたり個が胸の中は、諸共もろともに潮うしほの如きものに襲はれぬ。

未だ服さざりし毒にはかの俄に變じて、この藥と成れる不思議は、喜ぶとよりは愕おどろかれ、愕く
とよりは打うちまど惑はれ、惑ふとよりは怪あやしまれて、鬼か、神か、人ならば、如何いかなる人かと、
彼等は覺えず貫一の面を見据ゑて、更にその目を窃ひそかに合せつ。

四あた辺も震ふばかりに八声やこゑの鷄とりは高く唱うたへり。

夜すがら両個の運星蔽おほひし常闇とこやみの雲も晴れんとすらん、隱約ほのぼのと隙洩すきもあける曙の影は、玉

の緒^を長く座に入りて、光薄るる燈^{とも}火^{しび}の下^{もと}に並べるままの茶碗の一箇^{ひとつ}に、小^ちき蛾^が有りて、
落ちて浮べり。

新統金色夜叉

第一章

生れてより神かみほとけ 仏ぶつを頼み候さふらふこと 事こととは一度も無御座候ごぎなくさふらへども、此度ばかりはつく
づく一心に祈念致し、吾わがいのち 命いのちを縮め候さふらふかはり 代しろに、必ず此文は御目おんめに触れ候やうにと、
それをば力に病中ながら筆取りまゐらせ候さいはひ。幸さいはひに此の一念通じ候て、ともかくも御おんひら 披か
せ被下候くだされさふらはば、此身は直ぐ相果て候とも、つゆ憾うらみには不存ぞんじまをさずさふらふ 申候ひとりあはれ。元より御おん
憎くしみつよ 悪わたくし 強なにとぞれき私わたしには候へども、何卒なにとぞれ是は前非を悔いて自害いたし候一箇ひとの愍あはれなる女の、御おん
前様まへさまを見懸みけての遺言ゆいごんとも思召おもほしめし、せめて一通り御判読ごはんどく 被下候くだされさふらはば、未
までの御情おんなさけと、何より嬉うれしう嬉うれしう存ぞんじあ 上げまゐらせ候。

扱^{さて}とや、先頃^{さき}に久々とも何とも、御生^{おんいきわかれ}別^{わか}とのみ朝夕^{あさゆふ}に諦^{あきら}め居^をり候^を御顔^{おんかほ}を拝^をし、
 飛立^とつばかりの御懷^{おんなつか}しさやら、言^{こと}ふに謂^いれぬ悲^{かな}しさやらに、先立^{さき}つものは涙^{なみだ}にて、十
 年越^とし思^{おも}ひに思^{おも}ひまゐらせ候事^{こと}何一つも口^{くち}には出^でず、あれまでには様々^{さまざま}の覺悟^{かくご}も致^{いた}し、ま
 た心^{こころ}苦^{くる}き御目^{おんめ}もじの恥^{はぢ}をも忍^{しの}び、女^をの身^みにてはやうやうの思^{おも}ひにて参^{まゐ}じ候^を効^{さふらふ}も無^なく、
 誠^{まこと}に一生^{いっしょう}の無念^{むねん}に存^{ぞん}じまゐらせ候^を。唯^{ただ}其^{その}折^{をり}の形見^{かたみ}には、涙^{なみだ}の隙^{ひま}に拝^をしまゐらせ候^を御
 姿^{すがた}のみ、今^{いま}に目^めに附^つき候^をて旦暮^{あけくれ}忘れ^{わす}れやらず、あらぬ人の顔^{おもて}までも御前^{おんまへ}様のやうに見
 え候^をて、此頃^{このとき}は心^{こころ}も空^{そら}に泣暮^{なみだ}し居^をりまゐらせ候^を。
 久^{ひさ}う御目^{おんめ}もじ致^{いた}さず候^を中^{なかに}に、別^{わか}の人のやうに総^{すべ}て御^{おん}変^{かは}り被^{なされ}成^な候^をも、私^{わたくし}には何^{なに}とや
 ら悲^{かな}く、又^{また}殊^{こと}に御顔^{おんかほ}の羸^{やつれ}、御血^{おんち}色の惡^{わる}さも一^{ひと}方^{かた}ならず被^{おほ}居^を候^をは、如^{いか}何^{なん}なる御^{おん}
 疾^{やまひ}に候^をや、御見^{おんみ}上^あげ申^{まう}すも心細^{こころこま}く存^{ぞん}ぜられ候^をへば、折角^{あけ}御養^{おんやう}生^{せい}被^{あそ}遊^ば、何^{なん}は措^おきても
 御身^{おんみ}は大切^{たいせつ}に御厭^{おんいと}ひ被^{なされ}成^な候^をやう、くれぐれも念^{ねん}じ上^あ候^を。それのみ心に懸^{さか}り候^を
 余^り、悲^{かな}き夢^{ゆめ}などをも見続^みけ候^をへば、一^{ひと}入^{しほ}御案^{おんあん}じ申^{まう}上^あまゐらせ候^を。
 私事^{わたくしごと}恥^{はぢ}を恥^{はぢ}とも思^{おも}はぬ者^{もの}との御さげすみを顧^{かへり}み、先頃^{さき}推^おして御許^{おんもと}まで参^{まゐ}じ候^を胸^{むね}の内^{うち}は、
 なかなか御目^{おんめ}もじの上^{うへ}の辞^{ことば}にも尽^がし難^{がた}くと存^{ぞん}候^をへば、まして廻^{まわ}らぬ筆^{ふで}には故^わと何^{なん}も記^{しる}
 し申^{まう}さず候^をまゐ、何卒^{なにとぞ}々々宜^{よろ}く御汲^{おんくみ}分^{わけ}被^{くだ}下^{した}度^{たび}候^を。さやうに候^をへば、其^{その}節^{せつ}の御^{おん}

腹立らだちも、罪ある身には元より覚悟の前とは申しながら、余あまりとや本意ほんい無き御別おんわかれに、い
 とど思まささは愈さり候ふて、歸きりて後は頭つむり痛いたみ、胸むね裂さるやうにて、夜の目めも合あはず、明る日
 よりは一層心地悪あしく相成あひなり、物を見れば唯ただ涙なみだこぼれ、何事なにとも無なきに胸塞むねふさり、ふとすれ
 ば思迫おもひつめたる氣に相成ひるす候きて、夜昼よひと無なく劇げく悩なみ候ほどに、四日目よっぴには最早ふらふら起いたき居くらり候
 事ことも大儀おほいづに相成ひるす、午過とこより蓐ふらふらに就いたき候くらまま、今日けふまで
 方なかたの事ことのみ思おもひつ続つづけ候さては、みづからの儂はかなき儂はかなき身みの上うへを慨なげき、胸むねは愈いよい痛いたみ、目めは
 見苦みぐるく腫起はれあがり候みて、今日けふは昨日きのふより瘦やせ衰おとろへ申まを候し。
 かやうに思迫おもひつめ候さ氣きにも相成あひなり候さ上うへに、日毎やみに闇やみの奥おくに引ひ入れられ候いやうに
 段々うたがひ心弱こころり候なへば、疑うたがひも無なく信心まことの誠まこと頭あたまれ候うて、此この蓐とこに就つき候うが元もとにて、はや永ながか
 らぬ吾身ごみとも存候ぞんじまま、何卒なにとぞこれまでの思出おもひでには、たとひ命いのちある内うちこそ如何いかやうの御おん
 恨みは受け候うとも、今はの際きはには御前おんまへ様の御膝おんひざの上うへにて心安いそひく息引取いきひきとり度たくと存候ぞんじ
 へども、それは慚かなはぬ罪深なき身みに候上うへは、もはや再び懷なつかし懷なつかし御顔おんかほも拝なし難がたく、猶なほ又前非
 の御ゆるしも無なくて、此儘このまま相果あきらて候事ことかと、諦あきらめ候うより外ほか無なく存ぞんじながら、とてもとて
 も諦あきらめかね候苦くるしさの程ほどは、此心このこころの外ほかに知しるものも、喩たとふるものも無な御座候ござ。是これのみ
 は御憎惡おんにくしみの中うちにも少すこし不惑ふびんと思召被下度おもほしめがたく、かやうに認したた居をり候さ内うちにも、涙なみだこぼれ

候て致方無く、覚えそそうず麁相あらさまいたし候て、かやうに紙を汚よごし申候。御容おんゆるし被下度くだされたくさふら候。
ふ

さ候へば私事わたくしこと如何いかに自ら作りし罪の報むくいとは申ながら、かくまで散々の責苦せめくを受け、かくまで十分に懺悔ざんげ致し、此上は唯死ぬるばかりの身の可哀あはれを、つゆほども御前様には通じ候はで、これぎり空く相成候が、余あまりに口惜くちをく存候故ぞんじさふらふゆゑ、一生に一度の神かみ仏ほとけにも縋すがり候て、此文には私一念を巻込め、御許おんもとに差出さしだしまゐらせ候。

返す返すも悔くやしき熱海の御別おんわかの後の思、又いつぞや田鶴たづみ見子爵の邸内にて図づらぬ御見致候おんみ而来このかたの胸の内、其後途中にて御変おんかはり被成候なされさふらふ荒尾あらを様に御目おんめに懸かりしおんものじみ御物語おんものがたり致候事など、先達せんだ而中だつて冗じゆううも冗うも差上さしあり申候。毎度ごぞんじの文にて細こまに申上候へども、一通の御披おんひらせも無これな之やうに仰せられ候へば、何事も御存無きかと、誠まことに御恨おんうらめう存上候おんうらめしあけさふらふ。百度千度繰返もまたびちたびくりかへし候ても、是非に御耳に入あちきなれまゐらせ度存候へども、今此の切なく思乱れ居候折をりさふらふをりから、又仮初かりそめにも此上に味気無あちきなき昔を偲おもひ候事は堪難たへがたく候故、ここには今の今心に浮うび候ままを書続つづけまゐらせ候。

何卒余所なにとぞよそながらも承うけたまはり度存上候は、長々御信おんたよりも無く居らせられ候御前様おんまへさま

これまでいかにおんすごあそばされさふらふの是迄如何に御過し被遊候や、さぞかし暴き憂世の波に一方ならぬ御艱難を遊し候事と、思ふも可恐きやうに存上候を、ようもようも御めでたう御障無う居らせられ、悲き中にも私の喜は是一つに御座候。

御前様の数々御苦勞被遊候間に、私とても始終人知らぬ憂思を重ね候て、

此世には苦みに生れ参り候やうに、唯儂き儂き月日を送りまゐらせ候。吾身ならぬ者

は、如何なる人も皆可羨く、朝夕の雀鴉、庭の本草に至る迄、それぞれに幸なら

ぬは無御座、世の光に遠き囹圄に繋れ候悪人にて、罪ゆり候日の樂は有

之候ものを、命有らん限は此の苦艱を脱れ候事愜はぬ身の悲しさは、如何に致

候はば宜きやら、御推量被下度候。申すも異な事に候へども、抑も始より我心に

は何とも思はぬ唯繼に候へば、夫婦の愛情と申候ものは、十年が間に唯の一度も起り申

さず、却つて憎き仇のやうなる思も致し、其傍に居り候も口惜く、情く疎み果て候へ

ば、三四年前よりは別居も同じ有様に暮し居候始末にて、私事一旦の身の身の流も漸く今は淨

く相成、益堅く心の操を守り居りまゐらせ候。先頃荒尾様より御譴も受け、さやうな

心得は、始には御前様に不実の上、今又唯繼に不貞なりと仰せられ候へども、其の始の不

実を唯今思知り候ほどの愚なる私が、何とて後の不貞やら何やら弁へ申すべきや。愚なる

者なればこそ人にも勾かど引され候て、歸りたき空さへ見えぬ海山の果に泣倒れ居り候を、
 誰たれ一箇ひとも慇あはみて救はんとは思召したれ被下候くだされさくらはずや。御前様にも其の愚なる者を何とも
 思召しおぼしめ被下候くだされさくらはずや。愚なる者の致せし過もあやまち、並々の人の過も、罪は同じものに御
 座候や、重きものに御座候や。

愚なる者の癖に人がましき事申上候やうにて、誠に御恥おんはづかしう存候ぞんじさくらへども、何とも
 何とも心得難く存上候は、御前様唯今の御身分に御座候ごごさくらふ。天地は倒に相成さかさま

候とも、御前様に限りてはと、今猶私は疑ひ居り候ほど驚入おどろきいりまゐらせ候。世に生業なりはひ

も数多く候に、優き優き御心根にもふさはしからぬ然やうの道に御入り被成候なされさくらふまでに、

世間は鬼々おにおにしく御前様を苦め申候まをしさくらふか。田鶴見様方にて御姿おんすがたを拝し候さくらふのち後

始て御噂承はり、私は幾日も幾日も泣暮し申候。これには定て深き仔細も御座候ははじめおんうはさうけたま

んと存候へども、玉と成り、瓦と成るも人の一生に候へば、何卒昔の御身に御立返り被おんたちかへ

遊そはされ、私の焦れ居りまゐらせ候やうに、多くの人にも御慕れ被遊候おんしたは御出世の

程をば、偏に偏に願上ひとへひとへまゐらせ候。世間には随分賢からぬ者の好き地位を得て、時め

かし居り候も少からぬを見るにつけ、何故御前様には然やうの善からぬ業わざを拵よりに拵りて、

折角の人に優れし御身を塵芥ちりあくたの中に御捨て被遊候や、残念に残念に存上ぞんじあげまゐら

せ候。

愚なる私の心得違さへ無御座候はば、始終御側にも居り候事とて、さやうのおもひたち御座候節に、屹度御諫め申候事も叶ひ候ものを、返らぬ愚痴ながら私の浅はかより、みづからの一生を誤り候のみか、大事の御身までも世の廃り物に致させ候かと思ひまゐらせ候へば、何と申候私の罪の程かと、今更御申訳の致しやうも無之、唯そら可恐しさに消えも入度く存まゐらせ候。御免し被下度、御免し被下度、御免し被下度候。

私は何故富山に縁付き申候や、其氣には相成申候や、又何故御前様の御辞には従ひ不申候や、唯今と相成候て考へ申候へば、覺めて悔き夢の中のやうにて、全く一時の迷とも可申、我身ながら訳解らず存じまゐらせ候。二つ有るものの善きを捨て、悪きを取り候て、好んで箇様の悲き身の上に相成候は、よくよく私に定り候運と、思出し候ては締め居り申候。

其節御前様の御腹立一層強く、私をば一打に御手に懸け被下候はば、なまじひに今の苦難は有之間敷、又さも無く候はば、いつそ御前様の手籠にいつれの山奥へも御連れ被下候はば、今頃は如何なる幸を得候事やらんなど、愚なる者はいつまでも愚に、

始終愚なる事のみ考^{かんがへ}居^をり申候。

嬉^{おんゆるし}くも御^{おんゆるし}赦^をを得、御心解けて、唯二人熱海に遊び、昔の浜辺に昔の月を眺^{なが}め、昔の

哀^{かなし}き御物語を致し候はば、其の心の内は如何に御座候やらん思ふさへ胸^{むねとどろ}轟^をき、書く手

も震^{ふる}ひ申候。今も彼^かの熱海に人は参り候へども、そのやうなる楽^{たのしみ}を持ち候ものは一人も有^こ

之^{れある}まじく、其^{そのかはり}代^はには又、私^{わたくしこと}如^{あはれ}き可憐^{あはれ}の跡を留め候て、其の一夜^{いちや}を今だに歎^{なげ}き居

り候ものも決して御座あるまじく候。

世をも身をも捨て居り候者にも、猶^{なほ}肌身放^{はな}さず大事に致候宝は御座候。それは御遺^{おんのこ}

置^{しおき}の三枚の御写真にて何見ても楽み候はぬ目にも、是^{これ}のみは絶えず眺め候て、少しは憂

さを忘れ居りまゐらせ候。いつも御写真に向ひ候へば、何くれと当時の事憶^{おもひだ}出し候中に、

うつつとも無く十年前^{ぜん}の心に返り候て、苦き胸も暫^{しばし}は涼く相成申候。最も所好^{すき}なるは御横

顔の半身のに候へども、あれのみ色褪^{いろさ}め、段々薄く相成候が、何より情無く存候へども、

長からぬ私の宝に致し候間は仔細も有るまじく、亡^なき後には棺の内に斂^{をさ}めもらひ候やう、

母^{それ}へは其^{それ}を遺言に致候覚悟に御座候。

ある女世に比^{たぐひな}無^にき錦を所持いたし候^{さふらふところ}処、夏の熱^{さかり}き盛^さとて、差^さ当^{あた}り用無く思ひ候

不覺より、人の望むままに貸与へ候後は、いかに申せども返さず、其内に秋過ぎ、冬^{ふゆきた}来

り候て、一枚の曠着^{はれぎ}さへ無き身貧に相成候ほどに、いよいよ先の錦の事を思ひに思ひ候へども、今は何処^{いづこ}の人手に渡り候とも知れず、日頃そのみ苦に病み、慨^{なげ}き暮し居り候折から、さる方にて計らず一人の美き女に逢ひ候処、彼の錦をば華^{はな}かに着飾り、先の持主とも知らず貧き女の前にて散々^{さんざん}ひけらかし候上に、恥まで与へ候を、彼^{かの}女は其身^{あやまり}の過と諦^{あきら}め候て、泣く泣く無念を忍び申候事に御座候が、其錦に深き思の繋^かり候ほど、これ見よがしに着たる女こそ、憎くも、悔くも、恨くも、謂はうやう無き心の内と察せられ申候。

先達^{せんだ}而は御許にて御親類のやうに仰せられ候御婦人に御目に掛りまゐらせ候。毎日のやうに御出で被成^{おんい なされさくらふ}候て、御前様の御世話^{おんせわ}万事被遊^{あそばされさくらふ}候御方^{おんかた}の由に候へば、後にて御前様さぞさぞ御大抵ならず御迷惑^{あそばされさくらふ}被遊^{おんこと}候御事と、山々御察^{おんさつ}し申上候へども、一向さやうに御内合^{おんうちあひ}とも存ぜず、不躰^{ぶしつけ}に参上いたし候段は幾重にも、御詫^{おんわ}申上まゐらせ候。

尚^{なほ}数々^{かずかず}申上度存候事は胸一杯にて、此胸の内には申上度事の外は何も無御座候へば、書くとも書くとも尽き申間敷^{まをすまじく}、殊に拙^{こつ}筆に候へば、よしなき事のみくだくだしく相成候ていくらか、大切の事をば書洩^{かきもら}し候が思^{おもひ}残^{のこり}に御座候。惜き惜き此筆止^{とど}めかね候へども、いつの限無く手に致し居り候事も叶^{かな}ひ難く、折から四時の明^{あけ}近^{ちか}

き油も尽き候て、手元暗く相成候ままはやはや恋こひしき御名おんわかれを認め候て、これまでの御別おんわかれと致しまゐらせ候。

唯ただいま今の此の氣分苦く、何とも難たへがた堪き様子にては、明日は今日よりも病重き事と存ぞんじ候。

明後日は猶重くも相成可申あひなりまをすべく、さやうには候へども、筆取る事相叶あひかなひ候間は、

臨終までの胸の内御許に通じまゐらせ度存候たぐぞんじさふらへば、覺束おぼつか無くも何なりとも相認あひした

め可申候まをすべくさふらふ。

私事むなし空く相成候とも、決して余よの病にては無これなく之、御前様御事おんまへさまおんことを思死おもひじにに死候しにさふらふ

ものと、何卒々々御おんあはれ愍み被下くだされ、其段そのだんはゆめゆめ詐いつはりにては無御座むごなく、みづから堅く信

じ居候事に御座候。

明日は御前様御誕生おんまへさまごたんじようび日に当り申候へば、わざと陰膳かげぜんを供へ候て、私事も共に御おんい

祝はひ可申上まをしあぐべくうれし、嬉うれしきやうにも悲おんむかきやうにも存候。猶くれぐれも朝夕の御自愛御大事に、

幾久べきげんよく御機嫌好おんむかう明日を御迎へ被遊あそばされ、ますます御繁榮に被為居候あらせられさふらふやう、今は世

の望も、身の願も、そのみに御座候。

まづはあらあらかしこ。

五月二十五日

こひし
恋き恋き

いきわかれ
生別の御方様

まゐる

おろかなる女
より

第二章

隣に養へる薔薇の香の烈く薫じて、颯と座に入る風の、この読尽されし長き文の上に落つると見れば、紙は冉冉と舞延びて貫一の身を縋り、猶も跳らんとするを、彼は徐に敷据ゑて、その膝に慵げなる面杖拄きたり。憎き女の文など見るも穢しと、前には皆焚棄てたりし貫一の、如何にしてこたびばかりは終に打拆きけん、彼はその手にせし始に、又は読去りし後に、自らその故を譲めて、自ら知らざるを愧づるなりき。

彼はやがて屈めし身を起ししが、又直ちに重きに堪へざらんやうの頭を支へて、机に倚れり。

緑濃かに生茂れる庭の木々の軽々なる燥氣と、近き辺に有りと有る花の薫とを打雑ぜたる夏の初の大氣は、太だ慢く動きて、その間に旁午する玄鳥の声朗に、幾度か返しては遂に往きける跡の垣穂の、さらぬだに燃ゆるばかりなる満開の石榴に四時過の西日の夥く輝けるを、彼は煩しと目を移して更に梧桐の涼き広葉を眺めたり。

文の主はかかれと祈るばかりに、命を捧げて神仏をも驚かししと書けるにあらずや。貫一は又、自ら何の故とも知らで、独りこれのみ披くべくもあらぬ者を披き見たるにあらずや。彼を絡へる文は猶解けで、巖に浪の瀉ぐが如く懸れり。

そのままに専と思入るのみなりし貫一も、漸く悩む覺えて身動ぐとともに、この文殻の埒無き様を見て、やや慌てたりげに左肩より垂れたるを取りて二つに引裂きつ。さてその一片を手繰らんと為るに、長きこと帯の如し。好き程に裂きては累ね、累ねれば、皆積みて一冊にも成りぬべし。

かかる間も彼は自と思に沈みて、その動す手も怠く、裂きては一々読むかとも目を凝しつつ。やや有りて裂了りし後は、あだかも劇き力作に勞れたらんやうに、弱々と身を支へて、長き頂を垂れたり。

されど久きに勝へずやありけん、卒に起たんとして、かの文殻の委きたるを取上げ、庭

の日陰に歩出^{あゆみ}でて、一步に一たび裂^ひき、二歩に二たび裂^ひき、木間に入りては裂^ひき、花壇を繞^{めぐ}りては裂^ひき、留^{とど}りては裂^ひき、行^いきては裂^ひき、裂^ひきて裂^ひきて寸^{すん}々に作^なしけるを、又引^ひ振^きりては歩^あみ、歩^あみては引振^ひりしが、はや行くも苦^{くる}く、後^{うしろ}様に唯^と有^ある冬^{ふゆ}青^{あお}の樹^きに寄^よ添^そへり。

折^いから縁^でに出来^いれる若^わき女^には、結^ゆ立^ひたての円^{まる}髻^{わけ}涼^{すず}しげに、襷^{たす}掛^{かけ}の惜^おくも見^みゆる真^ま白^{しろ}の濡^ぬ手^てを弾^はきつ^つ、座敷^{ざしき}を覗^{のぞ}き、庭^{にわ}を窺^{うかが}ひ、人見付^{ひとみづ}けたる会^あ釈^{しやく}の笑^{わら}をつと浮^うべて、

「旦那様^{だんなさま}、お風呂^{ふろ}呂^{りょ}が沸^わきました」

この姿^{すがた}好^{この}く、心^{こころ}信^{まめ}かなるお静^{しず}こそ、僅^{わずか}にも貫^{くわん}一^{いつ}がこの頃^{とき}を慰^{なぐさ}むる一の唯^{ただ}一の者^{もの}なりけれ。

(二) の二

浴^ゆすれば、下^{おり}立ちて垢^{あか}を流^{なが}し、出^でづるを待^{まち}ちて浴衣^{ゆかた}を着^きせ、鏡^{かがみ}を据^するまで、お静^{しず}は等^{なほ}閑^{かん}ならず手^て一つに扱^あひて、数^{かず}ならぬ女^{をんな}業^{わざ}の効^か無^なくも、身^みに称^{かな}はん程^{ほど}は貫^{くわん}一^{いつ}が為^{ため}にと、明暮^{めいぼ}を唯^{ただ}それのみに委^ゆぬるなり。されども、彼^{かれ}は別^{べつ}に奥^{おく}の一^{ひと}間^まに己^{おのれ}の助^{すけ}くべき狭^さ山^{やま}あるを

も忘るべからず。そは命にも、換ふる人なり。又されども、彼と我との命に換ふる大恩を
 この主にも負へるなり。あるじ 如かくのこと 此いづおろそかく孰れ疎ならぬ主と夫とを同時に有もて忙せはしきは、盆
 と正月との併あはせ来にけんやうなるべきをも、彼はなほ未だ覚めやらぬ夢の中にて、その夢
 心地には、如何いかなる事も難かたしと為るに足らずと思へるならん。寔まことに彼はさも思へらんやう
 に勇いさみ、喜び、誇り、樂める色あり。彼の面は為に謂いふばかり無く輝ける程に、常にも愈ま
 して妖艶あでやかに見えぬ。

暫しばし浴後ゆあがりを涼みゐる貫一の側に、お静は習そよそよ々と団扇うちはの風を送りあたりしが、縁えんばし
 柱しらに靠もたれて、物をも言はず勞つかれたる彼の氣色を左瞻右視とみかうみて、

「貴方あなた、大変にお顔色かほつきがお悪いぢや御座いませんか」

貫一はこの言ことばに力をも得たらんやうに、萎なえ頰くづれたる身を始ゆすて揺りつ。

「さうかね」

「あら、さうかねぢや御座いませんよ、どうあそばしたのです」

「別にどうも為はせんけれど、何だかかう氣が閉ぢて、惺然はつきりせんねえ」
 「惺然はつきりあそばせよ。麦酒ビールでも召上りませんか、ねえ、さうなさいまし」

「麦酒かい、余り飲みたいくもないね」

「貴方そんな事を有^{おつしや}仰らずに、まあ召上つて御覧なさいまし。折角^{わたくしひや}私が冷して置きましたのですから」

「それは狭山君が帰つて来て飲むのだらう」

「何で御座いますつて」

「いや、常談ぢやない、さうなのだらう」

「狭山は、貴方、麦酒^{ビール}なんぞを戴^{いた}ける今の身分ぢや御座いませんです」

「そんなに堅く為^せんでも可いさ、内の人ぢやないか。もつと氣樂に居てくれなくては困る」
お静^{ちよ}は些^なと涙^{なみだ}含^めみし目を拭^{ぬぐ}ひて、

「この上の氣樂が有つて耐^{たま}るものぢや御座いません」

「けれども有^{ある}物だから、所好^{すき}なら飲んでもらはう。お前さんも克^いくのだらう」

「はあ、私もお相手を致しますから、一盃^{いっぱい}召上りましよ。氷を取りに遣りまして——夏^な蜜柑^{みつかん}でも剥^むきませう——林檎^{りんご}も御座いますよ」

「お前さん飲まんか」

「私も戴^はきますとも」

「いや、お前さん独^{ひとり}で」

「貴方の前で私が独で戴くので御座いますか。さうして貴方は？」

「私は飲まん」

「ぢや見てゐらつしやるのですか。不好ですよ、馬鹿々々しい！ まあ何でも可いから、ともかくも一盃召上ると成さいますよ、ね。唯今直に持つて参りますから、其処にゐらつしやいますし」

気軽に走り行きしが、程無く老婢と共に齎せる品々を、見好げに献立して彼の前に陳ぶれば、さすがに他の老婆子が寂き給仕に義務的吃飯を強ひらるるの比にもあらず、やや難捨き心地もして、コップを取挙げれば、お静は慣れし手元に噴溢るるばかり酌して、

「さあ、呷とそれを召上れ」

貫一はその半を尽して、先づ息へり。林檎を剥きゐるお静は、手早く二一片ばかり刻ぎて、

「はい、お肴を」

「まあ、一盃上げやう」

「まあ、貴方——いいえ、可けませんよ。些とお顔に出るまで二三盃続けて召上れよ。さうすると幾らかお氣が霽れますから」

「そんなに飲んだら倒れて了ふ」

「お倒れなすたつて宜いぢや御座いませんか。本当に今日は不^い好な御顔色であらつしやるから、それがかう消えて了ふやうに、奮発して召上りましよ」

彼は覚え^{うすわらひ}ず薄笑して、

「葉だつてさうは利^きかんさ」

「どうあそばしたので御座います。何^{どこ}処ぞ御体がお悪いのなら、又無理に召上るのは可う御座いせんから」

「体は始終悪いのだから、今更驚きも為んが……ぢや、もう一盃飲まうか」

「へい、お酌。ああ、余^{あんま}りお見事ぢや御座いせんか」

「見事でも可^かんのかい」

「いいえ、お見事は結構なのですけれど、余^{あんま}り又——頂戴……ああ恐入ります」

「いや、考へて見ると、人間と云ふものは不思議な者だ。今まで不^み見不^し知^らの、実に何の縁も無いお前さん方が、かうして内に来て、狭山君はあ^{じつて}あして実^{じつて}体^みの人だし、お前さんは優^せく世話をしてくれる、私は決して他人のやうな心持は為^いんね。それは如何^{いか}なる事情が有つてかう成つたにも為よ、那^{あそこ}裏^あで逢はなければ、何^{どこ}処の誰^だかお互に分らずに了つた者が、

急に一処に成つて、貴方がどうかと、私がかうだとか、……や、不思議だ！　どうか、まあ渝かはらず一生かうしてお附つきあひ合あひを為なしたいと思ふ。けれども私は高利貸だ。世間から鬼か蛇じやのやうに謂いはれて、この上も無く擯ひん斥せきされてゐる高利貸だ。お前さん方もその高利貸の世話に成つてゐられるのは、余り榮みえでも無く、さぞ心苦く思つてゐられるだらう、と私は察してゐる。のみならず、人の生血しほを搾しぼつてまでも、非道な貨かねを殖こしちへるのが家業の高利貸が、縁ゆかりも所因たも無い者に、設たとひ幾らでも、それほど大事の金をおいそれと出して、又体みまで引取つて世話を為ると云ふには、何か可おそろし恐おそい下心でもあつて、それもやつぱり慾徳ず渾ず成くで恩を被きせるのだらうと、内心ぢやどんなにも無氣味に思つてゐられる事だらう、とそれ私も察してゐる。

さあ、コップを空あけて、返して下さい」

「召上りますの？」

「飲む」

酒気やは稍おもて彼の面のほに上れり。

「お静しづさんはどう思ふね」

「私共わたくしは固もとより命の無いところを、貴方のお蔭ばかりで助たすつてをりますので御座いますか

ら、私共の体は貴方の物も同然、御用に立ちます事なら、どんなにでも遊あそばしてお使い下さ
いまし。狭山もそんなに申してをります」

「忝かたじけない。然し、私は天引三割の三月縛みつしばりと云ふ躍利をどりを貸して、暴あらい稼かせぎを為てゐるのだから、何も人に恩などを被せて、それを種に錢かね儲まうけを為るやうな、廻り迂くどい事を為る必要は、まあ無いのだ。だから、どうぞ決してそんな懸念けねんは為て下さるな。又私の了簡では、元々些ほんの酔興で二人の世話を為るのだから、究竟つまりそちらの身さへ立つたら、それで私の念は届いたので、その念が届いたら、もう剩錢つりを貰もらはうとは思はんだ。と言つたらば、情無い事には、私の家業が家業だから、鬼が念仏でも言ふやうに、お前さん方は愈いよいよ怪く思ふかも知れん——いや、きつとさう思つてゐられるには違無い。残念なものだ！」

彼は長吁ちやううして、

「それも悪あく木の蔭に居るからだ！」

「貴方、決して私共がそんな事を夢にだつて思ひは致しません。けれども、そんなに有おつし仰やいますなら、何か私共の致しました事がお氣に障さはりましたので御座いませう。かう云なんにふ何も存じません粗才ぞんざいもの者の事で御座いますから」

「いいや、……」

「いいえ、私は始終言はれてをります狭山に濟みませんですから、どうぞ行届きませんところは」

「いいや、さう云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴だから、さう気に懸けてく
 れては甚だ困る」

「ついにそんな事を有仰つた事の無い貴方が、今日に限つて今のやうに有仰ると、日頃
 私共に御不足がお有なすつて」

「いや、悪かつた、私が悪かつた。なかなか不足どころか、お前さん方が陰陽無く実に
 善く氣を着けて、親身のやうに世話してくれるのを、私は何より嬉しく思つてゐる。往日話
 した通り、私は身寄も友達も無いと謂つて可いくらゐの独法師の体だから、氣分が悪く
 ても、誰一人藥を飲めと言つてくれる者は無し、何かに就けてそれは心細いのだ。さう云
 ふ私に、鬱いであるから酒でも飲めと、無理にも勧めてくれるその深切は、枯木に花が咲
 くやうな心持が、いえ、嘘でも何でも無い。さあ、嘘でない信に一献差すから、その積で
 受けてもらはう」

「はあ、是非戴かして下さいまし」

「ああ、もうこれには無い」

「無ければ嘘なので御座いませう」

「未だ半打の上有るから、あれを皆注いで了はう」

「可うございますね」

貫一が老婢を喚ぶ時、お静は逸早く起ち行けり。

(二) の三

話頭は酒を更むるとともに転じて、

「それはまあ考へて見れば、随分主人の面でも、友達の間でも、踏躡つて、取る事に於ては見界なしの高利貸が、如何に虫の居所が善かつたからと云つて、人の難儀——には附込まうとも——それを見かねる風ぢやないのが、何であんな格にも無い気前を見せたのかと、これは不審を立てられるのが当然だ。

けれども、ねえ、いづれその訳が解る日も有らうし、又私といふ者が、どう云ふ人間であるかと云ふ事も、今に必ず解らうと思ふ。それが解りさへしたら、この上人の十人や二十人、私の有金の有たけは、助けやうが、恵まうが、少も怪む事は無いのだ。かう云ふと

何か酷く偉がるやうで、聞^{ききづら}辛^{ひど}いか知らんけれど、これは心易^{こころやすだて}立^たに、全く奥底の無いところをお話するのだ。

いやさう考^{かんが}込まれては困る。陰氣に成つて可^よかんから、話はもう罷^{やめ}に為^せう。さうしてもつと飲^のみ給^{たま}へ、さあ」

「いいえ、どうぞお話をお聞^きせなすつて下さいまし」

「肴^{さかな}に成^なるやうな話なら可^よいがね」

「始終狭山ともさう申してをるので御座いますけれど、旦那様は御病身と云ふ程でも無いやうにお身受申しますのに、いつもかう御元氣^{ごげんき}が無くて、お陰^{むづかし}いお顔^{かほつき}面ばかりなすつてゐらつしやるのは、どう云ふものかしらんと、陰ながら御心配申してをるので御座います
が」

「これでお前さん方が来てくれて、内^{うち}が賑^{にぎや}かに成つただけ、私も旧^{もと}から見ると余程^{よつほど}元氣には成つたのだ」

「でもそれより御元氣がお有^あなさらなかつたら、まあどんなでせう」

「死んでゐるやうな者さ」

「どうあそばしたので御座いますね」

「やはり病氣さ」

「どう云ふ御病氣なので」

「鬱ぐふさぐのが病氣で困るよ」

「どう為てさうお鬱ぎあそばすので御座います」

貫一は自ら嘲りあざけて苦しげに晒わらへり。

「究竟病氣の所為せゐなのだね」

「ですからどう云ふ御病氣なのですよ」

「どうも鬱ぐのだ」

「解らないぢや御座いませんか！ 鬱ぐのが病氣だと有おつしや仰るから、どう為てお鬱ぎ遊あそすのですと申せば、病氣で鬱ぐのだつて、それぢや何処どこまで行つたつて、同じ事ぢや御座いませんか」

「うむ、さうだ」

「うむ、さうだぢやありません、緊しつかりなさいましょ」

「ああ、もう酔つて来た」

「あれ、未だお酔ひに成つては可けません。お横に成ると御寐おやすみに成るから、お起きなす

つてゐらつしやいまし。さあ、貴方」

お静は寄りて、彼の肘杖ひちづゑに横はれる背後うしろより扶起たすけおこせば、為せん無げに柱はしらに倚よりて、
女の方を見返りつつ、

「ここを富山唯繼ただつぐに見せて遣りたい！」

「ああ、舍よして下さいまし！ 名を聞いても慄然ぞつとするのですから」

「名を聞いても慄然ぞつとする？ さう、大きにさうだ。けれど、又考へて見れば、あれに罪が有る訳でも無いのだから、さして憎むにも当らんのだ」

「ええ、些ほんの太好いけすかないばかりです！」

「それぢや余ちがり差ちがはんぢやないか」

「あんな奴は那箇どつちだつて可いんです。第一活いきてゐるのが間違つてゐる位のもんです。

本当に世間には不い好やな奴ばかり多いのですけれど、貴方、どう云ふ者でせう。三千何百万とか、四千万とか、何でも太たいした人ひと数が居するのぢや御座ごいませんか、それならもう少し氣きの利きいた、肌合はだあひの好うれしい、嬉うれしい人に撞見でつくはしさうなものだと思ひますのに、一向お目に懸りませんが、ねえ」

「さう、さう、さう！」

「さうして富山みたやうなあんな奴がまあ紛々然と居て、番狂を為て行くのですから、それですから、一日だつて世の中が無事な日と云つちや有りは致しません。どうしたらあんなにも氣障に、太好かなく、厭味たらしく生れ付くのでせう」

「おうおう、富山唯繼散々だ」

「ああ。もうあんな奴の話をするのは馬鹿々々しいから、貴方、舍しませうよ」

「それぢやかう云ふ話がある」

「はあ」

「一体男と女とでは、だね、那箇が情合が深い者だらうか」

「あら、何為で御座います」

「まあ、何為でも、お前さんはどう思ふ」

「それは、貴方、女の方がどんなに情が」

「深いと云ふのかね」

「はあ」

「信にならんね」

「へえ、信にならない証拠でも御座いますか」

「成程、お前さんは別かも知れんけれど」

「可^よう御座いますよ!」

「いいえ、世間の女はさうでないやうだ。それと云ふが、女と云ふ者は、慮^{かんが}が浅いからして、どうしても気が移^{やす}り易い、これから心が動く——不実を不実とも思はんやうな了簡も出るのだ」

「それはもう女は浅^{あさはか}拙^{せつ}な者に極^{きま}つてゐますけれど、気が移るの何のと云ふのは、やつぱり本当に惚^ほれてゐないからです。心底から惚れてゐたら、些^{ちつと}も気の移るところは無いぢや御座いませんか。善く女の一念と云ふ事を申しますけれど、思^{おもひつ}窮^{きう}めますと、男よりは女の方が余計夢中に成つて了ひますとも」

「大きにさう云ふ事は有る。然し、本当に惚れんのは、どうだらう、女が非^{わる}いのか、それとも男の方が非いのか」

「大変難^{むづかし}く成りましたのね。さうですね、それは那箇^{どつち}かが非^{わる}い事も有りませう。又女の性分にも由りますけれど、一概に女と云つたつて、一つは齡^{とし}に在るので御座いますね」

「はあ、齡に在ると云ふと?」

「私^{わたくし}共^{ども}の商^{しょう}買^{ばい}の者は善くさう申しますが、女の惚^ほれるには、見惚^{みぼれ}に、氣惚^{きぼれ}に、底^{そこ}

惚こぼれと、かう三み様有つて、見惚と云ふと、些ちよいと見たところで惚込んで了ふので、これは十五六の赤あかえり襟盛に在る事で、唯奇麗事でありさへすれば可いのですから、全まるで酸いも甘いもあつた者ぢやないのです。それから、十七八から二十はたちそこそこのところは、少し解つて来て、生意気に成りますから、顔の好いのや、扮装なりおつの奇おつなのなんぞには余あんまり迷ひません。気惚と云つて、様子が好いとか、気合が嬉しいとか、何とか、そんなところに目を着けるので御座いますね。ですけど、未まだ未だやつぱり浮気なので、この人も好いが、又あの人も万更でなかつたりなんぞして、究竟つまりお肚なかの中から惚れると云ふのぢやないのです。何でも二十三四からに成らなくては、心底から惚れると云ふ事は無いさうで。それからが本當の味が出るのだとか申しますが、そんなものかも知れませんよ。この齡に成れば、曲りなりにも自分の了簡すわも据り、世の中の事も解つてゐると云つたやうな勘定ですから、いくら洒落しやれつき氣の奴でも、さうさう上調子うはちようしに遣つちやゐられるものぢやありません。其処そこは何と無く深厚しんみりとして来るのが人情ですわ。かうなれば、貴方、十人が九人までは滅多に氣が移るの、心が変わると云ふやうな事は有りは致しません。あの『赤い切掛きれかけ島田の中うちは』と云ふ唄うたの文句の通、惚れた、好いたと云つても、若い内はどうしたつて心しんが一人前いちにんまへに成つてゐないのでから、やつぱりそれだけで、為方の無いものです。と言つて、お婆さ

んに成つてから、やいのやいの言れた日には、殿方は御難ですね」

お静は一笑してコップを挙げぬ。貫一は連に頷きて、

「誠に面白かつた。見惚に気惚に底惚か。齡に在ると云ふのは、これは大きにさうだ。齡に在る！ 確に在るやうだ！」

「大相感心なすつてゐらつしやるぢや御座いませんか」

「大きに感心した」

「ぢやきつと胸に中る事がお有なさるので御座いますね」

「はははははは。何為」

「でも感心あそばし方が凡で御座いませんもの」

「はははははは。愈よ面白い」

「あら、さうなので御座いますか」

「はははははは。さうなのとはどうなの？」

「まあ、さうなのですね」

彼は故に瞪れる眼を凝して、貫一の酔ひて赤く、笑ひて綻べる面の上に、或者を索むらんやうに打睨れり。

「さうだつたらどうかね。はははははは」

「あら、それぢや愈いよいよさうなので御座いますか！」

「はははははははははは」

「可けませんよ、笑つてばかりゐらしたつて」

「はははははははは」

第三章

惜くもなき命は有さふらふり候ものにて、はや其それより七日なぬかに相成候へども、猶なほごと日毎に心地苦くるし

く相成候やうに覚え候のみにて、今以このよつて此世を去らず候へば、未練の程の御おんつもらせも

然さぞかしと、口惜くちをしくも御おん恥はづかしく存上参らせ候。御前様おんまへさまには追々暑おひおひつさに向ひ候へ

ば、いつも夏まけにて御悩み被成候事とて、此頃このころは如何いかに御暮おんくらし被遊あそば候や

と、一ひとしほ入御案おんあんじ申上参らせ候。

私わたくし事人々の手前も有これありさふらふゆゑ之候故、儀ばかりに医者にも掛り候へども、もとより藥

などは飲みも致さず、皆打捨みなうちすて申候。御存じの此このわづらひ疾は決して書物の中には載せ

て在るまじく存候を、医者は訳無くヒステリイと申候。是もヒステリイと申候外は無きか
 ぞんじまをさずさふらは不存申候へども、自分には広き世間に比無き病の外の病とも思居り候ものを、さやう

に有触れたる名を附けられ候は、身に取りて誠に無念に御座候。

昼の中は頭重く、胸閉ぢ、氣疲劇く、何を致候も大儀にて、別けて人に会ひ候

うるさ、誰にも一切口を利き不申、唯独り引籠り居り候て、空く時の経ち候中

に、此命の絶えず些つつ弱り候て、最期に近く相成候が自から知れ候やうにも覚え申
 候。

夜に入り候ては又氣分変り、胸の内俄に沍々と相成、なかなか眠り居り候空は無之、

かかる折に人は如何やうの事を考へ候ものと思召被成候や、又其人私に候はば何と可
 れあるべくさふらふ有之候や、今更申上候迄にも御座候はねば、何卒宜く御判じ被遊度、夜一夜

其事のみ思続け候て、毎夜寝もせず明しまゐらせ候。

さりながら、何程思続け候とても、水を覓めて逾よ焰に燃かれ候に等き苦艱の募り候の

みにて、いつ此責を免るるともなく存へ候は、孱弱き女の身には余に余に難忍き事

に御座候。猶々此のやうの苦き思を致候て、惜むに足らぬ命の早く形付き不申る

やうにも候はば、いつそ自害致候てなりと、潔く相果て候が、に愈と存付き候へば、

万一の場合には、然やうの事にも可致と、覚悟極めまゐらせ候。

さまざまに諦め申候へども、此の一事は逆も思絶ち難く候へば、私相果て候迄には是非々々一度、如何に致候ても推して御目もじ相願ひ可申と、此頃は唯其事のみ一心に考居り申候。昔より信仰厚き人達は、現に神仏の御姿をも拝み候やうに申候へば、私とても此の一念の力ならば、決して慚はぬ願にも無御座と存参らせ候。

(三)の二

昨日は見舞がてらに本宅の御母様参られ候。是は一つは唯継事近頃不機嫌にて、とかく内を外に遊びあるき居り候。処、両三日前の新聞に善からぬ噂出で候より、心配の余様子見に参られ候次第にて、其事に就き私へ懇々の意見にて、唯継の放蕩致候は、畢竟内のおもしろからぬ故と、日頃の事一々誰が告げ候にや、可恥き迄に皆知れ候て、此後は何分心を用ゐくれ候やうにと被申候。私事其節一思ひに不法の事を申掛け、愛想を尽され候やうに致し、離縁の沙汰にも相成候はば、誠に此

上無き幸と存付き候へども、このしうとめ此姑と申候人は、評判の心掛善き御方にて、殊

に私をば娘のやうに思ひ、ひごろ日頃の厚き情は海山にも喻へ難きほどに候へば、なかなか辞を

返し候段にては無之、これなく心弱しとは思ひながら、涙の零れ候ばかりにて、無_{つつか}扠身の不

束をも詫び申候次第に御座候。

此命御前様に捨て候ものに無御座候はば、外には此人の為に捨て可_{まをすべく}申と存

候。んじさふらふ此の御方を母とし、御前様を夫と致候て暮し候事も相叶ひ候はば、私は土間

に寝ね、い蓆を絡ひ候ても、むしろ其樂は然ぞやと、常に及ばぬ事を恋く思居りまゐらせ候。

私事相果て候はば、他人にて真に悲みくれ候は、まこと此世に此の御方一人に御座あるべく、

第一然やうの人を欺き、さ然やうの情を余所に致候私は、なげき如何なる罰を受け候事かと、

悲く悲く存候に、しにやうはや浅ましき死様は知れたる事に候へば、外に私の願の障とも相成

不申やと、始終心に懸り居り申候。

思へば、人の申候ほど死ぬる事は可_{おそろし}恐きものに無御座候。私は今が今此儘に息引取

り候はば、しあはせ何よりの仕合と存参らせ候。唯後_{ただあと}に遣り候親達の歎を思ひ、又我身生

れ効も無く此世の縁薄く、がひかやうに今在る形も直に消えて、ちぎ此筆、このふで此硯、このすずり此指環、

此燈も此居室も、このあかり此夜も此夏も、このすまひ此の蚊の声も、あたり四圍の者は皆永く残り候に、私独

り亡^なきものに相成候て、人には草花の枯れたるほどにも思はれ候はぬ^{はかな}儂^なさなどを考へ候へば、返す返す情無く相成候て、心ならぬ未練も出^いで申^{まをしき}候^ふ。

青空文庫情報

底本：「金色夜叉」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年11月10日発行

1998（平成10）年1月15日第39刷

初出：「読売新聞」

1897（明治30）年1月1日～1902（明治35）年5月11日

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、「市《いち》ヶ一谷《や》」「児《ちご》ヶ一淵《ふち》」「竜《りゆう》ヶ一鼻《はな》」は小振りに、「一ヶ年分」は大振りに、つくつています。

2000年2月23日公開

2015年10月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金色夜叉

尾崎紅葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>